博士論文

中年期における夫婦関係と適応の関連

―混合研究法によるシステム論的観点からの検討―

藪垣　将

はじめに

本論文『中年期における夫婦関係と適応の関連―混合研究法によるシステム論的観点からの検討―』は，システム論の観点を採りいれた臨床心理学研究である.「システム論の観点を採りいれる」とはすなわち，本研究においては，親密な二者関係を取り扱うこと，およびシステム論の観点を適切に踏まえた研究計画および分析方法を用いることを意味する. したがって，本論文は「二者関係」を単位としたシステム論的な視座に基づいて，夫婦関係が適応にどのように関連しているかを示すことを目的としている.

第Ⅰ部では，本論文に関連する先行研究を概観し，研究の課題を明らかにすることを通じて，本論文の問題設定を行った．第 1 章では，システム論的な視座を心理学研究に取り入れる必要性について, 先行研究からの示唆を整理した. 近年の研究方法論の進歩により, これまで必要性を指摘されつつも実施することが難しいとされてきた「心理学研究にシステム論的な視座を取り入れること」が可能となったことが示された．第 2 章では，我が国の先行研究を概観し，中年期夫婦関係の現状を整理した．その結果，夫婦関係は，様々な変化と危機を迎える中年期において重要な役割を果たすこと, 中年期の夫婦関係研究は「研究の谷間」であり知見が不足していることが見出された．第 3 章では，上記をふまえ，本論文の「問題と目的」の整理と設定を行った．第 4 章では，夫婦関係の質の指標として扱われる「夫婦関係満足度」に焦点を当てて，情緒的サポートや家事役割分担などの，先行研究において夫婦関係との関連が検討されてきた諸変数との関連を検討した．先行研究において扱われてきた変数を 1 つのモデルに組み込み，大規模社会調査データを用いて検討することによって，変数間の関連を整理した.

第Ⅱ部および第Ⅲ部は, 第Ⅰ部で整理された知見から, 夫婦関係と適応の関連について, 量的研究法を用いて検討した．具体的には，夫婦関係を当事者自身が評定する「夫婦関係認知」を用いて，精神的健康との関連について検討を行った.

認知と適応の関連については, 認知が正確であればある程度適応的であると考える立場, 認知が肯定的に偏っていればいるほど適応的であると考える，ポジティブ・イリュージョン（以下，PI とする）理論の立場，認知が肯定的に偏っていることが適応につながるが, 偏りの程度が大きすぎる場合には逆に不適応的であると考える立場の 3 つがある．本研究はこれらの立場のうち，夫婦関係認知と適応の関連という文脈においてはどの立場が支持されるのかという点について検討を行った.

第Ⅱ部はその準備として位置付け，PI 研究の概観を行った上で，夫婦関係認知尺度および夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョン尺度（以下，PMI 尺度）の構成を行った．第 5 章では，PI 研究の展望を行った．その結果，認知と精神的健康の関連については大きく分けて 3 種類の理論的立場があることが整理された．また，これらの立場は，PI 研究の定義，測定方法，研究テーマ，および PI が生起する認知領域によって，それぞれ支持されることが見出された．さらに，PI 研究の今後の課題として，階層的分析法を用いること，既存の PI 研究とは異なる方法によってイリュージョンを測定すること，質的研究法を用いること，縦断的研究を行うことの 4 点が指摘された．

第 6 章，第 7 章では，夫婦関係認知の構造について検討を行った．第 6 章では，個人が自身の夫婦関係をどのような視点から認知しているのかという点について検討を行った．その結果，夫婦関係は「成熟とコミットメント」「距離の近さ」「関係の悪さ」「思いやりと明るさ」の 4 次元から捉えられていることが示された．第 7 章では，第 5 章における夫婦関係認知のうち，どの認知領域に PI が生起するのかについて検討した．その結果，PI は夫婦関係認知のうち，「思いやりがある関係」「自然で自由な関係」「一緒に過ごす関係」「精神的な距離と不信」「配偶者への非難と攻撃」の 5 次元で生起することが示され，夫婦関係認知の次元と夫婦関係認知における PI（以下，ポジティブ・マリタル・イリュージョン：PMI）がほぼ重複することが見出された．

第Ⅲ部は，第Ⅱ部で構成した尺度を用いて，PMI と適応の関連について検討を行った．第 8 章では，ペアワイズ相関分析の手法を用いて，PMI と適応の関連について検討した．その結果，PMI は適応に寄与すること，PMI の次元によって適応との関連の様相は異なることが見出された．第 9 章では，本論文において PMI の指標として用いた「平均点以上効果」に項目の獲得容易性が及ぼす影響について検討した．その結果，PMI の生起には，評定項目の獲得容易性が大きく影響していることが示された．ただしこのことは，PI の指標として「平均点以上効果」を用いることの妥当性を低めるものではない点に留意する必要がある．

ここまで第Ⅲ部では，個人が自身の夫婦関係を評定する「自己評定」の視点から，夫婦関係と適応の関連について検討を行った．これに対して第Ⅳ部は，夫婦関係を研究者が評定する「他者評定」の視点から，夫婦関係と適応の関連について検討を行った．第 10 章では，健常群夫婦を対象に，夫婦の葛藤場面を実験的に設定し，会話分析の手法を用いて検討した．その結果，夫婦間葛藤の過程は「夫婦間葛藤の開始，夫婦間葛藤，夫婦間葛藤の

終結」という 3 つの段階から成ることが示された．また，会話の中でどのような相互作用パターンが生起することで，葛藤が生起し，扱われ，解消/留保/回避されるのかが示された．第 11 章は，健常群夫婦との比較を目的として，臨床群夫婦について夫婦間葛藤のコミュニケーション・パターンを探索的に検討した．第 10 章の知見に基づいて，夫婦間葛藤の過程を夫婦間葛藤の開始，夫婦間葛藤，夫婦間葛藤終結の 3 つに分割し，それぞれについて会話分析の手法により詳細に検討した．その結果，それぞれの過程において，健常群と臨床群の夫婦に共通して認められるコミュニケーション・パターン，健常群にのみ認められるコミュニケーション・パターン，臨床群にのみ認められるコミュニケーション・パターンに区別された．夫婦間葛藤の開始方法は，健常群夫婦と臨床群夫婦で大きな違いは無いことが示唆された．これに対して，葛藤の扱い方および終結の方法については，健常群夫婦と臨床群夫婦で大きく異なることが示された．

第Ⅴ部は，中年期における夫婦関係と適応の関連について，本研究を総括した．

終章では，これまでに見出されてきた知見から，中年期における夫婦関係と適応の関連について検討することを目的とした．夫婦関係と適応の関連を検討する際に，PMI 研究の枠組みを用いた研究と，会話分析の手法を適用した研究をそれぞれ行った．PMI 研究は，当事者が自身の夫婦関係をどのように認知しているかという観点から夫婦関係を捉えている．一方，会話分析の研究は，夫婦のコミュニケーションを第 3 者である研究者が観察・分析するアプローチである．システム論の観点を採り入れて，夫婦関係と適応の関連について検討を行うことで，認知的側面およびコミュニケーションの観点から，中年期夫婦の適応に関する知見を提出した．最後に，今後の課題と展望について論じた．

博士論文の構成

第Ⅰ部　中年期夫婦関係研究の展望

- 第 1 章　二者関係研究とシステム論
- 第 2 章　中年期夫婦関係研究の概観
- 第 3 章　本論文の問題と目的
- 第 4 章　夫婦関係満足度および諸変数の関連

ペアワイズ相関分析による量的検討

第Ⅱ部　中年期夫婦における PMI

- 第 5 章　PMI 研究の展望
- 第 6 章　中年期の夫婦関係認知
- 第 7 章　中年期の PMI

第Ⅲ部　PMI と精神的健康の関連

- 第 8 章　PMI と精神的健康
- 第 9 章　PMI と項目の獲得困難性

会話分析による質的検討

第Ⅳ部　中年期の夫婦間葛藤の会話分析

- 第 10 章　健常群夫婦の会話分析
- 第 11 章　臨床群夫婦の会話分析

第Ⅴ部　総合考察

学術論文との対応

第Ⅰ部第 2 章　中年期夫婦関係研究の概観

藪垣将（2009）中年期夫婦関係研究の展望―システムズ・アプローチの観点から　東京大学大学院教育学研究科紀要,　49, 307-316.

第Ⅰ部第 4 章　中年期における夫婦関係満足度および諸変数の関連

藪垣将・渡辺美穂・田川薫（2015）中年期における夫婦関係満足度および諸変数の関連：多母集団同時分析による JGSS-2006 の検討　家族心理学研究, 29, (1), 51-63.

第Ⅱ部第 5 章　ポジティブ・イリュージョン研究の展望

藪垣将（2012）ポジティブ・イリュージョン研究の展望　東京大学大学院教育学研究科紀要, 52, 419-426.

第Ⅱ部第 6 章　中年期における夫婦関係認知の構造の探索的検討

第 7 章　ポジティブ・マリタル・イリュージョンの構造の探索的検討

第Ⅲ部第 8 章　中年期における夫婦関係認知と適応の関連―ペアワイズ相関分析を用いた検討―

藪垣将（2015）中年期の夫婦関係認知におけるポジティヴ・イリュージョンと精神的健康の関連　家族心理学研究, 29, (2), 128-141.

第Ⅲ部第 9 章　PMI に項目の獲得容易・困難性が及ぼす影響

藪垣将（2013）夫婦関係認知における評定項目の獲得困難性と平均点以上効果の関連　対人社会心理学研究, 13, 41-47.

第Ⅳ部第 10 章　中年期の健常群における夫婦間葛藤の会話分析

第 11 章　中年期の臨床群における夫婦間葛藤の会話分析および健常群における夫婦間葛藤との比較検討

藪垣将・中村伸一（2015）中年期夫婦は葛藤をどのように扱うのか？：会話分析による臨床群と健常群の比較検討, 家族療法研究, 32, (3), 290-300.

目次

第Ⅰ部　中年期夫婦関係研究の展望

第 1 章　二者関係研究とシステム論…… 9

第 2 章　中年期夫婦関係研究の概観…… 15

第 3 章　本論文の問題と目的…… 22

第 4 章　中年期における夫婦関係満足度
および諸変数の関連…… 28

第Ⅱ部　夫婦関係認知とポジティブ・マリタル・イリュージョン

第 5 章　ポジティブ・イリュージョン研究の展望…… 44

第 6 章　中年期における夫婦関係認知の構造の探索的検討…… 56

第 7 章　ポジティブ・マリタル・イリュージョンの構造の探索的検討…… 68

第Ⅲ部　ポジティブ・マリタル・イリュージョンと適応の関連

第 8 章　中年期における夫婦関係認知と適応の関連
―ペアワイズ相関分析を用いた検討―…… 82

第 9 章　PMI に項目の獲得容易･困難性が及ぼす影響……102

第Ⅳ部　会話分析による夫婦間葛藤の質的検討

第 10 章　中年期の健常群における夫婦間葛藤の会話分析…… 110

第 11 章　中年期の臨床群における夫婦間葛藤の会話分析,
および健常群における夫婦間葛藤との比較検討…… 145

第Ⅴ部　総合考察

終章　中年期における夫婦関係と適応の関連　―本研究のまとめと展望―…… 173

引用文献…… 182

第Ⅰ部　中年期夫婦関係研究の展望

第 1 章　二者関係研究とシステム論

１．はじめに

本論文『中年期における夫婦関係と適応の関連　―システム論的観点からの検討―』は，システム論の観点を採りいれた臨床心理学研究である．「システム論の観点を採りいれる」とは，本研究においては，親密な二者関係を取り扱うこと，およびシステム論の観点を適切に踏まえた研究計画および分析方法を用いることを意味している．

このことについて詳述するため，関係という概念に焦点を当てた研究を主題として，「関係という概念の意味」「分類による関係の研究」「システム論的観点を採りいれること」について論じる．

２．関係と言う概念が意味すること

「関係」の概念は多義的かつ複雑で，定義づけを行うことは非常に難しい．そこで本論文で「関係」と言う言葉を用いる際は，特別の断りが無い限り，「対人関係」を意味する．

Reis, Collins, & Berscheid（2000）は，人間の行動は個人と他者との関係において生起することを述べている．例えば，Segrin & Taylor（2007）は，肯定的な対人関係がソーシャル・スキルと心理学的 well-being の連関を調整することを明らかにした．このように，関係の文脈は，個人の行動や発達に対して，強い影響を及ぼすものである．言い換えると，関係の文脈が異なると，人々は同一の刺激に対して同じ反応をしない．したがって，心理学研究においては，個人の変数を取り扱う際に，関係の文脈を無視することは出来ない．Reis, et al.（2000）が「関係の科学の目標は，関係の科学やその先行条件および結果についての理解を深めることである」と述べるように，特定の関係に焦点を当てた上で，変数間の関連を検討することが重要である．

しかし，「関係」の概念は複雑であり，そのために研究が遅れてきた．「関係」とは，そもそも何を表す概念なのだろうか．既存の研究においては，日常場面でも良く用いられる一般的な語句であるために，「関係」という言葉は明確に定義されてこなかった．ただし，「『関係』という言葉の概念的な分析を行ってきた研究者の多く（e.g., Hinde, 1979）は，関係の本質はパートナーとの間で生起する相互作用 interaction にあるということに同意している」ということを Reis, et al.（2000）は述べている．相互作用の指標は「影響」である．すなわち，「個人の行動がその後に続くパートナーの行動に影響を及ぼす」ということが相互に起こっているということである（Berscheid & Reis, 1998）．また，「関係」は相互作用を足し合わせた概念よりも，より多くの内実を含んでいる（Hinde, 1999）．なぜなら，「関

係」は相互作用の連鎖に加えて，それら相互作用のエピソードが将来におけるエピソードに及ぼす影響を含むためである．したがって，「関係」には本質的に時間が関与している．以上のような理解の上で，「関係」の概念は研究されてきた．

なお，関係の研究は，社会的相互作用 Social Interaction の研究とは，時間という視点を採り入れている点で区別される．社会的相互作用は，関係が存在するための必要条件ではあるが，十分条件ではない．社会的相互作用は，社会心理学研究において重要なテーマの一つであるが, 相互作用の過程やパターンを直接的に扱う研究は殆ど行われて来なかった．そのため，相互作用の連鎖などに焦点が当てられることはなされて来なかった．ただし，例外として, 相互依存性理論 interdependence theory の研究（Rusbult & Van Lange, 1996, for an overview）や，ロチェスター相互作用記録 the Rochester Interaction Record（Reis & Wheeler, 1991）やイックスの二者相互作用パラダイム Ickes' Dyadic Interaction Paradigm（Ickes, Bissonnette, Garcia, & Stinson, 1990）を用いた研究，夫婦や家族の相互作用の観察研究（e.g. Gottman, 1998）がある．これらは相互作用の過程やパターンを扱うものであり，これらの研究をふまえる事は，関係の科学を進める上で重要である．

３．分類による関係の研究

関係に関する現象とそのプロセスは，関係の親密性に起因するものと考えられてきた．そのため，「親密性」の概念が注目を集めてきた（e.g. Aron, Aron, & Smollan, 1992）．親密な関係には，夫婦関係，友人関係，恋愛関係，同僚などさまざまな種類がある．「関係」の研究は，これらの名義的な分類に基づいた母集団を設定することによって行われ，親密な関係が一般の関係と区別されることを実証的に示してきた．すなわち，先行研究においては，関係は分類され，「親密な関係」の種類の違いによる，「変数の関連の様相」の相違が明らかにされてきた．

「親密な関係」という言葉の意味は不明瞭であり，充分に定義されているとは言えない点には留意しなければならない．「親密な関係」に焦点を当てた研究は，国内外を問わず，多く蓄積されつつある．しかし，例えば，夫婦関係は親密な関係として取り上げられているが, 離婚率が爆発的に上昇している事を踏まえると, その妥当性には疑問が残る（Berscheid, Snyder, & Omoto, 1989）という指摘もある．ただし，関係の種類によって変数の関連の様相が異なるという実証的知見は,「親密な関係」の概念的な曖昧さを差し引いてなお意義のあることである．

関係を分類することは，関係を記述する以上の意味を有している．何故ならば，関係を

分類した上で，特定の関係においてのみ特定の変数の関連が見られるという知見を明らかにすることは，関係において相互作用が調節される過程や法則の特徴を明らかにしていると言えるからである．ただし，分類によるアプローチの限界について充分に留意しておく必要がある．例えば，Fraley & Waller's （1998）は，永らくカテゴリ変数だと思われてきた愛着スタイルについて，次元的に捉える方が適切である事を示した．これは，カテゴリを用いるよりも，連続的な次元を想定した方が適切である場合の一例である．

４．システム論的観点を採りいれる

さて，多くの研究者（e.g. Bales, 1999; Berscheid, 1999; Forgas, 1979）が議論してきたように，これまで心理学者は典型的に，個人の行動を調節している法則を探索してきた．研究においては，主に個人のプロパティ（人格や遺伝，態度，気質など）に焦点が当てられ，これらのプロパティと行動の関連が検討されてきた．心理学者が関係の視点を取り入れるようになると，二者関係の力動の理解に力が注がれた．それらの研究においてはまず，個人のプロパティと，個人の関係体験ならびにその結果（e.g. 神経症傾向と結婚生活の安定性）の関係が研究の焦点となった．このような研究は関係の理解のために重要であるが，「二者関係は二人の個人によって始まり維持される」という事を見落としている点においてその価値は限定される．この問題の背景には，心理学の方法論や分析法は，個人を分析の単位としてデザインされたものが殆どであったという事情があった．

しかし，近年，二者関係を取り上げるのに適した方法論（Ickes et al., 1990）や分析方法（Gonzalez & Griffin, 1997; Kashy & Kenny, 2000; G. R. Patterson & Dishion, 1988）が開発されつつある．これらの方法論や分析法の発展は，パラダイムシフトを可能にする――すなわち，個人の観点からシステム論的観点への移行が可能になる．

氏原・小川・東山・村瀬・山中（1992）によると，システムとは，一組の諸要素や諸単位が, ある一定の関係または相互作用のかかわりにある状態である. どんなシステムでも，一定の関係によって組織された諸要素から成り立つ. それゆえに, 組織性 organization が最も重要な概念である．組織性は，全体性 wholeness，境界 boundaries，階層性 hierarchies の 3 つからなる．全体性とは，諸要素からなるシステムでは，全体は諸部分の総和以上の働きを示す事を意味する．各要素または各単位は，他の単位や要素に依存し，また他の要素や単位からの制約を受ける. 境界は, 各システムおよびそれを構成する各要素や単位には, 時間的・空間的な境界がある事を指している．境界は，空間的にも時間的にも存在する．階層性は，システムは階層レベルにしたがって，各単位や要素が組織化されている事を意

味する．ある男性は，夫婦システムの夫，家族システムの父親，会社システムの課長というように，各システムの単位として期待される役割を行なう．

システム論的観点を持つ事，すなわち事物をシステムと捉えるアプローチ全般は，システムズ・アプローチと呼ばれる．システムズ・アプローチは，これまでの科学が重要視してきた還元主義 reductionism をとらない点にその特徴がある．還元主義は，要素的還元主義とも呼ばれる．要素的還元主義においては，事象を線形の因果の等式で説明する事が目指される．一方，システムの理解は，その上位システムと下位システムとの相互関係を，その全体性に注目しながら理解する事によって深められる．さらに，システムズ・アプローチにおいては，事象を線形の因果で捉えようと試みる代わりに，円環的因果律が想定される．

「関係」はシステムである．また，ただシステムであるというわけではなく，「開かれた」システムである（Reis, Collins, & Berscheid, 2000）．この事は，“関係”がその上位システムならびに下位システムと相互に影響を及ぼしあっている事を意味している．理解の対象を統一された全体性をもつシステムと捉える事は，より単純なレベルに還元する事によって事象を説明しきろうとする事とは相容れない（氏原・小川・東山・村瀬・山中, 1992）．したがって，個人を関係の文脈に位置付け，システムとして捉える観点を持つ事は，これまで採られてきた心理学研究における方法論では得られない知見を得るために，極めて重要である．言い換えると，関係を理解するために関係を個人という要素に還元して研究を行なう事は不十分であり，関係を理解するためには，関係をシステムと捉える視点を持つ事が必要である．

夫婦関係をシステムとして理解するためには，システムの単位を複数の視点から捉えることおよび，システム間で互いに及ぼしあう影響について検討することが必要である．夫婦は，夫および妻という個人システムから構成される．そこで，夫および妻それぞれに目を向ける必要がある．また，夫システムが妻システムに及ぼす影響，妻システムが夫システムに及ぼす影響について検討する必要がある．

さらに，夫婦システムという単一のシステムとして捉えられる．そこで，夫婦を１単位としたシステムに目を向ける必要がある．二者から構成されるシステムを，あたかも１名であるかのように捉える「personality of a dyad（Reis, et al., 2000）」の考え方がこれに相当する．「personality of a dyad」の考え方を基にして，具体的にどのようにして二者から構成される単位を１つのシステムとして捉える方法は様々ある．本論文では夫婦を１単位とし

たシステムに目を向けるための具体的な方法としてペアワイズ相関分析を用いている．なお，その統計的な処理方法や数式，分析モデルはなどの委細については後述する．

５．システム論的観点を採りいれた混合研究法

それでは, システム論的観点の導入は, どのような方法によって可能となるのだろうか. Reis, et al.（2000）は, 近年の研究法および統計手法の目覚ましい発展により可能となった, システム論的観点の導入について記している．第１に，研究法（データの収集方法）の発展から, 観察法によるシステム論的観点の導入が可能となった. 観察法の代表例としては, 上述のロチェスター相互作用記録（Reis & Wheeler, 1991）や二者相互作用パラダイム（Ickes et al., 1990）がある．第２に，統計手法の発展から，システム論的観点を導入したデータの分析が可能となった．具体的な統計的手法としては，Gonzalez と Griffin による相関分析的なペアワイズ・アプローチ（Gonzalez & Griffin, 1999, 2000; Griffin & Gonzalez, 1995），Kenny を中心とする研究グループによる分散分析的アプローチ（Kenny, 1998, 1994, 1996; Kenny & Cook, 1999; Kenny & Judd, 1996; Kenny & La Voie, 1985），階層化されたデータを取り扱うために開発された階層的線形モデルを二者間データの相互依存性の評価に応用する方法（e.g., Bryk & Raudenbush, 1992）などが挙げられる．

本論文では，ペアワイズ相関分析，および会話分析を用いることによって，システム論的観点の導入を行う. 上述の 3 つの, 二者関係の相互依存性に配慮した統計的手法のうち, ペアワイズ相関分析は，(a)ピアソンタイプの相関が算出出来，(b)その有意性検定が容易であり, (c)多変数を用いた分析への拡張も理解し易い，というメリットを有している（石盛・清水，2004）．ペアワイズ相関分析の手法を用いることにより，2 変数間の相関係数は，個人レベルの相関係数と 2 者関係レベルの相関係数に分割される．すなわち，夫婦の相互依存性に対して配慮した上で，夫および妻それぞれの個人レベルの相関係数を得ることが出来る．さらに，夫婦を 1 つの単位として捉えた，2 変数間の相関係数を得ることが出来る．これらによって，夫および妻という夫婦サブシステム，夫婦を 1 つの単位とした夫婦システムにおける変数間の関連を検討することが可能となり，システム論的観点の導入が実現する．以上の理由から，本研究においては量的変数の統計的分析の際にペアワイズ相関分析を用いる．

次に，本論文で会話分析を用いる理由について説明する．上述のロチェスター相互作用記録は研究者による相互作用のコーディングを，二者相互作用パラダイムは観察対象者自身による相互作用のコーディングを発展させた点で重要な意義があった．ここでは,「親密

さ」や「開示度」など，相互作用を検討する際に重要な要因について記録が行われる．しかし，記録される内容が予め限定されている点は，研究者や当事者にとっては簡便である一方で，夫婦間の相互作用を探索的に追究するという目的にはそぐわない．夫婦間の相互作用を詳細に検討するためには，(a)相互作用の様相をそのまま記録すること，(b)予め理論的な背景や研究者の関心などを基に設定されたコーディング・システムを用いて検討するのではなく，データから知見を導出していくというボトム・アップのスタンスで検討することを通じてパターンを見出すこと，の 2 点が必要である．見出されたパターンを，予め準備されたコーディング・システムに当てはめて検討するのではなく，パターンそのものを扱える点で，会話分析は本論文の目的に合致する分析方法であると考えられる．また，本論文で用いる会話分析では，データを既存の理論などの参照枠に当てはめて理解するのではなく，データに浸る中で研究者が見出したパターンをそのまま記述することから，既存の方法よりもより詳細な検討が可能となっている．そこで本論文では，リサーチ・クエスチョンに基づいて分析の焦点を定め，探索的に相互作用パターンを検討することが出来る会話分析を用いる．

８．まとめ

ここまで，「関係」に焦点を当てた研究，およびシステム論的観点を採りいれる方法について論じた．「親密な二者関係」研究で，システム論の観点を適切に取り入れた研究は依然少ない．そのため，システム論的観点を採り入れた二者関係研究を行うことで，関係の文脈に対して適切な配慮がなされて来なかった既存の研究からは見いだせなかった知見を得ることが期待される．

第 2 章　中年期夫婦関係研究の概観

本論文は中年期夫婦関係に焦点を当てた研究である．夫婦関係は「親密な関係」の一つであるが，それでは，何故，中年期夫婦に焦点を当てる必要があるのだろうか．本章ではまず，中年期夫婦の特徴について論じる．続いて先行研究の概観を行い，これまでに明らかにされたことを整理する．最後に，中年期夫婦に焦点を当てる重要性について論じる．

１．中年期夫婦の特徴

中年期に関心が向けられるようになったのは，人間の生涯全体を発達的視点から捉える視座が確立されつつあった 1970 年代以降の事である（岡本, 1994）．それまでは，青年期までの発達に重点が置かれ，中年期以降の発達について関心が薄かった．しかし，長寿化により，誰もが中年期・高齢期を「人生の時刻表」の中に位置づけられるようになった事と，発達心理学などの諸学問において人間の生涯にわたる行動変化の研究が行なわれるようになった事が相俟って，人生後半への関心が高まり，研究すべき課題が見つけ出されていった（長津, 2007）．

それでは，中年期とはいつの事を指すのだろうか．レビンソン（1992）は，生物学的・心理学的機能の変化と生活構造の変化から, ライフサイクルがおおよそ 25 年間続く 4 つの発達期を徐々に進んでいくものである事を明らかにした．4 つの発達期は，児童期と青年期（0-22 歳），成人前期（17-45 歳），中年期（40-65 歳），老年期（60 歳以上）である．これらの発達期に重複している部分があるのは, ある発達期から次の発達期へ以降する際に, 2 つの発達期を結びつけ，何らかの連続性を持たせる発達上の過渡期があるとされている事による．石川（1996）は，レビンソンらによる調査が行なわれた 1975 年頃の平均寿命や合計特殊出生率を 1990 年代初めの日本と比較し，我が国においては，40-60 歳±5 歳が中年期と呼べると推論している．

中年期夫婦の特徴を取り上げる際には，個人の年齢に加えて，夫婦関係経歴について取り上げる必要があるだろう．夫婦関係経歴は，個人時間と家族時間の相互作用の中で形成される．そして，個人時間や家族時間は全体社会，経済，精度，そしてより大きな文化変動に影響される事から，夫婦関係経歴は歴史時間によっても規定されている（Hareven, 1982）．しかし，より直接的には，夫婦関係経歴は，生理的・心理的・社会的に固有な歩みを刻む個人と，家族という集団を形成し親役割や妻役割を遂行するとともに，家族成員と相互作用しながら家族の一員としての歩みを刻む個人との相互連関のなかでつくられている（長津, 2007）．

そこでまず，中年期の心理学的な特徴を記述し，次いで家族ライフサイクルについて言及する．中年期の心理学的な特徴として，第 1 に，時間的展望が挙げられる．先行研究より，中年期の時間的展望は，過去，現在，未来に対する志向性や過去，現在，未来に対する精神的な姿勢や身構えである時間的態度（都築, 2007）に転換が生じる事や，未来の展望に質的な変化が起こる事が明らかになっている．中年期は自己の有限性を自覚する時期であるとされている（日潟・岡本, 2008）一方で，時間的態度においては，青年期よりも中年期がポジティブであるとされる（白井, 1997）.

第 2 に, 体力の衰えや体調の変化, 老いと死への不安（岡本, 1985）の認識が挙げられる．中年期は，容姿の変化や成人病の罹患率の上昇，女性における閉経など，心身ともに大きな変化が現れる時期である.

第 3 に, これらの否定的変化をふまえた自己認識がもたらすアイデンティティの危機（東原, 2004）が挙げられる．岡本（1997）は，アイデンティティに対する問いは螺旋式に発達していくという論を展開し，青年期，中年期の入り口，および現役引退期に多くの人々が多くの領域で危機を体験しやすいと述べている．以上，個人時間としての中年期の特徴を述べた.

一方，家族時間としての中年期としては，家族ライフサイクルにおける中年期を取り上げる．第 1 に，親子関係の特徴が挙げられる．長津（2007）によると，中年期の親は，思春期の子供と新たな関係を形成しなければならない．また，子供が進学・就職・結婚などのために家を出た結果として，夫婦だけのエンプティ・ネストになる場合も多い．子供の離家から生じる空虚感は，メンタルヘルス上の危険因子も多い事が指摘されている（東原, 2004）．併せて，自身の親の介護と死が挙げられる.『平成 19 年　国民生活基礎調査』（厚生労働省, 2008）によると，65 歳以上の高齢者を介護している者のうち，40-49 歳が 9.2%, 50-59 歳が 29.2%となっている．このように，中年期の親子関係においては，育てる役割の縮小と終了，看取る役割のニーズの増大という特徴が認められる（長津, 2007）.

第 2 に，夫婦関係の特徴が挙げられる．親役割の縮小によって，親子関係を優先してきたために潜在化していた夫婦関係が顕在化し，夫婦関係が改めて見つめられ問い直される（長津, 1999）．中年期は，夫婦の生活世界が分化・拡散し，夫婦の情緒的な交流が最も疎遠になり，そして分化した夫婦の生活世界を高齢期という次のステージに向けて統合していく時期である（長津, 2007）．一方で，ライフコースや価値観が多様化している事によって，熟年離婚という選択も可能となっている．中年期に配偶者と別れても人生をやり直す

事が出来るだけの時間と，そうした行為が容認される社会環境が背景にある．離婚許容度の高まりと離婚数の増加の相互作用が，離婚率の上昇に影響していると考えられる（岩井, 1997）.

第 3 に，生活構造の特徴が挙げられる．収入の程度や時間の使い方は，生活水準や家族関係に大きな影響を及ぼすと考えられる．そこで，生活構造を捉える指標として，収入と仕事時間について取り上げる.『平成 19 年　国民生活基礎調査』（厚生労働省, 2008）によると，1 世帯当たりの平均所得金額は，世帯主の年齢階級別にみると，50 代が最も高く，次が 40 代である（29 歳以下 317.2 万円，30-39 歳 555.4 万円，40-49 歳 704.9 万円，50-59 歳 760.7 万円，60-69 歳 544.0 万円，70 歳以上 408.8 万円）．また，貯蓄額は，世帯主の年齢が高くなる程多く，30 代 515.9 万円，40 代 886.5 万円，50 代 1327.2 万円，60 代 1539.0 万円である．一方，借入額は，40 代が最も多く，30 代 718.3 万円，40 代 872.4 万円，50 代 543.2 万円，60 代 259.1 万円である．このように，40 代は所得が多い一方で借入額も多いのに対し，50 代は他の年齢階級に比べ最も所得が多い上，借入額は 40 代より少ない．したがって，中年期を通じて所得や借入額，貯蓄額は大きく変動するが，中年期後期に向かうにつれて，金銭的な余裕が増えるものと考えられる．年齢が増えるにつれて貯蓄額が増えていく事は，この考えを支持するものである.

次に，有業者の 1 日の仕事時間について取り上げる.『社会生活基本調査』（総務省統計局, 2007）によると，男性の場合，40-44 歳が仕事時間のピークとなっており，7 時間 47 分と最も長い．これに対し，女性の場合は，25-29 歳が 5 時間 51 分と最も長くなっている．また，男性の場合は，仕事時間は 25-29 歳から 55-59 歳まで 7 時間台であり，60-64 歳で 6 時間 06 分と減少する．中年期での仕事時間は 7 時間 30 分程度だが，中年期後期から高齢期に至る段階で仕事時間は段階的に減少していく．これに対し，女性の仕事時間は，30-34 歳で一度落ち込み, 60-64 歳でさらに落ち込む. 中年期での仕事時間は, 5 時間程度である．このように，男性の場合，中年期の仕事時間はそれ以前のステージと同様に 7 時間を越えるが，中年期後半は減少する．女性の場合は中年期を通して 5 時間前後であり，20 代に比べて労働時間は少ない．また，男女ともに，60 代前半より，仕事時間は減少している．『社会生活基本調査』（総務省統計局, 2007）によると，1 日の家事関連時間は，35-39 歳の女性が最も長く，男女の間に大きな差がある．男性の家事関連時間が増えるのは，職業から引退する者が増え始める 60 代前半以降である．中年期の男性の家事関連時間は，一貫して 30 分程度であるが，中年期後期から家事関連時間は増えていく．この事から，中年期の

前期と後期では，時間の使い方が異なる事が想定される．これに対し，女性の家事関連時間は，中年期とその前後のステージでは大きな変化はせず，4 時間 20-30 分程度となっている．以上，中年期夫婦の特徴について記述した．

Table 2-1 男女， 年齢階級別仕事時間（単位：時，分）

	男性	女性
総数（歳）	7	5
15-19	4.23	3.09
20-24	6.18	5.49
25-29	7.29	5.51
30-34	7.33	5.13
35-39	7.42	4.54
40-44	7.47	4.56
45-49	7.41	4.58
50-54	7.21	5.03
55-59	7	5.04
60-64	6.06	4.19
65-69	5.17	4.25
70-74	4.58	3.48
75-	4.08	3.33

社会生活基本調査（総務省統計局, 2007）をもとに作成（weekly average）.

Table 2-2 男女，年齢階級別家事関連時間（単位：時，分）

	男性	女性
総数（歳）	0.38	3.35
20-24	0.22	1.15
25-29	0.27	2.49
30-34	0.4	4.36
35-39	0.4	4.57
40-44	0.32	4.44
45-49	0.28	4.36
50-54	0.29	4.23
55-59	0.33	4.19
60-64	0.47	4.23
65-69	1.01	4.22
70-74	1.11	4.09
75-79	1.15	3.36
80-84	1.13	2.43
85-	0.49	1.21

社会生活基本調査（総務省統計局, 2007）をもとに作成（weekly average）.

２．中年期夫婦関係研究の展望

それでは，中年期夫婦については，先行研究から何が明らかにされてきたのだろうか．まず，夫婦関係研究について論じた上で，中年期夫婦について記す．

束原（2004）は夫婦関係研究を概観し，次のように述べている．心理学領域では研究が微少であるのに対して，家族社会学領域では大きな注意が払われてきた．社会学における夫婦研究は大きく分けると，役割構造研究，勢力構造研究，情緒構造研究の 3 領域に分ける事が出来る．役割構造研究は，役割期待，役割遂行，役割認知の一致度と妻の就労や子供の誕生を関連させるものなどである．勢力構造研究は，夫優位，妻優位，一致，自立の 4 類型に分類する研究である．情緒構造研究は，伴侶性，コミュニケーション，結婚満足度などの変数を用いる研究である．長津・細江・岡村（1996）は，1970 年から 1993 年半ばまでに出された夫婦関係についての実証研究の概観を行った．それらの実証研究は，対象年齢別に見ると，役割関係領域では育児期を対象にした研究が多く，勢力関係領域では研究そのものが少なく，情緒関係領域では育児期と高齢期を対象にした研究が多い（長津, 2007）．

このように，心理学領域での夫婦関係に関する研究は，蓄積され始めている状況だと言える．日本において，心理学領域で夫婦関係に関する研究が行われ始めたのは 1990 年代後半からである（束原, 2004）．しかしながら，中年期を対象とした夫婦関係研究は非常に少ない．長津（2007）は，その背景として，育児期や高齢期と違い，中年期夫婦の問題が見えにくい事を指摘している．例えば，育児期の夫婦関係については，少子化の原因として子育てと就業の両立の困難性が指摘されている点や，幼児・児童虐待や育児不安の原因の一端が夫婦関係にある事などが指摘されている（長津, 2007）．このように問題が明確にされている結果として，研究者の関心は育児期における夫婦関係の解明に向かう事になったと考えられる．これに対し，中年期夫婦の問題は何なのかという事についてこれまであまり明確にされてこなかったため，研究者の関心が集まりにくく，研究があまり行なわれてこなかったものと考えられる．また，中年期夫婦の問題が見えにくい事は，研究を実施する事自体の困難さにもつながる．中年期の問題が見えにくい事は，研究者の関心のみならず，調査協力者の関心を集める事の難しさにもつながる．結果として，中年期夫婦を対象とした研究を行なう事が困難になると考えられる．

さて，中年期夫婦を対象とした研究について，先行研究が明らかにした事を取り上げるには，長津（2007）が概観し，次の 7 点にまとめたものが明瞭である．1.夫婦間のコミュ

ニケーションの質は, 家庭生活の様々な領域でなされる夫婦の協働の程度と関連している. 2.夫の家事遂行より情緒的サポートのほうが妻の夫婦関係満足感と関連している. 3.個人化は夫婦の情緒関係と負の関連がある. 4.夫婦の情緒的側面において夫婦間に多くの認識差があり, それは妻にとってより深刻な状態をもたらす結果になっている. 5.夫婦の情緒関係レベルの対等性は, 妻が高学歴・高収入である共働き夫婦においてみられる. 6.夫は妻への情緒的な傾斜が強いが, 妻は夫に限らずより多くの信頼できる人との結びつきを持っている. 7.夫婦の情緒関係は 50 代前半が最も悪い.

最後に参考として, アメリカの研究動向について触れておく. アメリカでは, 膨大な数の夫婦関係研究が存在しているが, 中年期の夫婦関係に限定すると, その数は少ない. また, 日本の夫婦と異なり, アメリカでは全結婚のうち約 4 割が離婚に終わっている (Elliott & Umberson, 2004). したがって, 例えば, 夫婦関係としては新婚期であるが, 個人時間では中年期であり, 家族ライフサイクル上では子供の教育期である, というような状況が起こっている.

３. まとめ：中年期夫婦に焦点を当てる重要性

ここまで, 中年期夫婦の特徴と, 中年期夫婦を対象とした先行研究について述べてきた. 中年期を定義する際の困難は, 個人ライフサイクル上の中年期と家族ライフサイクル上の中年期が必ずしも一致しない点にある. 例えば, 前述のように価値観の多様化による離婚の増加は, 家族構造の多様化へとつながっている. そのため, 個人ライフサイクル上に中年期と位置付けられる個人が, 配偶者および子どもを有しているとは限らない. しかし, 個人ライフサイクルにおける中年期と家族ライフサイクルにおける中年期が一致している人が多いため, 本研究ではこれらが一致している者を研究対象とする. また, 子どもを有している夫婦とそうでない夫婦では, 臨床的に夫婦関係の様相に大きな違いがある. 家庭あたりの平均子ども数を参考に, 本研究では子どもを持つ中年期夫婦を研究の対象とする.

中年期は, 夫婦関係経歴を形成するうえで大きな転換期であるとともに, 個人的な危機を迎える時期でもある. 先行研究からは, 夫婦関係満足度は中年期前期から後期の間で最も低下している事, 夫婦間における情緒的側面に対する認識の差が大きい事などが明らかにされている. しかし, 心理学では, 中年期夫婦に焦点をあてた研究が充分にあるとは言えない状況であり, 中年期夫婦を対象とした実証的研究が蓄積される事が期待されている.

また, 育児期や高齢期との比較において取り上げられたように, 中年期夫婦の問題が見えにくいという事が, 研究の少なさを助長してきたと考えられる. しかし, 中年期は個人

的な危機を迎える時期と夫婦関係の転換期の重複した時期であるという事から，中年期を対象とした研究が進展する事は，熟年離婚の問題や，中年期に迎える変化と危機に伴う夫婦関係の再構築などの現代社会における実践的な課題に応える事に貢献する事が出来ると考えられる．中年期における重要な研究テーマである孤独感（井上, 2001）など実存的充実（松久・緒賀, 2009）の問題や，アイデンティティ（清水, 2008; 清水, 2004），時間的展望（日潟・岡本, 2008）, well-being（若本, 2007）といった変数に対して，夫婦関係の在り様が直接的・間接的に及ぼす影響は計り知れない．夫婦関係が夫や妻に影響を与えるという事が臨床における事例研究から示されているにも関わらず殆ど実証されていない（束原, 2004）事をふまえると，本論文のように夫婦関係に焦点を当てた実証的な研究が重要である．

第 3 章　本論文の問題と目的

ここまでの議論および先行研究の概観をふまえて，本章では本論文の問題と目的を整理する．

１．システム論の観点を採り入れた二者関係研究

第 1 章ではまず，二者関係研究の概観を行い，システム論の観点を採り入れた二者関係研究を行うことが重要であることを指摘した．研究法の発展により，これまで不可能であったシステム論の観点を採り入れることが可能となった．つまり，「関係」を分類して研究を行うという既存の方法を超えて，二者間の相互作用を直接的に研究の対象にする，2 変数間の関連を個人レベルと二者関係レベルに分割して理解する，といったことが可能となったのである．そこで本論文は，システム論の観点を採り入れた二者関係研究を行う．

２．中年期夫婦関係

数ある「親密な二者関係」の内，本論文は中年期の夫婦関係に焦点を当てている．第 2 章の中年期夫婦研究の概観から，１．中年期は様々な生物的・心理的・社会的変化と危機を迎える時期であり，それに伴い夫婦関係の再編成が求められること，２．家族ライフサイクルにおける中年期は，親子関係・夫婦関係・生活構造といった面で変化を迎えること，が示された．

中年期は個人としても夫婦・家族としても変化を迎える時期であることから，中年期を対象とした研究を行い，熟年離婚の問題やエンプティ・ネストの問題，実存的充実や well-being といった様々なテーマに関する知見を蓄積することが求められている．しかし，現在のところ，中年期夫婦に焦点を当てた心理学研究は少なく，充分な知見があるとは言えない状況にある．そこで本論文は，中年期夫婦関係に焦点を当てて，どのような夫婦関係が適応につながるのかということについて検討を行う．

３．夫婦関係の評価方法

以上をふまえて，本論文では中年期夫婦関係と適応の関連について検討する．そのためには，中年期夫婦関係を評価する必要があるが，それはどのようにしてなされ得るのだろうか．

理論的には，夫婦関係の評価方法は，１．夫婦関係にある個人が自身の関係を評定する方法，２．ある夫婦関係を他者が評定する方法，３．客観的・絶対的基準を用いて夫婦関係を評定する方法の３種類が考えられる．しかし，実際のところ，大学生の成績を GPA で評定するというような場合とは異なり，夫婦関係を客観的・絶対的基準を用いて評定する

ことは不可能である. 夫婦関係の理想的な在り方というものが客観的に存在する場合には, それを頼りに夫婦関係を評定することが可能であろう．しかし，そのような指標は存在しない.

そこで本論文は，夫婦関係にある個人が自身の関係を評定する方法と，夫婦関係を他者である研究者が評定する方法をそれぞれ用いて，夫婦関係と適応の関連を検討する．第Ⅱ部・第Ⅲ部においては，個人が自身の夫婦関係を評定することで，夫婦関係を理解する．第Ⅳ部においては，夫婦関係の相互作用を観察・記録し，分析の対象とすることで，夫婦関係を理解する.

４．適応

本論文において,「夫婦関係」と並んで重要な変数が「適応」である.「適応」の概念が意味するところはとても広いが，広義には「個体が生後の発達のなかで遺伝情報と経験をもとに，物理・社会環境との間において，欲求が満足され，さまざまな心身的機能が円滑になされる関係を築いていく過程もしくはその状態（根ヶ山, 1991）」と定義されている．そこで，本論文においても「適応」をこのように広義に定義する.

第Ⅱ部・第Ⅲ部では「適応」を，上記の定義を踏まえた上で，さらに狭義に「心身的機能が円滑になされており，精神的健康が保たれている状態」と定義する．このように定義する際に重要となる点は,「健康とは，病気ではないとか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にも，すべてが満たされた状態にあること（世界保健機関, 1948：世界保健機関憲章前文：日本世界保健機構協会仮訳より）」という考え方である．単に疾病や病弱が存在しないということではなく，より積極的な人間観に基づく概念であるという点が重要な点である. 第Ⅱ・Ⅲ部において, 適応は「心理的 well-being」および「GHQ28」により測定される.

一方，第Ⅳ部においては，狭義に適応を「環境に対して有効で適切な働きかけを行うことが出来, それに対して環境から肯定的な反応や評価が与えられている状態」と定義する．この定義に基づく場合, 不適応は「環境に対して有効で適切な働きかけを行う事が出来ず, 周囲から否定的な評価を受けており，心理的な不全感や不安定感を伴う状態」と定義することが出来る．この不適応は心理療法の対象となるものであることから，健常群を適応している状態，臨床群を不適応の状態と見做すことが可能であろう．なお，本項第Ⅳ部においては,「自身の夫婦関係にある配偶者」を「環境」として位置付けることが出来る.

この操作的定義だけでは，適応・不適応を区別するのは不可能である，という批判が行

われることは，充分に考えられる．夫婦間の相互作用が有効・適切でなく，心理的な不全感や不安定感を伴う場合であっても，そのことが医療機関や相談機関への受診に必ずつながるわけではないためである．つまり，臨床群を不適応な状態にある者と見做すことは可能であるが，その逆は不可能であり，健常群が適応的な状態にあるかどうかは厳密には不明である．

本論文ではこの点について，調査を行った時点で，健常群の夫婦は相談機関への受診に至らずに夫婦関係を継続することが出来ているという点において，相談機関への受診を必要とした臨床群夫婦と質的に異なるという考えから研究を行っている．健常群夫婦の夫妻間の相互作用が常に有効・適切であるとは現実的に考え難く，多少の問題を抱えながらも関係を維持していくのが実情であろう．しかし，臨床群夫婦においては当事者自身が相談機関への受診を必要としてきたこと，および，後に詳述するように，治療者から見て援助・介入の必要があると判断されたことから，本論文において調査協力を募った臨床群夫婦は，夫婦関係において生じている問題が健常群のそれとは質的に大きく異なるものと考えられる．

第Ⅱ部・第Ⅲ部における狭義の「適応」と第Ⅳ部における狭義の「適応」は，いずれも最初に述べたような広義の「適応」ではあるが，その内実は少々異なる．理想的には，第Ⅳ部について，心理的 well-being および GHQ28 を用いてスクリーニングをした上で，健康度の高い夫婦と低い夫婦のコミュニケーションを比較する，というような研究デザインを採用することで，第Ⅱ部・第Ⅲ部と一貫した狭義の「適応」の定義を基に研究を行うことが出来る．しかし，第Ⅳ部では，より臨床的に意味があると考えられる基準で適応の観点から夫婦を群分けし，コミュニケーションを比較することとした．

５．混合研究法とトレード・オフ問題

さて，システム論的観点を採りいれて関係について研究を行う際には，トレード・オフの問題について論じる必要がある．Ickes（2000／2004）は，親密な関係を研究する際に有用となる研究法を複数挙げた上で，それらの方法の全てがそれぞれ異なる長所および短所を有していることを論じ，多様な方法を組み合わせた折衷的方法を用いることを勧めている．方法を統合させることにより，さまざまな方法に関わらない結果の一致，あるいは三角測量（triangulation）的な結果を示すことが可能となる．Duck（1990）は，異なるさまざまな方法を組み合わせることは，単独の方法で得られたどんな単一のデータよりも，関係についてのより完全で正確な見方を提供してくれると述べている．

複数の研究方法を組み合わせて実施する方法の一つに，混合研究法（Mixed Methods Research）がある．混合研究法は，研究の妥当性・信頼性を高めるとともに，量的研究と質的研究のパラダイム論争に一つの方向を与える第 3 の研究法として発展してきた（廣瀬, 2012）.

川口（2011）は，混合研究法を巡る論点について，（１）何を混合研究法と呼ぶのか，（２）混合研究法を支える哲学，（３）混合研究法をどのように実施するか，の３点からまとめている．ここでは，「混合研究法を使用する場合には，混合研究法を支える哲学，混合研究法の実施スタンス，どのようなパラダイムに則って研究を行うのかということを宣言しなければ混乱が生じる」（Mertens, 2010）という指摘を受けて，川口の議論を参照しつつ，本稿における立場を明示する．

何を混合研究法と呼ぶかは，識者の間で意見が分かれている．川口（2011）は，単純に量的調査と質的調査を組み合わせること（Creswell & Clark, 2007/2010），データの収集・分析・結論など研究のそれぞれの段階で量的調査と質的調査を組み合わせて使うこと（Teddlie, 2006），一つの論文の中で中心となる手法と補助となる手法が組み合わされているもの（Morse & Niehaus, 2009）を挙げている．本稿は，Creswell & Clark（2007/2010）の立場をとっており，単純に量的調査と質的調査を組み合わせていることによって，混合研究法とする．

また，混合研究法を支える哲学については，様々な議論（e.g., Creswell & Clark, 2007/2010; Biesta, 2010; Gorard, 2010）がある．西條（2005）は，＜数量的アプローチ＞vs.＜質的アプローチ＞といった人間科学内における対立図式を超え，より建設的・創造的な研究を可能とする中核原理として，関心相関性を挙げている．すなわち，研究を構成する認識論，理論，方法論，アプローチ，分析法といった枠組みは，研究者の関心や研究目的と相関的に選択される．このことは，異なる認識論を前提とする多様な方法論の柔軟な選択を理論的に保証しているという点で，「場当たり的折衷主義」から「方法論的多元主義」へと深化し，三角測量的アプローチの認識論的基盤が整備されたことを意味する．以上の議論を踏まえ，本稿は「研究方法は研究の目的から関心相関的に規定されるため，必要に応じて適切な手法を選択すれば良い」という立場をとる．

最後に，混合研究法をどう実施するかという点について，川口（2011）は Morse（1991）の表記法を紹介している．これは，QUAL, QUAN, qual, quan, →, +といった記号を使って研究デザインを表記する考え方である．QUAL および qual は質的調査を行うことを意味し，

QUAN および quan は量的調査を行うことを意味する．大文字はそれが中心となる調査法となることを意味し，小文字はそれが中心ではない（その調査だけでは論文を書くことが出来ない）調査を意味する．→は，調査が順番に行われることを意味し，＋は同時に調査が実施されることを意味する．

川口（2011）は，この表記を用いる必要性および利点として，混合研究法を用いた研究を整理し評価することが可能になること，および研究のどの段階で量的調査と質的調査を混合させることが出来たのかという混合研究法の調査デザインの表現が可能であることを挙げている．本論文は，先行研究の展望，本論文の問題意識について論じた第Ⅰ部および総合考察の第Ⅴ部を除くと，quan1+quan2+QUAN1+quan3→QUAL1→QUAL2 と表記することが可能である．quan1 は夫婦関係認知の構造の探索的検討，quan2 は中年期のポジティブ・マリタル・イリュージョンの構造の探索的検討，QUAN1 は中年期における夫婦関係認知と適応の関連，quan3 は PMI に項目の獲得容易性が及ぼす影響，QUAL1 は会話分析による夫婦間葛藤の質的検討，QUAL2 は臨床群における会話分析による夫婦間葛藤の会話と適応の関連を意味する．

さて，本研究の目的は，中年期における夫婦関係が適応といった問題とどのように関係するかを検討することである．ここまでの議論をふまえ，本稿においては，第Ⅱ部においてペアワイズ相関分析の分析方法を，第Ⅲ部において会話分析の分析方法をそれぞれ用いる．なお，それぞれの分析方法とシステム論的観点の関連については詳細に後述する．

６．まとめ

以上をまとめて，本論文は次のような問題意識について検討したものである．

１．「中年期夫婦関係」と「適応」の関連について検討する．

２．「中年期夫婦関係」は，個人が自身の夫婦関係を評定する方法と，夫婦関係を第 3 者である研究者が評定する方法によって，それぞれ検討される．

３．「個人が自身の夫婦関係を評定する方法」を用いた「中年期夫婦関係」と「適応」の関連を検討する際，「適応」は心理的 well-being および GHQ28 といった尺度を用いて測定される精神的健康を意味する（第Ⅱ部・第Ⅲ部）．

４．一方，「夫婦関係を第 3 者である研究者が評定する方法」を用いた「中年期夫婦関係」と「適応」の関連を検討する際には，「適応」は当該夫婦が臨床群夫婦であるか否かによって区別される（第Ⅳ部）．中年期夫婦を臨床群夫婦と健常群夫婦に分けることで適応の状態が区別された上で，これら 2 群の中年期夫婦における夫妻間の相互作

用について，質的な相違が検討される．

5．第Ⅱ部・第Ⅲ部の研究と第Ⅳ部の研究は，いずれも中年期夫婦関係と適応の関連について検討したものであるが，その具体的な検討方法は異なる．これらの知見をどのように統合することが出来るのか，また残された課題は何なのかということについて，考察を行う．

第 4 章　中年期における夫婦関係満足度および諸変数の関連

１．はじめに

ここまで，本論文の問題意識と目的について論じてきた．本章では，システム論的観点を採り入れた研究を行う前に，先行研究から見出されてきた知見の統合を試みる．

第 2 章において展望したように，先行研究によって示されてきた知見は，中年期夫婦理解を進めてきた点で一定の価値がある．しかし，これらの知見が独立して存在していることや，後述のようなサンプリング・バイアスの問題，夫妻間の相互作用に焦点が当てられていないために充分な夫婦関係理解に至っていない点，および調査協力者が妻に偏っているという問題など，今後検討されるべき課題が多く残されている．

そこで本章では，夫婦関係満足度と夫婦関係に影響する諸変数との関連について検討を行う．夫婦関係満足度は，夫婦関係の質の指標として位置付けられる．また，夫婦関係満足度との関連を検討する諸変数として，先行研究の知見をふまえて，情緒的サポート，家事分担，子どもの同居，就労時間，および健康状態の指標を取り上げる．これらの変数を 1 つのモデルに組み入れて，大規模社会調査データを用いて検討を行うことで，夫婦関係満足度および諸変数との関連を整理する．

２．問題と目的

従来の中年期夫婦関係研究においては，次の 3 点の問題が指摘される．第 1 に，サンプルの偏りが挙げられる．中年期夫婦を対象とした研究は，講義を通して行われる，学生の両親を対象とした質問紙調査が多くみられる．また，回収率が充分に高いとは言えないという特徴がある．例えば，論文データベース CiNii で「中年期」「夫婦」のキーワードで検索して得られる心理学論文 15 篇（2015 年 4 月時点）のうち，質問紙調査を行った論文 6 篇の回収率の平均は，55.4%（SD = 15.5）と低い値であった．さらに，これらの論文は全て，学生を通じてその両親へ調査協力を求めるものだった．夫婦関係についての研究を行う際，夫婦関係が良好な場合には調査に協力しやすいが，そうでない場合には調査に協力するのが困難になると想定される．そのため，回収率の低さやサンプリング方法の偏りは，中年期夫婦研究において深刻な課題である．大規模社会調査データを用いることで，サンプリングの偏りの緩和が期待される．

第 2 に，夫婦を対象とした研究は,個人内の影響を問題にするものが殆どである点が挙げられる（藪垣,2010）．夫婦間の影響を知るためには,夫婦の一方の変数が配偶者の変数に影響を及ぼすクロスオーバーに焦点を当てる（e.g.，伊藤・相良・池田，2006）ことや，コミ

ュニケ―ションなどの「夫婦間の相互作用」に焦点を当てることが必要である．

第 3 に，中年期夫婦関係研究は，妻を対象とした研究に偏っていることが挙げられる．例えば,夫婦間の情緒的交流が対等かつ相互的に行われていない（e.g., 平山，1999；稲葉, 2001）ため, 配偶者や夫婦関係に対する満足感は妻側が顕著に低い（e.g. 菅原・詫摩, 1997）ことから,妻の夫婦関係に対する不満足感が重要なテーマとして研究の焦点となってきた．そのほか,女性の社会進出に伴う「個人化」傾向（長津, 2007）が研究者の関心を集めたこと,仕事と家庭の複数の役割に従事する多重役割研究は，労働市場参入に伴って生じる既婚女性の役割間葛藤に焦点が当てられてきた（福丸, 2003）ことなど,夫婦関係にまつわる研究は妻に焦点を当てられてきたことで，妻に対する知見に比して，夫に対する知見が極端に少ない状況にある．しかし，中年期夫婦にまつわる変数は性差が大きい（e.g., 平山・柏木, 2001；土倉, 2005）ことや，男性の夫婦関係満足度は 40-50 代に最も低減すること（リクルートブライダル総研, 2012）からは，夫を対象とする研究の蓄積が期待される．とりわけ，前述のような夫婦間相互作用に焦点を当てる際には，夫妻いずれの視点もそれぞれ重要な意味を持つだろう．

<u>中年期夫婦関係満足度に影響する諸変数</u>

夫婦関係の総合的評価の指標として,夫婦関係満足度（伊藤・相良, 2012）が挙げられる．夫婦関係満足度は,主観的幸福感や精神的健康といった個人の適応状態に影響を及ぼすこと（e.g., 伊藤・相良・池田, 2006; 金政, 2012）,また夫婦間のコミュニケーション（e.g., 伊藤・相良・池田, 2007；土倉, 2005）や家庭へのコミットメント（e.g., 伊藤・相良・池田, 2006；橘・中村・中島・石田・萩原, 2008；末盛, 1999）が夫婦関係満足度に影響を及ぼすことが知られており,夫婦関係満足度は中年期夫婦研究の重要な研究テーマとなっている．Saginak & Saginak（2005）は先行研究の概観から,近年の夫婦関係満足度に関する研究においては,夫婦の役割分担,および公平性・対等性に関する認知，とりわけジェンダー・イデオロギーが重要なテーマであると見出した．

夫婦関係満足度に影響を及ぼす重要な変数として,大きく 3 つの変数が先行研究から指摘されている．第 1 に情緒的サポートが挙げられる．岡本・村田（2005）は,夫婦関係満足度の高い中年期夫婦は愛情・精神的機能を重視する結婚をしていることを示した．また,情緒的サポートは女性に比べ男性の方が少ないことが知られている（e.g., 平山，1999；稲葉, 2001）．

第 2 に,家事役割が挙げられる．家事役割は,妻の分担量が多いことが知られている（e.g.,

Bartley, Blanton, & Gilliard, 2005）．大和（2006）は，夫の家事参加は，家事参加自体に対する妻の満足感を高めるが，夫婦関係全体に対する満足感には影響を及ぼさないことを示している．また,実際の家事役割の分担量は家事役割分担の満足度を媒介して夫婦関係満足度に影響すること Stevens, Kiger, & Mannon（2005）が知られている．さらに,中年期ではないが,育児期の妻をどうサポートするかという文脈で,夫の家事役割分担が妻の夫婦関係満足度に及ぼす影響が複数示されている（e.g., 中嶋・朴・小山・尹, 2012；中島・行田, 2009）．

第 3 に,エンプティ・ネストへの移行が挙げられる．中年期夫婦は,成人した子どもの同居が続いている場合には親役割が部分的に継続するのに対して,成人した子どもの離家によってエンプティ・ネストへ移行する（長津・小柳, 2012）．また,それに伴い夫婦で過ごす時間が増える,生活の自由度が増すなど,夫婦関係が変化する（後山，2002；Nagy & Theiss, 2013）．特に,家族構成の変化に伴って要請される夫婦関係の再構築（平木・中釜, 2006）は夫妻にとって重要な課題となる．これらのことから,子どもの同居の有無が夫婦関係満足度に影響を及ぼす可能性が示唆される．

以上をふまえ，本研究では「日本版 General Social Surveys 2006 年版（以下，JGSS-2006）」で扱われた変数のうち，夫婦関係の総合評価の指標として，「夫婦関係満足度」を,また夫婦関係満足度に影響を及ぼすと考えられる変数として「情緒的サポート」「家事分担」「子どもの同居」「就労時間」をそれぞれ扱う．さらに,「家事分担」や「情緒的サポート」などの活動に従事するためには，身体的に健康であることが重要であると考えられることから，「健康状態」を取り上げる．

<u>夫婦関係満足度および関連諸変数の理論モデル</u>

ここまで,夫婦関係満足度に影響を及ぼすと考えられている諸変数を概観した．これらの変数が相互にどのように関連しているかについて検討するためには,これらの変数を1つの分析モデルに組み込んで検討する必要がある．また中年期夫婦研究はこれまで女性に研究の焦点が当てられてきたことから男性に関する知見が少なく,性差についても検討する必要がある．以上より,本研究では多母集団同時分析の手法を用いて，変数間の関連について検討する．

我が国においては，性別役割分業観は未だ根強く残っており，妻が家事分担を夫よりも多く担う場合が多い（e.g., 内閣府, 2012）ことから，調査協力者の家事分担と配偶者による家事分担は負の相関関係が想定される．一方，コミュニケーションのように二者関係で

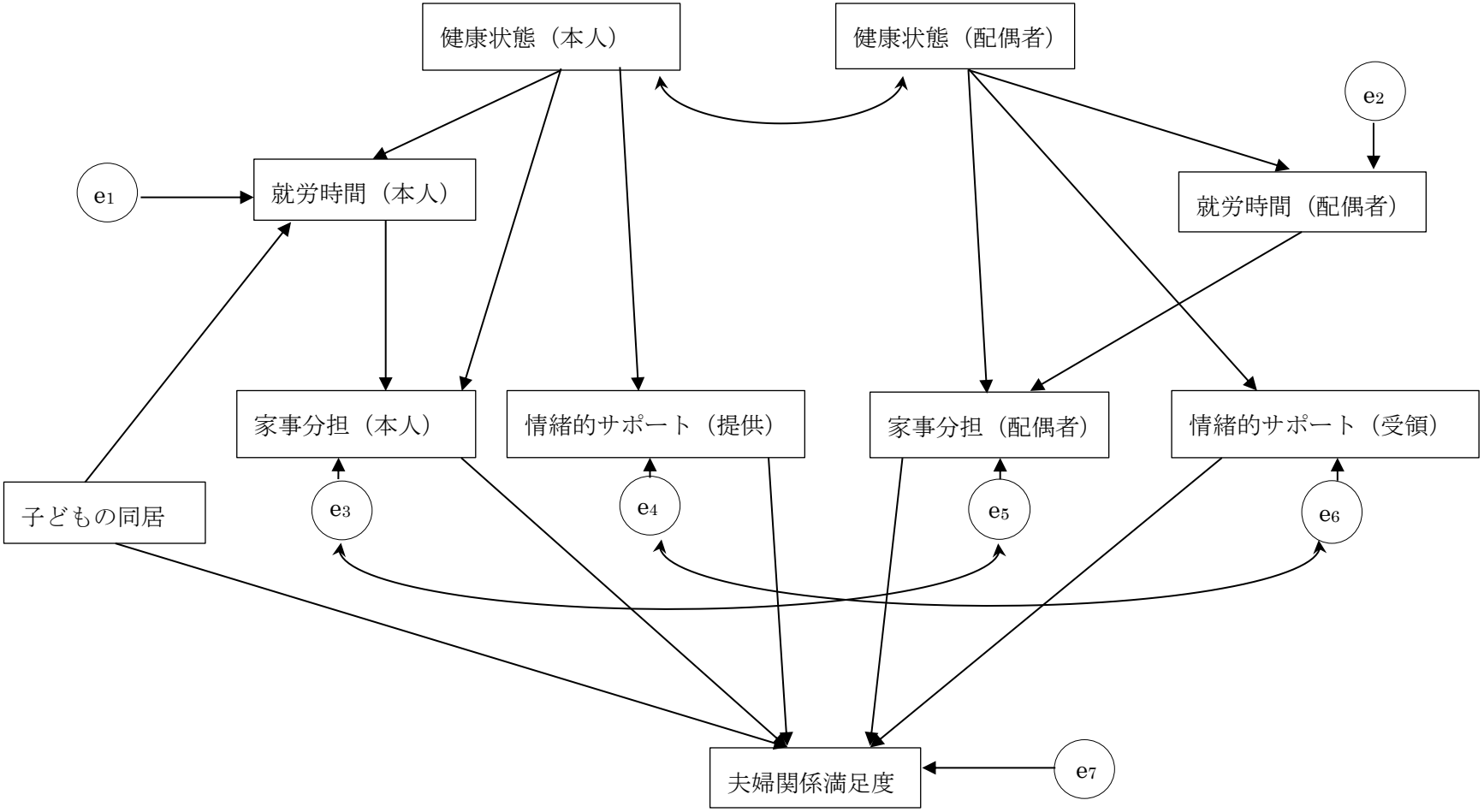


図 4-1．夫婦間相互作用，夫婦関係満足度および健康状態の関連の理論モデル

共有される間主観的な変数については，二者関係の一方のみが貢献し，もう一方のみが恩恵を受けるというような場合には，相互作用そのものが維持され難くなるものと考えられることから，基本的には互恵的な性質があるものと予想される．したがって，情緒的サポートは配偶者に与えるサポートと配偶者から得られるサポートの間に正の相関関係が想定される．ただし,中年期の妻は「夫婦が互いにケアしあう関係は非対称的である」と認知している（平山，2002）という知見があり,女性の場合においては相関関係が見られない可能性が考えられる．以上をふまえ,図 4-1.に示した理論モデルについて検討を行った.

３．方法

A.データ

東京大学社会科学研究所付属社会調査・データアーカイブ研究センターより JGSS-2006 の個票データの提供を受けた．この調査は，層化二段無作為抽出法を用いて，全国の満 20 歳以上 89 歳以下（2006 年 9 月 1 日時点）の男女個人を調査対象とし,面接法と留置法を組み合わせて行われた．本研究は中年期を 40 歳から 65 歳と定義し，該当するデータを分析の対象とした．欠損値がみられるものは，分析の対象から除外した．最終的なサンプルサイズは，男性 358 名，女性 459 名，計 817 名であった.

第一著者が JGSS-2006 コードブックに示された情報より算出したところ，回収率はそれぞれ，40 代は 56.4%，50 代は 59.0%，60 代は 69.4%であった.

なおJGSS では,厚生労働省の国勢調査の結果をもとに期待回答者数が算出されている．本研究が対象とする中年期では,回答者数が期待回答者数を上回っており，サンプリングにおける偏りは緩和されていると考えられる.

B.分析に用いた変数

属性　調査対象者の属性として，年齢，結婚年数，最終学歴，就業形態，家計収入を取り上げた．結婚年数は，初婚者については回答者の年齢から初婚年齢を引いて算出した．複数回結婚した者は，回答者の年齢から最新の結婚年齢を引いて算出した（Table4-1）.

夫婦関係満足度　夫婦関係満足感として,「生活面に関する以下の項目について，あなたはどのくらい満足していますか.」という教示文で「配偶者（夫や妻）との関係」について尋ねた 1 項目を夫婦関係満足度の指標とした.「１．満足」から「５．不満」までの 5 件法であった．なお，得点が高まるにつれてより夫婦関係に満足しているという意味にするため，項目得点は 6 から減じて逆転させた.

子どもの同居の有無　エンプティ・ネストの指標として,子どもの同居の有無を取り上げた.

同居している子どもが 1 名以上いる場合には 1,別居・死亡・無回答を 0 とそれぞれコード化した.

就労時間　1 週間あたりの就労時間数を尋ねた.

Table4-1 調査協力者の属性の記述統計

		男性（*n* = 358）	女性（*n* = 459）
平均年齢		54.6歳（*SD*=7.2）	53.1歳（*SD*=7.3）
平均結婚年数		26.9年（*SD*=8.7）	28.6年（*SD*=8.7）
平均再婚者結婚年数		17.1年（*SD*=10.1）	16.4年（*SD*=9.5）
最終学歴	中卒・高卒	226（63.1%）	328（71.5%）
	短大・専門学校	12（3.4%）	88（19.2%）
	大卒	107（29.9%）	36（7.8%）
	大学院卒	9（2.5%）	2（0.4%）
	その他・不明	4（1.1%）	5（1.1%）
就業形態	フルタイム	233（65.1%）	77（16.8%）
	パートタイム	20（5.6%）	141（30.7%）
	派遣	2（0.6%）	6（1.3%）
	自営業	52（14.5%）	55（12.0%）
	無職	51（14.2%）	180（39.2%）
家計収入	250万以下	15（4.1%）	23（5.0%）
	250−450万	49（13.7%）	50（10.9%）
	450−650万	65（18.2%）	70（15.3%）
	650−850万	59（16.5%）	70（15.3%）
	850−1,000万	37（10.3%）	38（8.3%）
	1,000万以上	57（15.9%）	70（15.3%）
	その他・不明	76（21.2%）	138（30.1%）
子どもの同居	同居なし	107（29.9%）	151(32.9%)
	1名以上同居	251(70.1%)	308(67.1%)

注. 全調査協力者 817 名のうち,再婚者は男性 23 名（6.4%）,女性 18 名（3.9%）であった.

情緒的サポート　情緒的サポートとして,「あなたの配偶者は，あなたに悩みを打ち明けてくれますか.（以下,『情緒的サポート（提供）』とする」「あなたの配偶者は，あなたの悩みを聞いてくれますか.（以下,『情緒的サポート（受領）』とする）」の 2 項目を用いた.「１．強くそう思う」～「７．強くそう思わない」の 7 件法であった．得点が高まるにつれてサポートが増えるという意味にするため,項目得点は 8 から減じることで逆転させた.

家事分担　家事分担として,「あなたは，どのくらいの頻度で次のことをしていますか.」という教示文で「夕食の用意」「洗濯」「買い物（日用品や食料品の買い物）」「家の掃除」「ゴミ出し」について尋ねた 5 項目を用いた．これらは「１．ほぼ毎日」「２．週に数回」「３．週に１回程度」「４．月に１回程度」「５．年に数回」「６．年に１回程度」「７．ま

ったくしていない」の 7 件法であった．これら 5 項目の得点の合計を算出し，家事分担得点とした．得点の範囲は，5 点から 35 点であった．同様に，「あなたの配偶者は，どのくらいの頻度で次のことをしていますか.」という教示文で同じ内容について尋ねた 5 項目について，項目得点の平均値を算出し，配偶者の家事分担得点とした．なお，得点が高まるにつれて家事の分担が多いという意味にするため，項目得点は 40 から減じて逆転させた．

健康状態　「あなたの現在の健康状態は，いかがですか.」の 1 項目を，健康状態の指標とした．「１．非常に良い」から「５．非常に悪い」の 5 件法であった．同様に，「あなたの配偶者の現在の健康状態は，いかがですか.」の 1 項目を用いて，配偶者の健康状態の指標とした．なお，得点が高まるにつれてより健康であるという意味にするため，項目得点は 6 から減じて逆転させた．

４．結果

情緒的サポート，家事分担，夫婦関係満足度，健康状態について，男女別に記述統計量を算出した．さらに，*t* 検定（夫 358 名，妻 459 名）によって性差を検討した（Table4-1）．その結果, 健康状態を除く全ての変数において, 男女間で有意な差が認められた（すべて, $p<.001$）.

続いて，多母集団同時分析を行った．まず,男女別に算出した相関行列を Table 4-2 に示す. 情緒的サポート,健康状態は男女ともに夫婦関係満足度との正の有意な相関が見られた. 一方,妻のみにおいて,配偶者の家事分担と夫婦関係満足度の間に正の有意な相関が,子どもの同居の有無,本人の就労時間と夫婦関係満足度の間に負の有意な相関が見られた. さらに, 夫妻ともに,本人の家事分担および配偶者の就労時間は夫婦関係満足度との間に有意な相関が見られなかった.

続いて,図 4-1 の理論モデルに基づいて分析を行い,男女のいずれのモデルにおいても有意で無かったパスを削除した. 次に,全てのパラメータについて男女で等値である制約を加えたモデルと等値制約の無いモデルについてそれぞれ適合度を算出し比較した．その結果, いずれにおいても充分なモデル適合度が得られなかった. そこで,相関行列を参考に等値制約の無いモデルを修正したところ,適合度が大幅に改善され,当てはまりのよいモデルが得られた. 最終的なモデルを図 4-2・図 4-3 に示す（GFI = .943, AGFI = .895, CFI = .818, RMSEA = .064）[1].

Table 4-2 情緒的サポート得点，家事分担得点，夫婦関係満足度，就労時間,健康状態の記述統計量と *t* 検定の結果

	夫（*n* = 358）		妻（*n* = 459）		全体（*n* = 817）		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*t*値
情緒的サポート（提供）	5.21	1.09	4.74	1.38	4.95	1.28	5.32***
情緒的サポート（受領）	5.27	1.09	4.74	1.53	4.97	1.38	5.53***
家事分担（本人）	15.51	6.86	32.07	2.59	24.82	9.59	−47.58***
家事分担（配偶者）	31.78	4.18	13.79	7.05	21.67	10.74	42.77***
夫婦関係満足度	4.02	0.95	3.73	1.03	3.86	1.01	4.05***
就労時間（本人）	40.00	21.78	19.13	19.98	28.28	23.22	14.24***
就労時間（配偶者）	19.53	19.89	39.80	21.53	30.92	23.12	−13.80***
健康状態（本人）	3.46	0.90	3.56	0.85	3.52	0.87	−1.57
健康状態（配偶者）	3.60	0.89	3.51	0.90	3.55	0.90	1.32

注． *** :p<.001.

Table 4-3. 情緒的サポート,健康状態,家事分担,夫婦関係満足度,子どもの同居,就労時間の相関行列（男女）

	年齢	情緒的サポート（提供）	情緒的サポート（受領）	健康状態（本人）	健康状態（配偶者）	家事分担（本人）	家事分担（配偶者）	夫婦関係満足度	子どもの同居の有無	就労時間（本人）	就労時間（配偶者）
年齢	−	.034	−.020	.017	−.031	−.038	.005	**.127*** **	−.395***	−.175**	−.484***
情緒的サポート（提供）	.004	−	.697***	.093**	.090	.021	.080	.369***	−.102*	−.015	−.020
情緒的サポート（受領）	−.025	.713***	−	.064	.109*	.029	**.144** **	.490**	−.069	−.032	.016
健康状態（本人）	−.016	.166**	.135*	−	.231***	**.121* **	−.068	.214**	−.021	.057	−.003
健康状態（配偶者）	−.077	**.138** **	**.143** **	.305***	−	.064	.038	.260***	−.022	−.055	.104*
家事分担（本人）	.001	**.127* **	.070	.052	−.018	−	−.135**	−	−.031	−.171***	.039
家事分担（配偶者）	−.005	.037	.095	.092	**.128* **	−.227***	−	**.093** **	−.063	.024	−.101**
夫婦関係満足度	.007	.377***	.378***	.285***	.245***	.091	.075	−	**−.164*** **	−.098*	−.006
子どもの同居の有無	−.325***	−.119*	−.082	−.032	.014	**−.118* **	**.118* **	−.040	−	.131**	**.227*** **
就労時間（本人）	−.541***	−.006	.015	.108*	.037	−.132**	−.030	.017	.191***	−	.333***
就労時間（配偶者）	−.193**	.039	.002	.016	.101	**.141** **	−.146**	.051	.024	.282***	−

注：左下は男性,右上は女性の相関係数．太字は,男女のいずれかのみ有意であった相関係数を表す．*** :p<.001, **: p < .01, *: p < .05.

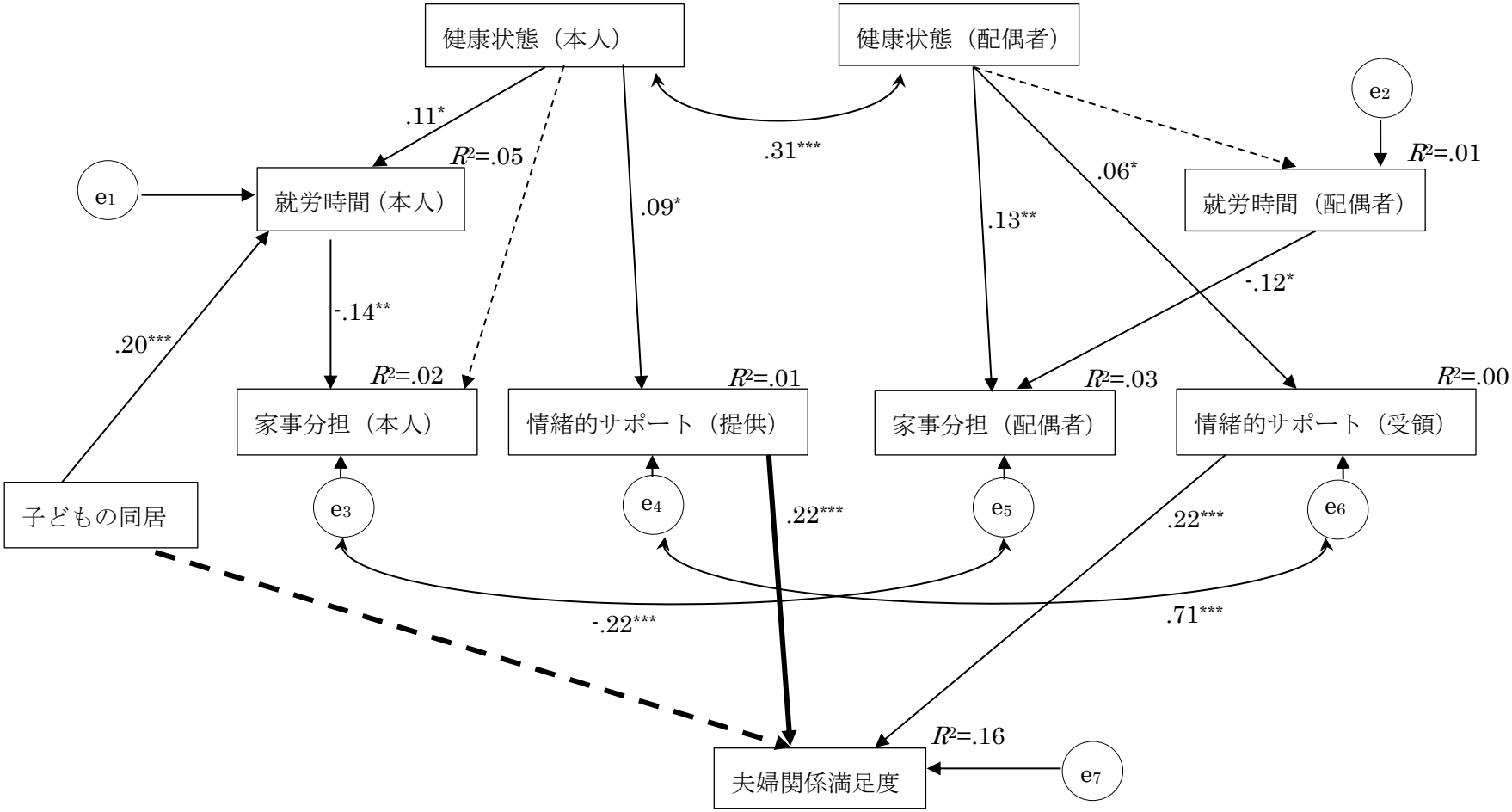


図 4-2　夫婦間相互作用, 夫婦関係満足度および健康状態の関連（男性, n = 358）　*** :p<.001, **: p < .01, *: p < .05.
　注. 有意なパスは実線で,有意でないパスは破線で示した. また,パス係数の差の検定により男女差が認められたパスは太線で示した. 数値は標準化された推定値である. また, 記述統計量より，50 歳前後に調査協力者が集まっていることから，中年期の中核を構成するデータが得られているものと考えられた.

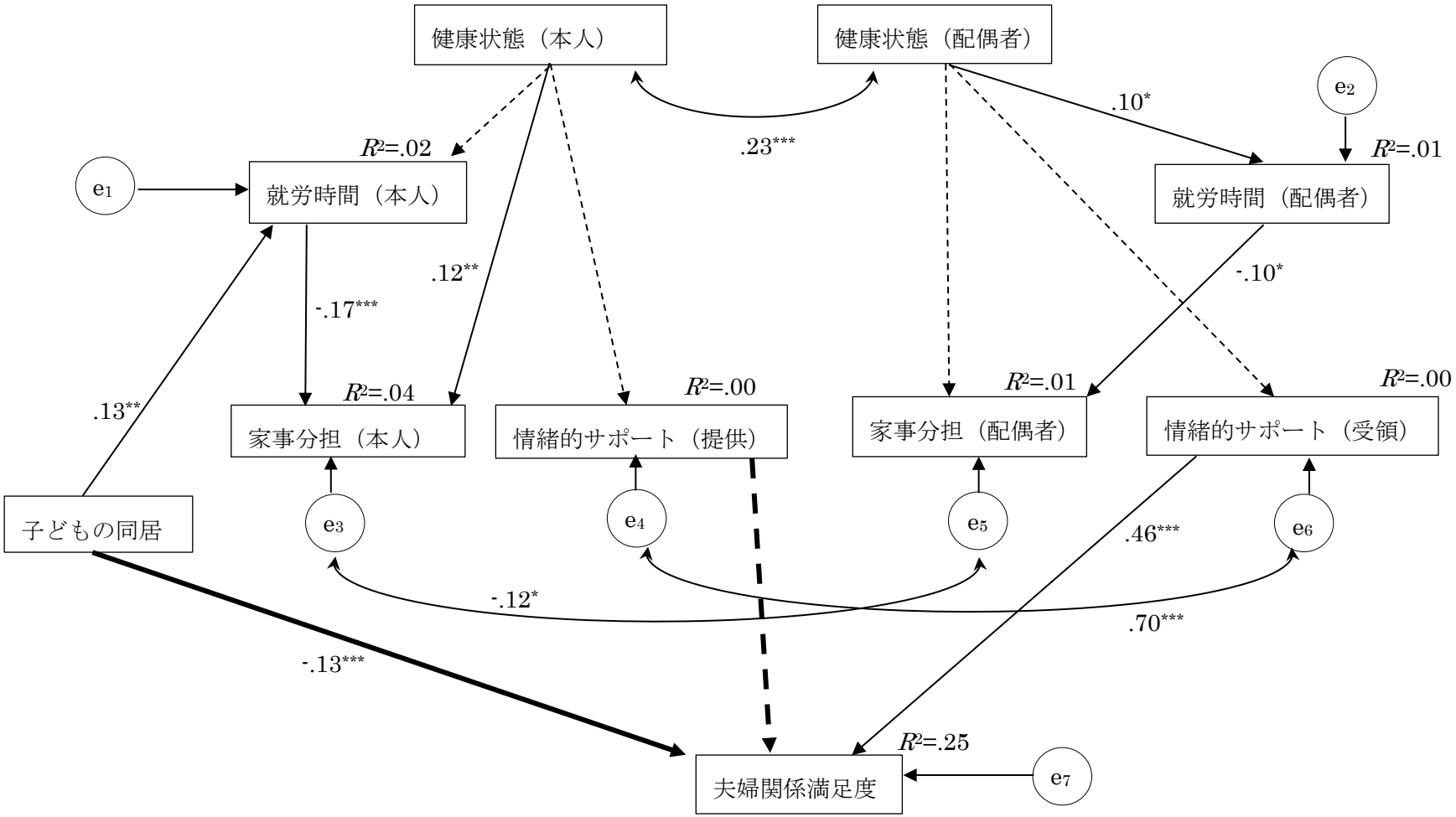


図 4-3. 夫婦間相互作用, 夫婦関係満足度および健康状態の関連（女性, n = 459）　*** :p<.001, **: p < .01, *: p < .05.
注. 有意なパスは実線で,有意でないパスは破線で示した. また,男女差が認められたパスは太線で示した. 数値は標準化された推定値である. 記述統計量より，50 歳前後に調査協力者が集まっていることから，中年期の中核を構成するデータが得られているものと考えられた.

男女いずれの分析モデルにおいても,情緒的サポート（受領）から夫婦関係満足度へのパスが有意であった.

次に,パス係数の差の検定を行い,性差を検討した．その結果,情緒的サポート（提供）から夫婦関係満足度へのパスは,男性の場合においてのみ有意であった. 一方,子どもの同居から夫婦関係満足度へのパスは女性の場合においてのみ有意であった．また,パス係数に男女へのパスが有意であるのに対し,女性は健康状態（配偶者）から情緒的サポート（受領）へのパスが非有意であった.

５．考察

本研究は,大規模社会調査データを用いて,夫婦関係満足度と夫婦関係に関する諸変数との関連の様相,およびその性差について検討することを目的とした.

サンプリングについて, 本研究で用いた大規模社会データの. 回収率は 6 割程度であり, 他の中年期夫婦研究と比して充分に高いとは言えなかった．ただし,JGSS-2006 には夫婦関係以外の質問項目が多く含まれており，夫婦関係の悪さが調査協力の拒否につながったとは考えにくい．また，第一著者が JGSS-2006 コードブックのデータから算出したところ, 有効回答が得られなかった理由の約 65%が「拒否」であったことが示された．調査項目の多さなどの JGSS の特徴や, 多忙などの調査協力者の要因の影響が考えられる. 以上から, 本研究のデータは夫婦関係に依存したサンプルの偏りを回避していること,および夫婦関係の良し悪しに関わらず，男女ともに，40 代・50 代から回答を得るのは難しい可能性が示唆される．後者については,中年期夫婦を対象とした研究の有効回収率が低い理由に関する一つの示唆として理解出来る.

記述統計および t 検定の結果について,情緒的サポート（提供・受領）は女性よりも男性の方が好ましく現状を捉えていること,男女は共通して「家事分担は妻の比重が大きい」と捉えていること,男性に比して女性の夫婦関係満足度が低いこと,女性に比して男性の就労時間が長いことが示された．一方,健康状態には性差が認められなかった．これらの知見は, 先行研究から示されてきたことと一致する.

本研究の結果は，学歴や収入が高い程情緒的ケアの夫婦間対称性が高まるという平山（2002）の結果と異なり,女性の情緒的サポート得点（提供・受領）の平均点が同じであることから,情緒的ケアに対する認知の非対称性は認められなかった．本研究のデータと比較したところ,平山論文のサンプルは,妻が高学歴（大学・大学院卒が本研究は 8.2%であるのに対して 26.9%，短大・専門学校卒が本研究は 27.0%であるのに対して 40.3%）であり,か

つ収入が少ない（無収入が本研究は 25.27%であるのに対して 47.70%，100 万未満が本研究は 30.28% であるのに対して 24.40%，100 万以上が本研究は 31.59%であるのに対して 27.90%，ただし本研究は不明・回答拒否・無回答が 0.13%見られた）という偏りが認められた．このことから，平山論文における情緒的ケアに対する認知の非対称性は,サンプルの偏りによってもたらされた可能性が考えられる．

本研究の結果からは，学歴が高くなくとも情緒的ケアの夫婦間対称性が見られることが示された．ただし，用いられている尺度の違いには留意する必要がある．平山論文の尺度は具体的な項目が並ぶのに対して，本研究の質問項目は包括的な情緒的ケアを問うものと理解出来る．一方，収入については，妻の収入が高いほど，情緒的ケアの対称性比率が高いという平山（2002）の知見と本研究の結果には一貫性が認められた．

相関分析の結果から,情緒的サポートの提供と受領の間に極めて強い相関関係が認められた．夫婦間の情緒的サポート関係は互恵性があるものと考えられる．また,男女のいずれにおいても,情緒的サポートの提供と受領の双方が夫婦関係満足度と関連することが示された．

多母集団同時分析の結果から,男女のいずれのモデルにおいても,配偶者による情緒的サポートの提供（＝情緒的サポートの受領）が個人の夫婦関係満足度に影響を及ぼすというクロスオーバー効果が示された．さらに,情緒的サポートの提供は,男性においてのみ夫婦関係満足度の向上につながることが示された．親密な話し合いを求める妻と回避する夫の問題がメディアで扱われ,夫の態度に対する妻の不満が紹介されている（平山・柏木，2001）といった状況からは,妻は夫からの情緒的サポートを求めていることが推察される．そこで,夫が妻に情緒的サポートを提供した際には,妻からのポジティブなフィードバックを受けると予想される．その結果,夫は夫婦関係満足度を高めるというシークエンスが示唆される．

家事分担は夫婦関係満足度に影響を及ぼさないことが示された．これは Stevens, et al.（2005）の知見と一貫する結果であり,家事役割分担の実際の労働量よりも，家事労働に対する評価が夫婦関係満足度に影響を及ぼす可能性が示唆される．

子どもの同居は女性においてのみ,夫婦関係満足度への有意なパス係数を示した．子どもが同居しない妻は，同居する場合に比べて夫婦関係満足度が少し高まる．これは,子どもの離家によってエンプティ・ネスト期に入るものの，夫婦の時間が増え,これまでとは異なる夫婦関係の構築が求められた結果,夫婦関係が改善したことの現れであると考えられる．また,男女いずれのモデルにおいても,子どもの同居から就労時間（本人）への有意なパス係数

が得られた．子どもの離家に伴い就労時間が減るというこの結果は,エンプティ・ネスト期に夫婦の生活構造が変わることを指摘する先行研究（e.g. Nagy & Theiss, 2013）の知見と一致する．ただし，本研究においては，同居している子どもの年齢について考慮していない．子どもの年齢によって親役割の負担度が異なり，このことが夫婦関係満足度に及ぼす影響については，今後の検討が必要である．

次に，男女いずれのデータからも，男性の健康状態は就労時間に，女性の健康状態は家事分担に，それぞれ影響することが示された．また，男性の健康状態が良くなることが，男女いずれにおいても夫婦関係満足度の改善につながる可能性が示唆された．ただし，男性の健康状態が「男性から女性への情緒的サポート」へ及ぼす影響については，男女で認識が異なっており，女性は男性の健康状態と情緒的サポートを関連付けて捉えていない点に留意されたい．

最後に,標準重相関係数から,男女いずれのモデルにおいても本研究の分析モデルによって,夫婦関係満足度の 16-25%が説明されることが示された．これらの数値は,心理学研究における目的変数の説明率としては充分に高いと言える．中年期夫婦関係を研究する際の情緒的サポートおよび子どもの同居の問題が重要なテーマであることが改めて示された．

６．今後の課題

情緒的サポートについて，本研究の結果から,「配偶者が自身の悩みを聞いてくれると個人が捉えていること」が重要であることが示された．どれくらい配偶者が悩みを聞いてくれると，個人は「配偶者は悩みを聞いてくれる」と評定するのかを明らかにすることが，今後の課題として考えられる．このことを検討するためには，夫婦間の情緒的サポートが実際にどの程度行われているのかを調べるとともに，期待充足度（李, 2008）の観点を研究に取り入れる必要がある．さらには,情緒的サポートについて，夫妻はそれぞれ配偶者に対してどのような期待を有しているのかということや，どのような振る舞いがその期待を充足させるのかといったことについて詳細に検討されることが望まれる．

次に，本研究で扱ったデータは,調査協力者が自身およびその配偶者についての変数を評定したものであった．自己評定によるデータと他者評定によるデータは，いずれがより正確かという点を明らかにすることは不可能であり，むしろそれぞれ独立した価値を有するものと考えられる．本研究においては，これらを組み合わせて検討することによって，自己評定による変数間の関連に加えて,クロスオーバー効果について検討することが出来た．一方で，本研究において用いられたデータの性質上，夫婦を対にして検討することが出来

なかった．そのため， Gonzalez & Griffin（1997）に指摘されるように，夫婦の相互依存性を適切に取り扱えていないという問題が残った．今後の課題として，ペア・データを収集することが必要である．特に，既存の大規模社会調査でペア・データを収集したものが見当たらない点は重要な課題である．ペア・データを収集することで，ペアワイズ相関分析（Gonzalez & Griffin, 1999）などの階層性を活かした分析（e.g., 藪垣, 2009）を行うことが可能となる．また，調査協力者から見た配偶者についての回答と配偶者から得られた回答の差異を検討することも，ペア・データを収集する重要な意義の一つである．個人の同一の変数について，自己評価と配偶者からの他者評価を比較することによって，認知がどのようにずれているのかということや，そのずれがどのような意味を持つのかについて検討することが可能となる．

最後に，本研究は夫婦関係満足度と諸変数の関連を横断的に検討した．しかし，実際には，配偶者から情緒的サポートを受けることで夫婦関係満足度が高まり，配偶者に対する情緒的サポートの提供が増え，その結果，配偶者の夫婦関係満足度が高まり，配偶者からの情緒的サポートが増える……というように，夫婦関係満足度と諸変数は円環的に影響し合うことが考えられる．したがって，どのように夫婦関係満足度と諸変数が相互に影響を及ぼし合っているのかを縦断的に検討することが，今後の課題として挙げられる．

脚注

[1] モデルから「健康状態」を削除した場合の適合度は GFI .952, AGFI .914, CFI .861, RMSEA .064,「健康状態」と「就労時間」の両変数を削除した場合の適合度は GFI .982, AGFI .961, CFI .968, RMSEA .039 であった．しかし，夫婦関係満足度と諸変数の関連を検討するという本研究の目的に照らし，本研究においてはこれらの変数を削除しないこととした．

第 I 部のまとめ

本章では，中年期夫婦関係にまつわる先行研究から指摘されてきた，夫婦関係に影響を及ぼす変数について，大規模社会調査データを用いて 1 つの理論モデルに組み込んで検討することで，知見の統合を試みた．

本研究の結果から,「配偶者が自身の悩みを聞いてくれると個人が捉えていること」が夫婦関係満足度と関連することが示された．これまで独立して示されていた先行研究の知見

を統合したという点で，本研究は重要な役割を果たしたと考えられる．

一方で，本研究で扱われた変数は，大規模社会調査において収集された項目のみであった点は今後の課題である．とりわけ,「個人は自身の夫婦関係をどのような観点から捉えているのか？」「情緒的サポートを配偶者から得ていると個人が感じていること以外に，個人がどのように夫婦関係を認知することが，質の良い夫婦関係と関連するのか？」といった問いは重要な検討課題であろう．例えば,「個人が配偶者から情緒的サポートを得ていると感じることが夫婦関係満足度に関連する」という知見は，夫婦関係満足度に関連する変数の一部に過ぎないかも知れない，というように考えることが出来る．先行研究ならびに本研究で扱われた「家事分担」などの変数が，夫婦関係満足度と関連する変数を網羅しているとは考え難い．そこで，第Ⅱ部からは,「個人は自身の夫婦関係をどのような観点から捉えているのか？」ということに焦点を当てて検討を行う．

また,「情緒的サポートを配偶者から得ていると個人が感じていること」が夫婦関係満足度において重要な役割を果たすことが示されたが，これは夫婦関係をどのように認知しているかという観点からの検討である．一方で，そもそも夫婦関係とはどのような実態を有するのかという側面についても，考察を深める必要があるだろう．言い換えれば，先述のように，個人が自身の夫婦関係を評定するのではなく，第 3 者が夫婦関係を評定するという観点から検討を加える必要があるということである．既に第 1 章において述べられたように，関係とは相互作用の連鎖，およびその連鎖が将来における連鎖に及ぼす影響を意味する．そこで、第Ⅳ部において，中年期夫婦間の相互作用について検討を行う．

第Ⅱ部　夫婦関係認知とポジティブ・マリタル・イリュージョン

はじめに

第Ⅰ部では，中年期夫婦関係の研究にシステム論の観点を採りいれる重要性を述べた．さらに，中年期夫婦関係を概観し，先行研究の知見を整理した．第Ⅱ部および第Ⅲ部は第Ⅰ部の議論をふまえて，個人が自身の夫婦関係を評定するという観点から，夫婦関係と適応の関連について検討する．第Ⅱ部では，「夫婦関係」という間主観性のある概念に対する認知である夫婦関係認知を取り扱い，どのような観点から構成されているのかを明らかにすることを目的とする．さらに，夫婦関係認知のうち，ポジティブ・イリュージョンが生起する認知領域を特定することを目的とする．

第 5 章　ポジティブ・イリュージョン研究の展望

第Ⅱ部では，夫婦関係を当事者が自己評価する研究枠組みを用いて，夫婦関係と適応の関連を検討する．本章はそれに先立ち，ポジティブ・イリュージョン研究の展望を行う，何故中年期の夫婦関係研究にポジティブ・イリュージョン研究の枠組みが有用であるかを示す.

１．ポジティブ・イリュージョンの枠組みから見る中年期夫婦関係

中年期夫婦関係を評価する方法は様々があるが，評価者という観点からは２つに大別することが出来る．１つ目は，夫婦関係を第 3 者が評価する方法である．第 3 者は夫婦それぞれの行動や夫婦間の相互作用を観察することにより，評価を行う．それに対し，２つ目は，当事者が自身の夫婦関係を評価する方法である.

当事者による自身の夫婦関係の評価にまつわるデータは，当事者が日常生活記録を付ける，研究者の用意した質問紙調査に応えるなど，様々な方法によって収集される．これらの方法によって得られたデータは第 3 者が評価することで得られるデータと異なり，配偶者に対する認知が実際よりも肯定的に偏る（Endo, Heine, & Lehman, 2000）など，当事者による認知バイアスの影響を受けることが示唆されている．したがって，中年期夫婦関係を理解する際には，夫婦関係に対する肯定的に偏った認知について検討することが有用である.

２．ポジティブ・イリュージョンとは

心理学研究において，認知は精神的健康の理解を深める際の鍵概念である．肯定的に偏った認知が精神的健康につながるとする考え方は，ポジティブ・イリュージョン（positive illusions，以下 PI とする）と呼ばれ，これまで多くの研究がおこなわれてきた．Taylor & Brown（1988）に端を発した PI 研究は，研究が積み重ねられるのに伴い，定義，PI が生起する認知の領域，測定方法などは広がりを見せている．そこで，本章は PI 研究の展望を行い整理することを通じて，先行研究と今後の課題を挙げることを目的とする.

３．精神的健康観

従来，臨床心理学などの臨床領域においては，自己概念やその者が置かれている状況および自身の将来に対する正確な認知が精神的健康につながる（Johada, 1953）と考えられてきた．これに対して，Taylor & Brown（1988）は先行研究の概観を通じて，正常で健康な者は「１．非現実的に肯定的な自己概念を有し，２．周囲の環境を統制する能力があると信じ，３．自身の将来は平均的な者に比べてより良いものであると考える」という特徴を

有することを見出し，肯定的に偏った認知が精神的健康につながるとする精神的健康観を提唱した．これら２つの精神的健康観に対して，Baumeister（1989）は，「１．肯定的な認知は適応的にも不適応的にも機能し，２．これらは認知が偏っている程度によって決定され，３.『認知の偏りの程度が最適である限界』が存在する」という最適限界理論（optimal margin theory）を提唱した．以降，これら３つの精神的健康観について，それぞれを支持する実証的研究が示されており，現在に至るまで，認知と精神的健康の関係についての統一的な見解は得られていない.

４．研究の展望

本項では，定義，測定方法，研究のテーマ，認知領域の４点について概観を行う.

A.定義

当初, PI は自己高揚バイアスに基づいた認知の偏りと定義された（Taylor & Brown, 1988）. イリュージョンという用語は，認知の誤り（error）や偏り（bias）と区別するために用いられている．これらの用語との違いは，１．イリュージョンは認知の誤りや偏りに比べて概念的に広いこと，２．歪んでいる認知は一時的なものではなく，ある程度の時間的幅において継続する性質があること，の２点である．なお，イリュージョンは肯定的なものだけでなく，否定的なものが存在することも明らかにされてきた（e.g., 外山・桜井, 2000）. これらはネガティブ・イリュージョンと呼ばれている.

さて，PI 研究が進むにつれて，後述のように PI の生起は自己認知のみならず，他者認知,「親密な他者との関係への認知」である関係認知においても認められることが明らかとなっている．また，認知が歪む背景にある要因として，高揚動機以外の要因の関与を示す研究（e.g., 工藤, 2004）も見られるようになった．さらには，先行研究における PI の定義として，背景にある高揚動機の存在の有無を問わないものが少なからず存在している．以上をふまえると，PI を「肯定的に歪んだ認知」と広く定義することで，包括的に PI 現象を捉えることが可能になる．そこで本研究においても，PI は「肯定的に歪んだ認知」と定義する.

B.測定方法

次に, 測定方法について取り上げる. 従来の PI の測定方法は, 大きく分けて３種類ある. PI 研究の初期においては，PI の測定方法として，平均点以上効果をもって PI とする「規範的モデル（normative model）」による方法が採られていた．平均点以上効果は，自身について自身の所属集団内での相対的地位を尋ねると，その回答の平均が理論上の平均値を上

回る現象である．平均点以上効果は，PI が生起しているものとして解釈されてきた．このことは，PI は集団レベルで生起する現象として捉えられてきたことを意味する．規範的モデルへの批判としては，自己認知に対する客観的な基準が存在しないことや，平均点以上効果が PI とは異なる要因によって生起することが挙げられる. 後者について, 工藤（2004）は，平均点以上効果の生起には評定項目の獲得容易性の効果が影響を持つこと，このことは能力だけでなく特性の評定においても認められることなどを示した．なお，評定項目の獲得容易性とは,「その能力や特性を得ることはどの程度容易であるか」を意味する.

規範的モデルに対する批判を踏まえ，これに代わる PI の測定方法として，測定項目に対する自己評定と他者評定を比較する「社会的合意（social consensus）」を用いた方法が採用されるようになった．社会的合意モデルへの批判としては，他者評定が自己評定よりも正確であるということが保証されない点が挙げられる．ここでは，規範的モデルと同様に，客観的な評定基準が存在しないことが問題として残される.

これらの問題意識を受けて，PI の生起程度を客観的に評価出来る方法として，GPA などの客観的指標を用いる「操作的基準（operational criteria）」を用いた方法を採る研究が見られるようになった．ただし，限界として，操作的基準となりうるような客観的指標が限られている点が挙げられる．そのため，PI の研究の内容によっては操作的基準を用いることが出来ず，他の測定方法を採用する必要がある.

これら３つの測定方法は，それぞれ長所と短所を有しているために，トレード・オフの関係にある．したがって，いずれの測定方法が優れているかということではなく，それぞれの測定方法を状況に応じて組み合わせたり，使い分けたりすることが有用である.

C．認知領域

続いて，PI の生起する認知領域について概観する．非現実的な自己概念，環境統制力，および楽観性を扱ってきた PI 研究は，知見の蓄積とともに，焦点となる自己認知の領域を拡大していった．その内容は，学業的パフォーマンス（Gramzow, et al., 2003），自己の特性の変容に関する統制感（EI-Alaylli & Gabriel, 2007），年齢（Gana, et al., 2004），再犯可能性（Dhami, et al., 2006）など多岐にわたっている.

さらに PI 研究は，自己認知のみならず，他者に対する認知である他者認知や，他者との関係についての認知である関係認知に焦点を当ててきた．とりわけ，親密な他者との関係についての認知が，研究者の関心を集めている．PI 研究において取り上げられてきた他者との関係は，夫婦関係（e.g., Fowers, et al., 1996; Fowers et al., 2001; Fowers, et al., 2002; Miller,

et al., 2006; Luo & Snider, 2009），友人関係（e.g., Brendgen, et al., 2004; 外山, 2002），恋人関係（e.g., Swami, et al., 2009; 外山, 2002, Barelds-Dijkstra, & Barelds, 2008; Conley, et al., 2009），親子関係（e.g., Cohen & Fowers, 2004; Mazur, 2006）など様々である．

D．研究のテーマ

最後に, 先行研究における PI 研究のテーマについて概観する. 概観の対象となる論文は, 論文データベース PsychInfo および CiNii を用いて抽出した. 検索は 2010 年 4 月に行った. その際に用いた検索語は，“Positive Illusions”および「ポジティブ・イリュージョン」であった．検索条件として，１．査読付きの論文であること，２．英語もしくは日本語で記されていることとした. 以上の手続きを経て抽出された 93 篇の論文を概観対象として，2000 年以降の論文を中心に内容ごとに整理した.

ｉ．心理・発達的要因　先行研究の知見からは，パーソナリティや動機などの心理学的要因や発達的な要因と PI の生起との関連が示されている．Robins & Beer（2001）は，PI は自己愛傾向や字が関与，自己奉仕的原因帰属，肯定的情動と関連していることを示した．他にも，自己実現が PI と関連すること（Boyd-Wilson, Walkey, & McClure, 2002）や，制御資源（regulatory resource）が PI の生起に必要であること（Fischer, Greitemeyer, & Frey, 2007），権力を持つ経験（experience of power）が統制刊に関する PI につながること（Fast, Gruenfeld, Sivanathan, & Galinsky, 2009）など，PI の生起に関連する様々な心理学的要因が示されている．

PI を生起させる動機を検討した研究は，次のようなものがある．Gramzow, Elliott, Asher, & McGregor（2003）は，大学生の学業的パフォーマンスについて，過剰に肯定的な自己評価は自己高揚動機や接近動機を反映するが，しばしば自己防衛動機や回避動機を反映していることを示した．さらに，自己評価のゆがみの水準が学業的パフォーマンスの結果に関連するのではなく, それらの背後にある動機が結果に関連していることを示した. EI-Alayli & Gabriel（2007）は，自己の特性の変容に関する統制感について検討し，イリュージョンの背後には自己成長動機ではなく自己承認（self-validation）動機が存在することを示唆した．

発達的要因としては，ADHD と PI の関連が検討されている．Hoza, Pelham Jr., Dubbs, Owens, & Pillow（2002）は，ADHD の子どもは統制群に比べ，学力や社会的受容，行動統制において自身を過大評価することを見出した. さらに, Evangelista, Owens, Golden, Pelham Jr.（2008）は，子どもの自己認知を教師による評定と比較し，ADHD の子どもはそうでな

い子どもよりも自己を過大評価していることを見出した．

ⅱ．社会・文化的要因　他者との相互作用や文化的背景が，PI の生起に影響する要因として示されている．社会的な相互作用に注目した研究として，Anderson, Srivastava, Beer, Spataro, & Chatman（2006）は，地位に関する認知は極めて正確であることや，地位における高揚的な自己認知は低い社会的受容と関連することを示した．Anderson, Ames, & Gosling（2008）は同様の知見を提出し，さらに個人は自身の地位を正確に認知する傾向があることや，地位についてイリュージョンを有する者はグループのプロセスを妨げるものとしてみなされるために社会的に制裁されることを示した．また，Bromgard, Trafimow, & Bromgard（2006）は，私的自己，集団的自己，関係自己の 3 水準の実験条件を設定し，調査協力者に対しいずれかのプライミングを行った上で自己陳述を行わせ，内容の分析を行った．その結果，集団的自己あるいは関係自己がプライムされた時に，自己陳述の内容はもっとも肯定的なものとなった．このことから，PI は他者との関係の文脈において強調される可能性が示唆された．

次に，文化的要因を指摘した研究として，異なる文化圏の調査協力者を比較した研究がある．Endo, Heine, & Lehman（2000）は，日本人，アジア系カナダ人，およびヨーロッパ系カナダ人を対象とした調査研究を行った．その結果，いずれの対象者も自身の関係を肯定的に捉えている点は共通していた．さらに，１．関係奉仕バイアスは自尊心や自己奉仕バイアスとは相関しないこと，２．日本人のみにおいて，関係奉仕バイアスは個人が自身よりもパートナーをより肯定的に捉える程度に対応していることを示した．Fowers, Fisiloglu, & Procacci（2008）は，アメリカ人夫婦，血族結婚ではないトルコ人夫婦，血族結婚をしているトルコ人夫婦の 3 群を対象とした調査研究を行った．研究の結果，これら 3 群は否定的側面において一般的他者に対する評定の様相が異なることが示され，PI の生起は文化によって調整されていることが示唆された．

ⅲ．精神的健康・適応　PI と養育行動の関連を検討した研究として，Mazur（2006）は，否定的な認知の誤りおよび PI が，養育場面における日常的な困難の頻度や程度と相関関係にあることを示した．Cohen & Fowers（2004）は，子どもに対する PI と，養育経験についての主観的報告における PI について，実親および継親を比較した．その結果，いずれも PI を示したこと，実親の方がより PI を示したこと，親役割への適応の程度が PI に関係していること，親の養育満足度を構成するもっとも重要な要因は親子関係の非現実的に肯定的な認知であることなどを見出した．

PI と精神的健康の関連を検討した研究には，次のものがある．Ransom, Sheldon, & Jacobson（2008）は，ガン患者を対象とした研究を行った．その結果，疾患の結果として経験される人格的成長は, 縦断的に自己を比較した結果としての PI および生物的評価過程（Organismic valuing process）によるものであり，これらは相互に独立していることを示した．Gana, Alaphilippe, & Bailly（2004）は，退職者 857 名を対象に調査研究を来ない，若さに関する PI を有している者は余暇に満足し，高い自尊心を有し，よりよく自身の健康を知覚し，退屈していないことが示された.

PI と社会適応の関係を扱った研究は，次のようなものがある．Brendgen, Vitaro, Turgeon, Poulin, & Wanner（2004）は，旧友や友人との社会的な関係に関する PI を有することは, 仲間評定による社会的望ましさを増加させ，友人との二者関係の安定性を促進させることを見出した．さらに，仲間集団における社会的コンピテンスの PI や友人関係の質に関する PI は抑うつ気分を低減させることを示した．また，仲間集団における社会的コンピテンスについて，極端な過大・過小推定は攻撃性と関連していることを示した．外山（2008）は, 社会的コンピテンスによる PI を備えもつ児童はそうでない児童よりも自己評定による精神的健康，適応が高いことを示した.

生物学的要因として，Taylor, Lerner, Sherman, Sage, & McDowell（2003）は，高い自己高揚動機を有する者は, ストレスに対する心反応が低いこと, また心反応の回復が早いこと, コルチゾールの水準が低いことを見出した.

ⅳ．問題行動・不適応　PI と問題行動の関連を検討した研究は，問題対処行動に PI は不要であるとするものや，PI を有していることが問題行動へとつながっている可能性を示したものがある．Boyd-Wilson, Walkey, McClure, & Green（2000）は，自己の特性における PI と問題焦点化対処行動に関連が見られなかったことから，問題に上手く対処するためには物事に対して肯定的である必要があるが，PI は必要ないことを示唆した．Unger, Molina, & Teran（2000）は，十代での出産が肯定的な結果につながると考えていることが性的交渉リスクの増加に関連することを示し，十代の妊娠を予防するための戦略として，十代での出産についての PI を否定することなどを指摘した. Dhami, Mandel, Loewenstein, & Avton（2006）は，囚人が自身の再販可能性について，統計データに比べはるかに楽観的であることを示した．Schlehofer, Thompson, Ting, Ostermann, Nierman, & Skenderian（2009）は，自身の運転能力に関する PI を有することが運転中の携帯電話使用につながることを示した.

もう一つ，PI の影響を考慮する際に重要となる要因として，時間的要因がある．Colvin,

Block, & Funder（1995）は PI を有することについて，長期的にみれば PI を有する者は孤立してしまい，また，Robins & Beer（2001）は，PI は自尊心の低下および well-being の提言と関連すること，PI は高い学力を予測しないことを示し，自己高揚は短期的には適応的だが，長期的には適応的ではないことを示唆した．外山（2006）は，社会的コンピテンスにおける PI は時間が経つにつれて, 攻撃的な児童においてはさらなる攻撃行動の促進につながることを示した.

不適応に関する研究として，外山（2008）は社会的コンピテンスにおける PI を備えもつ児童はそうでない児童よりも，教師やクラスメイトから攻撃性が高いとみなされ，クラスメイトからは受容されていないことを示した.

ｖ. 親密な他者との関係についての PI　親密な他者との二者関係についての認知が研究者の関心を集めている．さらに，極めて少数ではあるが，家族のような上位システムに対する認知を取り上げる研究も見られる．なお，関係認知には大きく分けて，関係そのものの性質を問うもの（e.g., 私たちの夫婦は～である）と，特定の関係にあるパートナーの性質を問うもの（e.g., 私の配偶者は～である）の 2 つがある．ここでは，両方について扱う.

夫婦関係認知を検討している研究は，Fowers らによる一連の研究（e.g., Fowers, Lyons, Montel, 1996）と，Miller, Niehuis, & Huston（2006），Luo & Snider（2009）がある．Fowers, et al.（1996）は，夫婦関係についての PI は個人の楽観性や非完成，および社会的望ましさよりも結婚生活の質と強く関連することを見出した. Fowers, Lyons, Montel, & Shaked（2001）は，夫婦関係についての PI は結婚満足度および持続期間によるものかどうかを検討し，PI はこれらに依存しないことが見出された．Fowers, Veingrad, & Dominics（2002）は婚約しているカップルを対象に面接を行い，個人はパートナーに対する肯定的な認知を様々なやり方で維持していることを見出した．Miller, Niehuis, & Huston（2006）は，夫婦関係の理想化による結果について検討するため，新婚夫婦 168 組を対象に，日記および質問紙データを用いた 13 年にわたる縦断的研究を行った．その結果, 配偶者を理想化している者の方がそうでない者よりも新婚時に愛し合っていたこと，新婚時に配偶者を理想化するとその後の愛情の低下が少ないことが示された. Luo & Snider（2009）は新婚夫婦を対象に研究を行い，夫婦関係認知の正確さや PI，および夫婦の類似性についての認知の偏りは，それぞれ独立して夫婦関係満足度に寄与していることを示した．さらに，夫婦関係認知の正確さおよび夫婦の類似性についての認知の偏りはパートナーの満足度に寄与するが，PI では見られなかった.

恋人関係認知を取り上げた研究は次のものがある．外山（2002）は，恋人関係および友人関係において PI が見られること，また個人は自身よりもパートナーを肯定的に評価することを示した．Swami, Stieger, Haubner, Voracek, & Furnham（2009）は，恋人を自身よりも魅力的であると認知する傾向である”Love-is-blind bias”について同性愛カップルを対象に検討し，多くの身体的魅力に関する質問項目において，パートナーを肯定的に評定する，頑健なバイアスが見られることを示した．Barelds-Dijkstra, & Barelds（2008）はカップルを対象に，身体的魅力についての PI を検討した．その結果，個人はパートナーの身体的魅力についての PI を有していることが示された．Barelds & Dijkstra（2009）では，同様の結果に加えて，パートナーの身体的魅力についての PI と夫婦関係の質の関連が示された．

その他，Conley, Roesch, Peplau, & Gold（2009）は，夫婦や同性愛・異性愛カップルを対象とした研究から，パートナーの自身への評価よりも好ましくパートナーを評価している才に，親密な関係はより満足するものとなることを見出した．

vi．まとめ　PI の生起には生物学的要因，心理学的要因，社会文化的要因と様々な次元の要因が影響していることが，先行研究から示された．PI と精神的健康・適応に関する研究からは，生物学的水準における適応，well-being の増加や満足度の増加，関係役割適応，社会適応というように，PI を有することは様々なシステムの水準において精神的健康の増加や適応へつながることが示された．また，親密な他者との関係についての PI 研究からは，PI と関係の質の連関が示された．

一方で，特定の文脈における PI は問題行動へつながる危険性があること，および PI によって維持されている問題行動が不適応へとつながっている可能性が示唆された．これらの知見は，PI を有していることのメリット・デメリットについて，文脈をふまえて理解する必要性を示している．すなわち，PI が適応的であるかどうかについては，一元的に論じることは不可能であり，また意味がない．代わりに，どういった状況においてどのような PI を有すると適応的・不適応的なのかというように理解する必要がある．

５．今後の課題

これまで，国内外の先行研究を概観してきた．本項では，問題点とそれを克服するための方法について示し，今後の課題を明らかにする．具体的には，まず階層データを用いた PI 研究について述べる．ついで，PI の測定方法における工夫，および質的研究法を採りいれた PI 研究について述べる．最後に，縦断的研究について述べる．

A．階層的データと階層的分析法による PI 研究

自己認知と精神的健康の関連に関する検討から始まった PI 研究は，他者認知（e.g., 恋人認知，友人認知，配偶者認知 etc.）や関係認知など，関係の視点を採りいれはじめている段階にある．関係の文脈は個人の行動や発達に影響を及ぼしている（Reis, Collins, & Berscheid, 2000）ことから，PI 研究に関係の視点を採りいれることは重要な意義を持つ．しかし，PI 研究においてはこれまで，親子や夫婦，恋人や友人といった特定の二者関係に焦点を当て，恋人や配偶者を評定する，あるいはパートナーとの関係を評定するという段階に留まっており，関係の視点の取り入れ方は改善の余地がある．

その方法の一つとして，PI 研究に階層的分析法を用いることで，従来の方法では得られなかった，関係の視点を踏まえた重要な知見を得ることが出来る．個人に関する変数と集団に関する変数の両方が含まれるデータを階層的データと呼び，これらのデータを適切に扱うための統計的手法を階層的分析法という．階層的分析は，階層線形モデル（HLM: Hierarchical Linear Model）やペアワイズ相関分析（Pairwise Correlation Analysis; e.g., Griffin & Gonzalez, 1995）などがある．これらは階層的データを分析する方法という点で共通しているが，分析の視点が異なる点で区別する必要がある．が，本項では PI 研究の一発展可能性の指摘を目的としているため，ここではまとめて論じる．したがって，実際に PI 研究に階層的分析法を応用する場合には，どのようなデータを収集し，どのような視点から分析を行うのかという目的に照らし合わせて，適切な階層的分析の方法を選ぶことが必要である点に留意されたい．

さて，清水（2006）は，階層性のあるデータを分析する際には，階層的分析法を用いる必要があることを述べ，これらを使わない場合には，有意性検定の正確さを失い，得られる係数が希薄化されたものになる可能性を指摘している．また，階層的分析法を用いることの積極的な意義として，個人レベルとペア・集団レベルを一つのモデルで同時に分析することによって，個人レベルの推定値のペア・集団間の分散を説明したり，ペア・集団レベルにおける関連を個人レベルの変数から推定したりすることが出来る（清水, 2006）．

B．PI の測定方法の工夫

PI の測定は，ある認知の変数に焦点を当てて測定を行い，理論的平均・他者評定・客観的指標のいずれかと比較することによって行われてきた．近年，これらの測定方法に加えて，新たな測定方法が用いられている．

Fowers et al.（2001）は, ENRICH（Olson, 1999）の解釈度である The Idealistic Distortion scale

の尺度得点を用いて，直接的に認知の偏りを測定している．操作的基準と同様に，使用可能な尺度が限られるという難点は残されるものの，特定の尺度を用いることで直接的に PI の生起を測定するのは有効な方法である．

また，Miller, et al.（2006）は，理論から作成したモデルに潜在変数として PI を組み込み，構造方程式モデル（SEM: Structural Equation Modeling）を用いて検討する方法を採用している．ここでは「パートナーの好ましい行動，好ましくない行動，およびこれらの相互作用から予測される値と比較して，より好ましいものとしてパートナーを認知する程度」と PI を操作的に定義している．そして，パートナーの行動に対する評定は，パートナーの好ましい行動，好ましくない行動，およびこれらの相互作用から説明される部分と，PI から説明される部分から成るとするモデルを検討している．ここでの PI は潜在変数であるため，直接測定することは不可能であるが，PI をふまえたモデルを検討出来る点で極めて重要な意義を有すると考えられる．

このように，PI の測定方法を工夫することで，より PI を幅広く捉え，理解を深めることが可能となるだろう．

C．質的研究法

PI 研究は，ほとんど量的研究法によって研究が進められてきた．これらの研究において関心を寄せられてきたのは，「PI を有することがどのような結果につながるか」ということである．一方で，PI の内実についてはあまり目が向けられてこなかった．したがって，PI の定義を上述のように「肯定的に偏った認知」とするならば，「何について」「どのように」偏った認知なのかということについて検討することが，今後の研究課題の一つとなる．

量的研究法を用いた先行研究の多くでは，「何について」の PI であるか，すなわち焦点を当てる変数については，理論的な背景をふまえて研究者によって選択されてきた．また，「どのように」という点については，充分に検討されていない．これらの点について，質的研究法を用いた研究が有用となる．

筆者が探した範囲で唯一見られた研究例として，次の論文が挙げられる．Parke, Griffiths, & Parke（2007）は，87 名のギャンブラーに対して半構造化面接を行い，ギャンブラーは 9 種類の「肯定的に偏った信念」を有していることを見出した．この研究は，楽観性および PI がどのようなものであるか，すなわち「どのように」偏った認知なのかという点について明らかにしている．今後，このように，PI がどのように偏った認知なのかという点について検討する論文の蓄積が期待される．

量的研究と質的研究は相補的な関係にあり，いずれの知見も重要である．よって，これらの知見が相互補完的に統合されることが望まれる．

D．縦断的研究

PI 研究において，縦断的研究は取り入れ始められた段階にあるが，その数は充分ではない．縦断的研究は，PI が長期的にどのような意味を有する課を検討する上で，非常に重要な役割を果たしている．

この点については，大きく２つの立場が存在している．一つ目の立場は，PI は適応につながるとする考え方である．PI は目的—達成志向や感情的 well-being を促進するため，精神的健康および適応に役立つと考えられている（e.g., Taylor & Brown, 1988）．一方で，もう一つの立場からは，PI は不適応につながると考えられている（e.g., Baumeister, Bushman, & Campell, 2000）．自身の社会的関係について極端に肯定的な評価を下すことは，他者から非現実的に高い期待を寄せられることにつながる．そして，その高い期待に応えられなかった時，２つのことが起こる．一つ目は，周囲からのネガティブなフィードバックを受け入れることで，抑うつ的な感情を有するというものである．もう一つは，周囲からのネガティブ・フィードバックを受け入れず，代わりにネガティブなフィードバックを与える者に対して敵対するというものである．いずれの場合も適応的とは考え難く，PI は不適応につながると考えられる．

研究例として，Brendgen, et al.（2004）は，仲間との関係についての PI と適応の関連について検討した．その結果，１．仲間との社会的関係における PI は仲間関係の適応につながること，２．自身の社会的コンピテンスおよび友人関係における PI は 6 か月後の抑うつ感情の低減と関連すること，３．調査開始時点で高い攻撃性を有している子どものうち，極端に高く，もしくは極端に低く自身の社会的コンピテンスを評価する者は，6 ヶ月後に攻撃性が増していることを示した．この研究は，PI を有することは，調査時点のみならず，時間的感覚を経た上でも適応・不適応のいずれとも関連すること，およびその関連の仕方は PI の程度に依存することを示唆している．

このように，PI と適応・不適応の関連を検討する際に，時間の視点は不可欠である．今後，縦断的な研究の蓄積が必要であると考えられる．

６．まとめ

ここまで，国内外の PI に関する先行研究の概観を行った．認知と精神的健康の関連については，代表的な精神的健康観を示し，これらは異なる研究の文脈によって，それぞれが

支持されていることが明らかとなった．したがって，認知と精神的健康の関連は一概に述べることは不可能であり，研究対象や測定方法などを踏まえて論じるべきということが示された．

PI 研究の展望として,「肯定的に偏った認知」と広く定義することが示された．ついで，代表的な PI の測定方法を示した．研究のテーマとしては，PI の生起に関する心理・発達的要因および文化・社会的要因に関するもの，精神的健康・適応および問題行動・不適応に関するもの，親密な他者との関係に関するもの，の 5 つにまとめられた．また，PI 研究における PI の生起する認知領域については, その焦点となる自己認知の領域を拡大していること，および関係の視点を採りいれつつあることが示された．

最後に，PI 研究の今後の課題として，4 つの課題が示された．量的研究法への示唆として，階層的分析法を用いることでさらなる知見を得られること，測定方法を工夫することで先行研究とは異なる観点から PI を捉えられることが論じられた．また，量的研究法と相補的な関係にある研究法として質的研究法について論じ，これら双方の知見を統合することが望まれる．さらに，PI と適応・不適応の関連を検討する際に，時間の視点を採りいれる必要性について論じた．今後，これらを踏まえた PI 研究の蓄積が期待される．

第 6 章　中年期における夫婦関係認知の構造の探索的検討

当事者による自身の夫婦関係の評価における「肯定的な認知バイアス」について検討するためには，まず夫婦関係をどのような認知次元から捉えているのかについて明らかにする必要がある．そこで本章は，中年期における夫婦関係認知の構造を探索的に検討することを目的とする．

１．問題と目的

第 5 章では，PI 研究の概観を行い，今後の課題を論じた．これを受けて，本論文では第Ⅱ部において，１．関係の視点を採りいれ，２．相互依存的な階層的データを適切な手法により分析を行う，新しい PI 研究を行う．具体的には，中年期の夫婦関係に焦点を当てて階層的データを収集し，ペアワイズ相関分析の手法により分析を行う．さらに，PI と精神的健康の関連について，短期縦断的検討を行う．これに先立って，本章は中年期夫婦における夫婦関係認知を明らかにすることを目的とする．

この目的を果たすためには，まず夫婦は自身の関係をどのような観点において認知しているのかという点について調べる必要がある．しかし，夫婦が自身の関係をどのような観点から認知しているのかを明らかにしている先行研究は見当たらない．そこで，関連する先行研究に触れた上で, 本章は夫婦関係認知の構造を探索的に検討することを目的とする．なお，関係認知とは,「関係の知識の総体」を意味する．すなわち，関係をどのように認知しているかということであり，関係の現在の状態や将来の予測などについての認知を含むものである．したがって，本論文において夫婦関係認知とは,「自身の夫婦関係に関する知識の総体」と定義される．

まず，二者関係がどのように認知されているかという問題に関連する先行研究を取り上げる．二者関係は，幾つかの次元から構成される（Fiske, 1991）として捉える事が出来ると考えられている．この事はすなわち，二者関係は幾つかの観点（次元）に基づいて客観的に捉える事が出来ると考えられているという事を意味している．中でも，権力関係や社会的地位，上下関係などを表す“垂直の次元”Vertical Dimension は，特に重要なものとして研究されている（e.g. Hall, Coats, & LeBeau, 2005; Burgoon & Hoobler, 2002）．類似の概念として，Bugental（2000）は，関係の領域として 5 つの社会領域 social domain を提言している．これは，1.愛着領域 attachment domain，2.階層的権力領域 hierarchical domain，3.連合領域 coalitional group domain，4.互恵領域 reciprocity domain，5.婚姻領域 mating domain から成る．愛着領域は，保護的な関係における近さと維持によって特徴付けられる．階層的権力

領域は，社会的な優勢さの利用とその認知によって特徴付けられる．連合領域は，「私達」と「彼ら」の区別の同定と維持によって特徴付けられる．互恵領域は，機能的に等価であるような利益の交渉によって特徴付けられる．婚姻関係は，性的パートナーの選択と拒絶によって特徴付けられる．これらの関係領域は，“世界を区切り，それらの世界において有機体が直面した繰り返し起こる問題を解決するように促進するような知識”を示しており，それぞれ異なる特徴と機能を有している．二者関係は，これらの次元に基づいて観察され，研究されてきた．このように，客観的な視点から二者関係を捉える際の次元については，先行研究において議論が重ねられている．

それでは，主観的な視点から捉える二者関係については，先行研究ではどのような研究が行われているのだろうか．人々が関係を特徴付ける際の次元を明らかにした研究はこれまでに多く蓄積されており（e.g., Wish, Deutsch, & Kaplan, 1976），それらの研究で共通に見られる次元は，「協調 / 競争」，「対等 / 非対等」，「課題志向 / 社会情緒」，「公的 / 私的」，「緊密 / 表面的」の 5 次元である（Deutsch, 1982）．「協調 / 競争」次元は，二者が助け合う関係か，争いあう関係かを表す次元である．「対等 / 非対等」次元は，二者の地位や権力関係を表す次元である．「課題志向 / 社会情緒」次元は，二者関係が課題達成を目的としているか，親密さを発展させる事を目的としているかを表す．「公的 / 私的」次元は，公な社会集団における関係か，私的な関係かを表す．「緊密 / 表面的」次元は，二者の関係の親密さを表す．

これらの次元は，一般的な二者関係の認知次元を明らかにしている点において，重要である．しかし，個人が属している具体的な関係の認知次元を明らかにしていないという点が，問題として指摘出来る．長期的で関与の大きな関係の認知構造は，一般的なそれと異なると考えられる．この点をふまえている研究として，清水・大坊（2005）は，大学生を対象に研究を行い，恋愛関係の関係認知構造として，重要性，緊張感，不確実性，活発性の 4 因子構造を明らかにした．

以上，関係認知について，先行研究を概観した．二者関係を捉える次元については，客観的な視点から捉える際の次元，一般的な二者関係の関係認知次元，大学生における恋愛関係の関係認知次元が明らかにされている．一方，夫婦関係の関係認知についての研究は見当たらない．

夫婦関係は個人にとって重要なものであるため，関係をどのように認知するのかについて明らかにする事は重要である．また，夫婦関係は“親密な関係”であり，長期的で関与の

大きな関係であるため，夫婦関係認知には，過去の記憶や相互作用のあり方，将来への予測など，一般的な二者関係次元よりも詳細な次元が含まれると考えられる．さらに，清水・大坊（2005）の知見は大学生の恋愛関係を対象としたものであるため，夫婦関係へと一般化する事の是非については不明である．したがって，夫婦関係認知がどのような構造を有しているか，実証的に検討される必要がある．

そこで，本研究は，夫婦関係認知の構造を探索的に検討する事を目的とする．さらに，夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンが生起する領域と夫婦関係認知の構造を比較する事を目的とする．これらの目的に先立って，まず予備調査によって，夫婦関係認知の次元を捉えるために必要な項目候補の収集を行なう．

２．方法

A. 予備調査による項目の収集

夫婦関係はどのような観点（次元）から認知されているのかという事，すなわち夫婦関係認知の次元を明らかにする必要がある．そこで，夫婦関係認知を表す項目を収集する事を目的として，予備調査を行なった．予備調査は，面接法と質問紙法の 2 つの方法を組み合わせて実施した．

面接法は，夫婦関係にある妻 2 名を対象とした．調査時期は，2008 年 7 月中旬から下旬であった．調査協力者は，研究者の知人 1 名と，その者から紹介された者 1 名の計 2 名であった．

調査協力者の属性は次の通りであった．1 人目の調査協力者は，47 歳女性で，東京在住，婚姻関係年数は 23 年 1 ヶ月，夫の年齢は 55 歳であった．2 人目の調査協力者は，49 歳女性で，東京在住，婚姻関係年数は 23 年 3 ヶ月，夫の年齢は 50 歳であった．

面接の際には，インタビュー・ガイドを用意した．予め用意した質問は，次の通りであった．「一般的な夫婦関係について，上手くいっている関係を表すような言葉を，出来るだけ沢山挙げて下さい．」「一般的な夫婦関係について，上手くいっていない関係を表すような言葉を，出来るだけ沢山挙げて下さい．」「夫婦関係は，友人関係とどのように異なると思われますか？」「夫婦関係は，親友関係とどのように異なると思われますか？」「夫婦関係は，恋愛関係とどのように異なると思いますか？」「御自身の夫婦関係は，どのような関係ですか？　（e.g. 親密，退屈，etc……）」「御自身の夫婦関係に満足していますか？」「御自身の夫婦関係を表現するような言葉を，出来るだけ沢山挙げて下さい．」「自分は，どういうところで伴侶に支えられていると思いますか？」「自分は，どういうところで伴侶を支

えていると思いますか？」これらの質問をもとに，適宜質問を追加して面接を行った．面接所要時間は，いずれも約 55 分であった．

質問紙法は，夫婦を調査対象とした．調査時期は，2008 年 8 月上旬であった．質問紙は，41 組 82 名に配布し，そのうち，25 組 50 名より返送された．回収率は 61%であった．また，回答に不備があるものを分析の対象から除外したところ，有効回答数は 44 名であり，有効回答率は 54%であった．なお，フェイス・シートが欠落しているものは，分析の対象から除外しなかった．この事からは，サンプリングバイアスの問題などが指摘される．しかし，予備調査の目的は，関係認知を表す単語の収集であった．ここでは，出来るだけ幅広い項目を集める事が重要になる．また，後述の手続きにより配布した質問紙であったため，質問紙の調査協力者が夫婦である事が確認されている．以上の理由より，フェイス・シートが欠落していた調査協力者の回答を分析の対象とする事は，サンプリングバイアスなどの問題をふまえてなお意味があると判断した．

調査対象者の平均年齢は，夫は 56.5 歳（*SD* = 7.21），妻は 53.5 歳（*SD* = 7.02）であった．調査協力者の居住区域は，京都 15 組，神奈川 2 組，東京 2 組，大阪 1 組，静岡 1 組，青森 1 組，福岡 1 組，埼玉 1 組であった．また平均婚姻関係年数は，28 年 10 ヶ月（*SD* = 7.44 ヶ月）であった．

質問紙は無記名とした．質問紙の配布方法は 2 種類あった．1 つ目は，研究者の知人の両親に質問紙を郵送する方法であった．もう 1 つは，研究者の知人 2 名に質問紙を配布してもらう方法であった．いずれの方法においても回収方法は同じであり，質問紙に同封した返信用封筒を用いて，研究者に宛てて郵送して戴く方法によって回収した．また，質問紙には，夫妻で相談しないようにという旨の教示を明記した．

質問項目は，「あなた自身の夫婦関係を表現して下さい．また，それを表すような単語を，思いつく限り挙げて下さい．」「夫婦関係一般について，上手くいっている関係を表現して下さい．また，それを表すような単語を挙げて下さい．」「夫婦関係一般について，上手くいっていない関係を表現して下さい．また，それを表すような単語を挙げて下さい．」の 3 種類であった．

以上，面接法と質問紙法により得られたデータは，ＫＪ法を参考にして整理を行なった．そして，内容的に重複するものを削除し，共通する要素をまとめた．その結果，抽出された 110 の要素が，29 の要素の集約された．さらに，それらの内容が網羅的に表現されるよう項目を考え，114 の項目候補を作成した．なお，ＫＪ法を参考にした分類から要素の集

約までの手続きは，客観性を高めるために，心理学を専攻している大学院生 2 名（博士課程在籍者 1 名，修士課程在籍者 1 名）と協議の上で行なった．意見が別れたところは，合意に至るまで議論を行なった．

作成した 114 の項目候補については，調査協力者 1 名および心理学を選考している大学院生 1 名（博士課程在籍者）に内容の妥当性や分かり易さについての検討を依頼した．その結果，24 項目が削除され，最終的に 90 項目が残された．

B. 調査協力者と調査方法

調査は日本在住の夫婦を対象とした．調査時期は，2008 年 9 月上旬から 12 月上旬であった．質問紙への調査協力は，以下の 3 つの方法によって求められた．1 つ目は研究者の知人の両親 18 組に質問紙を郵送し，返送を求めた．2 つめは，研究者の知人 3 名を介し，55 組の夫婦に質問紙を配布し，返送を求めた．3 つ目は，訪問留置郵送回収法を用いて，東京都板橋区の住居を無作為に訪問し，7 組の夫婦に回答の郵送を求めた．これら 3 つの方法によって配布された質問紙の調査対象者数は，80 組 160 名であった．また，インターネット上の SNS（Social Networking Service）で不特定多数に対して，調査協力への募集を行なった．インターネット上での調査には，研究者が作成したアンケートを用いた．調査協力者には，アンケートに回答して戴くよう教示した．アンケートの内容は，質問紙と同一のものであった．

ここで，インターネットを利用したアンケートについて触れておく必要があるだろう．SNS とは，社会的ネットワークをインターネット上で構築するサーヴィスの事である．本研究では，紹介制・会員制の SNS にて調査の概要を説明して調査協力者の募集を行い，研究者の作成したウェブ・サイトへと誘導した．さらに研究者のウェブ・サイトにて，調査についての詳細な説明を行なった．アンケートに回答を始めるためには，研究者が行なった説明を理解したという事に同意するチェック・ボックスにチェックをつける必要があった．加えて，同一人物が複数回アンケートに答える事が出来ないよう，プログラムを組んだ．このように，厳正な手続きを踏んだ事から，悪戯や悪意あるアクセスは排除されたと考えられる．よって，インターネットを利用したアンケートから得られたデータは，通常の質問紙調査から得られたデータと同じ扱いで分析を行なってよいものと判断した．

C. 質問紙の構成

まず，基本的属性として，居住地域，婚姻関係期間，家族構成員の年齢，夫妻の年収，夫妻の就業時間，夫妻の最終学歴，夫妻の職業を訊ねた．

次に，予備調査をもとに作成した，関係認知に関する 90 項目について，回答を求めた．教示は,「あなたが思われる平均的な夫婦関係に比べて，あなた自身の夫婦関係にどの程度当てはまりますか？」と行い，各項目について,「1. あてはまらない」「2. ややあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」「5. あてはまる」の 5 件法で評定を求めた．

D．分析方法

まず，質問紙に不備があったため，1 項目を分析の対象から除外した．[1] 続いて，関係認知に関する 89 項目について，天井効果・床効果に関する項目分析を行なった．さらに，天井効果・床効果に関する項目分析を行なった．天井効果・床効果が見られた項目は，分析の対象から除外された. 残された項目について, 探索的因子分析を行なった. 分析には, SPSS for Windows 11.0 を用いた.

３．結果

A．調査協力者の属性

質問紙調査については，46 組 92 名より回答を得た．回収率は 57.5%であった．また，有効回答は 85 名（53.1%）であった．また，インターネット上のアンケートでは，13 組 13 名より回答を得た．インターネットでのアンケートでは，回答の不備がある場合には研究者に回答データを送信出来ないようにプログラムを組んだため，有効回答率は 100%であった．以上を足しあわせ，本研究では，計 59 組 98 名の回答を有効回答とした．

次に，欠損値の扱いに関して詳述する．98 名の有効回答のうち，24 名のデータには欠損値が見られた．そのため，本研究では系列平均を用いた補完，すなわち平均値補完法を用いた補完を行なった．欠損値の補完方法には，平均値補完法の他に，削除法や k-NN 法などの手法（金子, 2005）があり，心理学研究においては，欠損値の含まれるデータを分析の対象から除外する削除法が多用されている．しかし，欠損値の含まれるデータを削除することは，系列平均を用いた補完に比べて，より得られたデータを結果に反映出来ないという指摘（金子, 2005）がある．本研究にて得られたデータの場合，削除法よりも平均値補完法を用いた方が，得られたデータを適切に結果へ反映出来ると判断した．なお，1 項目あたりで補完された欠損値の個数の平均値は 0.49（SD = .77）であった．

次に，調査協力者の属性について記す．ただし，フェイス・シートに関して，欠落して

[1] 質問紙には，同じ項目が 2 項目含まれており，重複していた．そのため，学習効果などを配慮し 1 項目を除外した上で分析を進める事とした．なお，確認のため，これらの項目について対応のある t 検定を行なった．その結果，(t (97) = -1.74, $n.s.$)となり，項目得点間に有意な差は見られなかった．

いる者や，一部未記入のまま返送された者があったため，それらは以下に記される調査協力者の属性から除外された．フェイス・シートが欠落している夫婦は 2 組，一部未記入だった夫婦は 3 組であった．なお，本研究は夫婦を対象としており，質問紙が夫婦に配布された事については確認が取れている. よって, 最低限の基準は満たしているものと判断し，フェイス・シートに不備がある夫婦は，分析の対象に加えている．

調査協力者の居住地域は，京都 19 組，大阪 7 組，東京 6 組，滋賀 4 組，神奈川 3 組，青森 2 組，茨城 2 組，埼玉 2 組，愛知 2 組，福岡 2 組，北海道 1 組，栃木 1 組，静岡 1 組，兵庫 1 組，香川 1 組，広島 1 組，大分 1 組，宮崎 1 組であった．

平均婚姻関係期間は，21 年 4 ヶ月（*SD* = 11 年 4 ヶ月）だった．また，平均子供数は 1.98 名であった．

調査協力者の年齢，最終学歴，職業，収入，就業時間については，それぞれ Table. 6-1 ～6-5 に示した．ただし，収入に関しては，夫の年収と妻の年収を足し合わせ，世帯収入としてまとめた．

Table 6-1 調査協力者の年齢

		夫		妻	
		N	%	*N*	%
年齢	20代	1	1.8	3	5.3
	30代	9	15.8	11	19.3
	40代	16	28	17	29.8
	50代	22	38.6	20	35.1
	60代	9	15.8	6	10.5

Table 6-2 調査協力者の最終学歴

		夫		妻	
		N	%	*N*	%
最終学歴	中卒	6	10.7	4	7.1
	高卒	17	30.4	20	35.7
	短大･専門学校卒	4	7.1	19	33.9
	大卒	26	46.4	13	23.2
	大学院卒	3	5.4	-	-

B. 因子分析の結果

次に，項目分析について記す．各項目の平均値と標準偏差を算出し，天井効果・床効果が見られた 19 項目を削除した．天井効果・床効果の基準は，平均点±標準偏差が 5.10 以上

および 0.75 以下とした．

Table 6-3 調査協力者の職業

		夫		妻	
		N	%	*N*	%
職業	会社員	30	53.6	-	-
	公務員・教員	10	17.9	3	5.6
	自営業	8	14.3	1	1.8
	専門職	3	5.6	1	1.8
	専業主婦	-	-	23	41.1
	フルタイム	-	-	9	16.1
	パートタイム	-	-	17	30.4
	その他	5	8.9	2	3.6

Table 6-4 調査協力者の収入（単位：万円）

		世帯収入	
		N	%
年収	-300	5	9.3
	301-500	11	20.4
	501-700	13	24.1
	701-1000	10	17.9
	1001-	15	27.8

Table 6-5 調査協力者の 1 週間あたりの就業時間（単位：時間）

		夫		妻	
		N	%	*N*	%
1週間の仕事時間	-10	9	15.8	27	47.4
	11-20	1	1.8	7	12.3
	21-30	3	5.3	10	17.5
	31-40	12	21.1	8	14
	41-50	19	33.3	2	3.5
	51-60	8	14	2	3.5
	61-70	2	3.5	1	1.8
	71-	3	5.3	-	-

次に，残った 70 項目に関して因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行なった．固有値の変化は，31.60, 3.52, 2.95, 2.22, 2.00, 1.73……というものであり，4 因子構造が妥当であると考えられた．そこで再度，4 因子構造を仮定して，因子分析（イメージ因子法・プ

Table 6-6　夫婦関係認知の因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
第Ⅰ因子　成熟とコミットメント（α　= .94）				
感謝しあっている	**.84**	.07	.02	-.01
責任感がある	**.80**	.00	-.09	-.09
自由である	**.79**	-.15	-.11	-.02
成熟している	**.78**	-.22	.00	.04
対等である	**.76**	-.27	.05	-.01
自然体である	**.75**	-.04	.07	.07
育んできたものである	**.74**	.01	.09	-.03
重要である	**.67**	.16	.02	.11
目的を共有している	**.64**	-.07	-.05	.15
信頼しあっている	**.62**	.12	.11	.15
似た者同士である	**.54**	.10	-.19	-.09
支えあっている	**.52**	.27	.09	.09
生きがいである	**.49**	.16	.20	-.02
安定している	**.49**	.02	.18	.15
歩み寄っている	**.43**	.15	-.26	.31
第Ⅱ因子　距離の近さ（α　= .83）				
行動を共にしている	.11	**.90**	.00	-.19
一緒に過ごしている	-.05	**.86**	.00	-.12
一緒に過ごす時間を持っている	.35	**.71**	.00	-.23
たのしみを共有している	.16	**.69**	-.10	.18
趣味が同じである	-.28	**.57**	-.16	.21
すれ違いがある	.27	**-.56**	-.12	-.13
相手に無関心である	-.06	**-.46**	-.13	-.19
精神的な距離がある	.01	**-.42**	-.11	-.28
性行為がある	.04	**.41**	-.04	.07
第Ⅲ因子　関係の悪さ（α　= .79）				
我慢しあっている	.02	-.15	**-.75**	.09
忍耐しあっている	.35	-.11	**-.69**	-.07
妥協しあっている	.12	-.12	**-.64**	-.02
喧嘩がある	-.09	.17	**-.57**	.09
悪口を言い合っている	-.02	.13	**-.54**	-.15
謙虚である	.16	-.01	**.50**	.14
欠点を指摘しあっている	-.15	.16	**-.47**	.28
第Ⅳ因子　思いやりと明るさ（α　= .93）				
思いやりがある	.17	.02	.11	**.64**
明るい	.28	.09	-.13	**.62**
真心がある	.36	.04	.14	**.49**
言葉でのやり取りがある	.22	.34	-.21	**.48**
優しさがある	.32	.22	.01	**.45**

ロマックス回転）を行なった．十分な因子負荷量を示さなかった項目および複数の因子に

負荷した項目を分析から除外し，再び因子分析を行なった．プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table 6-6 に示す．なお，回転前の 4 因子で 36 項目の全分散を説明する割合は，60.45%であった．

第Ⅰ因子は 15 項目で構成されており，「感謝しあっている」「責任感がある」「成熟している」など，関係が成熟している事と関係へのコミットメントを表す内容の項目が高い負荷量を示していた．そこで，『成熟とコミットメント』因子と命名した．

第Ⅱ因子は 9 項目で構成されており，「行動を共にしている」「一緒に過ごしている」など，距離の近さを表す内容の項目が高い負荷量を示していた．そこで，『距離の近さ』因子と命名した．

第Ⅲ因子は 7 項目で構成されており，「我慢しあっている」「忍耐しあっている」など，関係の悪さを表す内容の項目が高い負荷量を示していた．そこで，『関係の悪さ』因子と命名した．

第Ⅳ因子は 5 項目で構成されており，「思いやりがある」「明るい」など，関係における思いやりや関係の明るさを表す内容の項目が高い負荷量を示していた．そこで，『思いやりと明るさ』因子と命名した．

さらに，夫婦関係認知の因子を構成する項目に対し，信頼性の検討を行なった．信頼性を検討するために，夫婦関係認知のそれぞれの下位因子について，それぞれクロンバックの α 係数を算出した．『成熟とコミットメント』因子で(α = .94)，『距離の近さ』因子で(α = .83)，『関係の悪さ』因子で(α = .79)，『思いやりと明るさ』因子で(α = .93)と，それぞれ十分に高い値が得られた．次に，因子間相関を Table 6-7 に示す．

Table 6-7　夫婦関係認知の因子間相関

	Ⅰ成熟とコミットメント	Ⅱ距離の近さ	Ⅲ関係の悪さ
Ⅱ距離の近さ	.74	-	-
Ⅲ関係の悪さ	.57	.52	-
Ⅳ思いやりと明るさ	.68	.63	.49

夫婦関係認知の下位因子間では，.49- .74 と，中～高程度の相関が見られた．

４．考察

本研究は，夫婦関係認知の構造を明らかにすることを目的とした．まず，因子分析の結果について考察する．

「成熟とコミットメント」と命名した第Ⅰ因子は，「感謝しあっている」「責任感がある」

「自由である」「成熟している」といった項目が大きな負荷量を示していた．これらの言葉からは，夫婦関係に主体的に参与し，夫婦で互いに感謝しあっているという夫婦の様相が想定される．また，それらの項目が，関係の成熟という言葉の内実を表しているものと考えられた．

「距離の近さ」と命名した第Ⅱ因子は，「行動を共にしている」「一緒に過ごしている」「一緒に過ごす時間を持っている」などの項目が大きな負荷量を示していた．この事から，時間や楽しみなどを共有している事が表されているものと考えられた．さらに，「精神的な距離がある」「性行為がある」といった，精神的・物理的の両方の意味での距離の近さが表現されているものと考えられた．そこで，これらの意味を包括する言葉として，「距離の近さ」とした．

「関係の悪さ」と命名した第Ⅲ因子は，「我慢しあっている」「忍耐しあっている」「妥協しあっている」というように，関係の悪さに耐えようとしている状況を表しているものと考えられた．一方で，「喧嘩がある」「悪口を言い合う」というように，関係の悪さに耐えるというよりも，相手を攻撃したり責めたりしようとする姿勢が想定される項目も含まれていた．そこで，これらの項目は，関係の悪さを全般的に示しているものと考えられた．なお，第Ⅲ因子に負荷している項目の殆どは負の因子負荷量を示している．因子負荷量においては，その絶対値が重要であり，第Ⅲ因子を構成する項目は 1 項目を除いて否定的な項目であった事から，否定的な項目群として捉える事とした．

「思いやりと明るさ」と命名した第Ⅳ因子は，「思いやりがある」「明るい」「言葉でのやりとりがある」など，思いやりと明るさを表す項目が大きな負荷量を示していた．これらの項目からは，夫婦関係において，パートナーに対して思いやりを持ち，良いコミュニケーションが行なわれている様子を表しているものと考えられた．

夫婦関係認知の下位因子間では，中～高程度の相関が見られた．中でも，肯定的な特性の項目から成る「成熟とコミットメント」，「距離の近さ」，「思いやりと明るさ」は.63-.74 の高い相関が見られた．この事から，自身の夫婦関係が成熟したもので，そこ夫婦関係へコミットメントしている感覚を持っている者は，パートナーとの距離を近く感じており，パートナーを思いやり，夫婦関係において良いコミュニケーションを取っている傾向にある事が示された．また，否定的な特性の項目から成る「関係の悪さ」は，それ以外の因子と.49- .57 の相関を示し，中程度の負の相関関係にあった．よって，上述のように自身の夫婦関係を肯定的に捉えている者は，自身の夫婦関係を否定的な特性を持たないものとして

捉えている事が示された.

次に，Deutch（1982）の示した「協調 / 競争」,「対等 / 非対等」,「課題志向 / 社会情緒」,「公的 / 私的」,「緊密 / 表面的」の 5 次元と比較する事で，夫婦関係認知の特徴を考察する.「成熟とコミットメント」はその内容から，5 次元すべてに広がる認知次元であると考えられる.「距離の近さ」は,「緊密 / 表面的」に対応すると考えられる.「思いやりや明るさ」は,「公的 / 私的」「緊密 / 表面的」の 2 次元に広がる認知次元であると言える.「関係の悪さ」は,「緊密 / 表面的」次元と一部重複するものと思われるが，相手への攻撃や呵責と言った側面が含まれる点でこれと区別される．このように，夫婦関係認知は，主観的な二者関係認知に比べ，上述のような特徴を備えた次元から構成されるものと言えるだろう.

第 7 章　ポジティブ・マリタル・イリュージョンの構造の探索的検討

第 6 章では，夫婦関係認知の構造を探索的に検討し，夫婦関係認知は「成熟とコミットメント」「距離の近さ」「関係の悪さ」「思いやりと明るさ」の 4 次元から成ることが示された．第 7 章は，夫婦関係認知における PI を測定するための尺度を構成することを目的とする．さらに，「夫婦関係認知における PI は，夫婦関係認知の領域すべてにおいて生起するのか，あるいは PI の生起領域は限定的であるのか」という問いを明らかにするため，夫婦関係認知の構造との比較を通して，夫婦関係認知における PI の生起領域についての検討を行う．

１．問題と目的

夫婦関係認知における PI は，ポジティブ・マリタル・イリュージョン（positive marital illusions ; 以下，PMI）と呼ばれる．先行研究において PMI は，主として 2 つの方法から取り上げられてきた．1 つ目の方法は，『夫婦関係の理想化』や『夫婦関係満足度』などの構成概念を用いたものである（e.g. Fowers et al., 2001）．例えば，『夫婦関係の理想化』については，夫婦関係を理想化すればするほど，夫婦関係を肯定的なものとして捉えていると見做される．ここでは，具体的な夫婦関係認知の次元が明らかにされていないという点が問題として挙げられる．すなわち，どういった観点から夫婦関係を評価し，満足していたり素晴らしいと思っていたりするのかという事が不明である．夫婦関係認知の次元を明確にしておく事は，臨床実践の場における介入の指標となるため，重要であると考えられる．

もう 1 つの方法は，この問題意識に答えるものである．すなわち，具体的な項目を取り上げ，それぞれの項目に対する評定から，ポジティブ・イリュージョンを測定する方法である．代表的な方法として，『好ましい特性を表す形容詞』を用いるやり方がある．それらの形容詞がどの程度当てはまるかという事を夫婦に訊ねるのである．（e,g, Fowers et al., 2008）．具体的な手続きは，次の通りである．それぞれの形容詞について，調査協力者が自身のパートナーと一般的な他者について評定を行い，その差を検討する．また同じ方法で，好ましい特性を表す形容詞以外の項目を用いる研究には，「親しみがある」「誠実である」というような項目について評定させるものがある（e.g. Endo, Heine, & Lehman, 2000）．これらの研究は，夫婦関係認知について，具体的な認知次元を用いている点が優れている．ただし，問題として次の 2 点が指摘される．

1 点目は，『好ましい特性を表す形容詞』やその他の項目が，夫婦関係認知そのものを取り上げているわけではないという点である．『好ましい特性を表す形容詞』が夫婦関係認知

における認知次元の一部を構成するという可能性は，充分に考えられるものである．例えば，夫婦関係は「明るい」かどうかという観点から評価されている，と考えられるだろう．しかし，好ましい特性を表す形容詞がすべて，夫婦関係認知における認知次元となるかどうかという点については疑問が残される．夫婦関係を評価する際に重要となるような観点とそうでない観点は，区別しなければならない．さらに，それらの観点の背後には，因子分析における因子のような潜在変数を仮定出来る可能性がある．つまり，ここで取り上げられている項目は，背後にある潜在的な構成概念を反映したものである可能性がある．その場合，それらの潜在的な変数を探索する事，すなわち夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンが生起する領域を構造として理解する事は重要であるだろう．

2 点目は，具体的な項目が用いられるに至るまでの手続きが不明であるという点である．慣例的に用いられている「親しみがある」「誠実である」といった項目は，確かに，夫婦関係認知において重要であると考えられる．そして，この考えを支持する知見が存在している．しかし，これらの項目がどのような手続きによって導かれたものなのか，これらの項目は夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンを網羅的に捉えているものなのかという 2 点については明らかにされていない．したがって，既存の研究が夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンを充分に捉えられているかどうかという点には疑問が残される．

また，ポジティブ・イリュージョンの生起には，文化的社会的背景が関連しているとする先行研究もある（e.g. Fowers et al., 2008; 遠藤, 1999）. この事について, 外山・桜井（2000）は，自己認知に関する研究において次のような考察を加えている．相互協調的であるとされるわが国の文化的背景を考慮すると，日本人は，集団の一員として重要であると考える自己の特性については，それをおもてに出しても良いと考え，他方，個人としては重要と考えるが，それをおもてに出してはいけないと考える，すなわち，おもてに出すと集団の成員からネガティブに評価されると考えられる自己の特性については，内心ではポジティブに評価していてもネガティブであると評価する人が多くなる．この事からは，自己の特性を肯定的に評価した際に，集団の成員からどのように評価されるかという事が，ポジティブ・イリュージョンの生起に関わっていると考えられる．

しかし，日本の夫婦が自身の夫婦関係を評定する際，どのような特性については評価をして良いものと考え，どのような特性についてはそうでないと捉えているのかについては不明である．また，そもそも，自身の夫婦関係を肯定的に評価する事によって，集団の成

員からネガティブに評価されるかどうかについても不明である．夫婦の関係認知におけるポジティブ・イリュージョンの生起領域を探索する事は，この問題に対する何らかの示唆を与えうるものと考えられる．

以上の問題意識をふまえ，本章では，夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンを測定するための尺度を構成する事を目的とする．

夫婦関係認知の次元を捉えるために必要な項目の収集には，第 5 章の予備調査の結果を用いる．次に，それらの項目得点の 99.9%信頼区間を算出し，平均点以上効果・平均点以下効果の生起している項目を同定する．そして，平均点以上効果の生起した項目と平均点以下効果の生起した項目をそれぞれ独立させて因子分析を行なう．

項目得点の 99.9%信頼区間に理論的平均値が含まれない場合，項目得点の分布は大きく正，あるいは負に偏っていることを意味する．このことは，「自身の夫婦関係を平均的な他の夫婦関係と比較した」際に，多くの人が「自身の夫婦は平均的な他の夫婦よりも自身の夫婦関係に当該特性がある」と認知していることを意味する．

平均点以上効果の生起した項目と平均点以下効果の生起した項目を独立させた理由について触れておく．平均点以上効果と平均点以下効果はそれぞれ，生起の様相や他の変数との関連の仕方が異なる可能性が, 先行研究から示唆されている. 例えば, Fowers et al.（2008）は，肯定的な項目におけるポジティブ・イリュージョンは文化によって調整されているのに対し，否定的な項目におけるポジティブ・イリュージョンは，文化を超えて一般化されるという知見を提出している．このような理由から，平均点以上効果の生起した項目と平均点以下効果の生起した項目はそれぞれ独立させて尺度を構成する事とした．

２．方法

本章で用いているデータは，第 5 章で用いたデータと一部重複している．第 7 章で扱っているデータは，第 6 章で扱ったデータのうち，平均点以上効果/平均点以下効果の見られる項目である．また，第 6 章と第 7 章では，調査開始から終了までの時期が異なることから，データに関する記述統計量が異なっている点に留意されたい．

A. 調査協力者と調査方法

調査は日本在住の夫婦を対象とした．調査時期は，2008 年 9 月上旬から 10 月上旬であった．質問紙への調査協力は，以下の 3 つの方法によって求められた．1 つ目は研究者の知人の両親 18 組に質問紙を郵送し，返送を求めた．2 つめは，研究者の知人 3 名を介し，55 組の夫婦に質問紙を配布し，返送を求めた．3 つ目は，訪問留置郵送回収法を用いて，

東京都板橋区の住居を無作為に訪問し，7 組の夫婦に回答の郵送を求めた．これら 3 つの方法によって配布された質問紙の調査対象者数は，80 組 160 名であった．また，インターネット上の SNS（Social Networking Service）で不特定多数に対して，調査協力への募集を行なった．インターネット上での調査には，研究者が作成したアンケートを用いた．調査協力者には，アンケートに回答して戴くよう教示した．アンケートの内容は，質問紙と同一のものであった．

B．質問紙の構成

まず，基本的属性として，居住地域，婚姻関係期間，家族構成員の年齢，夫妻の年収，夫妻の就業時間，夫妻の最終学歴，夫妻の職業を訊ねた．

次に，第 6 章の予備調査をもとに作成した，関係認知に関する 90 項目について，回答を求めた．教示は，「あなたが思われる平均的な夫婦関係に比べて，あなた自身の夫婦関係にどの程度当てはまりますか？」と行い，各項目について，「1. あてはまらない」「2. ややあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」「5. あてはまる」の 5 件法で評定を求めた．

C．分析方法

まず，質問紙に不備があったため，1 項目を分析の対象から除外した．[2]関係認知に関する項目について，項目得点の 99.9%信頼区間を算出した．99.9%信頼区間に項目得点の理論的平均値（3 点）が含まれた項目は，分析の対象から除外した．この手続きにより，平均点以上効果の見られた項目と平均点以下効果の見られた項目を特定した．

さらに，天井効果・床効果に関する項目分析を行なった．天井効果・床効果が見られた項目は，分析の対象から除外された．ここまでの手続きで残された項目を，平均点以上効果が見られたものと平均点以下効果が見られたものに分け，それぞれについて探索的因子分析を行なった．分析には，SPSS for Windows 11.0 を用いた．

３．結果

質問紙調査については，46 組 92 名より回答を得た．回収率は 57.5%であった．また，有効回答率は 63 名（39.4%）であった．また，インターネット上のアンケートでは，11 組 11 名より回答を得た．インターネットでのアンケートでは，回答の不備がある場合には研究者に回答データを送信出来ないようにプログラムを組んだため，有効回答率は 100%で

[2]第 6 章と同様に，質問紙には同じ項目が 2 項目含まれており，重複していた．そのため，学習効果などを配慮し 1 項目を除外した上で分析を進める事とした．確認のために，これらの項目について対応のある t 検定を行なった．その結果，(t (73) = -2.17, $n.\ s.$)となり，項目得点間に有意な差は見られなかった．

あった．以上を足しあわせ，本研究では，計 51 組 74 名の回答を有効回答とした．

データに欠損値が認められたものは，分析の対象から除外した．

A．調査協力者の属性

次に，調査協力者の属性について記す．ただし，フェイス・シートに関して，欠落している者や，一部未記入のまま返送された者があったため，以下に記される調査協力者の属性からそれらは除外された．フェイス・シートが欠落している夫婦は 1 組，一部未記入だった夫婦は 3 組であった．なお，本研究は夫婦を対象としており，質問紙が夫婦に配布された事については確認が取れている．よって，最低限の基準は満たしているものと判断し，フェイス・シートに不備がある夫婦は，分析の対象に加える事とした．

調査協力者の居住地域は，京都 17 組，大阪 5 組，東京 5 組，滋賀 4 組，神奈川 3 組，青森 2 組，茨城 2 組，埼玉 2 組，福岡 2 組，栃木 1 組，静岡 1 組，愛知 1 組，兵庫 1 組，香川 1 組，広島 1 組，大分 1 組，宮崎 1 組であった．

平均婚姻関係期間は，20 年 5 ヶ月（*SD* = 11 年 1 ヶ月）だった．また，平均子供数は，2.04 名であった．

調査協力者の年齢，最終学歴，職業，収入，就業時間については，それぞれ Table 7-1～7-5 に示した．ただし，収入に関しては，夫の年収と妻の年収を足し合わせ，世帯収入としてまとめた．

B．平均点以上効果/平均点以下効果と項目分析

まず，PMI 尺度の候補となった 89 項目について，それぞれの項目得点の 99.9%信頼区間を算出した．そして，99.9%信頼区間に理論的平均値（3 点）が含まれた 23 項目を以降の分析から除外し,平均点以上効果の認められた 66 項目を特定した．これらの項目は，換算前の項目の得点分布が理論的平均値よりも正に偏っている項目 43 項目（以下，肯定項

Table 7-1 調査協力者の年齢

		夫		妻	
		N	%	*N*	%
年齢	20	1	2	3	6
	30	7	14	10	20
	40	16	32	15	30
	50	20	40	18	36
	60	6	12	4	8

Table 7-2 調査協力者の最終学歴

		夫		妻	
		N	%	*N*	%
最終学歴	中卒	4	8.2	2	4.1
	高卒	13	26.5	17	34.7
	短大・専門学校卒	4	8.2	17	34.7
	大卒	25	51	13	26.5
	大学院卒	3	6.1	-	-

Table 7-3 調査協力者の職業

		夫		妻	
		N	%	*N*	%
職業	会社員	26	52	-	-
	公務員・教員	10	20	3	6.1
	自営業	8	16	1	2
	専門職	3	6	1	2
	専業主婦	-	-	19	38.8
	フルタイム	-	-	7	14.3
	パートタイム	-	-	17	34.7
	その他	3	6	1	2

Table 7-4 調査協力者の収入（単位：万円）

		世帯収入	
		N	%
年収	-300	1	2.1
	301-500	10	21.3
	501-700	13	27.7
	701-1000	8	17
	1001-	15	31.9

Table 7-5 調査協力者の 1 週間あたりの就業時間（単位：時間）

		夫		妻	
		N	%	*N*	%
1週間の仕事時間	-10	4	8	20	40
	11-20	1	2	6	12
	21-30	3	6	10	20
	31-40	10	20	6	12
	41-50	18	36	3	6
	51-60	9	18	4	8
	61-70	3	6	1	2
	71-	2	4	-	-

目）と負に偏っている項目 23 項目（以下，否定項目）の 2 つに分けて分析された．

PMI の指標として，肯定項目を用いて夫婦関係認知における平均点以上効果尺度（Above Average Effect in Marital Cognition 尺度: 以下，AAEMC 尺度とする）を，否定項目を用いて夫婦関係認知における平均点以下効果尺度（Below Average Effect in Marital Cognition 尺度: 以下，BAEMC 尺度とする）をそれぞれ独立して構成した．

C．肯定項目の因子分析の結果

肯定項目 43 項目に対して因子分析を行い，固有値の変化の仕方から 3 因子構造を仮定して，α 因子法・Promax 回転（κ=4）による因子分析を行った．充分な因子負荷量を示さなかった項目および複数の因子に負荷した項目を分析から除外し，再び α 因子法・Promax 回転（κ=4）による因子分析を行った．Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 7-1 に示す．なお，回転前の 3 因子で 14 項目の全分散を説明する割合は 62.0%であった．

第 I 因子は「思いやりがある関係」因子，第Ⅱ因子は「自然で自由な関係」因子，第Ⅲ因子は「一緒に過ごす関係」因子と命名した．

AAEMC 尺度の信頼性について，3 つの下位尺度のそれぞれにクロンバックの α 係数を算出したところ，第 I 因子から順に α=.93，α=.77，α=.84 と，充分に高い値が得られた．

表 7-1. AAEMC 尺度の因子分析結果

第 I 因子　思いやりがある関係（α = .93, M = 1.08 , SD = .67 ）	**I**	**II**	**III**	h^2
思いやりがある	**.93**	−.08	−.03	.71
穏やかである	**.77**	−.12	.07	.53
安定している	**.77**	−.02	.09	.66
大切である	**.75**	.25	−.01	.88
一生続けていたい	**.70**	.18	.07	.81
目的を共有している	**.61**	.20	−.06	.53
言葉でのやり取りがある	**.46**	.10	.29	.62
第Ⅱ因子　自然で自由な関係（α = .77, M = 1.13, SD = .60）				
自然体である	−.09	**.86**	.13	.77
自由である	−.08	**.73**	−.02	.43
対等である	.15	**.61**	−.16	.39
責任感がある	.17	**.41**	.12	.40
第Ⅲ因子　一緒に過ごす関係（α = .84, M = .73, SD = 1.01 ）				
一緒に過ごす時間を持っている	.04	.03	**.84**	.78
一緒に過ごしている	−.03	−.07	**.79**	.52
会話がある	.12	.01	**.70**	.64
因子相関行列	−	**.77**	**.75**	
			.67	

D．否定項目の因子分析の結果

次に，否定項目 23 項目に対して因子分析を行い，固有値の変化の仕方から 2 因子構造を仮定して主因子法・Promax 回転（κ=4）による因子分析を行った．充分な因子負荷量を示

さなかった項目および複数の因子に負荷した項目を分析から除外し，再び主因子法・Promax 回転（κ=4）による因子分析を行った．Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 7-2 に示す. なお, 回転前の 2 因子で 14 項目の全分散を説明する割合は 58.2% であった.

第 I 因子は「精神的な距離と不信」因子，第Ⅱ因子は「配偶者への非難と攻撃」因子と命名した.

BAEMC 尺度の信頼性について，2 つの下位尺度のそれぞれにクロンバックの α 係数を算出したところ，第 I 因子から順に α=.84，α=.83 と，充分に高い値が得られた.

表 7-2. BAEMC 尺度の因子分析結果

第 I 因子　精神的な距離と不信（α = .84, M = 1.03, SD = .58）	**I**	**Ⅱ**	h^2
精神的な距離がある	**.91**	−.15	.67
不信感がある	**.86**	−.21	.56
表面的である	**.86**	.03	.77
相手に無関心である	**.80**	−.17	.54
不協和音がある	**.77**	.02	.60
無視しあっている	**.70**	.16	.67
傷つけあっている	**.65**	.21	.63
無責任である	**.60**	.20	.55
性行為がある	**−.56**	.07	.27
惰性である	**.55**	.16	.44
第Ⅱ因子　配偶者への非難と攻撃（α =.83, M = 1.57, SD = .58）			
悪口を言い合っている	−.12	**.92**	.72
けなしあっている	.10	**.87**	.88
暴力がある	−.21	**.61**	.26
ののしり合っている		**.60**	.58
因子相関行列	−	.63	

E. PMI 尺度の検討

PMI 尺度の下位尺度間における相関の検討を行った．AAEMC 尺度は,「思いやりがある関係（M=1.08, SD=.67）」,「自然で自由な関係（M=1.13, SD=.60）」,「一緒に過ごす関係（M=.73, SD=1.01）」の 3 因子から構成された．一方, BAEMC 尺度は,「精神的な距離と不信（M=1.03, SD=.58）」と「配偶者への非難と攻撃（M=1.57, SD=.58）」の 2 因子から構成された.

これら 5 つの下位尺度間の相関係数を表 6-3 に示す．AAEMC 尺度における「自然で自由な関係」と「一緒に過ごす関係」との相関係数，および「AAEMC 尺度における「一緒に過ごす関係」と BAEMC 尺度における「配偶者への非難と攻撃」との相関係数を除いて, PMI 尺度の下位尺度間で.45 から.78 といった高い有意な相関係数が認められた.

表 7-3. PMI 尺度の尺度得点の相関係数

	思いやり	自然で自由	一緒に過ごす	精神的距離と不信
思いやり	–	–	–	–
自然で自由	**.59****	–	–	–
一緒に過ごす	**.67****	.30	–	–
精神的距離と不信	**.78****	**.63****	**.51****	–
非難と攻撃	**.48****	**.51****	.19	**.45****

有意なものを太字で示してある．各相関係数の右肩のアスタリスクは，** $p < .01$ を意味する．

４．考察

本研究は，夫婦関係の関係認知について，ポジティブ・イリュージョンの生起する領域を同定して構造的に把握し，それを測定する尺度を構成する事を目的とした．

ｉ．PMI の生起する認知領域　本研究の結果から，PMI における平均点以上効果が生起する領域には 3 因子が，平均点以下効果が生起する領域には 2 因子がそれぞれ認められた（表 7-1，表 7-2）．これらは，夫婦関係認知における PI が生起する認知領域の構造を示していると考えられる．すなわち，個人は自身の夫婦関係を平均的な他の夫婦関係と比して，「思いやり」があり，「自然で自由な関係」であり，「一緒に過ごす」時間を有しており，「精神的な距離と不信」が少なく，「配偶者への非難と攻撃」が少ない関係であると認知している．

先行研究の多くにおいて，夫婦関係の質は「夫婦関係満足度」という単一指標を用いて評価されてきたが，本研究は，夫婦関係がどのような観点からとらえられ評価されているのかについて詳細に検討した．

ⅱ．AAEMC 尺度　AAEMC 尺度について，「思いやりがある関係」と命名した第 I 因子は，「思いやりがある」「大切である」「言葉でのやり取りがある」などから構成されている．夫婦関係を対象とした研究では，情緒的側面やコミュニケーションの不全が問題とされてきた（e.g. 平山・柏木, 2004）が，これらの点について，夫婦は一般的に，他の夫婦よりも好ましい状態にあると捉えているものと考えられる．また，「安定している」「一生続けていたい」といった時間的な観点が含まれている点が特徴的である．

「自然で自由な関係」と命名した第 2 因子は，「自然体である」「自由である」などの言葉が示すように，自由な夫婦関係を示している．夫婦関係は自由なものであり，夫妻は対等であり，また自身の夫婦関係に対する責任感があることが示されている．中年期に至るまでの長い時間の中で，夫婦が相互に影響を及ぼし合いながら関係を築いてきた，その結果が示されているものと考えられる．

第Ⅲ因子は「一緒に過ごす関係」と命名した．夫婦は「一緒に過ごす時間を持っている」

こと，また実際に「一緒に過ごしている」こと，夫妻間の「会話がある」ことが示されている．個人は自身の夫婦関係について，夫妻間のコミュニケーションが平均的な夫婦関係よりもたくさんあると捉えている，と理解することが出来る．

夫婦関係は“親密な関係”の 1 つとして分類されて研究されてきたが，この事の妥当性を保証する結果が得られたと考えられる．“親密な関係”は，関係が当人にとって重要で，互いに影響を及ぼしあうような関係であると考えられている．夫婦関係にある者が自身の関係を他の者の夫婦関係に比べ，より重要な関係と捉えている事は，直感的には，関係が当人にとって重要であるという事を表しているものとして考えて良いと思われる．勿論，論理的には，自身の夫婦関係を重要なものとは見做さない上で，他者の夫婦関係をより重要ではないものであると見做している場合も考えられる．しかし，この考え方は，離婚が選択肢の一つとなっている現代の状況でなお夫婦関係を継続している多くの夫婦の実情にはそぐわないように思われる．したがって，親密な関係として捉える事の正当性を示したものと考えられる．

ⅲ． BAEMC 尺度 BAEMC 尺度について，「精神的な距離と不信」と命名した第Ⅰ因子は，「精神的な距離がある」「表面的である」「傷つけあっている」など，夫婦関係の悪さを示していると考えられる．同一因子内に，「傷つけあう」というように，パートナーとのやり取りが想定される項目が含まれている一方で，「表面的である」「相手に無関心である」というように，パートナーとの交流が阻害されていると思われる項目が含まれている．よって，全体的に関係の不和を表すような要因が因子として抽出されたと考えられる．

第Ⅱ因子は「配偶者への非難と攻撃」と命名した．「悪口を言い合っている」「けなしあっている」など，夫妻の対立が表面化していて，直接的にネガティヴなコミュニケーションが行われていることが示唆される．第Ⅰ因子に「傷つけあっている」という項目が含まれていたが，この項目は第Ⅱ因子に収束しなかったことから，配偶者への直接的な非難や非難によって傷つけあっているというよりは，精神的な距離からお互いに傷つけあっていることを示していると考えられる．

ⅳ．PMI 尺度の下位尺度 PMI 尺度の下位尺度間では，.45 から.78 といった高い有意な相関係数が認められた．全体的には，ある観点において自身の夫婦関係を，平均的な他の夫婦関係と比べて好ましく捉えている夫婦は，別の観点においても自身の夫婦関係を好ましく捉えていると理解することが出来る．一方，有意な相関関係が認められなかった点からは，一緒に過ごす夫婦が必ずしも自然で自由な夫婦関係とは限らないこと，夫婦間におけ

る配偶者への非難と攻撃は，夫婦がどれだけ一緒に過ごしているかとは関係しないことが示された．また，既存の夫婦関係に焦点を当てたポジティブ・イリュージョン研究では，満足度や理想化の程度といった指標が用いられていた．これは，本研究で見出された因子のいずれにも属さず，むしろ，本研究で見出された因子を包括的に反映しているものと考えられる．よって，本研究は，関係の満足度やその評価がどのような側面において捉えられているのかという点について，その領域を特定したと考えられる．

ⅴ．PMI と文化的背景　次に，ポジティブ・イリュージョンと社会文化的な背景の関係について考察する．相互協調的な文化とされる日本では，自己認知に関して，ある特性に関して肯定的な評価をし，それを表明する事が，何らかの不利益につながる場合があるという可能性が示唆されている．しかし，本研究にて得られた知見は，肯定的な項目において平均点以上効果，否定的な項目において平均点以下効果が見られた．この事からは，2 つの可能性が考えられるだろう．1 つ目は，今回取り上げられた肯定的な項目の中に，それを肯定的に評価した際に集団の成員から否定的に評価されるような項目が含まれていなかった可能性がある．2 つめは，夫婦関係における肯定的な評価は，個人による自己の特性に対する評価とは異なり，おもてに出しても集団の成員からネガティブに評価される事はない，という可能性がある．本研究からは，以上の 2 つの可能性が示唆された．しかし，これらの考えのいずれが支持されるものなのかを結論付ける事は出来ない．そのため，今後さらなる研究が必要であると言える．

ⅵ．PMI 尺度の特徴　次に，本研究で構成した尺度の特徴を考察する．ポジティブ・イリュージョンの生起の確認には，平均点以上効果および平均点以下効果を用いた．それらの基準として，99.9%信頼区間を用いた．これは，平均点以上効果・平均点以下効果が生起しているかどうかという事の判断に際し，厳しい制約を課したものと言える．よって，99.9%信頼区間を基準に採用した事は各因子の内容的な広がりを制限する一方で，平均点以上効果・平均点以下効果が特に強調して見られる領域のみを取り上げる事を可能にしたと考えられる．

また，本研究で構成した尺度は，因子分析におけるモデル適合度の観点から評価を行なった結果，高い適合度が得られたと言える．また，信頼性については，構成した尺度全てにおいて，.85 から.95 の充分に高い α 係数が得られた．今後，本研究で検討されなかった妥当性や信頼性について，さらなる検討を重ねる事で，今回構成した尺度をより洗練することが求められる．

vii．今後の課題　本研究における問題点としては，今回行なった研究は，調査協力者数が多いとは言えなかった事が挙げられる．因子分析を行なうために必要な人数は確保出来たものと思われるが，調査協力者を追加して分析をし直す事で，より安定した因子負荷量などの推定値が得られるものと考えられる．

調査協力者が少なかった理由には，夫婦を対象とした研究を行なう事の難しさが挙げられるだろう．心理学研究は大学生を対象とした研究が多く見られるが，これは青年期研究の重要さに加え，研究が行いやすいという実情があると考えられる．それに対し，夫婦を対象とする事は，知人を介して紹介してもらう方法や，知人の両親に依頼する方法を採る事になり，大規模な調査研究を行なう事は困難であった．

また，本研究の知見は，対象者が中年期を中心とした分布となっていた点をふまえておく必要がある．特に，若い世代の夫婦が少なく，それらの夫婦にまで知見が一般化出来るかどうかについてはさらに検討しなければならない．また，生活構造においても，世帯あたりの年収に若干の偏りが認められた点に留意する必要がある．

さて，本章にでは，ポジティブ・イリュージョンの生起する領域が特定された．まとめると，夫婦関係の肯定的な側面については，次のような事が明らかになった．夫妻間の相互の「思いやり」,「自然体で自由」であること,「一緒に過ごす」ことという観点において，個人は自身の夫婦関係を他の平均的な夫婦関係よりも好ましいものとして肯定的に認知している．一方，夫婦関係の否定的な側面については,「精神的な距離と不信」および「配偶者への非難と攻撃」という点において，個人は自身の夫婦関係を他の平均的な夫婦関係よりも好ましいものとして肯定的に認知している．

次に，夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンの生起領域と夫婦関係認知の構造を比較する．肯定的な項目においては，夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンと夫婦関係認知の構造で一部重複しているという結果が示された．AAEMC 尺度における「思いやりがある関係」は，夫婦関係認知における「思いやりと明るさ」の一部であると考えられる．また,「自然で自由な関係」「一緒に過ごす関係」は，夫婦関係認知における「成熟とコミットメント」および「距離の近さ」の一部を表すものと考えられる．

一方，BAEMC 尺度の「精神的な距離と不信」および「配偶者への非難」は，夫婦関係認知における「関係の悪さ」と対応するものと思われる．また，その内実は，相手への攻撃や無関心とそれらに耐える事と言うように殆ど重複している．

これらのことから，夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンは，夫婦関係認

知の一部において生起するものと考えられる.

第Ⅲ部　ポジティブ・マリタル・イリュージョンと適応の関連

第Ⅲ部では, 第Ⅱ部で構成したPMI尺度を用いて, PMIと適応の関連について検討を行う. 第8章では, ペアワイズ相関分析の手法を用いて, PMIと適応の関連について検討を行う. 適応の指標としては, 心理的well-beingおよびGHQ28を用いる. 続いて, 第9章において, PMIに項目の獲得容易・困難性が及ぼす影響について検討する.

第 8 章　中年期における夫婦関係認知と適応の関連
―ペアワイズ相関分析を用いた分析―

本章では，第Ⅱ部において作成した PMI 尺度を用いて，中年期における夫婦関係認知と適応の関連について検討する．その際，ペアワイズ相関分析の手法を用いることで，夫妻の類似性に配慮し，個人レベルと二者関係レベルに分割された相関係数を得る．

１．問題と目的

第 5 章において，夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンを取り扱った研究は，わが国においてはほとんど見られない事が示された．さらに，夫婦を対象とした研究の観点からも，中年期夫婦を対象とした研究が極めて少ないという事が示された．中年期は個人にとっても夫婦関係にとっても大きな転換期であり，この時期に焦点を当てた精神的健康に関する研究は，臨床心理学研究として重要な意義を持つものと考えられる．そこで本章では，中年期夫婦を対象として，夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンと適応の関連を検討する事を目的とする．

以下，本研究の問題意識を明確にするため，第Ⅰ部および第 5 章で詳述した問題意識を振り返りながら，本研究の目的を示す．

ⅰ．夫婦関係認知と精神的健康観　夫婦関係認知に関して，既存の精神的健康観のいずれが支持されるかを検討する．精神的健康観には，正確な認知が精神的健康につながるとする「伝統的精神的健康モデル」，肯定的に偏った認知が精神的健康につながるとする Taylor & Brown（1988）の「心理社会モデル」，正確性も偏りも極端であれば精神的健康を害するとする Baumeister（1989）の「最適限界理論」の 3 つがあった．これまでのポジティブ・イリュージョン研究からは，それぞれの考えを支持する知見が示された．そこで，いずれの精神的健康観が正しいのかという事ではなく，どのような条件下でどの精神的健康観が支持されるのかを同定する必要があると考えられた．本研究は，中年期夫婦を対象とした夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョンが，いずれの精神的健康観を支持するのかという事について検討を行なう．

ⅱ．適応の指標としての精神的健康　本研究においては，適応の指標として精神的健康に焦点を当てる．これまでポジティブ・イリュージョン研究において取り上げられてきたポジティブ・イリュージョンおよび精神的健康の指標に関しては，次のような問題が指摘された．関係認知におけるポジティブ・イリュージョンを取り上げた指標は，その構成概念について，内容的な広がりや必然性について限界があった．そこで，第 5 章にて，これを

測定するための包括的な尺度を構成した．一方，精神的健康の指標に関しては，取り上げられてきた指標が限定的である事が指摘された．よって，本研究では，関係認知におけるポジティブ・イリュージョンを測定する尺度として第 5 章で構成したものを，適応の指標としての精神的健康を測定する尺度として，中川・大坊（1985）による精神的健康調査票（General Health Questionnaire; GHQ）短縮版（28 項目版; 以下，GHQ28）と心理学的 well-being 尺度（西田, 2000）を用いる事とした．

GHQ28 と心理的 well-being 尺度を取り上げた理由は，次の通りである．GHQ28 は，大規模な集団を用いて標準化されている事に加え，その妥当性や信頼性について検討を行なっている研究が多く存在する（e.g. 成田, 1994; 嶋, 1994）．また，GHQ28 を構成している項目は「身体的症状」,「不安と不眠」,「社会的活動障害」,「うつ傾向」の 4 つであり，損なわれている精神的健康を測定するのに内容的に充分な広がりを持っていると判断した事による．

一方，心理的 well-being 尺度は，Ryff（1989）によって提唱された心理的 well-being の概念に基づいて，西田（2000）が構成した尺度である．心理的 well-being とは，「人格的成長」「人生における目的」「自律性」「環境制御力」「自己受容」「積極的な他者関係」の 6 次元からなる，ポジティブな心理的機能である．Ryff（1989）は，well-being の概念についての理論的解釈が行なわれてこなかった事を批判した．そして，生涯発達理論や臨床的知見，人格発達や自己成長に関連した理論について詳細に検討し，それらの重複・収束した局面に着目して，心理的 well-being の統合モデルを組織化する事を試みた．さらに，これらの概念に基づいて尺度化を行い検討し，次元によって発達的変化のパターンに相違が見られる事を確認した（Ryff & Keys, 1995）．心理的 well-being の各次元の定義と，それらの感覚を強く有する者の特徴を Table8-1 に記す．

GHQ が精神的健康の負の側面を測定するのに対し，心理的 well-being は肯定的な側面を測定する事が出来ると考えられた．そこで，これらを組み合わせる事により，精神的健康について，多角的に検討する事が可能になると思われた．人間の健康的で適応的な側面に焦点を当てる事は，主にポジティブ心理学（Seligman & Csikszentmihalyi, 2000）において行なわれている．だが，臨床心理学研究においても，精神的健康についての理解を進めるためには，その負の側面のみならず，肯定的な側面を併せて検討する事は重要であると言えるだろう．また，精神的健康の肯定的な側面を測定する尺度は主観的幸福感など様々あるが，心理的 well-being は理論に導かれたポジティブな心理的機能であるという事

から，理論的解釈が行なわれている点において優れていると考えられた．さらに，次元によって発達的変化のパターンに相違が見られる事から，中年期に焦点を当てた本研究では，中年期特有の心理的 well-being を取り上げる事が出来ると考えられた．そこで，本研究では，これらの尺度を用いて検討を行なう．

Table 8-1　Ryff（1989）による心理的 well-being6 次元の定義

人格的成長（Personal Growth）：
発達と可能性の連続上にいて，新しい経験に向けて開かれている感覚
連続して発達する自分を感じている；自己を成長し発達し続けるものとして見ている；
新しい経験に開かれている；潜在能力を有しているという感覚がある；
自分自身がいつも進歩していると感じる
人生における目的（Purpose in Life）：人生における目的と方向性の感覚
人生における目的と方向性の感覚を持つ；現在と過去の人生に意味を見出している；
人生の目的につながる信念を持つ；人生に目標や目的がある
自律性（Autonomy）：自己決定し，独立，内的に行動を調整できるという感覚
自己決定力があり，自立している；ある一定の考えや行動を求める社会的抑圧に抵抗する事ができる；
自分自身で行動を統制している；自分自身の基準で自己を評価している
環境制御力（Environmental Mastery）：複雑な周囲の環境を統制できる有能さの感覚
環境を制御する際の統制力や能力の感覚を有している；
外的な活動における複雑な状況をコントロールしている；
自分の周囲にある機会を効果的に使っている；
自分の必要性や価値にあった文脈を選んだり創造する事ができる
自己受容（Self-Acceptance）：自己に対する積極的な感覚
自己に対する積極的な態度を有している；自分の過去に対して積極的な感情を持っている
良い面，悪い面を含む自己の他側面を認めて受け入れている；
積極的な他者関係（Positive Relationships with Others）：
暖かく，信頼できる他者関係を築いているという感覚
暖かく，満足でき，信頼できる他者関係を築いている；他者の幸せに関心がある；
他者に対する愛情，親密さを感じており，共感できる；持ちつ持たれつの人間関係を理解している

西田（2000）より転載した．

iii．ペアワイズ・アプローチを用いた分析　次に，ペアワイズ・アプローチを用いた分析を行なう理由は 2 点ある．第 1 に，夫妻の類似性について検討する必要がある．例えばある者が自身の夫婦関係に満足している時，その配偶者も夫婦関係に満足していることが予想される．このように，相互依存的なペアから収集したデータは，相関係数など，従来用いられてきた統計指標を考慮なしに算出することは出来ない．従来の分散分析や回帰分析といった統計手法を用いて階層的データを分析した場合には，１．サンプルの独立性の仮定に違反する，２．ペアや集団内で平均値を算出し，それをペア・集団レベルの変数とする，３．個人レベルの変数間の関連を，ペアレベル・集団レベルの変数を無視して分析・解釈を行う，といった問題点が生起する（清水, 2006）ためである．関係の視点を採りいれた PI 研究が進められていく際には，階層的データを収集し，階層的分析法を用いて適切に分析することで，従来の統計手法を用いることでは得られなかったような新しい知見を得

ることが期待される．

第 2 に，夫婦を単位とした分析を行なう必要がある．何故ならば，この方法によって，個人を単位とした分析から得る事の出来ない知見が得られるからである．夫婦を単位とした分析を行なうという事は，夫婦関係認知と精神的健康の関連についての理解を試みる際にシステム論的観点を導入する事と同じ事を意味する．また，夫婦を単位として，夫婦関係認知と精神的健康の関連を検討する事は，二者の人格特性 personality of a dyad という概念を想定すると理解し易くなるだろう．個人における 2 変数間の関連を検討するように，夫婦を単位として，その単位における 2 変数間の関連を検討する．これは，後述のペアワイズ潜在変数モデルを用いた分析によって検討される．

以上を踏まえ，ペアワイズ・アプローチによる相関分析を用いて，具体的には次のような検討を行なう．まず，夫妻における夫婦関係認知の類似性を検討する．あわせて，精神的健康についても，その類似性を検討する．さらに，それらに類似性をふまえて，夫婦を分析の単位とした夫婦関係認知と精神的健康の関連を検討する．

それでは，ペアワイズ・アプローチは具体的にどのような方法なのだろうか．ペアワイズ・アプローチについては，(Gonzalez, 1994; Gonzalez & Griffin, 1999, 2000, 2001, 2002; Griffin & Gonzalez, 1995) が詳しいので，全体的な理解のためにはそちらを参照されたい．また，（Griffin & Gonzalez, 2000）には日本語で詳述されているが，ここで紹介されているものは公式に誤りがあるので，注意が必要である．ここでは，本論文で用いるペアワイズ・アプローチとして，単一変数における相互依存性の評価について，次に包括的相関とクロス級内相関について，最後に個人と二者関係の効果を分離するための潜在変数モデルについて詳述する．

ⅳ．相互依存性の評価　本論文における一連の研究の調査協力者は“識別可能なケース distinguishable case”である．異性のカップルのような二者関係では，二者関係内のメンバーを識別するために性別を用いる事が出来るので，メンバーは識別可能である．このようなケースは，識別可能なケースと称される．これに対し，同性の友人関係や同性愛のカップルでは，性別を用いてメンバーを識別する事は出来ない．これは，“交換可能なケース exchangeable case”と称される．識別可能なケースと交換可能なケースでは，同じペアワイズ・アプローチでも統計的手法が異なる．その理由は，次の通りである．二者関係メンバーを識別出来る時，各カテゴリ内のメンバー（例えば，性別というカテゴリにおける男女）は，得点の異なった平均値，分散，共分散を持ちうる．これに対し，交換可能なケー

スにおいては，二者関係メンバーをカテゴリに分割する方法が無いため，彼らの得点は同じ平均値，分散，共分散を持つ事になる．

さて，まず，単一変数における相互依存性の評価について取り上げる．識別可能なケースにおいて，相互依存性の程度はどのように評価されるのだろうか．1 つの方法として，標準級間相関係数あるいはピアソンの積率相関係数を用いる事が出来る．これは，“相対的類似性”を表す．例えば，ある 1 つの変数において，“他の女性と比較して”高得点を示す女性が，“他の男性と比較して”その変数上で高得点を示す男性とペアになる傾向があるかどうかを評価する．級間相関は二者関係メンバー間の絶対的類似性測度や一致性とは解釈出来ないため（Robinson, 1957）重要である．

2 つの集団（例えば，異性カップルを対象とした研究における男女それぞれの群）が等分散を持つ母集団に由来していると想定される場合には，さらに“絶対的類似性”，すなわち“二者関係内類似性”を測定する事も可能になる．識別可能なケースにおける，単一変数に対する二者関係内類似性の有効な尺度は，ペアワイズ級内相関（ペアワイズ級内偏相関）と呼ばれる（Donner & Koval, 1980）．ペアワイズ級内相関は $r_{xx'}$，ペアワイズ級内偏相関は，$r_{xx'.c}$ と表記される．これらのいずれを用いるかという事は，データが識別可能なものか交換可能なものかという事による．すなわち，識別可能なデータにおいては，データを識別するための変数による影響が取り除かれる．そのため，交換可能なケースにおける相関に対応するのは偏相関になる．

N組の二者関係におけるペアワイズ級内相関は，もともとの N組の得点に，二者関係内でメンバーの得点を入れ替えた N組の得点を追加した，計 $2N$組のデータに対し，通常の「ピアソンの積率相関係数」の算出手続きを適用する事で求められる（Griffin & Gonzalez, 1995）．具体的には，4 組の二者関係であれば，もともとの 4 組の得点に，二者関係内で各メンバーの得点を入れ替えた 4 組の得点を追加して，X と X’という 4 組のデータセットを作成する（Table8-2, Table 8-3 参照）．そして，それら X と X’に関して算出したピアソンの積率相関係数が，ペアワイズ級内相関 $r_{xx'}$である．ペアワイズ級内相関は，級内相関の最尤推定値である．ペアワイズ級内相関 $r_{xx'}$は，二者関係において交換可能なパートナー達の絶対的類似性，すなわち，ある人の得点とそのパートナーとの級内相関を指し示す．

識別可能なケースにおいては，二者関係メンバーを示すグループ化コードという一つの追加情報を要する．各二者関係メンバーが，何らかの理論的に意味のある変数に応じ識別可能であるため，この追加情報が必要とされる．この追加情報は，$r_{xx'}$の値に組み入れられ

る．そのため，級の平均差の影響を取り除くために，追加のデータカラムを創る事が必要となる．Cとラベル付けされたこのカラムは，調査協力者の性別のような“級”変数を表す 2 値コードから構成される．本論文の研究では，妻を“1”，夫を“2”と統一してコード化している．したがって，第 1 行の第 1 カラムは“1”が，第 2 行には“2”が入り，そしてこのパターンがサンプル内の N 組の二者関係それぞれに対して繰り返され，$2N$ 個の 2 値コードが生み出される．

Table 8-2 交換可能なケースでのペアワイズ・データ設定の記号表現

	変数			変数	
二者関係	X	X'	二者関係	X	X'
No.1	X_{11}	X_{12}	No.3	X_{31}	X_{32}
	X_{12}	X_{11}		X_{32}	X_{31}
No.2	X_{21}	X_{22}	No.4	X_{41}	X_{42}
	X_{22}	X_{21}		X_{42}	X_{41}

1 番目の添え字は二者関係を，2 番目の添え字は個人を表す．1 または 2 という個人のカテゴリ化は任意である．例えば，X_{21} は，No.2 の二者関係における個人 1 の得点 X を表す．

Table 8-3 識別可能なケースでのペアワイズ・データ設定の記号表現

	変数				変数		
二者関係	C	X	X'	二者関係	C	X	X'
No.1	1	X_{11}	X_{12}	No.3	1	X_{31}	X_{32}
	2	X_{12}	X_{11}		2	X_{32}	X_{31}
No.2	1	X_{21}	X_{22}	No.4	1	X_{41}	X_{42}
	2	X_{22}	X_{21}		2	X_{42}	X_{41}

1 番目の添え字は二者関係を，2 番目の添え字は個人を表す．1 または 2 という個人のカテゴリ化は，級変数 C（本論文においては性別がそれであり，“1”は妻，“2”は夫をそれぞれ表す）に基づく．

ペアワイズ級内偏相関のサンプル推定は，単純に，変数 C の影響を除いた X と X'のピアソンの積率相関係数である．この偏相関の公式は，次の通りである．

$$r_{xx'.c} = \frac{r_{xx'} - r_{cx}\, r_{cx'}}{\sqrt{(1 - r_{cx}^2)}\,\sqrt{(1 - r_{cx'}^2)}}$$

サンプル値 $r_{xx'.c}$ は，大規模サンプルをもちいて $\rho_{xx'.c} = 0$ という帰無仮説に対して漸

近検定でテストされる．ここでZは正規分布し，標準表中の臨界値と比較出来る．Zは以下の式によって与えられる．

$$Z = r_{xx'.c}\sqrt{N}$$

ｖ．包括的相関とクロス級内相関　次に，包括的相関とクロス級内相関について詳述する．研究者が二者関係の各メンバーを測定した2変数XとYのデータを持っているとする．本論文の枠組みで言えば，例えば，PMI尺度と心理的well-being尺度が，N組の二者関係の各メンバーに実施された．ここでは，次のような2つの疑問が起こる：1.ある個人が抱くポジティブ・イリュージョンは，その人の心理的well-being と結びついているだろうか，2.ある個人が抱くポジティブ・イリュージョンは，その人のパートナーの心理的well-being と関連しているだろうか．

これらの疑問に対して，2つの相関係数を算出する事が有用である．それは，包括的相関（例えば，個人のポジティブ・イリュージョンと心理的well-being との相関）と，クロス級内相関（例えば，個人のポジティブ・イリュージョンとパートナーの心理的well-being との相関）である．これら2つの相関の値を算出する事により，背後にある線形関係を推定する事が可能となる．

識別可能なケースにおける包括的偏相関 $r_{xy.c}$ とクロス級内偏相関 $r_{xy'.c}$ は，それぞれ次の式によって算出される．なお，この枠組みでは，$r_{xy'} = r_{x'y}$ かつ $r_{xy} = r_{x'y'}$ となる事に留意されたい．

$$r_{xy.c} = \frac{r_{xy} - r_{cx}\, r_{cy}}{\sqrt{(1 - r_{cx}^2)(1 - r_{cy}^2)}}$$

$$r_{xy'.c} = \frac{r_{xy'} - r_{cx}\, r_{cy'}}{\sqrt{(1 - r_{cx}^2)(1 - r_{cy'}^2)}}$$

また，基本的なデータの調整は，Table 8-4の通りである．

識別可能なケースにおいては，データの処理の前に確認する必要がある3つの過程が存在する：1.各変数における2級間の分散の等質性（例えば，Xについての男性の分散はXについての女性の分散に等しい必要があり，かつ，Yについての男性の分散はYについての女性の分散に等しい必要がある），2.級を横断する2変数間の共分散の等質性（例えば，男性のXとYの間の共分散は，女性のXとYの間の共分散に等しい事が必要），3.2変数間のクロス共分散の等質性（例えば，男性Xと女性のYの間の共分散は，女性のXと男性のYの間の共分散に等しい事が必要）．

Table 8-4 識別可能なケースでの 2 変数に対するペアワイズ・データ設定の記号表現

	変数						変数				
二者関係	C	X	X'	Y	Y'	二者関係	C	X	X'	Y	Y'
No.1	1	X_{11}	X_{12}	Y_{11}	Y_{12}	No.3	1	X_{31}	X_{32}	Y_{31}	Y_{32}
	2	X_{12}	X_{11}	Y_{12}	Y_{11}		2	X_{32}	X_{31}	Y_{32}	Y_{31}
No.2	1	X_{21}	X_{22}	Y_{21}	Y_{22}	No.4	1	X_{41}	X_{42}	Y_{41}	Y_{42}
	2	X_{22}	X_{21}	Y_{22}	Y_{21}		2	X_{42}	X_{41}	Y_{42}	Y_{41}

1 番目の添え字は二者関係を, 2 番目の添え字は個人を表す. 1 または 2 という個人のカテゴリ化とは, 級変数 C（Table 20 に同じ）に基づく．プライム符号は，入れ替えられてコード化されている事を示す.

Table 8-4 のようにデータが配列されると，これらの偏相関は図 8-1 のように表現される.

図 8-1 識別可能なケースで X，Y，対応する“入れ替えられたコード”の間において可能な全てのペアワイズ相関

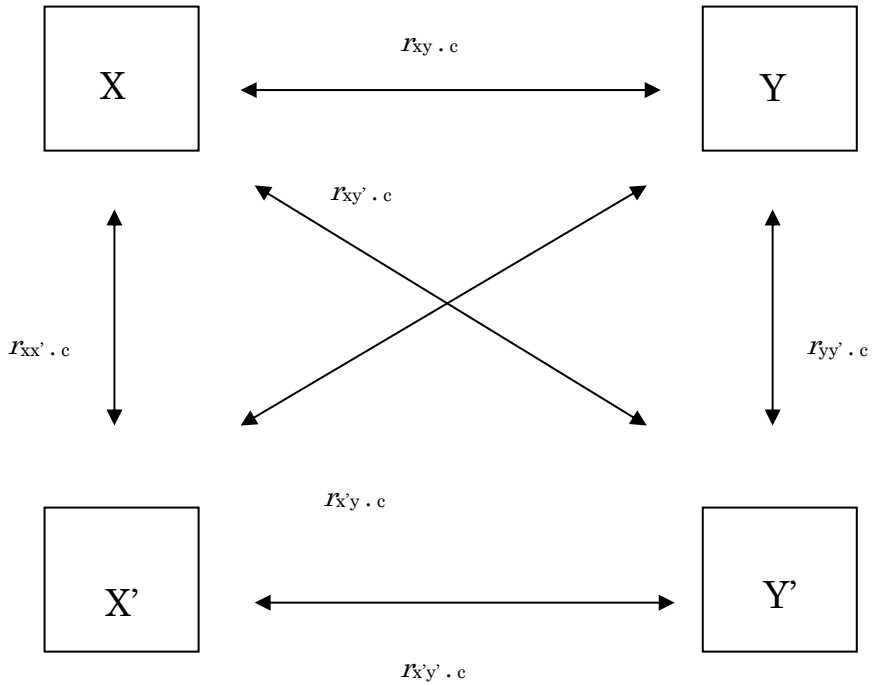


図 8-1 における 4 つの基本的相関が与えられると，相互依存性の程度を考慮に入れた $r_{xy.c}$ と $r_{xy'.c}$ に対する有意性検定を行なう事が可能である．$\rho_{xy.c} = 0$ という帰無仮説のもとで，$r_{xy.c}$ の近似的大規模サンプルの分散は，$1/N^*_1$ である．

$$N^*_1 = \frac{2N}{1 + r_{xx'.c}\, r_{yy'.c} + r_{xy'.c}}$$

したがって，包括的偏相関 $r_{xy.c}$ は Z 検定を用いてテスト出来る．

$$Z = r_{xy'.c} \quad \sqrt{N^*_1}$$

クロス級内偏相関は，2 人のパートナー間の平均差を取り除いた，異なる二者関係のパートナーについて測定された 2 変数間の関係の強さを評価する．$\rho_{xy'.c} = 0$ という帰無仮説の下で，$r_{xy'.c}$ の漸近的分散は，$1/N^*_2$ である．

$$N^*_2 = \frac{2N}{1 + r_{xx'.c}\, r_{yy'.c} + r_{xy.c}}$$

クロス級内偏相関 $r_{xy'.c}$ は，Z 検定を用いてテスト出来る．

$$Z = r_{xy'.c} \quad \sqrt{N^*_2}$$

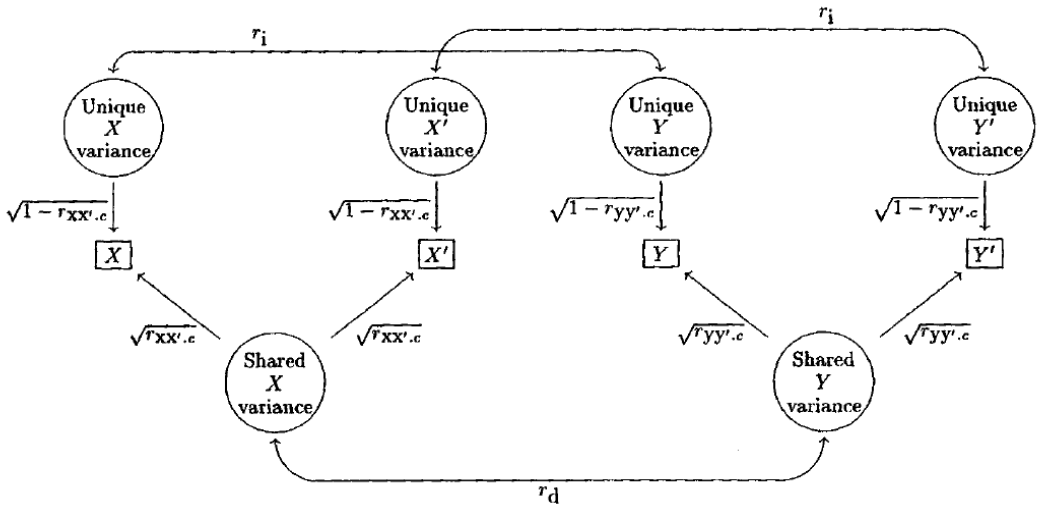
vi．二者関係の分析レベル　次に，ペアワイズ・アプローチを二者関係研究に存在する分析レベルの問題への取り組みに適用する．二者関係の研究者は，個人レベル，二者関係レベル，あるいはその両方について検討する事が出来る（Kenny & La Voie, 1985）．この事を本論文の枠組みに照らし合わせると，次のように表現出来る．ポジティブ・イリュージョンをより多く有する個人は，心理的 well-being もまた高いのだろうかと問う事が出来る．また，両者の人がより多いポジティブ・イリュージョンを有するようなカップルは，両者の人が高い心理的 well-being を有するカップルでもあるのだろうかと問う事も出来る．この 2 つの問いは，個人あるいは二者関係というように，分析のレベルが異なっている．

個人レベルの分析を二者関係レベルの分析からどう分離するかという問題は，永い間，方法論者を悩ませてきた．Robinson（1950）は，2 つの集合変数間の相関（例えば，州をまたいでの学業成績の平均と収入の平均）は，個々人について測定された同じ 2 つの変数（例えば，州内での学業成績の平均と収入の平均）の間の相関と等価では無い事を指摘している．社会学では，このようなレベル横断のエラー，あるいは，一つのレベルから別のレベルへの誤った一般化は，“生態学的相関錯誤 ecological correlation fallacy”と呼ばれている．この問題に関して，ペアワイズ潜在変数モデル Pairwise Latent Variable Model

と呼ばれる方法は，異なるレベルの分析を可能とした．なお，このモデルの構成要素は，これまでのペアワイズ・アプローチと同様に，二者関係メンバーが交換可能であるか識別可能であるかに依存する．

図 8-2 は, 識別可能な二者関係デザインに対する, 単純な潜在変数モデルを表している．このモデルでは，各変数は上述の図 7-1 のようなペアワイズの様式でコード化されている．“級”または“グループ変数”C が統制変数である．ある所与の観測変数の分散は，2 つの異なる潜在変数から生じると仮定される．つまり，二者関係のパートナーたちに共有されている変数の部分を表現する二者関係的成分，そして共有されていない，あるいは独自の変数の部分を表現する個人成分である．

図 8-2 識別可能なケースに対するペアワイズ潜在変数モデル



（Gonzalez & Griffin, 1999）より転載．Unique X variance は変数 X の独自分散であり，Shared X variance は変数 X の共有分散である．観測変数は，個人レベル（独自）と二者関係レベル（共有）効果に分離される．

図 8-2 に示されているように，変数が関連付けられる 2 つのレベルが存在する．X と Y の共有された二者関係自体の分散は，二者関係レベル偏相関 r_d を通じて関係付けられている．X と Y の独自の個人的分散は，個人レベル偏相関 r_i を通じて関係付けられている．ペアワイズ潜在変数モデルは，r_d と r_i の同時推定と検定を可能にする．

図 7-2.は，下記の 2 つの等式によって表現する事も可能である．

観測変数 X = β_{x0} + 共有分散 $_x$ + 独自分散 $_x$

観測変数 Y = β_{y0} + 共有分散 $_y$ + 独自分散 $_y$

グループ $_x$ とグループ $_y$ の偏相関が r_d であり，個人 $_x$ と個人 $_y$ の偏相関が r_i である．個人レベルの偏相関 r_i ならびに二者関係レベルの偏相関 r_d は，それぞれ次のように表現出来る．また, 包括的偏相関 $r_{xy.c}$ は個人レベルの偏相関 r_i と二者関係レベルの偏相関 r_d を用いて，次のように表現出来る．

$$r_i = \frac{r_{xy.c} - r_{xy'.c}}{\sqrt{1 - r_{xx'.c}}\sqrt{1 - r_{yy'.c}}}$$

$$r_d = \frac{r_{xy'.c}}{\sqrt{r_{xx'.c}}\sqrt{r_{yy'.c}}}$$

$$r_{xy.c} = \sqrt{r_{xx'.c}}\sqrt{r_{yy'.c}}\ r_d + \sqrt{1 - r_{xx'.c}}\sqrt{1 - r_{yy'.c}}\ r_i$$

個人レベルの偏相関 r_i は，その計算式に包括的偏相関 $r_{xy.c}$ ならびにクロス級内偏相関 $r_{xy'.c}$ を用いているので，これらを計算する時に必要とされた仮定が，r_i にも適用される．r_i は, 値が 0 という帰無仮説に対して, 相関についての標準の t 検定を用いて検定出来る．識別可能なケースにおいては, 2 値級変数 C が用いられるため, t の自由度は $N-2$ である．

r_d の推定では，クロス級内偏相関 $r_{xy'.c}$ が級変数の各レベルで等しいという仮定を満たす必要がある．この仮定が所与のデータで妥当なら，クロス級内偏相関は，級内偏相関によって希薄化されていない二者関係レベル相関の素点版として使用する事が出来る．

ここまで詳述した内容をまとめると，次のように記すことが出来る．関係にまつわる PI 研究はこれまで主に個人の回答のみを扱い，パートナーの関係への評価は考慮されてこなかった.「関係」のような間主観的な概念を扱う場合には，パートナーの回答を含めたペアデータを扱う必要がある．また，ペアデータの分析の際には，従来，ペアの回答の平均値や差分を算出する方法が採られてきたが，正確なペアレベルの相関が得られない問題と，個人レベルとペアレベルの相関が混在し，いずれの効果か解釈出来ない問題が指摘される（Griffin & Gonzalez, 1995）．そこで本研究はペアワイズ相関分析（Gonzalez & Griffin, 2000; Griffin & Gonzalez, 1995）を採用し，相互依存的な二者のデータにおける変数間の相関係数の効果をペア内の類似性に基づいて二者関係レベルと個人レベルに分割・比較する．この手法により(a). 単一変数に対する夫婦間の類似性，(b). 個人における二変数間の相関，(c).

「個人の変数 X」と「パートナーの変数 Y」の相関（ペアワイズクロス級内相関）， (d). 二変数に対する個人レベルおよび夫婦関係レベルの相関を区別して検討することが可能となる．

以上をふまえ，本研究では，中年期における夫婦の関係認知と精神的健康の関連を検討する事を目的とする．

２．方法

A. 調査協力者と調査方法

日本在住の中年期夫婦を対象に質問紙調査を行った．質問紙は 43 組 86 名の夫婦に配布し, 同梱された返信用封筒による返送を求め, 21 組 42 名より回答を得た（回収率 48.8%）．質問紙調査の調査用封筒は，第一著者の知人に直接配布し，さらに関東圏に所在する 2 つの大学において，在籍する大学生・大学院生に配布した．大学での調査の際には，調査用封筒の宛名として，両親の住所の記入を依頼し，回収した．回収した封筒のうち，宛名の記入されたもののみを投函した．

調査時期は，2015 年 6 月から 7 月であった．調査協力者 21 組 42 名の平均年齢は 51.84 歳（*SD*=4.19），平均婚姻期間は 25 年 3 ヶ月（*SD*=5 年 1 ヶ月），平均子ども数は 1.95 名であった．

B. 質問紙の構成

まず，基本的属性として，居住地域，婚姻関係期間，家族構成員の年齢，夫妻の年収，夫妻の就業時間，夫妻の最終学歴，夫妻の職業を訊ねた．

次に，第 6 章にて作成した，AAEMC 尺度および BAEMC 尺度計 28 項目に対して回答を求めた．教示は,「あなたが思われる平均的な夫婦関係に比べて，あなた自身の夫婦関係にどの程度当てはまりますか？」と行い，各項目について,「1. あてはまらない」「2. ややあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」「5. あてはまる」の 5 件法で評定を求めた．

次に，心理的 well-being 尺度 43 項目に対して,「1. 全くあてはまらない」「2. あてはまらない」「3. ややあてはまらない」「4. ややあてはまる」「5. あてはまる」「6. 非常にあてはまる」の 6 件法で評定を求めた．

最後に，日本版 GHQ 短縮版 28 項目に対して,「よかった」「いつもと変わらなかった」など，項目ごとに 4 種類の選択肢を用いて評定を求めた．

C．指標の算出

AAEMC 尺度（肯定項目 14 項目）と BAEMC 尺度（否定項目 14 項目）について，下位尺度ごとにそれを構成する項目の得点の平均値を算出し，下位尺度得点とした．

工藤（2004）にならい，各評定の得点が高いほど自分を望ましく評定している事を意味するようにするために，AAEMC 尺度および BAEMC 尺度の評定に対して次のような変換を行なった．まず肯定/否定項目の評定方向をそろえるために，否定項目に対する評定を，6 から減じて逆転させた．続いて，全ての項目の評定から 3 を減じた．これらの手続きによって，肯定語について平均より自分に当てはまるという回答が正に，平均より自分にあてはまらないという回答が負になるように，否定語については平均より自分に当てはまるという回答が負に，平均より自分に当てはまらないという回答が正になるようにした．すなわち, AAEMC および BAEMC 尺度得点が正であることは, 平均的な夫婦関係に比して, 自身の夫婦関係を好ましく捉えていることを意味する．AAEMC 尺度得点および BAEMC 尺度得点の取り得る最高点は 2 点，最低点は-2 点であった．

心理的 well-being 尺度は，6 つの下位尺度ごとに項目得点の平均点を算出し，それぞれの下位尺度得点とした．例えば,「人格的成長」は 8 項目から構成されるので，人格的成長得点として, これら 8 項目の項目得点の平均点を用いた. また, これらは便宜をはかるため, 結果を示す図表や説明においては適宜，次のように略記した．人格的成長得点は，PGr 得点，人生における目的得点は PiL 得点，自律性得点は Aut 得点，環境制御力得点は EnM 得点，自己受容得点は Sac 得点，積極的な他者関係得点は PRO 得点とした．

GHQ は，独自の採点法があり，それに従った．すなわち，4 種類の選択肢のうち，左の 2 つの欄を選択したものについては 0 点，右の 2 つの欄を選択したものについては 1 点を与え，その合計を求めた．この採点法により，GHQ 総得点および下位尺度ごとの総和得点を算出した．したがって，GHQ 総得点の可能な最高点は 28 点であり，最低点は 0 点であった．また，GHQ の 4 つの下位尺度は，それぞれ 7 項目から構成されており，それらの可能な最高点は 7 点，最低点は 0 点であった．また，これらは便宜をはかるため，結果を示す図表や説明においては適宜，次のように略記した．GHQ28 総得点は，GHQ28 得点，身体的症状得点は Sym 得点, 不安と不眠得点は Anx 得点, 社会的活動障害得点は Dys 得点, 抑うつ得点は Dep 得点とした．

D．分析方法

まず，PMI の AAEMC 得点，BAEMC 得点，心理的 well-being 得点およびその下位尺

度得点，GHQ 得点およびその下位尺度得点について，ペアワイズ相関分析を行なった．

ペアワイズ・アプローチを用いた識別可能な二者間データ分析のステップは，次のようになる．

1.分散の等質性，共分散の等質性，クロス共分散の等質性について確認する．

2.ペアワイズ・データの設定を行なう．

3.変数のペア毎に，4 つの基礎となるペアワイズ相関（2 つの級内偏相関 $r_{xx'.c}$ と $r_{yy'.c}$，包括的偏相関 $r_{xy.c}$，クロス級内偏相関 $r_{xy'.c}$）を計算する．

4.包括的偏相関 $r_{xy.c}$ とクロス級内偏相関 $r_{xy'.c}$ に対し，それぞれ N^*_1 と N^*_2 を用いた Z 検定を行なう．

5.級内偏相関の有意性を検定する．もし一方または両方が有意でなければ，それらの変数に関しては二者関係レベルのプロセスは重要ではなく，潜在的二者関係レベル相関 r_d は無意味となる．

6.個人レベル相関 r_i について自由度 $N-1$ で t 検定を行なう．

7.両方の級内相関が有意であれば，潜在的二者関係レベル相関 r_d を計算し，その素点版として $r_{xy'.c}$ の解釈を行なう．

３．結果

A.PMI の性差の検討

AAEMC 尺度および BAEMC 尺度を構成する下位尺度得点について，それぞれ性差に関する t 検定（男性 21 名，女性 21 名）を行った結果,「思いやりがある関係」尺度は $t(40) = -0.43$, *n.s.*,「自然で自由な関係」尺度は $t(40) = -1.00$, *n.s.*,「一緒に過ごす関係」尺度は $t(40) = -0.18$, *n.s.*,「精神的な距離と不信」尺度は，$t(40) = -1.05$, *n.s.*,「配偶者への非難と攻撃」尺度は，$t(40) = -0.15$, *n.s.*であった．このことから，夫婦関係に対する認知は夫妻で差が認められなかった．

中年期においては，夫婦関係満足度は妻の方が低いことが知られている（例．藪垣・渡辺・田川，2015）が，PMI は夫妻間で差が認められなかった．夫妻は同じように平均的な夫婦関係よりも自身の夫婦関係を良いものとして理解しているが，そのことがそのまま夫婦関係満足度につながるわけではないと考えられる．

B．ペアワイズ相関分析の前提条件の確認

まず，分析に先立って，識別可能な二者関係である夫婦のペアデータにおいて，ペアワイズ･アプローチを適用するための前提条件が満たされているかどうかの確認を行なった．

前提条件の確認は，本研究にて扱う全ての変数に対して行なわれた．

ペアワイズ相関分析では，21 組 42 名の回答は中規模データと見なされるため，充分な数のデータが得られたと考えられた．

初めに，各変数における男女の分散について，等分散性のための Levene の検定を行なった．その結果，全ての変数において有意では無かったため，等分散性が成り立っているものと判断した．この事は，全ての変数において，ペアワイズ級内偏相関 $r_{xx'.c}$ を算出しても良いという事を意味する．

次に，級を横断する 2 変数間の共分散の等質性，および 2 変数間のクロスの共分散について，検定を行なった．識別可能なデータでのペアワイズ相関分析では，カテゴリ間で，変数の分散，変数間の共分散，交差級内共分散の等質性が仮定されているためである．なお，本研究においては，カテゴリは性別が該当している．検定は，Box の共分散行列の等質性の検定を用いた．これは，s_{xy} と $s_{x'y'}$ および，$s_{x'y}$ と $s_{xy'}$ の等質性を検定するものである．有意水準は 5%に設定した．Box の検定の結果，全ての変数の組み合わせにおいて有意では無かった．したがって，群間の共分散行列が同質でないと考える根拠は無いと言える．そのため，等分散性が成り立っていると判断した．この事と上述した Levene の検定の結果とを合わせると，PMI，心理的 well-being，および GHQ28 の全ての変数において，包括的偏相関 $r_{xy.c}$，クロス級内偏相関 $r_{xy'.c}$ を算出しても良いという事が示された．

C．ペアワイズ相関分析

PMI，心理的 well-being，GHQ28 について，夫妻の類似度を意味するペアワイズ級内相関係数を算出した（N=21）．それぞれの変数について，ペアワイズ級内相関係数と記述統計量を示す．

PMI については，思いやりのある関係：r=.60, p<.01（M=1.08, SD=.67），自然で自由な関係：r=.38, p<.10（M=1.13 , SD=.60），一緒に過ごす関係：r=.73, p<.01（M=.73 , SD=1.01），精神的な距離と不信：r=.41, p<.10（M=1.03 , SD=.58），配偶者への非難と攻撃：r=.65, p<.01（M=1.57 , SD=.51）であった．

心理的 well-being はそれぞれ，人格的成長：r=-.07, *n.s.*（M=4.61 , SD=.95），人生の目的：r=-.03, *n.s.*（M=4.31, SD=.93），自律性：r=.03., *n.s.*（M=3.99, SD=0.64），環境制御：r=.01, *n.s.*（M=3.94, SD=.61），自己受容：r=-.07, *n.s.*（M=4.38, SD=.70），他者関係：r=-.16, *n.s.*（M=4.12, SD=.69）でいずれも有意ではなかった．

GHQ28 はそれぞれ，身体症状：r=.39, p<.10（M=2.64, SD=2.13），不安・不眠：r=.23, *n.s.*

（*M*=2.86, *SD*=2.04）, 社会活動障害 : *r*=.34, *n.s.*（*M*=1.14, *SD*=1.76）, 抑うつ : *r*=.17, *n.s.*（*M*=.71, *SD*=1.77）でいずれも有意ではなかった.

以上のことから，自身の夫婦関係に対する評価は夫妻で類似するが，心理的 well-being および GHQ28 は夫妻で類似しないことが示された．心理的 well-being と GHQ28 の記述統計量は，先行研究（西田, 2000；中川・大坊, 1985）とほぼ同様の結果であった.

ペアワイズ相関分析では，相関関係を調べたい 2 つの変数それぞれのペアワイズ級内相関がともに正で有意である場合にのみ，二者関係レベルの相関係数の算出と解釈に意味がある（Griffin & Gonzalez, 1995）．本研究においては，全ての精神的健康の指標においてペアワイズ級内相関が有意でなかったため，二者関係レベルの相関係数の算出と解釈には慎重にならなければならない．そこで，包括的相関（ピアソンの積率相関係数）およびペアワイズクロス級内相関を算出した．それぞれの結果を Table 8-5 から Table8-8 に示す.

Table 8-5. PMI と心理的 well-being の包括的相関係数（ピアソンの積率相関係数, N=42）

	人格的成長	人生の目的	自律性	自己受容	環境制御	他者関係
思いやり	.33*	.38*	.31+	.25	.18	.31*
自然で自由	.32*	.29+	.34*	.23	.25	.25+
一緒に過ごす	.32*	.32*	.28+	.26	.15	.23
精神的距離と不信	.19	.44**	.41*	.21	.17	.36*
非難と攻撃	.03	.13	.11	.13	.07	.06

注.**p<.01, *p<.05, +p<.10

Table 8-6. PMI と心理的 well-being の相関分析の結果（ペアワイズクロス級内相関係数, N=42）

	人格的成長	人生の目的	自律性	自己受容	環境制御	他者関係
思いやり	.06	.12	.37*	.36*	.23	.10
自然で自由	.06	.15	.34*	.23	.17	.05
一緒に過ごす	.04	.15	.35*	.24	.05	.04
精神的距離と不信	−.07	.01	.27	.28+	.07	−.08
非難と攻撃	−.14	−.07	.18	.14	.06	−.10

注. *p<.05, +p<.10,

Table 8-7. PMI と GHQ の包括的相関係数（ピアソンの積率相関係数, N=42）

	身体的症状	不安と不眠	社会活動障害	うつ傾向
思いやり	−.11	−.18	−.13	−.16
自然で自由	−.27	−.22	−.17	**−.29**$^{+}$
一緒に過ごす	−.04	−.04	−.10	.02
精神的距離と不信	−.11	−.22	−.14	−.25
非難と攻撃	−.13	−.16	.01	−.11

注. $^{+}$p<.10,

Table8-8. PMI と GHQ の相関分析の結果（ペアワイズクロス級内相関係数, N=42）

	身体的症状	不安と不眠	社会活動障害	うつ傾向
思いやり	−.01	−.09	−.15	−.20
自然で自由	−.24	−.16	−.24	−.21
一緒に過ごす	−.09	−.09	−.06	.03
精神的距離と不信	−.06	−.20	−.07	−.19
非難と攻撃	−.19	−.20	−.01	−.14

PMI と精神的健康の関連について相関分析の結果を検討する．心理的 well-being では，「人格的成長」「人生の目的」「自律性」「他者関係」の各因子と PMI との間には正の相関関係が認められた一方で，「自己受容」「環境制御」については相関関係が認められなかった．また，「配偶者への非難と攻撃」因子では，心理的 well-being との間に相関関係が認められなかった．これらの結果から,PMI を有することが一部の心理的 well-being と関連することが示された．一方，ペアワイズクロス級内相関の結果からは，配偶者の PMI が個人の「自律性」「自己受容」と関連することが示唆された．これらの結果から，PMI は個人および配偶者の「自律性」に関連することが示された．

対照的に，包括的相関係数およびペアワイズクロス級内相関係数から，GHQ は PMI との相関関係がほとんど見られなかった．自身の夫婦関係に対する認知は，自身の GHQ28 および配偶者の GHQ28 と関連しないものと考えられる．

４．考察

A. PMI と精神的健康の関連

PMI と精神的健康の関連について，PMI と「自己受容」「環境制御力」を除く心理的 well-being との間に相関関係が認められた一方で，PMI と GHQ28 との間には相関関係が認められなかった．また，配偶者の PMI が，個人の「自律性」「自己受容」と関連することが示された．

PMI についてはさらに，AAEMC 尺度と心理的 well-being の一部の尺度との間に相関関係が見られた一方で，BAEMC 尺度の「配偶者への非難と攻撃」は包括的相関とペアワイズクロス相関のいずれにおいても心理的 well-being との相関関係が認められなかった．このことから，AAEMC 下位尺度および BAEMC 下位尺度は相互に強い相関関係にあって共通点が多い一方で，精神的健康との関連においては一部異なる機能を果たす部分があると考えられる．つまり，平均的な夫婦に比べ自身の夫婦関係が「肯定的な性質を有すること」と「否定的な性質を有しないこと」は，いずれも PMI として理解することが出来るが，精神的健康との関連においてはその意味は異なる．

B. ペアワイズ相関分析の結果

夫妻の類似の程度を意味するペアワイズ級内相関を検討する．AAEMC 尺度と BAEMC 尺度においては，有意な級内相関係数が得られた．このことから，自身の夫婦関係についての認知は，夫妻で類似することが示された．「夫婦関係」は夫妻間で共有される間主観的な概念であることとこの結果は一貫性が認められる．

一方，心理的 well-being と GHQ28 においては，有意な級内相関は得られなかった．これらの精神的健康の指標は，二者関係レベルの情報をほとんど有していないと考えられる．このことから，夫妻の一方の精神的健康の状態は，配偶者の精神的健康の状態とは関連しないことが示唆された．心理的 well-being と GHQ28 は，精神的健康に関する個人的な変数であると考えられる．

PMI と「自己受容」「環境制御力」を除いた心理的 well-being の包括的相関係数からは，PMI が心理的 well-being と関連することが示された．夫婦関係の質が「人格的成長」や「人生における目的」といった実存的な内容に関連すると考えられる．また，温かく信頼できる他者関係を築いていることを意味する「積極的な他者関係」は，「思いやりのある関係」「精神的距離と不信」といった側面における PMI との関連が見られた．中年期において，様々な対人関係の中で，特に夫婦関係が個人の心理的 well-being に重要な役割を果たしているものと考えられる．

一方で，自己に対する積極的な感覚を意味する「自己受容」は，自己の多側面を認めて受け入れているということを意味するため，夫婦関係の質以外から規定される部分が大きいものと考えられる．また，「環境制御力」は自身の能力に対する信頼を問う内容から構成されていることから，夫婦関係の質は直接的に関与しないため，有意な相関係数が得られなかったものと考えられる．

Ryff（1989）は従来の well-being の概念が充分に理論的背景を備えていないことを指摘し，理論に導かれたポジティヴな心理的機能として心理的 well-being の概念を提唱した．また，心理的 well-being を構成する 6 次元のうち,「自己受容」および「環境制御力」のみ，well-being 概念の指標として用いられてきた「人生満足度」や「自尊心」などの変数との強い関連が認められたことを示した．つまり,「自己受容」と「環境制御力」を除いた心理的 well-being の 4 次元は，従来の well-being 概念では充分にとらえることが出来なかったポジティヴな心理的機能の側面を表すものと言える. 本研究の結果は, PMI と「自己受容」および「環境制御力」を除いた心理的 well-being との間の相関関係を示した．このことから，平均的な夫婦関係に比べて自身の夫婦関係を肯定的にとらえることは，従来の well-being 概念では充分に理解されてこなかったポジティヴな心理的機能と関連することが示された.

ペアワイズクロス級内相関係数からは，心理的 well-being の下位尺度「自律性」「自己受容」を除き，個人の PMI は配偶者の精神的健康と関連しないことが示された．あくまで個人自身が PMI を有することが「人格的成長」や「人生の目的」といった実存的な内容と関連するのであり，配偶者の PMI は関連しないものと考えられる．その中で，配偶者が夫婦関係の肯定的な側面において PMI を有することが自身の「自律性」と関連する点，配偶者が自身の夫婦を「思いやりのある関係」だととらえていることが自身の「自己受容」と関連する点は興味深い．自身の夫婦関係を肯定的に認知している配偶者との日常生活上の関わりが，個として自律した自身を認識し，自分自身を受け入れることへとつながっているものと考えられる.

GHQ28 については，PMI との間に関連が認められなかった．一方，先行研究（例．小田切ら, 2003）からは，夫婦関係と夫妻の抑うつの関連が示されている．平均的な夫婦と比較して自身の夫婦を肯定的に認知する傾向がみられるような夫婦関係認知の側面ではなく，総花的な夫婦関係の評価，あるいは肯定的なイリュージョンが生起しないような夫婦関係認知の側面が抑うつと関連する可能性が考えられる．また,「身体的症状」「不安と不眠」「社会活動障害」は，内容的に夫婦関係認知が直接的には関連しないため，PMI との関連が見られなかったものと考えられる.

C. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題として 3 点挙げられる．1 点目は PMI の評価方法である．本研究で収集したペア・データは自己報告によるものであり，実際の夫婦関係の様相につい

ては問われていない．研究者が夫婦関係を観察・評定するというような方法を組み合わせることで，夫婦関係認知と実際の夫婦関係の様相を対応させた理解が可能となる．

2 点目，本研究は中年期夫婦を対象としているため，婚姻関係期間が長く，夫婦関係認知はある程度の安定性を有していると考えられる．これは，夫婦間の相互作用が夫婦関係認知に影響を及ぼし，夫婦関係認知が夫婦間の相互作用に影響を及ぼすという循環的な過程を経た結果であると想定される．そこで今後の課題として，夫婦関係における日常的な相互作用について検討するとともに，夫婦関係認知と夫婦間の相互作用の関連について調べる必要がある．

3 点目，本研究はサンプル数が少ないことから，PMI 尺度の構成に課題が残された．今後，大規模サンプルを対象とした検討が必要である．

第 9 章　PMI に項目の獲得容易・困難性が及ぼす影響

第 8 章では，PMI を有することが適応につながることが示された．ただし，本論文において PI の指標として用いている「平均点以上効果」を生起させる要因の一つとして，評定項目の容易さ及び困難さが指摘されている（e.g., Kruger, 1999;　工藤, 2004）ため，その影響の程度を明らかにしておく必要があるだろう．

そこで本章では，PMI 尺度における評定項目の獲得容易・困難性が PMI の生起に与える影響について検討する．ただし，PMI の生起は評定項目の獲得容易・困難性に全て依存するわけではない点に留意されたい．

１．問題と目的

評定項目の獲得容易・困難性とは,「その項目の能力や特性を獲得するのはどの程度困難であるか」ということを意味する．例えば,「マウスを使う」「車の運転」などは容易な事柄であり，これらの能力に関する自身の能力を平均的な他者と比較するように求めると平均点以上効果がみられた一方で,「チェス」や「コンピューターのプログラミング」といった困難な事柄については平均点以下効果が見られた(Kruger, 1999). さらに，工藤(2004)は，評定対象を能力ではなく特性とし，また肯定的な側面だけでなく否定的な側面についても取り上げて，同様の結果が見られることを確認した．これらの研究は，能力や性格特性などの自己評定における平均点以上効果を検討したものであった．

それでは，平均点以上効果に対する評定項目の獲得容易・困難性の影響は，どの程度ロバストな効果なのだろうか．Klar & Giladi(1997)は，自身が所属している集団のうち，見知らぬ他者 1 名について集団の平均と比較させても平均点以上効果が生じることを示し，平均点以上効果が平均との比較対象となる人物が自分以外の者である場合にも生じる現象だということを示した．また，外山(2002)は恋愛関係にある大学生を対象に調査研究を行い，恋人認知，恋愛関係認知において平均点以上効果が生起することを示した．さらに，Endo, Heine, & Lehman(2000)は，日本人，アジア系カナダ人，ヨーロッパ系カナダ人の夫婦を対象に調査を行い，それぞれの文化圏を超えて，同程度の強さで夫婦関係認知における平均点以上効果がみられることを示した．このように，自己に対する評定のみならず，他者に対する評定においても，他者との関係に対する評定においても，平均点以上効果がみられることは先行研究によって示されている．しかし，これらの他者評定や関係評定における平均点以上効果に対し，評定項目の獲得容易・困難性がどのように影響を及ぼしているのかについては，これまで明らかにされていない．

Kruger(1999)は，容易な事柄の評定においては，他者にとってもそれが容易であるということを考慮出来ないために平均点以上効果が生起すると指摘している．また工藤(2004)は同様の指摘に加え，人々の「平均」に対する知識が乏しい可能性を指摘している．これらをまとめると，ある特性や能力などの評定の際に，「平均」を正確に考慮出来ないことによって平均点以上効果が生起していると言える.「関係」のように間主観的な概念の特性に対する評定においては，個人の平均に対する知識が必要であることに加えて，その関係を構成する個人の間の相互作用も考慮される必要があるために，個人の能力や特性を対象とした評定の際に「平均」を想定することと比して，関係の特性を対象とした評定の際に「平均」を正確に考慮することは，同等もしくはそれ以上に困難となると考えられる．これらのことから，関係認知においても，評定項目における平均点以上効果に評定項目の獲得容易・困難性が影響を及ぼしていると予測される.

以上をふまえ,平均点以上効果の生起における評定項目の獲得容易･困難性の効果が(1)関係認知においても，(2) 評定項目の感情価が肯定的な場合だけでなく否定的な場合においても認められるかどうかを検討することを目的とする.

２．方法

A. 調査協力者と質問紙の構成

本研究は，工藤(2004)の研究枠組みに倣い，平均点以上効果と評定項目の獲得容易・困難性の関連を検討した．まず，中年期の夫婦を対象に 80 組 160 名に質問紙を配布した．質問紙の配布方法は次の 2 つの方法を組み合わせた．1 つ目は，訪問留置郵送回収法を用いて，7 組の夫婦に質問紙への回答を求めた．2 つ目は，調査者の知人を介して，73 組の夫婦に質問紙を配布し，郵送での返送を求めた．質問紙には返信用封筒と説明書を同梱し，回答例を示した他，夫婦で相談せずに回答することなどを教示した.

第 5 章で行った予備調査から作成された 88 項目について,自身の夫婦関係がどの程度当てはまるかを尋ね，回答を求めた．教示は，予備調査で作成した夫婦関係認知項目それぞれに対して「あなたが思われる平均的な夫婦関係に比べて，あなた自身の夫婦関係にどの程度当てはまりますか？」と行い，「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」までの 5 件法で評定を求めた（以降，関係認知得点とする）．理論的中央値である 3 は，「どちらともいえない」とした．さらに，同じ 88 項目について，自身の夫婦関係がその特性を獲得することはどの程度難しいかということについて尋ね，回答を求めた．教示は，肯定的な項目については「あなた自身の夫婦関係に関して，そうである事がどの程度容易か困難である

かをお答え下さい」と行った．困難であるかをお答え下さい」と行った．否定的な項目については,「あなた自身の夫婦関係に関して，そうでは無い事がどの程度容易か困難であるかをお答え下さい」と行った．回答については，「1.非常に容易」から「7.非常に困難」までの 7 件法で評定を求めた(以降，獲得容易・困難性得点とする).

B．分析方法

以上の手続きから，88 項目を対象に，関係認知得点と獲得困難性得点について相関分析を行った．なお，分析には統計処理ソフトウェア R ver.2. 15. 0.を用いた.

各項目について，関係認知得点および獲得困難性得点の記述統計量を算出した．それぞれについて，以下の Table9-1～Table9-4 に示す．まずそれぞれの項目について項目得点の 99.9%信頼区間を算出し，99.9%信頼区間に理論的平均値（3 点）が含まれた 24 項目を以降の分析から除外した.

続いて，平均点以上効果の生起を確認するために，残りの項目について，肯定語 43 項目と否定語 21 項目に分けて分析を行った.

３．結果

A．データの処理

46 組 92 名より回答を得た．回収率は 57.5%であった．有効回答は 84 名(52.5%)で，欠損値は平均値補完法を用いて補完した.

B．相関分析

肯定項目については，関係認知得点の平均値は 3.83（SD = 0.19），獲得困難性得点の平均値は 2.74（SD = 0.22）だった．否定項目については，関係認知得点の平均値は 1.79（SD = 0.36），獲得困難性得点の平均値は 3.59（SD = 0.19）だった．項目全体では，関係認知得点の平均値は 3.16（SD = 1.00），獲得困難性得点の平均値は 3.02（SD = 0.45）であった．続いて，関係認知得点と評定項目の獲得困難性得点の相関を検討した．肯定項目については，r = -.86（n =43, p<.01; 95% CIs [-.92, -.75]）と，有意で極めて高い相関係数が得られた．これは，ある評定項目について，その特性を獲得することが困難である程，自身の夫婦に当てはまらないということを意味する．一方，否定項目については，r = .73（n =21, p<.01; 95% CIs [.44, .89]）と，有意で極めて高い相関係数が得られた．これは，ある評定項目について，その特性を排除することが困難である程，自身の夫婦に当てはまるということを意味する.

Table 9-1　平均点以上効果の見られた関係認知項目（肯定語）の記述統計（n = 84）

	M	99.9% *CI*			*M*	99.9% *CI*	
		下限	上限			下限	上限
成熟している	3.42	3.03	3.81	言葉でのやり取りがある	3.86	3.39	4.34
歩み寄っている	3.51	3.05	3.98	喜びがある	3.89	3.43	4.35
目的を共有している	3.53	3.06	3.99	感謝しあっている	3.89	3.47	4.31
結束がある	3.54	3.02	4.06	真心がある	3.92	3.47	4.37
価値観を共有している	3.57	3.08	4.05	愛がある	3.93	3.45	4.41
気づかいあっている	3.57	3.12	4.01	対等である	3.93	3.49	4.37
一緒に過ごす時間を持っている	3.58	3.03	4.13	明るい	3.93	3.49	4.38
尊敬しあっている	3.58	3.10	4.06	仲が好い	3.93	3.46	4.40
悩みを相談できる	3.59	3.11	4.08	良好である	3.93	3.45	4.42
頼りあっている	3.59	3.13	4.06	重要である	3.93	3.49	4.37
自立しあっている	3.61	3.18	4.04	一生続けていたい	3.93	3.42	4.45
理解しあっている	3.62	3.13	4.11	安定している	3.95	3.51	4.38
一緒に過ごしている	3.70	3.16	4.25	支えあっている	3.95	3.49	4.40
尊重しあっている	3.73	3.23	4.22	穏やかである	4.00	3.54	4.46
許容しあっている	3.74	3.33	4.16	幸せである	4.00	3.53	4.47
思いやりがある	3.80	3.30	4.29	円満である	4.00	3.53	4.47
会話がある	3.80	3.26	4.34	優しさがある	4.03	3.60	4.45
愚痴を言える	3.81	3.29	4.33	自然体である	4.12	3.75	4.49
育んできたものである	3.81	3.36	4.26	大切である	4.12	3.66	4.58
信頼しあっている	3.82	3.34	4.31	自由である	4.14	3.80	4.47
きずながある	3.85	3.36	4.34	責任感がある	4.16	3.83	4.50
笑顔がある	3.86	3.38	4.35				

Table 9-2　平均点以下効果が見られた関係認知項目（否定語）の記述統計（n = 84）

	M	99.9% *CI*			*M*	99.9% *CI*	
		下限	上限			下限	上限
暴力がある	1.23	0.91	1.55	悪口を言い合っている	1.84	1.37	2.30
異性問題がある	1.35	0.98	1.72	過干渉である	1.84	1.44	2.24
ねたみあっている	1.45	1.12	1.78	意地悪である	1.86	1.39	2.34
憎みあっている	1.46	1.07	1.85	不信感がある	2.00	1.53	2.47
束縛しあっている	1.47	1.18	1.76	浪費がある	2.08	1.55	2.61
ののしり合っている	1.53	1.12	1.93	相手に無関心である	2.11	1.64	2.58
無責任である	1.61	1.21	2.00	不協和音がある	2.19	1.69	2.69
金銭問題がある	1.65	1.22	2.08	惰性である	2.24	1.80	2.68
無視しあっている	1.66	1.18	2.14	精神的な距離がある	2.45	1.90	2.99
傷つけあっている	1.82	1.41	2.24	多くを求め合っている	2.53	2.15	2.90
けなしあっている	1.82	1.36	2.29				

Table 9-3 平均点以上効果・以下効果の見られなかった関係認知項目の記述統計（n=84）

	M	95%CI			*M*	95%CI	
		下限	上限			下限	上限
面倒である	2.47	1.94	3.01	行動を共にしている	3.14	2.58	3.69
不満である	2.50	1.96	3.04	忍耐しあっている	3.14	2.70	3.57
喧嘩がある	2.50	1.95	3.05	謙虚である	3.19	2.72	3.66
邪魔にならないようにしている	2.54	2.06	3.02	高めあっている	3.23	2.82	3.64
性行為がある	2.64	2.03	3.24	似たもの同士である	3.32	2.80	3.85
趣味が同じである	2.65	2.10	3.19	生きがいである	3.39	2.85	3.93
同情がある	2.65	2.15	3.14	同調しあっている	3.41	2.95	3.86
妥協しあっている	2.69	2.18	3.20	努力しあっている	3.41	2.98	3.83
性格が一致している	2.69	2.22	3.16	寝室を共にしている	3.43	2.71	4.16
我慢しあっている	2.70	2.18	3.23	友達のようである	3.45	2.94	3.95
欠点を指摘しあっている	2.77	2.33	3.21	永遠である	3.50	2.96	4.04
すれ違いがある	2.81	2.31	3.31	たのしみを共有している	3.53	2.99	4.06

Table 9-4 関係認知項目の獲得容易・困難性得点の記述統計

	M	*SD*		*M*	*SD*
責任感がある	2.40	1.25	結束がある	3.11	1.58
安定している	2.42	1.22	努力しあっている	3.13	1.28
自由である	2.42	1.23	価値観を共有している	3.15	1.56
自然体である	2.42	1.43	歩み寄っている	3.18	1.43
一緒に過ごしている	2.43	1.40	行動を共にしている	3.18	1.63
幸せである	2.49	1.47	寝室を共にしている	3.19	2.29
穏やかである	2.50	1.33	友達のようである	3.20	1.53
大切である	2.56	1.62	暴力がある	3.21	2.64
喜びがある	2.57	1.35	目的を共有している	3.21	1.45
笑顔がある	2.58	1.55	浪費がある	3.35	2.13
支えあっている	2.59	1.30	似たもの同士である	3.37	1.46
優しさがある	2.61	1.45	高めあっている	3.37	1.48
円満である	2.62	1.69	ねたみあっている	3.37	2.31
明るい	2.63	1.58	邪魔にならないようにしている	3.38	1.34
重要である	2.63	1.64	異性問題がある	3.40	2.50
対等である	2.64	1.45	けなしあっている	3.43	2.20
真心がある	2.67	1.48	憎みあっている	3.46	2.36
感謝しあっている	2.67	1.57	無視しあっている	3.48	2.31
許容しあっている	2.68	1.19	悪口を言い合っている	3.49	2.10
会話がある	2.68	1.63	ののしり合っている	3.53	2.27
尊重しあっている	2.70	1.45	束縛しあっている	3.54	2.07
信頼しあっている	2.71	1.47	意地悪である	3.58	1.99
思いやりがある	2.71	1.49	過干渉である	3.58	2.05
仲が好い	2.71	1.65	傷つけあっている	3.61	2.09
良好である	2.71	1.70	金銭問題がある	3.67	2.22
理解しあっている	2.73	1.51	我慢しあっている	3.68	1.84
きずながある	2.76	1.52	すれ違いがある	3.69	1.88
言葉でのやり取りがある	2.77	1.61	面倒である	3.70	1.96
自立しあっている	2.77	1.37	同情がある	3.70	1.80
一生続けていたい	2.77	1.62	忍耐しあっている	3.73	1.76
愛がある	2.82	1.74	不満である	3.75	1.80
愚痴を言える	2.87	1.53	不協和音がある	3.75	1.90
育んできたものである	2.89	1.37	不信感がある	3.76	2.05
頼りあっている	2.92	1.49	惰性である	3.77	1.86
気づかいあっている	3.00	1.46	喧嘩がある	3.77	2.20
成熟している	3.01	1.42	無責任である	3.80	2.20
たのしみを共有している	3.01	1.59	多くを求め合っている	3.81	1.82
永遠である	3.01	1.65	相手に無関心である	3.84	1.85
悩みを相談できる	3.01	1.65	妥協しあっている	3.84	1.73
尊敬しあっている	3.02	1.61	精神的な距離がある	3.93	1.92
謙虚である	3.07	1.32	欠点を指摘しあっている	4.05	1.94
同調しあっている	3.07	1.47	性格が一致している	4.06	1.64
一緒に過ごす時間を持っている	3.08	1.77	趣味が同じである	4.29	1.65
生きがいである	3.10	1.53	性行為がある	4.66	1.96

4．考察

本研究は，中年期における夫婦関係認知に焦点を当てて，平均点以上効果に評定項目の獲得容易・困難性が及ぼす影響について検討を行った．

まず，夫婦関係認知項目を収集し，どのような観点から夫婦関係が認知されているのかを明らかにした．さらに，それらの特性を自身の夫婦関係が獲得するのはどの程度困難あ

るいは容易なのかが示された．夫婦関係認知がどのような認知次元から成るのかを示した研究はこれまでに見当たらず，重要な知見であると考えられる．

夫婦関係認知の項目の多くについては，肯定的な内容については平均点以上効果が，否定的な内容については平均点以下効果がそれぞれ認められた．また，肯定的な内容における平均点以下効果，否定的な内容における平均点以上効果は認められなかった．これらのことから，人々は自身の夫婦関係を好ましく捉える傾向があることが示唆された．

次に，評定項目の獲得容易・困難性について，先行研究の知見から自己認知においては肯定困難語，肯定容易語，否定困難語，否定容易語の 4 種類の特性語の存在が示されている(e.g.,工藤, 2004)．しかし，本研究で扱った夫婦関係認知においては，肯定困難語および否定困難語(獲得困難性得点の理論的平均値が 4 を上回る項目)は 88 項目中わずか 4 項目であった．つまり，多くの夫婦は自身の夫婦関係の特性について，一部を除き，肯定的な内容の特性を獲得すること及び否定的な内容の特性を排除することは容易だと感じる傾向が示された．今後，それぞれの項目について獲得容易・困難性得点がどのような意味を有するのかについて検討することが望まれる．例えば,「趣味が同じである」という項目は獲得容易・困難性得点が理論的平均値の 4 を上回っており，夫婦で一致した趣味を有することが困難であると解釈出来るが，夫婦で趣味が異なることが必ずしも夫婦関係に悪影響を及ぼしているとは限らないと考えられる．

夫婦関係認知における平均点以上効果と評定項目の獲得容易・困難性の関連について，自己の能力や特性の認知だけでなく，関係認知においても評定項目が獲得容易である程，平均点以上効果が増大する傾向が示された．さらに，平均点以上効果に対する獲得容易・困難性の効果は，肯定項目と否定項目のいずれにも認められた．これらの結果は Kruger(1999)や工藤(2004)の結果との一貫性が認められ，平均点以上効果を生じさせる獲得容易・困難性の効果はロバストなものであることが示された．

ただし，平均点以上効果に評定項目の獲得容易・困難性が影響を及ぼすことが示されたことは，ポジティブ・イリュージョンの指標として平均点以上効果を用いること自体を否定するものではない点に留意されたい．

本研究の限界として，質問紙の回収率の低さが挙げられる．本研究の回収率は 57.5%であり，充分に高いとは言えず，サンプルが偏っている可能性がある．夫婦関係が良好な場合に回答率が高まっているとすれば，評定項目の獲得容易・困難性得点に偏りが生じている可能性は否定出来ない．しかし，本研究においては，全ての獲得容易・困難性項目の標

準偏差を参照し,項目得点において充分な得点の散らばりが得られたと判断した.最後に,平均点以上効果と評定項目の獲得容易・困難性は，円環的因果律の関係にあると考えられる．つまり，夫婦関係のある性質に関して，自身の夫婦関係に当てはまらないためにその性質を獲得するのは困難だと評しているのか，その性質を獲得するのが困難だから自身の夫婦関係にも当てはまらないと評しているのかについては不明である．しかし，臨床的な介入によって評定項目の獲得容易・困難性が変化すれば，それに伴って関係認知も変動すると考えられる．そこで今後の課題として，効果的な臨床的介入の方法について手がかりを得るために，評定項目の獲得容易・困難性が形成されるプロセスを明らかにすることが期待される.

５．まとめ

第Ⅲ部では，PMI と適応の関連について検討を行った．まず，夫婦関係認知尺度を構成し，夫婦関係がどのような観点から認知されているかを明らかにした．続いて，中年期夫婦においてPMIが生起することを確認し,PMIの生起する認知領域を特定した.その結果,PMI が生起する認知領域は，否定項目においては夫婦関係認知と殆ど重複する一方，肯定項目では夫婦関係認知の一部に限局されることが示された．さらに，PMI は特定の精神的健康と関連することが横断的・短期縦断的に示された．最後に，PMI の生起には，夫婦関係認知における評定項目の獲得容易･困難性が大きく影響を及ぼしていることが示された.

夫婦関係を主観的な観点から評定した場合，個人が自身の夫婦関係を良いものと考えることが適応につながることが示された.

第Ⅲ部　会話分析による夫婦間葛藤の質的検討

はじめに

第Ⅰ部において，夫婦関係の質を検討する際に，夫婦間の情緒的サポートが重要であることが示された．第 4 章の知見からは,「配偶者が自身の悩みを聞いてくれると個人が捉えていること」が重要であると見出された．それでは，中年期夫婦はどのようなコミュニケーションを行っているのだろうか.

第Ⅳ部では，会話分析の手法を用いて，夫婦間葛藤の会話分析を行い，夫婦間相互作用と適応の関連を探索的に検討する．まず，第 10 章において，健常群夫婦の夫婦間葛藤におけるコミュニケーション・パターンについて検討する．続いて，第 11 章において，臨床群夫婦の夫婦間葛藤の会話分析を行い，臨床群夫婦の夫婦間葛藤におけるコミュニケーション・パターンについて検討する．併せて，健常群夫婦との相違について探索的に検討する．

第Ⅲ部では，個人が自身の夫婦関係を評定するという観点から，夫婦関係と適応の関連について検討した．これに対し，第Ⅳ部は，夫婦関係を他者である研究者が評定するという観点から，夫婦関係と適応の関連について検討を行うものと位置付けられる．

第 10 章　中年期の健常群における夫婦間葛藤の会話分析

これまで，PMI と適応の関連について様々な検討を行ってきた．これは，夫婦関係を当事者自身が評価した上で，それがどのように適応につながるかを検討したものである．これに対して，本章では，第 3 者である研究者が夫婦関係を評価し，適応との関係について検討を行う．第 3 者の立場から夫婦関係を評価する方法は様々あるが，本論文では夫婦間の相互作用に着目し，会話分析の手法を用いて夫婦間葛藤におけるコミュニケーション・パターンを詳細に検討する．

１．問題と目的

第 1 章で詳述されたように，「関係」の概念の中核を成すのは相互作用であると考えられている．重要な夫婦間の相互作用の一つに，コミュニケーションが挙げられる．例えば，夫婦関係に焦点を当てた海外における先行研究からは，コミュニケーション・パターンと夫婦関係満足度の関連が示されている（e.g., Woodin, 2011; Heyman, 2001; Gottman & Levenson, 2000）．夫婦間のコミュニケーションと夫婦関係満足度の関連（e.g., Woodin, 2011; Gottman & Levenson, 2000; 伊藤・相良・池田, 2007）が数多く示されるなど，中年期夫婦研究においてコミュニケーションは重要な研究テーマの一つである．関係の破綻につながる（e.g., Vannoy, 1996）など，夫婦関係の質に大きく影響を及ぼすことから，これまで研究者の関心はとりわけ破壊的なコミュニケーションに集められてきた．

このように，夫婦関係に焦点を当てる上でコミュニケーションは重要な変数であるが，先行研究は海外における知見が多い．柏木・平山（2003）が「日本では，夫婦間コミュニケーションの不足・不全の問題が経験的・評論的に指摘されることは多いが，夫婦間コミュニケーションの内実に焦点を当てた実証的研究の蓄積は少ない」と指摘するように，コミュニケーションに焦点を当てた国内の先行研究は充分に蓄積されているとは言えない状況にある．

西洋圏における先行研究から見出されてきた，国や研究手法を問わず認められるロバストな知見は次の通りである：夫婦関係に悩む者はそうでない者に比べて，(a) パートナーに対して敵対的になること，(b) 敵対的に会話を始め，それを維持すること，(c) パートナーの敵意に応じる，あるいは助長すること，(d) 葛藤中の自身の行動を調整出来ず，相互にネガティブな循環を長く続けること，(e) ポジティブな行動が少ないこと，(f) 夫婦間葛藤による健康上の問題に悩まされていること，(g) 要求/撤退（demand/withdrawal）パターンを示しがちであること（Heyman, 2001）．

A．夫婦間葛藤の評価

夫婦のコミュニケーションは様々あり，特に臨床的には，葛藤場面における夫婦間相互作用が重要だと考えられる．例えば，破壊的なコミュニケーションは，建設的なコミュニケ―ションの不足と同様に，それが生起している間の関係におけるディストレス（e.g., Weiss & Heyman, 1997），また縦断的な関係の悩み（e.g., Karney & Bradbudy, 1995）と関連することが示されている．したがって，葛藤場面において夫婦はどのような相互作用を行うのか, またそれはどのような結果につながるのかという点が重要な研究のテーマとなる．

海外において夫婦間葛藤は，様々な枠組みを用いて検討されている．Woodin（2011）は，感情的行動の価（negative-to-positive Valence）とその行動が示される強度（Intensity）の 2 軸からなるメタ・コーディング・システムを用いてメタ分析を行った．ここでは，夫婦間葛藤に関して敵対（Hostility），苦悩（Distress），撤退（Withdrawal），親密さ（Intimacy），問題解決（Problem-solving）の 5 パターンが直交する 2 次元上に布置される．夫婦間葛藤の間，女性は敵対，苦悩，親密さを示しやすいのに対し，男性は撤退および問題解決を示しやすいことが見出された．

研究者が評定する夫婦間葛藤としては，次のような先行研究がある．Overall, Fletcher, Simpson, & Sibley（2009）は，夫婦を含む親密なカップル 61 組を対象としコミュニケーション戦略を検討し, 価（肯定/否定）と直接性（直接/間接）の 2 軸から成る, 威圧（coercion），独裁（Autocracy）, 操作（Manipulation）, 哀願（Supplication）, 合理的推論（Retional Reasoning），柔和な肯定（Soft Positive）の 6 つのコミュニケ―ション戦略を見出した．その結果，直接的な戦略は相対的に見て，即時的にはあまり効果が認められなかったものの，12 ヶ月後の変容を予測した．一方で，肯定的・間接的な戦略は即時的な効果が認められるものの，後の変化は予測しなかった．

Lee, Nakamura, Chung, Chun, Fu, Liang, & Liu（2013）は，Gottman’s Specific Affect Coding System（SPAFF; Gottman, Coan, & McCoy, 1996）および Christensen’s Couple Interactive Rating System Codes（Sevier, Simpson, & Christensen, 2004）を基に，夫婦間葛藤のプロセスをコード化し，比較検討することで，アジア 5 か国間の夫婦間葛藤の差異を明らかにした．後者には, 要求―撤退（Demand-Withdraw; Heavey, Layne, & Christensen, 1993; Sevier, et al., 2004），相互敵対（Mutual Hostility; Gottman, et al., 1996），相互撤退（Mutual Withdrawal; Christensen & Heavey, 1990），協力（Collaboration; Christensen & Pasch, 1993）が含まれる．

B. 国外における夫婦関係のコミュニケーション

Gottman & Silver（1999）は，夫婦間に問題が生じる場合の最善の解決方法として，相互の意思疎通（コミュニケーション）を図り，夫婦間のぎくしゃくした感じを解くことを挙げている．加えて，専門家はコミュニケーションを図るためにアクティブ・リスニングのスキルを心理教育するが, 功を奏さないことを示している. 代わりに Gottman & Silver（1999）が推奨しているのは，夫婦がリペア・アテンプト（repair attempt：修復努力）を行うことである．リペア・アテンプトは，憎悪感情が手に負えなくなるほど高揚するのを防ぐ技術である. 夫婦間葛藤が激化し, 手の施しようがなくなる前に, 収拾することが重要である．ただし，リペア・アテンプトはそれぞれの夫婦固有のものであるため，リペア・アテンプトの具体的な言動についてはほとんど言及されていない．言語を用いたコミュニケーションのみならず，非言語コミュニケーションも含め，夫婦間葛藤の管理のために行われる言動は全てリペア・アテンプトに含まれる．一方，不適応的なコミュニケーションに関しては，Gottman & Silver（1999）は「4 つの危険要因」と呼び，夫婦関係を脅かす深刻度の高い順に，非難，侮辱，自己弁護，逃避の 4 種類を挙げている．

Gottman & Silver（1999）の知見は示唆に富むが，Lee, et al.（2013）が示しているように，欧米圏とアジア圏の夫婦ではコミュニケーションのスタイルが大きく異なること，とりわけ日本人夫婦は「まるで葛藤をしていないかのように」夫婦間葛藤をすることなど，日本人夫婦のコミュニケーションは特殊であり，欧米圏の知見をそのまま我が国の夫婦間コミュニケーションに当てはめることは出来ない．

C. 国内における夫婦間コミュニケーション

コミュニケーションの内実に焦点を当てた, 数少ない国内の研究として, 平山･柏木（2001）がある．平山・柏木は，中年期夫婦を対象に，夫婦間のコミュニケーション様態を明らかにし，ポジティブな態度として「共感」「依存・接近」，ネガティブな態度として「無視・回避」「威圧」の 4 因子を抽出した．この研究は，上述の「コミュニケーションの内実」に迫るものであり，重要な研究と言える．しかし，この研究で取り上げられているのは「個人が自身の夫婦関係におけるコミュニケーションをどのように捉えているか」であり，実際に夫婦間にどのような相互作用が生起しているのかという点に迫ることが出来ていないという限界が指摘出来る．したがって，実際の夫婦間コミュニケーションを研究者などの第三者が評価するというアプローチが必要である．

また，夫婦間のコミュニケーションを扱った先行研究は統計的手法を持ちいた研究が多

く（e.g., 伊藤・相良・池田, 2007; 平山・柏木, 2004），その内実を詳細に検討したものは見当たらない．海外には夫婦間のコミュニケ―ションを詳細に検討したものが見られるが，Lee, et al.,（2013）が示しているように，日本人夫婦のコミュニケーション・パターンは特殊であり，海外の知見を日本人夫婦に当てはめることは出来ない．

D．会話分析を用いたコミュニケーション・パターンの検討

夫妻間のコミュニケーションを含む相互作用に焦点を当てた研究は，トップ・ダウンのアプローチを採用したものが殆どであった（e.g., woodin, 2011）．このアプローチは，病理的なコミュニケーションをア・プリオリに設定し，その枠に当てはめたコミュニケーションの理解を試みるものである．このような研究は重要であるが，一方で，夫妻が葛藤している際に何が起こっているのかを細やかに検討するためには，観察データに根差したボトム・アップのアプローチによる知見が必要であろう．加えて，トップ・ダウンのアプローチによる研究において用いられるコーディング・システムは，研究者によって様々に異なっている（e.g., Overall, et al., 2009; Woodin, 2011）点や，様々な統計的手法を用いた研究が多くみられる一方で，コミュニケーションのパターンについて詳細な質的検討を行ったものは殆ど見当たらない点が，先行研究における問題として挙げられる．

夫婦間の相互作用的な葛藤を分析するための方法として，会話分析が挙げられる．Sidnell（2010）によると，会話分析は「どのように話しては発話の順番を作るか」「発話は相互作用においてどのようなことを達成したか（質問など）」「どのように発話は後に続く発話と関連するか」というような社会的相互作用の様相に焦点を当てる分析方法である．会話分析の手法を用いることで，これまで研究が殆どなされて来なかった日本人の夫婦間葛藤のコミュニケーションを詳細に検討することが可能となる．とりわけ，コミュニケーションを特定の理論枠組みを基にしたコーディング・システムを用いて分類することや，当事者による「コミュニケーション態度（e.g., 平山・柏木, 2001）」を評価するといったアプローチではなく，探索的に夫婦間葛藤中のコミュニケーション・パターンを検討出来る点が重要である．

ところで，類似した研究方法として，談話分析やナラティブ分析が挙げられる．これらはいずれも，会話をトランスクリプトに基づいて分析していくという点で共通している（McLeod, 2000）．が，本研究においては，１．意味についての解釈を可能な限り意識的に排除すること，２．沈黙，強調，重なり，妨害などの準言語的な手がかりを分析の際に用いることから，会話分析を採用する．意味やストーリィが重要な焦点となる談話分析およびナラティブ分析は，本論文の目的にはそぐわないと考えられる．

以上をふまえ，本研究は会話分析の手法を用いて夫婦間相互作用を検討し，会話の中でどのような相互作用パターンが生起することによって，葛藤が生起し，扱われ，解消/留保/回避されるのかを探索的に明らかにすることを目的とする．

なお，葛藤の解消/留保/回避については，本論文では次のように区別を行う．葛藤の解消は，夫婦が葛藤のテーマについて何らかの合意を行うことで，葛藤状態が解消することを意味する．ただし，葛藤のテーマについて，問題意識を解決しないことについて合意を行う場合には，葛藤の留保とする．この場合，葛藤状態は解消せず，夫婦はその状態を維持することについて合意している．葛藤の回避は，葛藤のテーマについて，夫婦の一方あるいは双方が，様々な方略によって合意を避けることを意味する．

２．方法

A．調査協力者

中年期夫婦 8 組 16 名を対象とした．調査協力者は，スノーボールサンプリングの手法によってリクルートされた．調査協力者の平均年齢は 40.86 歳（SD = 5.5），平均婚姻関係期間は 9.00 年（SD = 3.34）であった（Table 10-1）．調査期間は，2010 年 3 月～2010 年 8 月であった．本章のデータは，Lee et al.（2013）のプロジェクトのために収集したデータと一部重複している．

Table 10-1　健常群の調査協力者の属性

夫婦番号	夫/妻	年齢	職業	最終学歴	子どもの年齢と性別	婚姻関係期間（年）	年収（万）
#001	夫	41	会社員	大学	8歳女	15	1100
	妻	39	専門職	大学院			400
#002	夫	48	専門職	大学	8歳女	10	800
	妻	48	専業主婦	大学			0
#003	夫	33	会社員	大学	7歳男、5歳男	8	600
	妻	30	パートタイム	大学			0
#004	夫	40	会社員	大学	6歳女、3歳男、1歳男	10	850
	妻	38	会社員	大学			600
#005	夫	48	会社員	大学	17歳女	4	900
	妻	47	専門職	大学院			300
#006	夫	44	会社員	大学	5歳男	8	900
	妻	38	会社員	大学			200
#007	夫	43	専門職	専門学校	4歳女	11	450
	妻	44	専門職	専門学校			300
#008	夫	37	会社員	大学	3歳男、2歳女	6	750
	妻	36	会社員	大学			550

B．データの収集

データの収集は，共同研究者の所有する面接室にて行われた．調査協力者には研究の目的および手続きを説明し，参加の承諾を得た．その際，「現在，夫婦で合意に至っていない事柄について，30 分間議論していただきます．議論をしていただく内容については，子育

てのやり方やその責任，結婚にまつわる意見の食い違い，法的問題，経済的問題，その他，過去や現在に家族に起こった重大な出来事など，なんでも構いません」と教示を行った．さらに，議論の後 30 分のデブリーフィング・セッションを設けた．デブリーフィング・セッションでは，夫婦の議論で話された内容に関する追加の質問，および議論を通じて生じた感情的な不快感への対処が行われた．これらはすべて録画された[3]．

C．面接室の状況

共同研究者の所有する面接室は，下図の通りであった（図 10-1）．

図 10-1．観察実験状況

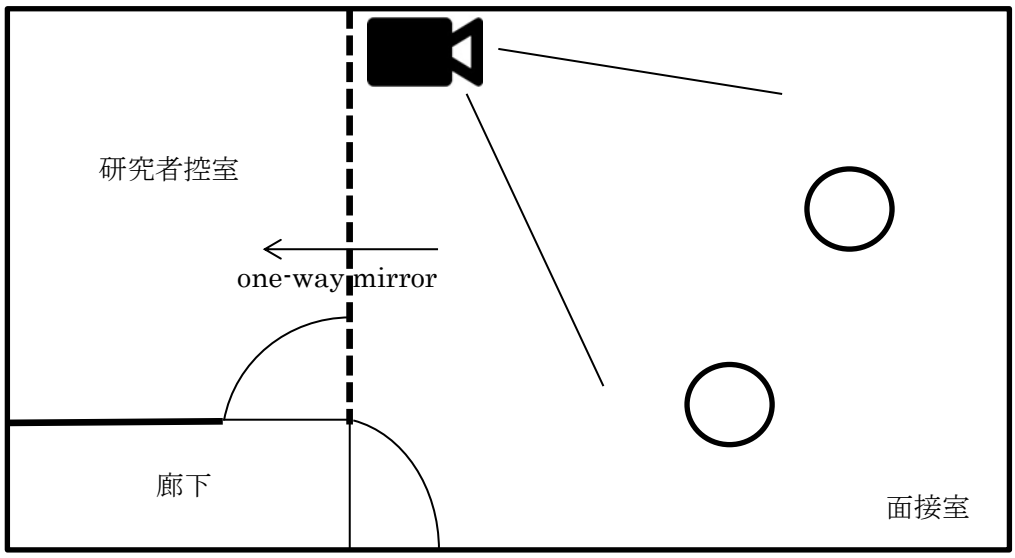


図 10-1 の左上は，研究者たちの控室で，右側は面接室である．破線は one-way mirror となっているが，本研究では用いなかったため，面接室側にカーテンがかけられている．one-way mirror については，事前に調査協力者に説明が行われた．

面接室左上にはカメラがあり，これを用いて夫婦の議論を録画した．カメラで録画中の映像は，控室から観ることが出来，研究者はこれをみることで夫婦の議論の様子を観察した．観察はさらに，上述のように，録画されたデータを用いて行われた．

D．分析の戦略

まず，録画したデータに基づいて，トランスクリプトを作成した．トランスクリプトには発話内容に加え，声の質（強弱，ペース，トーン，笑いを含むか否か），沈黙の長さ，発話の重複が記された．この手続きにより，読者はトランスクリプトを通して，さながら「そ

[3] なお，本章で用いているデータは，Lee, et al.（2013）の日本チームの資料として用いられているものと一部重複している点に留意されたい．ただし，分析方法などは Lee, et al.（2013）と全く異なるものである．

の場にいる」かのように相互作用を再構成することが出来る（Jefferson, 2004）．さらに，トランスクリプトを複数の部分に分割した．分割の際には，夫婦間で議論されているテーマの移り変わりを，分割のための指標として用いた．

続いて，可能な限り一切の予断を排した上で，繰り返し録画データを観たりトランスクリプトを読んだりする「帰納的探索（Inductive exploration）（Voutilainen, Peräkylä, & Ruusuvuori, 2011)」を行った．帰納的探索は，葛藤にまつわるやり取りにおいて繰り返される夫婦間の相互作用のパターンを特定することを目的とした．

最後に, 機能的探索によって特定された「繰り返される夫婦間相互作用」の例を収集し，それらについて，夫婦間相互作用の性質およびバリエーションを明らかにするため会話分析を行った（Peräkylä, 2004 を参照）．分析の焦点は，１．発話はどのように話し手および聞き手と関係するか，２．前の発話に続いて行われた発話がどのようなことを意味しているか，３．その発話は前の発話に対してどのように応じているか，４．その発話は次の発話に対してどのようなことを示唆しているか，の 4 点だった．１点目の「発話はどのように話し手および聞き手と関係するか」は，２，３，４点目の分析の焦点と性質が異なるため，これについて補足する．分析の焦点の２，３，４点目は，内容的側面に関する検討であるのに対して,「発話はどのように話し手および聞き手と関係するか」は，会話に参与している者の立場に関する検討である．

分析は観察された表面的な相互作用に対して行われ，調査協力者の内的世界に対する解釈は要しなかった．なお，Voutilainen et al.(2011)が述べているように，分析の妥当性は本論文中に示された発話例に基づいて照査されることによって保証される．

分析は基本的に，まず全て著者が行った．その後，分析の結果について，共同研究者と議論を行った．異論が分かれた場合には，合意に達するまで議論を重ねた．最終的には，専門家間の同意（Experts Consensus）によって，判断の信頼性を担保した．

E．分析方法

本研究の目的は, 会話の中でどのように葛藤が生起し, 夫婦間葛藤がどのように扱われ，そして解消/留保/回避されるのかを明らかにすることであった．そこでまず，すべての録画データについて逐語録を作成した．次に，逐語録を用いて葛藤生起場面を特定し，会話分析に用いるためのトランスクリプトを作成した．なお，トランスクリプトの詳細度は，必要に応じて異なった．文字起こしを基本としたが，帰納的探索の手続きから見出されたコミュニケーション・パターンを示す際に，発話の重複や沈黙の秒数が意味を持つと勧化

られた場合には，その箇所について会話分析の特別な記号を付与した詳細なトランスクリプトを作成した．

トランスクリプトを分析のために分割する際には,「テーマの移り変わり」の判断が難しい場合がしばしばみられる．例として，妻が夫に対して「休日は寝過ぎだ」ということを訴えている場合（健常群ケース#003）を示す．夫婦の会話が進行するに連れて,「早く起きて子どもを遊ばせて欲しい」「掃除をするのに邪魔になる」「私（妻）に対する思いやりが足りない」といった妻の夫への不満が話された. この部分の夫婦間葛藤のテーマは,「私(妻)に対する思いやりが足りない，それは休日の夫の過ごし方に表れている」という不満を妻が有していると理解することが出来る．しかし本研究においては，より詳細に繰り返されるパターンの抽出が目的であるため，妻の訴えに基づいて，夫婦間葛藤を「休日は寝過ぎである」「子どもを遊ばせて欲しい」「思いやりが足りない」とトランスクリプトを分割して分析を行った．トランスクリプトの分割の際には，スクリプトを遡ることはせず，その時点で夫婦の一方がもう一方に何を伝えているか，配偶者はそれに対してどう応じているか，およびその内容に基づいて，分割の可否を定めた．

夫妻間の一連のやりとりのうち，コミュニケーションのパターンとして抽出された部分は,「シークエンス」として記述した．さらに,「それぞれのシークエンスでどのようなことが達成されているか」に焦点を当てて，類似のシークエンスを集め，カテゴリの生成を行った．

夫婦間葛藤は基本的に,「夫婦間葛藤の開始」「夫婦間葛藤」「夫婦間葛藤の終結」の３段階から成ると考えられる．そこで，これら３段階について順番に検討する．夫婦間葛藤の開始段階では「夫婦間葛藤はどのように始まるのか？」，夫婦間葛藤段階では「夫婦はどのように夫婦間葛藤を取り扱うのか？」，夫婦間葛藤の終結段階では「夫婦間葛藤はどのように終結するか？」をそれぞれリサーチ・クエスチョンとした．

３．結果

本章は，会話分析の手法を用いて夫婦間相互作用を検討することを通じて，会話の中でどのような相互作用パターンが生起することによって，葛藤が生起し，扱われ，解消/留保/回避されるのかを探索的に明らかにすることが目的であった．

夫婦間葛藤は,「夫婦間葛藤の開始」「夫婦間葛藤」「夫婦間葛藤の終結」の３段階から構成されると考えられた．ただし,「例えば夫婦の一方が問題意識を提示するものの，もう一方が拒否し，その問題意識に関する葛藤が終結する」というように，例外的に３段階の全

部が揃わない場合も認められた.

Table 10-2. 健常群夫婦の葛藤のテーマ数

ケース番号	葛藤のテーマ数
#001	25
#002	20
#003	37
#004	26
#005	22
#006	17
#007	15
#008	5
合計	167
平均値	20.88
標準偏差	9.31

Table 10-2 は，各夫婦の議論における葛藤のテーマ数である．葛藤は,「議論のテーマの移り変わり」を基準としてカウントした．結果から，夫婦によって，30 分の議論時間のうちに話し合う葛藤のテーマ数に大きくばらつきがあることが示された. 議論は 30 分と決められているので, テーマ数とテーマ当たりの会話時間には反比例の関係がある. すなわち, テーマ数が少ない程， 1 つのテーマに費やす会話時間は多くなる．夫婦によってテーマ数はばらつきがあり，会話のやりとり数は重要な意味を持たないと考えられる.

A. 夫婦間葛藤の開始

本項のリサーチ・クエスチョンは,「夫婦間葛藤はどのように始められるのか？」ということであった．会話分析の結果，夫婦間葛藤を開始するパターンとして，3 種類のシークエンス，5 つのパターンが見出された（Table 10-3）.

Table 10-3 夫婦間葛藤の開始パターン

シークエンス名	説明
議論への導入	
問題意識の存在を示す	何かしらの問題意識を有していることを示す。
問題提起の促進	問題提起を促進する。 夫婦間葛藤のテーマを挙げるよう配偶者を促すほか、自身に関する問題意識を尋ねて問題提起を促進する場合もある。
議論の開始	
議論の焦点を定める	議論の焦点を定める。 話題を転換しつつ、議論の焦点を定める場合もある。 また、議論の焦点の抽象度には幅がある。
問題意識の推察	夫婦のうち問題意識を持たない一方が、もう一方の有している問題意識を推察する。
葛藤の回避	
雑談の焦点を定める	雑談の焦点を定める。夫婦間の葛藤に直接関係しない話題について、焦点が定められる。

ｉ．議論への導入　1つ目のシークエンスは,《議論への導入》であった．ここでは，夫婦間葛藤を始めるための導入が行われており，具体的なテーマには触れられていない，いわば葛藤の準備段階である．このシークエンスには，＜問題意識の存在を示す＞＜問題提起の促進＞の2パターンが含まれた.

Extract A-1は＜問題意識の存在を示す＞の例である．以降,「A.夫婦間葛藤の開始」の項名に対応し, 夫婦間葛藤の開始に関するシークエンスの引用をExtract A-Xとして例示する．夫婦は，議論の焦点を定めるためのやりとりから，議論を開始した．引用箇所は，妻が問題意識を提示し，そのことに関するやりとりが始められ，一段落した部分である．妻は1行目で，問題意識はぱっと思い出せないと述べる．これに対して，夫は2行目で，何か問題意識があることを妻に伝えている．妻はこれを受けて，夫の有している問題意識を取り扱うことに同意し，議論が開始される.

Extract A-1 ＜#003＞

01　妻：あとは（問題意識は）何があったかな？（略）じゃあ，無しね．あとはね．ぱっと言われても思い出せない程度だね.

02　夫：**俺，いっぱいあるけどね.**

03　妻：あ，ホント．あらそう？　**どうぞ．何かしたかしら，あたし.**

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

Extract A-2は，＜問題提起の促進＞の例である．妻は1行目で，夫に対して質問をすることで，夫婦間葛藤のテーマを挙げるように配偶者を促している．夫は2行目で質問に回答しているが，具体的なテーマは挙げられていない．そこで妻は3行目に，夫婦間葛藤の問題意識を尋ねる追加の質問を行っている.

Extract A-2 ＜#004＞

01　妻：**後は何ですか．何か日頃思っていることとかあるんじゃないの.**

02　夫：**思っているとかない．無いな.**

03　妻：無いの？　何か．早く言いなさいよ．何か無いんですか.

04　夫：何かあるんですかねえ．そうねえ.

以上のように,夫婦間葛藤に開始の際には,具体的なテーマについて話し合われる前に,＜議論への導入＞の段階がしばしば認められることが明らかにされた.

ⅱ．議論の開始　2つ目のシークエンスは,《議論の開始》であった．ここでは夫婦の一方によって具体的な議論の焦点が定められることによって，夫婦間葛藤が開始される.

Extract A-3は＜議論の焦点を定める＞の例である．妻は1行目で，具体的な問題意識を提示しすることによって，夫婦間葛藤の議論の焦点を定めている．夫は2行目でそれに応じ，夫婦間葛藤が開始される.

Extract A-3 ＜#005＞

01　妻：じゃあ．**うーんと，親．年を取っていく親をどうするかについて.**

02　夫：**うんうんうん.**

03　妻：どう思ってますか？

04　夫：そりゃあやっぱ面倒みなきゃいけないでしょう．そちらもあるでしょうけど.

Extract A-4もExtract A-3同様，＜議論の焦点を定める＞例である．別のテーマについて夫婦が話し合っているが，3 行目で唐突に妻は話題を転換し，新たな議論の焦点を定めていることで，夫婦間葛藤が開始される．4 行目で夫はそれに応じ，新しく設定されたテーマについて夫婦は議論を継続する．このように＜議論の焦点を定める＞方法には，唐突に話題を転換する場合が含まれる.

Extract A-4 ＜#002＞

01　妻：普通だから忘れちゃうんだよね．やんなくていいかなって．難しいよね.

02　夫：Y（テレビの登場人物？）が，J（テレビの登場人物？）が普通とかテレビで言ってて，ハッハ.

03　妻：**教育方法を変えよう．**まちがいって言う．当たり前って思ってる.

04　夫：そうね．やって貰って当たり前，全部当たり前と思っている.

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

Extract A-5は，＜問題意識の推察＞の例である．1行目で夫は，問題意識の存在を示している．それに対して，妻は具体的な問題意識を推察・提示し，夫婦間葛藤が開始される.

Extract A-1 で示されたように，問題意識の存在を示すことは夫婦間葛藤の議論への導入であるが，Extract A-5 のように，妻が具体的な問題意識を推察し提示することによって，夫婦間葛藤のテーマが定められ，そのテーマについての議論が開始される．＜問題意識の推察＞は，＜問題意識の存在を示す＞という《議論への導入》に続いて生起する．

Extract A-5 ＜#003＞

01　夫：じゃあねえ，寝るついでに，オレのこと寝てるっていうけど，**オレいっつも思うのはね，今度ちょっと反撃するから**.

02　妻：**あ，何？　家事のこととか？　遅くやるってことよね？**

03　夫：それアウトね.

ⅲ．葛藤の回避　3 つ目のシークエンスは，葛藤の回避であった．夫婦間葛藤に関係の無い話題に焦点を当てることによって，夫婦間葛藤が回避される．

Extract A-6 は，＜雑談の焦点を定める＞の例である．ここでは，＜葛藤の焦点を定める＞場合と同様に，会話の焦点が定められている．すなわち，焦点が定められる会話の内容が，夫婦間葛藤にまつわるものではなく，夫婦間の葛藤には全く関与しない雑談である点が特徴である．

Extract A-6＜#007＞

01　妻：そうそう，黒カビは怖いからね．あたしだって咳がでそうで嫌だよ．肺炎になりそう．ね．**今週，箱根は面白かったね.**

02　夫：うん.

01　妻：ちょっとさ，来年どっか行く？

02　夫：箱根，ちょっとしか出てないんだよね.

03　妻：そうなんだ.

04　夫：箱根行くんだったら，フリーパスとかあるから相当安く行けるけど.

夫婦は黒カビ退治とぜんそくについて話をしていたが, 01 行で突然, 妻が話題を転換し, 旅行の話になる．02 行目以降，夫婦間で葛藤している事柄については話し合われず，旅行先の場所や旅費について雑談が続く．

ⅳ．まとめ　以上より，夫婦間葛藤はほとんどの場合において，夫婦の一方が＜議論の焦点を定める＞ことによって開始されることが見出された．ごくまれに，夫婦の一方が＜問題意識の推察＞をすることによって開始されるパターンも見られた．またその前段階として，夫婦の一方が＜問題意識の存在を示す＞，もしくは＜問題提起の促進＞を行い，《議論への導入》がなされる場合が見られた．また，＜問題意識の推察＞は，夫婦の一方が＜問題意識の存在を示す＞のを受けて生起することが示された．さらに，夫婦間葛藤を回避するパターンは，夫婦の一方が＜雑談の焦点を定める＞ことによって開始されることが見出された．

B.夫婦間葛藤

本項のリサーチ・クエスチョンは，「夫婦はどのように夫婦間葛藤を取り扱うのか？」ということであった．

会話分析の結果，夫婦間葛藤のプロセスにおいて繰り返されるパターンとして，6 種類のシークエンス，19 種類のカテゴリが見出された（Table 10-4）．

ⅰ．要求の明示　1 つ目のシークエンスは，《要求の明示》であった．ここでは，夫婦の一方が配偶者に対して行っている要求の明示・明確化が行われる．

Extract B-1 は，＜要求を伝える＞の例である．以降，「B. 夫婦間葛藤」の項に対応し，Extract B-X として引用を例示する．夫婦は 01 行目で妻は「夫の帰宅が遅い」ことについて言及し，夫婦間葛藤の議論が開始されている．ここでは，妻が夫の帰宅時間に対して問題意識を有していることが示されているが，具体的な要求については言及されていない．

07 行目，妻は「もっと早く連絡を入れてくれないかしら」と要求し，妻の夫に対する要求が明確にされている．

Extract B-1＜#003＞

01　妻：帰りが遅いのって理由ないの？

02　夫：何の？　いつ？

03　妻：毎日．

04　夫：仕事？

05　妻：うん．

06　夫：それはしょうがないでしょう．

07　妻：それはしょうがないけど．**たまに，人が夕食作ってるのに，今日飲んで帰るから**

Table 10-4 夫婦間葛藤のプロセスにおいて繰り返されるパターン

シークエンス名	カテゴリ名	説明
要求の明示	要求を伝える	配偶者に対して、自身の要求を伝える。
	意向を確認する	配偶者に対して、配偶者の要求を尋ねる。
葛藤の扱い方	現況の共有	夫婦間葛藤に関し、現在の状況を共有する。自身の理解している現況を述べる場合と、配偶者に現況を尋ねる場合の両パターンがある。
	原因の探索	繰り返しているパターンの洞察や原因にまつわる仮説を示すなど、夫婦間葛藤の原因を探索する。
	譲歩	夫婦間葛藤の議論を経て、自身の要求を取り下げる、あるいは配偶者の要求を受け入れる。
	問題意識の価値下げ	配偶者の要求を満たしていることを伝える、あるいは配偶者の有している問題意識は大げさだと価値を下げる。
	解決策の提案	自分が提案する場合も、相手に提案を求める場合もある。
	論点の整理	夫婦間葛藤に関連する論点を整理する。
葛藤回避と要求の拒絶	話題の転換	夫婦のいずれか一方が話題を転換することで、夫婦間葛藤を回避する。
	開き直り	配偶者から提示された夫婦間葛藤の解決策に対して、開き直ることで拒絶する。
	責任転嫁	配偶者から提示された夫婦間葛藤の解決策に対して、第三者が容認しないことを理由に拒絶する。
	議論の拒絶	夫婦間葛藤に関する議論の進行を、直接的に拒絶する。
関係への配慮	努力の承認	夫婦間葛藤の解消に向けて配偶者が行っている努力を承認する。
	深刻度の管理	「議論が並行して対立が深刻化する」前に論点を戻す。
	否定の前置き	配偶者の主張を否定する際に前置きをする。
発話ターンの維持	発話ターンの維持	長時間にわたって、夫婦の一方が発話ターンを維持する。
笑いの生起	不適切な笑い	不適切なタイミングで笑い、配偶者の提案や要求などを拒絶する。
	笑いの共有	夫婦の両方が笑いながら和やかに議論をする。

って．もっと早く連絡を入れてくれないかしらって．

08　夫：急に誘われるから，しょうがないそれは．付き合いがあるから．仕事だから．

09　妻：ああ，そう．

Extract B-2 は，＜意向を確認する＞の例である．妻は夫に対して，休日に寝ている時間が長いことを不満として訴え，夫婦間で議論が行われている．04 行目で夫は，「それをど

うして欲しいの？」と，妻の意向を確認し，妻の夫に対する要求を明確にしている．

Extract B-2＜#003＞

01　妻：それにしたって寝過ぎだよね.

02　夫：寝てるでしょう．寝るよ．疲れているから，寝る．

03　妻：12 時過ぎても．

04　夫：**それをどうして欲しいの？**

05　妻：もっとこう，早く起きて．子どもを遊ばせて．

ⅱ．葛藤の扱い方　2 つ目のシークエンスは，《葛藤の扱い方》であった．ここには，6 つのカテゴリが含まれていた．夫婦間葛藤を扱う方法として，様々な方略が用いられていることが示された．

Extract B-3 は，＜現況の共有＞である．夫婦は子どもが「やっと一日が終わった」と口にすることについて議論をしている．妻は夫に対して，「協力的ではないからいけない」と不満を述べ，それに対して夫は 04 行目で，「（子どもはちゃんと）寝ている方だ」と反論している．そこで，「子どもがちゃんと寝ているかどうか」について，05 行目以降 07 行目まで，夫婦で現況が共有される．

Extract B-3＜#002＞

01　妻：やっと一日終わった，って．ベッドに寝る時は．8 歳の子が言う科白ではない．そんなにハードな生活をさせてないんだけど，協力的じゃないからいけないんだよ．そうだよ．お父さんがもっと協力的じゃないからいけないんだよ．

02　夫：ああ，そっか.

03　妻：フッフッフッフッフッフッフ.

04　夫：だって，結構ちゃんと寝てるじゃん．寝てる方だと思うよ．

05　妻：**寝てないよ．みんな 9 時まで寝てるのに.**

06　夫：**10 時，10 時 7 時か.**

07　妻：**10 時 7 時で何時間？　9 時間か.**

08　夫：長いよ．まだ…….

09　妻：小学 3 年生だよ．

10　夫：ちっちゃい子じゃないんだよ．9 時で 6 時とかさあ．それでも同じだろうけど．

Extract B-4 は，＜原因の探索＞の例である．夫婦は「妻がヒステリーを起こす」ことについて話し合っている．02 行目で妻が，「(手伝って欲しいことがある時に家族メンバーが)それを知っていながら行動を起こさないところで余計に怒りが倍増させる」と原因について言及し，夫婦で「妻がヒステリーを起こす」原因についての議論が行われる．

Extract B-4＜#006＞

01　夫：ヒステリーを起こすのはな．そういう時はもう黙ってやり過ごすっていうかな．

02　妻：ヒステリーって．治す方法を教えて欲しいよ．**大概が，S（人名）だけが原因ではなく，それを知っていながら行動を起こさないところで余計怒りが倍増させているところは見て分かっていると思うんだけど．**

03　夫：あてつけにしか見えない，なんかさ．

04　妻：S に対してでしょう．

05　夫：違う違う違う．上に対してのあてつけ．

06　妻：Y（人名）には怒ってるもん．

07　夫：だから，なんで上に怒るかを考えたい．

08　妻：だって，なんか S がうるさいことを言うのに，手伝って欲しいことを言うのに，それを見て見ぬ振りをしているから腹が立つ．

09　夫：そう言われても，多少は手伝ってるじゃん．全く手伝ってないわけじゃないじゃん．

10　妻：それは全く手伝ってないとは言わないけれど，こちらも手伝って欲しい時に．

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

Extract B-5 は，＜譲歩＞の例である．夫婦は T さんのお金で買い物をした際に付いてきたエコポイントの処遇について議論をしている．夫は「エコポイントを貰ってしまって良い」と主張しているが，妻は「T さんに伺いを立てるべき」と主張している．夫は妻の主張を理解した上で，01 行目に「好いと思うけどねえ」と述べているが，03 行目で妻の主張に従い，「T さんのとこに持って行く」としている．ここでは，夫が妻の主張に納得してい

るかどうかは不明であり，主張は並行したままだが，夫は自身の主張を取り下げ，妻の要求を受け入れている．

Extract B-5＜#007＞

01　夫：好いと思うけどねえ．ホントはダメなんだよ．ホントはダメでしょ，だって向こうが金出してるんだからさ．それはこっちの判断だから．

02　妻：そうだよね.

03　夫：だからママがそうやってヤバいとかって言うんだったら，それも全部，来た時に，T さん（人名）にオレが持っていっちゃう．うん．エコポイントの，何か，その，なんていうの．はがきで．で，引き換えるから，それを **T さんのとこ持って行って，エコポイントが付いたんでっつって．で，T さんとこ持って行くかはオレからするよ．それでいいか．その方が良かったら，そうする．**

04　妻：エッヘッヘッヘッ．

05　夫：うん．いや，そこまで言うんだからさ．

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

Extract B-6 は＜問題意識の価値下げ＞の例である．妻は，「自身の父，祖父に比べて，夫は家事などに協力しない」ということについて不満を述べている．それに対し，夫は 08 行目で「極端なんじゃない？」と反論している．ここでは，妻の主張である「夫が動かない」ことは，「夫との比較対象である妻の父や祖父が極端だからであり，そういう人もいればそうじゃない人もいる」と，夫は妻の有している問題意識を価値下げしている．

Extract B-6＜#003＞

01　妻：お父さん（妻の父親），なんでもやってくれるから，ちょっと．あの，おじいさんもお父さんも，うちの，家のこと，家事も結構やる方なので.

02　夫：知ってます.

03　妻：あまりのやらなさにびっくりみたいな.

04　夫：そういう人もいれば，そうじゃない人もいる.

05　妻：でも，そういう風に育ってきたから，イライラする．みてて.

06　夫：何が？

07　妻：なんでこの人，こんなに動かないんだろうって．

08　夫：**極端なんじゃない？**

09　妻：極端じゃない．

10　夫：お父さん，極端だよ．

11　妻：何が極端なの？　何が？　動き過ぎってこと？　いや，普通だって．普通だよ．

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

Extract B-7 は＜解決策の提案＞の例である．夫婦は，夫の帰宅時間について議論をしている．「早く帰ってくるように」と要求する妻に対して，夫は仕事の状況が忙しいことを伝えている．その後妻はは，夫に謝意を伝えた上で，部下を使うことで仕事の負担を減らすことを示唆し，帰宅時間を早められるように提案している．

Extract B-7＜#004＞

01　妻：　じゃあ，早く帰ってくるように．私がいつも言っているのは．

02　夫：はいはいはい．はい，なんでしょう．

03　妻：週の平日の 5 日のうち，1 日だけでも，定時もしくは＊＊＊（聞き取れず）で帰ってきて下さい．

04　夫：ああ，一日ねえ．

（中略）

05　妻：　土日はまあ，有難いですけど．平日に 1 日．

06　夫：　土日頑張っているでしょう．

07　妻：そりゃあそうだけどさ．そりゃあそうだけど．土日はもうそりゃあ好いけどさ．平日 5 日間，ねえ，みっちりあの 3 人でがつんと来られると，やっぱりちょっとね．

08　夫：　まあね．

09　妻：　うーん．まあどうしてもダメな時はいいけどさ，しょうがない．**まあでもその T さん**（夫の会社の部下）**とか T さん**（夫の会社の部下）**とか K ちゃん**（夫の会社の部下）**．使えるわけでしょう．T さん**（夫の会社の部下）**も下でしょう．**

10　夫：うん，そうそうそう．今はT（夫の会社の部下），T（夫の会社の部下）を教えながら使うという形だから，それがひと手間.

11　妻：でもそれが動けばさ.

12　夫：うん．でもまあ動き出してきたかな.

13　妻：**仕事のぱぱも流しなさいよ，あんたも課長になったんだから.**

14　夫：まあね.

15　妻：**自分でやらないで．自分で，時間は，作るものだから.**

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

Extract B-8 は＜論点の整理＞の例である．夫婦は，家事のアウトソーシングの是非について議論している. 夫は 03 行目で,「妻はアウトソーシングをしたいと思っている. 一方, 夫は心理的な抵抗があり，対立している」ということを明示し，論点を整理している.

Extract B-8＜#008＞

01　夫：いまだにアウトソーシングは納得しないわけだね.

02　妻：うん.

03　夫：だからえっと，こっち（撮影方向）に向かってしゃべればいいか，あれなんだけど．テーマの一つとしては，二人で働いて，二人の子どもを育てて，かつ，色々な家事がある，と．で，その家事がどうも，二人のキャパシティを超えているんじゃないかと．で，どうするかっていう時に，**A（妻）はなんか，そういう掃除サーヴィスみたいなところにお金を払って，家の中をきれいにしてもらおうと思っているし，僕はそれは心理的な抵抗がある，というのがあるので.**

04　妻：うん．それはそうだよね.

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

ⅲ. 葛藤回避と要求の拒絶　3 つ目のシークエンスは,《葛藤回避と要求の拒絶》であった. ここには，4 つのカテゴリが含まれていた．夫婦間葛藤を回避したり，配偶者からの要求を拒絶したりする際には，様々な方略が用いられていることが見出された.

Extract B-9 は＜話題の転換＞の例である．妻は，夫の帰宅時間が安定しないことについて不満を述べている．それに対して，夫は 02 行目で，「S 先生（夫の同僚）が夕飯を家で食べない」ことを伝えている．ここでは，「夫の帰宅時間が安定せず，晩御飯を 2 回作るのが大変だ」という妻の訴えに対して，話題を転換することで，夫婦間葛藤を回避している．

Extract B-9＜#002＞

01　妻：大体，お父さんは決まった時間に帰ってこないんじゃないの．ずるずるずるずる．晩御飯を 2 回するのは大変なのよ．時間がもったいない，あたしの時間がもったいない．

02　夫：**S 先生**（夫の同僚）**は夕飯を家で食べない．**

03　妻：嘘．

04　夫：ホント．

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

Extract B-10 は＜開き直り＞の例である．夫婦は直前まで，別のテーマについて議論していた．02 行目で，夫は妻の「気にしすぎなところ」に議論の焦点を定めた．それに対して，妻は 03 行目で，「色々考えるというのを取り除くと，あたしじゃないから」と開き直ることで，相手の要求を拒絶している．

Extract B-10＜#005＞

01　妻：話はそれだけかなあ．

02　夫：あると思うけど．気にしすぎなところを話す．

03　妻：**色々考えるというのを取り除くと，あたしじゃないから**．

Extract B-11 は，＜責任転嫁＞の例である．夫婦は，夫の両親の農業を手伝うために，夫の実家に戻ることについて議論している．妻は夫の実家に戻ることは希望していないため，「おばあちゃん家の古い家を直して住む」などを提案している．夫は 03 行目で，妻の提案を受け入れるものの，05 行目で「うちの親は理解しない」と妻の提案を拒絶している．

Extract B-11＜#005＞

01　夫：それは前から聞いてるけど，そっちの希望はね.

02　妻：それいいなあって．それで，おばあちゃん家の古い家を直して住む.

03　夫：まあまあ，それで好いけどね.

04　妻：別に好いよね.

05　夫：**それはでも，絶対，そこはうちの親は理解しないよ**.

06　妻：その話を？

07　夫：「なんで！？」って.

Extract B-12 は＜議論の拒絶＞の例である．01 行目，妻が議論の焦点を提案している．それに対して，夫は 02 行目で，「3 人目をどうするか」についての議論を直接的に拒否し，夫婦間葛藤を回避している．

Extract B-12＜#008＞

01　妻：何にしよう．でもなんか，3 人目をどうするか．そういうこと．それか，ワークライフバランスかな.

02　夫：**3 人目の話は，でもちょっと＊＊＊（聞き取れず）ねえ**．えー．家事をアウトソーシングする，まあ本当にあれで言うと，あれじゃない？

03　妻：ああー，そうだね．未だにアウトソーシングは納得しないわけだね.

ⅳ．関係への配慮　4 つ目のシークエンスは，《関係への配慮》であった．ここには，3 つのカテゴリが含まれていた．夫婦は夫婦間葛藤にまつわる議論をする中で，肯定的・否定的のいずれも含んだ，夫婦関係に影響するコミュニケーション・パターンを示すことが明らかになった.

Extract B-13 は＜努力の承認＞の例である．この夫婦間葛藤場面では，妻は「自分の話をもっと聞いて欲しい」と夫に要求している．02 行目で夫はその要求を拒否し，夫婦は葛藤しているが，05 行目で妻は，「でも良く聞いてくれるもんね」と夫が話を聴いてくれていることを承認している.

Extract B-13＜#005＞

01　妻：もっと聞いて欲しい．寝ないで聞いて欲しい．

02　夫：いやいやいやいやいや．

03　妻：フフフ．私の結論が出るまで聞いて欲しい．

04　夫：うーん．

05　妻：**でも良く聞いてくれるもんね．**

06　夫：うん．

Extract B-14 は＜深刻度の管理＞の例である．妻は夫に「休日寝過ぎ」だと不満を述べているのに対し，01 行目で夫は「自分（妻）の方が寝ている」と反論し，夫婦は葛藤している．そのまま，「妻が夫よりも寝ている」という点について，議論が並行するが，09 行目に夫は自ら自身に不利な内容に議論の焦点を戻し，10 行目以降，妻が反論出来る余地をつくっている．このことにより，議論の焦点が「妻の方が寝ている」から「夫が寝過ぎである」という点に戻され，夫妻間の対立がある程度以上には深刻化しない．

Extract B-14＜#003＞

01　夫：自分（妻）の方が寝てるでしょう．平日．

02　妻：寝てない，寝てない．あたし結構忙しいもん．本当，忙しいんだよ．忙しい，忙しい．結構外出している．

03　夫：子供二人，学校にやるでしょ．

04　妻：寝てない．お出かけですもん．

05　夫：それ，遊びでしょう？

06　妻：遊びっていう名の，ね．

07　夫：遊びでしょう？　それと一緒だよ．

08　妻：失礼な．いいじゃん，別に．

09　夫：**でも，そこまで酷くないっしょ，オレ**．

10　妻：酷い．他のとこみんな見てごらんなさい．9 時くらいからみんな遊びに連れて行っている．

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

Extract B-15 は＜否定の前置き＞の例である. 夫婦はそれぞれの親と同居するかどうかについて議論をしている．妻は 03 行目で,「夫の両親が病気がちである」と指摘する直前に「申し訳ないけど」と前置きをしている．前置きをすることで，妻にとっては夫に対して指摘がし易い可能性が考えられる．また，前置きが無い場合と比較して，前置きがあることで，夫にとっては妻からの指摘が受け入れやすい可能性が考えられる．

Extract B-15＜#005＞

01　妻：みんなで一緒には住めないでしょう.

02　夫：うーん.

03　妻：で，10 歳違うじゃない．そっちのお父さんとお母さんと，うちの．だけど，**申し訳ないけど，病気がちなのはそっちの方なの**.

ｖ．発話ターンの維持　5 つ目のシークエンスは,《発話ターンの維持》であった．ここには 1 つのカテゴリが含まれている．夫婦間葛藤にまつわる議論において，特徴的な発話ターンの取得が見出された.

Extract B-16 は＜発話ターンの維持＞の例である.「家事のアウトソーシングの是非」について夫婦が議論をしている．妻は，アウト―シングに賛成で，ここでは「何故アウトソーシングに賛成か」について述べている．長時間にわたり妻が発話ターンを維持し，夫は時折相槌を打つものの，殆ど発話ターンを取得することがない.

Extract B-16＜#008＞

01　夫：どうするかっていう時に，あのー，A はなんだ，そういう，掃除サーヴィスみたいなところにお金を払って，家の中を綺麗にして貰おうと思っているし，僕はそれは心理的な抵抗がある，というのがあるので.

02　妻：うん．それはそうだよね．そうそうあたしも近日，話し合わなければ．ならないテーマかなと思っていて．というのは，Mさんに，私の父であるMさんに，そうすべきだ，早急にそうすべきだってこの前言われたわけ.

03　夫：なんで？

04　妻：この前っていうのはどういう時かっていうと，私が凄く仕事がこの前の番組で忙しくて（夫：うん)，でまあ，でしかもあなたの方のご両親が，スイスに行っちゃ

って，旅行に行っちゃってるから，うちの両親だけが，に委託せざるを得ない．

05　夫：うん．

06　妻：その，具体的には，保育園のお迎えと（夫：うん），そのあとの食事を食べさせて，時にはお風呂に入れて，こういつ帰るか分からないあたしたちを待つみたいな．（夫：うん）わたしは 9 時半，9 時には帰るっていう約束，お互いにね，寝かしつけ前には帰るっていう約束でそうしてやってきたわけだけど．その負担が若干こう二人だけに，うちの親だけに行く状況で，多分二人も，なんとなくこりゃしんどいなっていう意識がある中で．（夫：うん）で，家の中がどんどん汚くなっていくっていう．（夫：うん）で，まあ，子どもへの影響みたいなことを感じたかも知れないよね．で，その中で．

07　夫：子どもへの影響って何？

08　妻：なんかこう，ようするに，家がぐちゃぐちゃなその，あの，nobody knows 的な映画のそんな，子育て環境的にはどうなのっていう，食べこぼしが落ちてますみたいなさ．（夫：うん）おもちゃにぶつかって転びますみたいな（夫：うん），そういう中での子育てをするっていうことがどうなのかっていうことと，うちの父だから娘のことを思っているから，私たち自身のメンタルヘルスの問題と．あとやっぱり何より言っていたのは，あのー，土日にね，ちゃんと遊んであげていますかっていう．

09　夫：うん．

10　妻：子どもと向き合っていますか？　っていうことなわけ．（夫：うん）一番は．で，あたしもそれは同意するところがあって．

11　夫：うん．

12　妻：まああたしたちのメンタルヘルスって考えると，ちょっとあたしも心が痛いんだけれども．あたし前から言っている通り，土日に，今実際例えば土曜日の午前中は，片方，T ちゃん（夫）だけが子どもと遊んで，あたしは粛々と家事をやるみたいな感じ．

13　夫：逆でも好いよ．

14　妻：逆でも好いけど，片親ってこと，要するに．そうじゃなくて，4 人家族なんだから，その，土日は目いっぱいさ，普段月から金まで遊んであげられないじゃん．で，じゃあ，月から金までの生活っていうのを説明するとさ，あの，ご飯を食べ

させた後,「いないいないばあ」のテレビを点けっぱなしにして，それでもう，皿洗いやらさあ，風呂掃除やらさあ，しているわけじゃん．あたしは，あの，携帯みたりしないけどさ．そういう中で，子どもとほとんどちゃんと遊んでいない．で，ご飯作っている間に子どもはさ，なんか，お母さん何々って言いに来るけど，怒るわけ．今お母さん何してるのご飯作ってるでしょうとか，お母さん今忙しい！とか言って．いうような日々なわけ．月から金まで，その殆ど遊んであげられていないわけ．子どもの欲求にこたえていないわけ．そしたら，少なくとも土日はその贖罪を兼ねて，あの，子どもと遊ぶっていうことに集中するっていうね．（夫：ああー）ために，金曜日．金曜日っていうわけ，うちの父は．金曜日，アウトソーシングして，土日はピカピカである，と．ピカピカであれば，掃除しなくても済むわけじゃん．洗濯ものと朝ごはんだけで，午前中から，遠出も出来るし．

15　夫：ただね，あの，家事が忙しくて子どもに構ってやれないっていうのは（略）．

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

ⅵ．笑いの生起　6 つ目のシークエンスは，《笑いの生起》であった．ここには，2 つのカテゴリが含まれている．夫婦は夫婦間葛藤にまつわる議論をする際について，不適切なタイミングで笑う場合と，和やかに笑いながら議論をする場合の 2 パターンが見出された．

Extract B-17 は＜不適切な笑い（inappropriate laugh）＞の例である．直前に夫婦は，「妻のヒステリーは嫌だ」「ダメだしの連続が，腹が立つ」という点について議論をしており，主張は並行していた．01 行目，妻は「思いやる気持ちを持って欲しい」と夫に伝えたが，それに対して夫は笑い始めた．おかしみを誘ったり，冗談を言ったりするのを受けて笑うのではなく，妻の提案を受けて笑い始めるのは，不適切なタイミングである．このような笑いが生起する背景には，妻の提案の価値下げや冷笑といったニュアンスが含まれていると考えられる．

Extract B-17＜#006＞

01　妻：そうやって，常にダメだしばかり言って，あのもうちょっと，こう，思いやる気持ちを持って欲しい．

02　夫：**ふっふっふっふ．思いやる気持ち．ふふふふ．**

03　妻：明らかにそれが足りない.

Extract B-18 は，＜笑いの共有＞の例であった．夫婦は，妻が仕事を続けるかどうかについて議論を行っている．妻は，「（子どもの成長に伴い）あと 4 年も働きたくない」と主張しているのに対し，夫は「無理ならば構わないが，出来るなら働いて欲しい」と主張しており，互いの主張は対立している．しかし，01 行目で妻は自身の主張を夫に伝えながら笑う，10 行目で夫が笑うなど，夫婦の両方が笑いながら和やかに議論をしている．

Extract B-18＜#004＞

01　妻：4 年も働きたくない．**ふふっ！((笑))**　働いて欲しいの？

02　夫：うーん．まあ，出来得るならね，ってとこだね.

03　妻：あ，そう.

04　夫：うーん.

05　妻：働いて欲しい派なの？

06　夫：ん？　うーん，まあ，無理なるんなら別にそれはいいけど．多分ねえ，家のローンが消えたらそんなに.

07　妻：**金の為ですか ((笑：無声)).**

08　夫：そうそうそうそうそうそう.

09　妻：あたしのこの疲れは.

10　夫：**ハッハッハッハッハッ((笑)).**

以上，夫婦間葛藤は，その機能や表現の形式から 6 種類のシークエンス，19 種類のカテゴリに区別される，様々な方略を用いて扱われていることが見出された.

C．夫婦間葛藤の終結

本項のリサーチ・クエスチョンは，「夫婦間葛藤はどのように終結するか？」ということであった．会話分析の結果，夫婦間葛藤を終結するパターンとして，2 種類のシークエンス，7 つのコミュニケーション・パターンが見出された（Table 10-5）．夫婦間葛藤を終結するパターンの記述統計について，Table 10-6 に示す.

Table 10-5 夫婦間葛藤の終結パターン

シークエンス名	説明
夫婦間葛藤の終結	
解決策の合意	夫婦のいずれかによって提案された解決策に合意し、夫婦間葛藤を終了する。
先延ばし	結論を先延ばしにし、夫婦間葛藤を終了する。
議論の並行	夫婦間の議論は平行線を辿り、合意に達しないまま話題が転換されることで、夫婦間葛藤が終結する。
拡散	夫婦間葛藤の焦点は拡散し、雑談を経て夫婦間葛藤が終結する。
譲歩	夫婦のいずれか一方が譲歩し、夫婦間葛藤を終了する。 葛藤のテーマについては合意に至らないが、夫婦のいずれか一方が、相手の主張を受け入れることで夫婦間葛藤を終了する。
回避	夫婦のいずれか一方によって定められた夫婦間葛藤のテーマについて話し合うことを配偶者は拒否し、夫婦間葛藤を終了する。
夫婦間葛藤終結の失敗	
議論の継続	夫婦のいずれかによって提案された解決策に合意した後も、議論の焦点は変わらないまま、夫婦はそれぞれ自身の主張を繰り返すやりとりが継続される。 合意に至った解決策について、実現可能性の検討が行われることもある。

夫婦間葛藤の終結は主に，＜解決策の合意＞＜議論の並行＞＜拡散＞によってなされることが示された．また，＜議論の継続＞による夫婦間葛藤終結の失敗は，主に#007 の夫婦のみにみられたコミュニケーション・パターンであった．そのため，#007 の夫婦は外れ値のような特殊な夫婦であり，夫婦間葛藤終結は多くの場合，あまり失敗する頻度は高くない可能性が示唆される．

ｉ．夫婦間葛藤の終結　1 つ目のシークエンスは《夫婦間葛藤の終結》であった．ここでは，6 つのパターンによって，夫婦間葛藤が終了する．ここでは，項名「C.夫婦間葛藤の終結」に対応し，Extract C-X として該当部分を引用する．

Table 10-6 健常群夫婦の葛藤終了方法の記述統計量

ケース番号	夫婦間葛藤の終結						夫婦間葛藤終結の失敗
	解決策の合意	先延ばし	議論の並行	拡散	譲歩	回避	議論の継続
#001	8	0	2	13	0	0	2
#002	0	0	0	18	0	1	0
#003	6	0	16	7	2	1	5
#004	14	0	1	9	1	0	3
#005	2	1	9	7	0	0	2
#006	1	0	9	3	1	0	2
#007	7	0	0	6	1	0	20
#008	3	0	0	0	0	1	2
合計	41	1	37	63	5	3	36
平均値	5.13	0.13	4.63	7.88	0.63	0.38	4.50
標準偏差	4.61	0.00	6.00	5.62	0.74	0.52	6.41

Extract C-1 は，＜解決策の合意＞の例である．夫妻は家事を外注するということについて，議論を続けている．妻は家事の外注を勧めていたが，夫は家事の外注に対して拒否的な態度をとっていた．議論を経て，4 行目で夫は家事外注を試してみるという妻のアイディアに合意をし，夫婦間葛藤を終了している．続いて，夫は＜議論の導入＞を行い，別のテーマについて夫婦間葛藤を始めている．

Extract C-1 ＜#008＞

01　妻：あたしはそのお姑さんたちに理解して欲しいのは，じいちゃんばあちゃんしか出来ないこと，または S（夫の名前）さん，S さんしか出来ないことっていうか，だから出来ることをやって欲しい，と．

02　夫：掃除を手伝って欲しいとかじゃなくてね．

03　妻：掃除とかは，まあ，ある意味誰でも出来ることなので．そういうのを活かしてやってもらいたい．これが勉強とかになってくるわけじゃん．

04　夫：**じゃあ，あの，そうだね．じゃあその辺は，あの，ふまえつつ，家事外注に関してはいっぺん試してみようか．**っていうことで，もう一ネタくらい話しておくか．

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

Extract C-2 は，＜先延ばし＞の例である．妻は 2 行目で，議論の焦点について「おいおい考える」とその場で結論することを避けて，先延ばしにすることを提案している．3 行目で夫はそれに応じ，夫婦間葛藤は終了した．

Extract C-2 ＜#005＞

01　夫：まあでも，難しいっすよね．

02　妻：難しいですね．なんかもう電話がかかってきたりして，お母さん倒れたとか言われるんじゃないかと思って凄いビックリしてる．それから，電話をかけて，電話に出なかったりしたら，なんかあったんじゃないかってビックリしてますね．**じゃあ，それはおいおい考えるということで．何かあるたびに，話し合った方が．**

03　夫：**うん．**

Extract C-3 は，＜議論の並行＞の例である．8 行目まで，夫婦間の議論は平行線を辿り，

合意に達しないまま終結した．続いて 9 行目に，夫は新しい夫婦間葛藤の焦点を提示し，議論の焦点は移行した．

Extract C-3 ＜#003＞

01　夫：1 時前に寝たこと，ここ最近ないよ．

02　妻：でも別になにしてるってわけでもないでしょ．テレビ観て．

03　夫：仕事じゃん．

04　妻：ホントに？

05　夫：パソコン．で，7 時に起きるでしょう．1 時はないね．2 時に寝るとして．

06　妻：5 時間．

07　夫：**その分ちょっと寝かしてくれよって思う．土日に．死んじゃうよ．**

08　妻：**死なない死なない．大丈夫大丈夫．5 時間睡眠．死なない死なない．もったいないと思う．**

09　夫：**自分**（妻）**の方が寝てるでしょう．平日．**

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

Extract C-4 は，＜拡散＞の例である．1 行目で，妻は問題意識を提示しているが，2 行目で夫は不適切な応じ方をし，議論の焦点が拡散している．そのまま，雑談のような会話が続けられ，夫婦間葛藤のテーマは拡散したまま葛藤が終結する．

Extract C-4 ＜#002＞

01　妻：**あたしも独立していれば良かった．自分の時間があってさ．**

02　夫：いやだってさ，今日だって K（テレビタレント），訴えられてんじゃん．テレビに出てたから．K（テレビタレント）．K（テレビタレント）？　前の奥さんから．

03　妻：なんで？　倒産しちゃったから．

04　夫：出来ちゃった婚になった理由も，結局，偽装じゃないけど，いっぱい借金，好い加減な業者が 3 億 7 億ってあるから，借金取りから逃れるために，うちの奥さんじゃないからって，形式上離婚したって言ってたらしい．形式上離婚しようってことで離婚したら，しゅっとは言って着ちゃって，子どもまで出来た．くらたま

自身も前になんか結婚して子どもがいたんでしょ.その子どもと今度の子どもと，二人の子どもがいるんだよ.

05　妻：いいねー，インターネットがあればなんでもわかるんだね.

06　夫：結局儲かったのはAしかなかったんだよ，映画．観た？

07　妻：観てないけど．アニメから出た映画かしら.

08　夫：Aってフランス映画でしょあれ．フランス映画だっけ.

09　妻：フランス映画は当たらないんだってねえ．趣味の人だよ.

10　夫：趣味だよどうみたって．Aの映画っていうか.

11　妻：**＊＊＊だって趣味じゃない，どうみたって．フフフ…….**

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

Extract5 は＜譲歩＞の例である．夫婦は，大家さんのところにエコポイントを持っていくかどうかということについて議論をしている．葛藤のテーマについては，夫妻間で合意に至らない．すなわち，ここでは「大家さんのところにエコポイントを持っていく」ことの是非については結論が出ていない．しかし，12行目で夫は妻の主張を受け入れ，夫婦間葛藤が終結する.

Extract C-5 ＜#007＞

01　妻：でも（大家さんが）細かい人だったらどうする？

02　夫：大丈夫だよ．言って来たらほら，言って来たら.

03　妻：ああそう？　言って来たらで好いの？　ハッハッハッ.

04　夫：好いよ，言って来たらで．言わないでしょう，普通.

05　妻：言うんじゃない？　あなたも言うじゃんよ.

06　夫：言わないよ，言わないよ.

07　妻：だって細かい人，細かいもん.

08　夫：どちみち時間差があるんだから，言って来たら商品券に＊＊＊（聞き取れず）何かをつければ，使いますかっつって，使いますかって言うかそしたらそっちに＊＊＊（聞き取れず）．そしたら向こうが＊＊＊（聞き取れず）．好いと思うんだけどね.

09　妻：んっふっふ.

10　夫：好いと思うけどねえ．ホントはダメなんだよ．ホントはダメでしょ，だって向こう（大家さん）がお金だしてるんだからさ．それはこっちの判断だから.

11　妻：そうだよね.

12　夫：**だからママ（妻）がそうやってやばいとかっていうんだったら，来た時に，とりあえずオレが持っていっちゃう．**はがきで，引き換えるから，それを取り出そうと思っていて，エコポイントが付いたって．で，それを持っていくかどうかはお任せするよ．それでいいか．それで＊＊だったらそうする.

12　妻：エッヘッヘッ.

13　夫：いや，そこまで言うんだからさ.

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

Extract C-6 は，＜回避＞の例である．1 行目で妻は，「3 人目をどうするか」という夫婦間葛藤のテーマを提示している．それに対して，2 行目で夫は，「3 人目の話はでもちょっと＊＊＊で」と議論の継続を拒否し，夫婦間葛藤が終結する．夫はさらに，代わりの夫婦間葛藤のテーマを提示し，3 行目で妻が応じることで，新たなテーマについて夫婦間葛藤が開始されている.

Extract C-6 ＜#008＞

01　妻：何にしよう．**でもなんか，３人目**（子ども）**をどうするか.** そういうこと．それか，＊＊＊（聞き取れず）かな.

02　夫：**3 人目の話はでもちょっと＊＊で.** えー．家事をアウトソーシングする＊＊＊（聞き取れず）.

03　妻：未だにアウトソーシングは納得しないわけだね.

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

ⅱ．夫婦間葛藤終結の失敗　2 つ目のシークエンスは《夫婦間葛藤終結の失敗》であった.

これまで示してきたように，夫婦間葛藤は 6 つのパターンによって終結する．しかし，＜解決策の合意＞に達したにもかかわらず，夫婦間葛藤が終結しないパターンが 1 つ見出された.

ExtractC-7 は，＜議論の継続＞の例である．夫婦は，「お風呂に黒カビがついているので，大家さんに言って対応して貰う」ということについて話し合っている．3 行目で妻は，「大家さんに（言って欲しい）」と依頼し，夫は「ちょっと言ってみるわ」と受諾している．ここでは，＜解決策の合意＞が成立している．しかし夫婦間の議論は終結せずに継続されている．

Extract C-7 ＜#007＞

01　妻：あれはあのまたほら，あのー，お風呂屋さん．お風呂屋さんに言わないとダメだと思う．

02　夫：うん．風呂やか．うん．風呂屋ね．うん．

03　妻：**だからちょっと大家さんに．**

04　夫：**ちょっと言ってみるわ．**

05　妻：黒カビはさ．ぜんそくとか出るやつなんだよ．ホントにあのー，パパ（夫）がお風呂入ると調子悪くなる可能性があるわけ．

06　夫：うん．うん．確かに壁さ，凄いよね．天井が．**ちょっと言ってみようかな．**

07　妻：うん．こうやってよく見るとホントに怖いくらい．

以上，夫婦間葛藤は 2 種類のシークエンス，7 種類のカテゴリに分類される，様々なパターンによって終結することが示された．

Table 10-7 健常群夫婦の葛藤の開始方法の記述統計量

ケース番号	議論への導入		議論の開始		葛藤の回避
	問題意識を示す	問題提起の促進	議論の焦点を定める	問題意識の推察	雑談の焦点を定める
#001	0	0	20	0	5
#002	0	0	4	0	16
#003	3	2	27	2	3
#004	0	3	18	0	6
#005	2	3	13	0	4
#006	0	1	14	0	1
#007	0	0	10	0	5
#008	0	0	5	0	0
合計	5	9	111	2	40
平均値	0.63	1.13	13.88	0.25	5.00
標準偏差	1.83	2.92	33.17	0.88	12.53

続いて，各夫婦における夫婦間葛藤を開始するパターンの記述統計を Table 10-7 に示す．ほとんどの場合，夫婦の一方が＜議論の焦点を定める＞ことによって，夫婦間葛藤にまつわる議論が開始されることが示された．また，夫婦で合意に至っていない事柄について話

し合うように教示をしているにも関わらず＜議論の焦点が定め＞られないということは，《葛藤の回避》を表しているものと考えられる．その際，《議論への導入》および《議論の開始》は成立せず，ほとんどの場合，夫婦の一方が＜雑談の焦点を定める＞ことにより，夫婦間の葛藤を回避していると考えられる．さらに，しばしば，《議論の開始》の前段階として，《議論への導入》が行われることが見出された．

４．考察

本章は，会話分析の手法を用いて夫婦間相互作用を検討することを通じて，会話の中でどのような相互作用パターンが生起することによって，葛藤が生起し，扱われ，解消/留保/回避されるのかを探索的に明らかにすることが目的であった．

海外における先行研究からは，夫婦間コミュニケーションは，価（Valence）と強度（Intensity）の 2 軸上（Woodin, 2011），もしくは価と直接性（直接/間接）の 2 軸上（Overall, Fletcher, Simpson, & Sibley, 2009）に布置される，敵対や撤退，威圧等々に分類され，検討が行われてきた．また，国内の研究からは，夫婦間コミュニケ―ションの態度として，「共感」「依存・接近」などの因子が抽出（平山・柏木, 2001）されている．これらの知見は，研究者がメタ分析を基に作成したメタ・コーディング・システムを用いたり，研究者が開発した質問紙に個人が回答したものを用いて因子分析を行ったりすることで得られた知見である．それに対し，本研究は実験的手法により，実際に面接室で議論をする夫婦の様子を研究者が分析したものであり，夫婦関係を第三者が観察するという方法によって，既存の知見とは異なる知見を得られた点に意義がある．例えば，夫婦間のコミュニケーションで「葛藤回避」と考えられるパターンは，夫婦間葛藤の開始時，夫婦間葛藤の議論中，夫婦間葛藤の終結時のいずれにおいても生起することが示されたが，これは先行研究の知見からは見いだせない点であり，本研究から見出された新しい知見である．

さて，夫婦間葛藤にまつわる議論は，＜議論への導入＞＜議論の開始＞のいずれかによって開始されることが示された．また，夫婦間葛藤にまつわる議論が開始されない場合には，＜葛藤の回避＞によって雑談が始められることが示された．直感的には，＜議論の開始＞の「議論の焦点を定める」コミュニケーション・パターンに観られるように，夫婦間葛藤は夫妻の一方が問題意識を示し，それを受けて夫婦が話し合うという流れが想定される．しかし実際には，しばしば＜議論の開始＞の前に＜議論への導入＞段階が挿入される場合があること，＜議論の開始＞の際には配偶者が有している問題意識を推察する場合があること，雑談を始めることで葛藤を回避することなど，様々なパターンが見出された．

次に，夫婦が夫婦間葛藤を扱う際には，様々なコミュニケーション・パターンが用いられていることが示された.＜要求の明示＞＜葛藤の扱い方＞＜葛藤回避と要求の拒絶＞は，夫婦間葛藤がどのように扱われていくかを示したものである．夫婦は＜要求の明示＞を行った後，様々な＜葛藤の扱い方＞を用いて検討したり，様々なやり方で＜葛藤回避と要求の拒絶＞を行ったりする．また，夫妻がそれぞれ対立した主張をする議論の最中に，しばしば＜関係への配慮＞が行われていること，＜発話ターンの維持＞や＜笑いの生起＞といった会話表現の形式について，特徴的な夫婦間コミュニケーションを行っていることが示された.

先行研究においては，破壊的なコミュニケーションが夫婦関係に及ぼす影響に焦点が当てられることが多い.「破壊的なコミュニケーション」は，先行研究において明確な定義は殆ど見当たらないが，Deutsch（1998）は葛藤を，肯定的・生産的な結果，否定的・破壊的な結果のいずれにつながるかという点から区別している．否定的・破壊的な結果につながるような葛藤中のコミュニケーションは,「破壊的なコミュニケーション」と呼ぶことが出来るだろう．葛藤が建設的か破壊的かという点は，葛藤に関与する人のパーソナリティ，win-win な関係か win-lose もしくは zero-sum な関係か，葛藤がエスカレートするかどうかなど，複数の要因によって複合的に影響を受ける．これを踏まえ，本研究では破壊的なコミュニケーションを生産的なコミュニケーションと対比して位置付けた上で,「競争的で，葛藤状態を維持もしくは促進するコミュニケーション」と定義する．具体的には＜配偶者を非難する＞などのコミュニケーションがこれに相当する．また，議論からの撤退や回避もこれに含まれる.

本研究の結果からは，健常群の夫婦であっても，夫婦によって，あるいは夫婦が話し合っている葛藤の内容によっては，破壊的なコミュニケーションが認められた．例えば，＜葛藤回避と要求の拒絶＞のコミュニケーションがこれに相当するだろう．したがって，良好な夫婦関係かどうかを検討する際には，夫婦間で破壊的なコミュニケ―ションを採るかどうかではなく，その生起頻度や深刻さ，そしてどのように終結するかが問題であると考えられる.

さらに，夫婦間葛藤は，様々なコミュニケーション・パターンによって終結すること，および，しばしば葛藤の終結に失敗することが見出された．健常群の夫婦が常に上手く夫婦間葛藤を処理しているわけではなく，＜議論への導入＞＜議論の開始＞と同様に，＜葛藤の回避＞の段階においても，健常群夫婦はしばしば＜議論の並行＞＜拡散＞＜回避＞に

よって夫婦間葛藤を終結したり，＜議論の継続＞によって夫婦間葛藤の終結に失敗したりすることが明らかとなった．

今後の課題として，本研究の結果を基に，＜議論への導入＞＜議論の開始＞＜葛藤の回避＞それぞれの段階において，臨床群夫婦のコミュニケーション・パターンが健常群夫婦のコミュニケーション・パターンとどのように類似し，あるいは異なるのかを検討することが挙げられる．健常群にのみ認められるコミュニケーション・パターンを扱う，あるいは臨床群にのみ認められるコミュニケーション・パターンを避けることが夫婦関係の改善に役立つ可能性が考えられる．このように，臨床群夫婦に特徴的なパターンを特定することが出来れば，臨床場面における介入のターゲットとして扱うことが可能になる．

また，＜議論への導入＞＜議論の開始＞＜葛藤の回避＞それぞれの段階におけるコミュニケーションのパターンがどのような意味を持つのかについても検討する必要がある．例えば,「夫婦間で対立するテーマについて話し合うのではなく，雑談を始めることで＜葛藤の回避＞を行う」ことは，夫婦関係における緊張感を高めないという点では適応的な振る舞いである可能性がある．一方で，夫婦関係における緊張感を高めることが出来ないために，夫婦が対立する議論の代わりに雑談が始められる可能性も考えられる．また，＜議論への導入＞＜議論の開始＞＜葛藤の回避＞の様々なバリエーションによって夫婦間葛藤にまつわる議論を始めることが出来る夫婦とそうでない夫婦では，適応度に差が見られる可能性が示唆される.「夫婦間で合意に至っていない事柄について議論すること」を求められる状況において，＜葛藤の回避＞しか扱えずに雑談を継続する夫婦は，夫婦間葛藤の深刻度に合わせて＜議論への導入＞＜議論の開始＞＜葛藤の回避＞を使い分ける夫婦より不適応的である可能性が考えられる．

生態学的妥当性の点についても，今後の課題が残される．本研究は実験状況で実施されたものであり，日常生活場面におけるコミュニケーションとの相違については検討の余地がある．本研究においては，1 組あたり 30 分と充分な長さの会話データを収集しており，そこでは様々なコミュニケーション・パターンによって夫婦間の葛藤が扱われている．そのため，夫妻が夫婦間葛藤をどのように扱っているかということについて，充分な検討が行われたと考えられる．この点について，今後，実証的に示されることが期待される．

第 11 章　中年期の臨床群における夫婦間葛藤の会話分析，および健常群における夫婦間葛藤との比較検討

第 10 章では，中年期の健常群における夫婦間葛藤に会話分析を行い，夫婦間葛藤中のコミュニケーション・パターンを明らかにした．また，今後の課題の一つとして，臨床群との比較が重要であることが論じられた．

そこで本章では，中年期の臨床群における夫婦間葛藤のコミュニケーション・パターンについて，その特徴を明らかにすることを目的とする．さらに，健常群との比較を行うことで，健常群に特有のコミュニケーション・パターン，臨床群に特有のコミュニケーション・パターン，そして健常群および臨床群の両群に認められるコミュニケーション・パターンを区別することを目的とする．

１．問題と目的

Gottman & Silver（1999）は，適応的な夫婦関係を維持するための重要な要因として，口論に陥った際に夫婦が自身で立ち直ることが出来るかどうかを挙げている．立ち直るための試みは，リペア・アテンプト（repair attempt）と呼ばれている．夫婦間のコミュニケーションの問題が治療の焦点となっている臨床群夫婦においては，夫婦の一方もしくは repair attempt を行う術を持たない，もしくは夫婦の一方が repair attempt を試みるにも関わらず，それが効を奏さない可能性が考えられる．また，repair attempt の失敗は，葛藤関係からの撤退，もしくは葛藤状態のエスカレートにつながる可能性がある．

ただし，臨床群夫婦が健常群夫婦と異なり，常に破壊的なコミュニケーションを取るという風には考え難い．したがって，臨床群夫婦におけるコミュニケーションの中には，健常群夫婦におけるコミュニケーションと重複する部分が多く見られると考えられる．

２．方法

A．調査協力者

中年期の臨床群夫婦 9 組 18 名を対象とした．調査協力者は，共同研究者である，臨床経験が約 40 年の精神科医 1 名（以下，N 氏）によってリクルートされた．全ての調査協力者は，共同研究者によって夫婦で臨床心理面接による治療を受けている．調査協力者の平均年齢は 48 歳（*SD* =7.72），平均婚姻関係期間は 16 年 9 ヶ月（*SD* = 9 年 5 ヶ月）であった．臨床群の調査期間は，2013 年 1 月～2013 年 8 月であった．ただし，#C-008 および#C-009 については，Lee at al.（2013）のプロジェクトに参加中に収集したデータであり，調査期間は 2010 年 5 月～2010 年 6 月であった．臨床群夫婦の属性を Table 11-1 に示す．

Table 11-1　臨床群の調査協力者の属性

夫婦番号	夫/妻	年齢	職業	最終学歴	子どもの年齢（歳）	婚姻関係期間	年収（万）
#001	夫	46	会社員	大学	6	12年3ヶ月	1,000
	妻	41	専業主婦	大学院			–
#002	夫	41	会社員	大学	–	11年8ヶ月	800
	妻	43	専業主婦	短大			–
#003	夫	40	会社員	大学院	6	9年8ヶ月	1,200
	妻	39	会社員	大学院			550
#004	夫	59	団体職員	大学	31, 29	33年10ヶ月	1,000
	妻	62	専業主婦	大学院			30
#005	夫	51	会社員	大学院	17, 15, 13	18年8ヶ月	1,000
	妻	47	専業主婦	大学院			–
#006	夫	55	会社員	大学院	13	14年0ヶ月	900
	妻	54	専業主婦	大学院			–
#007	夫	56	会社員	大学	26, 22	28年4ヶ月	1,000
	妻	54	専業主婦	専門学校			–
#008	夫	48	会社員	大学	25	3年6ヶ月	1,800
	妻	33	専業主婦	大学			–
#009	夫	46	会社員	専門学校	16	19年0ヶ月	1,200
	妻	49	会社員	大学			480

次に，それぞれの調査協力者について，主治医の治療を受けるまでの来談経路およびリクルートの経緯を記述し，本研究における臨床群調査協力者の特徴を簡単に記述する．なお，個人情報の保護のため，記述の際には匿名性を保持することに配慮した．

#C-001 の夫婦は,「体調不良と, ボーっとして何を自分がしているのか分からなくなる」という抑うつの訴えで妻が精神科クリニックを受診，夫からの脅威的な暴言のせいもあると訴えたところ，N 氏のところで夫婦療法を受けることを勧められ，来談に至った．治療の経過の中で，夫の好戦的なコミュニケーション・パターンが Th にも向けられ，そのルーツの探索などの治療的介入を通じて，コミュニケーション・パターンの自覚が進んだ．この夫婦面接による治療の延長として，コミュニケーション・パターンの分析のためと研究への協力を依頼し，承諾を得た．

#C-002 の夫婦は，夫が受診した内科医から精神科クリニックが紹介され，そのクリニック勤務の精神科医からさらに N 氏が紹介されることで, N 氏による夫婦療法が導入された．夫の主訴は，抑うつ状態と ED によるセックスレスであった．夫の，性に対する嫌悪感（基本的に女性に興味を持つこと自体が悪だ）という姿勢は強固であった．心理検査の結果からは，IQ が高い一方で，自尊心が極めて低いこと，自己イメージが甚だ悪いこと，感情のコントロールが極めて悪いこと, 場に見合った感情表出が出来ないなどの特徴がみられた．妻との間でも被害的な発言がみられることから，コミュニケ―ションの改善のデータの収

集として研究協力を依頼し，承諾を得た．

#C-003 の夫婦は，妻が実母との関係が悪いため，個人カウンセリングを受けていたが，夫婦関係にも問題があるとのことから夫婦療法を勧められた．治療の初期から，夫婦間の問題の根源は夫が実家から精神的に離れられていないためだという，妻の強い主張が見られた．夫の両親は夫に対して極めて支配的で，夫は原家族との世代間境界が無い．夫は自身の実家と妻の間に入り，右往左往する状態が続いたことから，夫の原家族の問題が治療の焦点となっていた．その文脈で，夫婦間のコミュニケーションについて分析したいという旨を伝えると興味を示し，夫婦は研究への協力を受諾した．

#C-004 の夫婦は，夫が「社内でのトラブルが酷い」ことから，「夫婦で N 氏にかかって精密にアセスメントをしてもらい，指導を受けるように」と紹介され，N 氏の下へ来談．夫の心理検査の結果に障碍者対応の専門家である妻が興味を示し，検討していくことで合意した．夫は退職し，ハローワークで専門性を活かした仕事を探しているが，家にいる間に妻に対して細かく指摘するため妻がストレスを感じている．夫婦のコミュニケーションに問題があることからカウンセリングを継続している．その文脈で，夫婦間コミュニケーションの研究を紹介し，研究協力を打診したところ，夫婦は受諾した．

#C-005 の夫婦は，夫が「会社でのコミュニケーションが難しい」ために産業医の面接を受けたところ，家庭内でのコミュニケーションも困難を極めていることが判明し，N 氏の家族療法を勧められ，来談に至った．夫は PDD と AD/HD の傾向が認められ，現在は ASD であり，夫もこのことを自覚している．ロールシャッハ・テストの結果にも自閉性はクリアに表れており，また巨大な怒りをコントロールすることが出来ずに枝葉末節に固執する傾向も明らかで，適応上大いに問題があることが明らかになった．3 人の子ども達も ASD 傾向を有し，大きな適応上の問題を抱えている．妻は夫のそのような特徴を理解している．夫は自身のコミュニケーション障害に自覚があるため，夫婦間コミュニケーションの分析を進めると積極的に協力を表明した．また，治療の経緯の中で各種心理検査のフィードバックを行っていたことから，夫婦ともに研究へのレディネスは充分にあった．

#C-006 の夫婦は，息子の発達障害についての相談を継続してみてはどうかと N 氏が紹介され来談に至った．息子が「両親の虐待にあっている」と訴え，児童相談所に駆け込み，保護された．両親はこの児童相談所の対応に不満を持ち，児童相談所を相手取って交渉を重ねている．来談後，ロールシャッハ・テストの結果から妻の問題点が浮き彫りになり，そのために夫婦間のコミュニケーションが難しいことが明らかとなった．そこで本研究を

紹介し，研究への協力を依頼したところ，ほとんど抵抗なく夫婦は研究に参加した．

#C-007 の夫婦は，長女の BPD 行動に対して手が付けられずに妻が困惑し，長女の主治医に相談したところ，夫婦で N 氏のところへ行くように勧められ，来談に至った．長女の主治医は長女に個人面接を行う一方で，家族合同面接を N 氏が担当した．ただし，長女は家族合同面接に現れず，夫婦面接が続けられた．夫婦間で長女の問題行動に対処するのにコンセンサスを得るのが難しいということから，N 氏がコミュニケーションの問題点を再発見する上でも必要であると本研究の話を導入し，夫婦は研究への協力に同意した．

#C-008 の夫婦は，とある宗教関係の結婚相談所による紹介で結婚，3 年後に妻が妊娠・出産するが，夫や義理の母および義理の姉からサポートされず，抑うつで不安定となり通院に至った．主治医からは「適応障害」と診断を受けた上，夫婦療法を紹介され N 氏の下へ来談した．ロールシャッハテスト・フィードバックセッションの後，夫婦間のコミュニケーションについても興味があれば是非と研究への協力を依頼し，受諾した．

#C-009 の夫婦は，姑の認知症が進んだために同じ敷地内に住み始めてから妻が食思不振，不安，不眠を訴え，精神科の外来を夫婦で受診した．妻が経理を担当している夫の会社の人事や経営のことで，妻が夫に不満をぶつけるため，夫もうつ状態および手足のしびれを訴えていた．外来担当医が N 氏を紹介し，夫婦療法が開始された．夫婦療法の結果，妻の症状が軽快し，それに伴い夫の抑うつや身体症状も改善していった．治療の一環として，夫婦のコミュニケーションに関する研究への協力を依頼したところ，夫婦は受諾した．

以上より，研究協力者の臨床群夫婦は，それぞれ主訴や来談に至る経緯などが異なるが，夫婦療法の治療の，焦点の 1 つが夫婦間のコミュニケーションである点が共通している．

B. データの収集

データの収集は，第 10 章と同じ方法を用いた．データの収集は，共同研究者の所有する面接室にて行われた．調査協力者には研究の目的および手続きを説明し，参加の承諾を得た．その際，「現在，夫婦で合意に至っていない事柄について，30 分間議論していただきます．議論をしていただく内容については，子育てのやり方やその責任，結婚にまつわる意見の食い違い，法的問題，経済的問題，その他，過去や現在に家族に起こった重大な出来事など，なんでも構いません」と教示を行った．さらに，議論の後 30 分のデブリーフィング・セッションを設けた．デブリーフィング・セッションでは，夫婦の議論で話された内容に関する追加の質問，および議論を通じて生じた感情的な不快感への対処が行われた．

これらはすべて録画された[4].

C．面接室の状況

面接室の状況は，第 10 章の研究と全く同一であった（第 10 章参照）.

D．分析の戦略

臨床群の会話分析については，第 10 章の健常群の会話分析と同じ方法で行った．まず，録画したデータに基づいて，トランスクリプトを作成した．さらに，トランスクリプトを複数の部分に分割した．分割の際には，夫婦間で議論されている「テーマの移り変わり」を，分割のための指標として用いた.

続いて，可能な限り一切の予断を排した上で，繰り返し録画データを観たりトランスクリプトを読んだりする「帰納的探索（Inductive exploration）（Voutilainen, Peräkylä, & Ruusuvuori, 2011)」を行った．帰納的探索は，葛藤にまつわるやり取りにおいて繰り返される夫婦間の相互作用のパターンを特定することを目的とした.

最後に, 機能的探索によって特定された「繰り返される夫婦間相互作用」の例を収集し，それらについて，夫婦間相互作用の性質およびバリエーションを明らかにするため会話分析を行った（Peräkylä, 2004 を参照）．分析の焦点は，１．発話はどのように話し手および聞き手と関係するか，２．前の発話に続いて行われた発話がどのようなことを意味しているか，３．その発話は前の発話に対してどのように応じているか，４．その発話は次の発話に対してどのようなことを示唆しているか，の４点だった（第 10 章参照）.

E．分析方法

本研究の目的は, 会話の中でどのように葛藤が生起し, 夫婦間葛藤がどのように扱われ, そして解消/留保/回避されるのかを明らかにすることであった．そこでまず，すべての録画データについて逐語録を作成した．次に，逐語録を用いて葛藤生起場面を特定し，会話分析に用いるための詳細なトランスクリプトを作成した.

第 10 章の健常群の夫婦と同様に，夫婦間葛藤は基本的には,「夫婦間葛藤の開始」「夫婦間葛藤」「夫婦間葛藤の終結」の３段階から成ると考えられる．そこで，これら３段階について順番に検討する．夫婦間葛藤の開始段階では「夫婦間葛藤はどのように始められるのか？」，夫婦間葛藤段階では「夫婦はどのように夫婦間葛藤を取り扱うのか？」，夫婦間葛藤の終結段階では「夫婦間葛藤はどのように終結するか？」をそれぞれリサーチ・クエス

[4] なお，本章で用いているデータの一部は，Lee, et al.（2013）の日本チームの資料として用いられている点に留意されたい.

チョンとした．

さらに，健常群と臨床群の夫婦間葛藤について，比較を行った．健常群と臨床群の両群について，夫婦間葛藤の開始および終結のパターンを分類し，生起頻度を数えた．

続いて，健常群データの分析から得られた結果と臨床群データの分析から得られた結果を対応付けて比較するため，健常群データの分析から得られたカテゴリを参照しつつ，臨床群データの分析から得られたカテゴリを修正し，カテゴリの統合を行った．

最後に，健常群データと臨床群データにおける夫婦の葛藤数を，t 検定を用いて比較した．さらに，夫婦間葛藤の形式的側面に注目し，葛藤開始段階および葛藤終結段階について，健常群夫婦と臨床群夫婦のコミュニケーション・パターンを，χ^2 検定を用いて比較した．χ^2 検定では，葛藤開始段階および葛藤終結段階における各シークエンスの合計を比較した．ただし，健常群と臨床群の夫婦数が異なったため，単位時間あたりに出現したシークエンス数が等価になるように，調査協力夫婦数に対応した重みづけを行った．具体的には，健常群における各シークエンスの出現頻度を 8/9 倍した上で χ^2 検定を行った．これらの分析には，Microsoft Excel 2010 ver. 14.0 を用いた．

３．結果

本章は，会話分析の手法を用いて夫婦間相互作用を検討することを通じて，会話の中でどのような相互作用パターンが生起することによって，葛藤が生起し，扱われ，解消/留保/回避されるのかを探索的に明らかにすることが目的であった．

第 10 章と同様に，夫婦間葛藤は，「夫婦間葛藤の開始」「夫婦間葛藤」「夫婦間葛藤の終結」の 3 段階から構成されると考えられた．ただし，「例えば夫婦の一方が問題意識を提示するものの，もう一方が拒否し，その問題意識に関する葛藤が終結する」というように，例外的に３段階の全部が揃わない場合も認められた．

A．夫婦間葛藤の開始

本項のリサーチ・クエスチョンは，「夫婦間葛藤はどのように始められるのか？」ということであった．会話分析の結果，夫婦間葛藤を開始するパターンとして，3 種類のシークエンス，7 つのパターンが見出された（Table 11-2）．

ｉ．議論への導入　1 つ目のシークエンスは，《議論への導入》であった．ここでは夫婦間葛藤を始めるための導入が行われており，葛藤の準備をしている段階である．このシークエンスには，＜問題意識の存在を示す＞＜問題提起の促進＞＜議論の焦点候補の羅列＞＜議論の方法を示す＞の 4 パターンが含まれた．ここでは，臨床群にのみ見られた＜議論の

焦点候補の羅列＞＜議論の方法を示す＞の 2 パターンを示す.

Table 11-2 臨床群における夫婦間葛藤の開始パターン

シークエンス名	説明
議論への導入	
問題意識の存在を示す	何かしらの問題意識を有していることを示す。
問題提起の促進	問題提起を促進する。 夫婦間葛藤のテーマを挙げるように配偶者を促すほか、自身に関する問題意識を尋ねて、問題提起を促進する場合もある。
●議論の焦点候補の羅列	議論の焦点の候補を複数挙げる。
●議論の方法を示す	提示された問題意識についての議論を始める前に、どのような方法で議論を行うかについて検討する。
議論の開始	
議論の焦点を定める	議論の焦点を定める。話題を転換しつつ、議論の焦点を定める場合もある。 また、議論の焦点の抽象度には幅がある。 さらに、内容には「直接的な論点の提示」の他、「不平・不満」や「洞察」など様々なバリエーションがある。
問題意識の推察	夫婦のうち、問題意識を持たない一方が、もう一方の有している問題意識を推察する。
葛藤の回避	
雑談の焦点を定める	雑談の焦点を定める。夫婦間の葛藤に直接関係しない話題について、焦点が定められる。

Note. ●印が付いているシークエンスは，健常群には観察されなかったことを示す.

Extract A’-1 は＜議論の焦点候補の羅列＞の例である．なお，本章も前章と同様に，項名「A.夫婦間葛藤の開始」に対応して ExtractA’-X として引用し，該当箇所を記述する．健常群のデータと区別するため，A’とした．妻は 04 行目，06 行目，08 行目で葛藤の焦点となる問題意識を羅列している．11 行目で，夫がその中から 1 つを選び，夫婦間葛藤の焦点が定められ，夫婦間葛藤の議論が開始される．

Extract A’-1＜#C-005＞

01　夫：そんなにお金がないっていうのは，僕も把握出来ていない.

02　妻：うん.

03　夫：把握できていないんだけど，はっきり言って.

04　妻：だってあのー．**まあお金のことでしょ.**

05　夫：うん.

06　妻：**それから子育てのことでしょ.**

07　夫：うん.

08　妻：**あのー，休暇の使い方.**

09　夫：はい.

10　妻：挙げるといっぱいあるでしょう.

11　夫：いや，まずは，何故，金の使い方とかさ.

Extract A’-2 は＜議論の方法を示す＞の例である．夫は 02 行目で，子育てについて話し合うことに同意した後,「まずは最初から？」と，どうやって検討していくか，その方法について言及している．それを受けて，妻は 03 行目で「いつも過去のことを言ってもしょうがない」ということを指摘し，子育てについて，過去のことを話しあうことを拒否している．

Extract A’-2＜#C-007＞

01　妻：いっつもいっつも，どうしてこうなっちゃったのかなあっていっつもいっつも思ってる.

02　夫：うん．じゃあ，今まさに悩んでいる問題として，子育てか．子育て，教育とか，子育てについて，えー，話しますか．うーん．**まずは，最初から？　うーん，Y が生まれた時？**

03　妻：え．**だっていつも言うじゃない，過去のことを言ってもしょうがないって．**いつも私が昔のことを言うとさ，過去は変わらないんだから.

04　夫：うん.

ⅱ．議論の開始，葛藤の回避　2 つ目のシークエンスは《議論の開始》であった．夫婦の一方によって具体的な議論の焦点が定められることによって，夫婦間葛藤が開始される．さらに，3 つ目のシークエンスは，葛藤の回避であった．夫婦間葛藤に関係の無い話題に焦点を当てることによって，夫婦間葛藤が回避される．これらは，健常群における夫婦間葛藤の開始シークエンスと同様であった.

３．まとめ

以上より，夫婦間葛藤は夫婦の一方が＜議論の焦点を定める＞あるいは＜問題意識の推察＞をするによって開始されることが見出された．またその前段階として，夫婦の一方が＜問題意識の存在を示す＞，＜問題提起の促進＞を行う，＜議論の焦点候補の羅列＞を行う，あるいは＜議論の方法を示す＞ことによって,《議論への導入》がなされる場合が見ら

れた．＜議論の焦点候補の羅列＞および＜議論の方法を示す＞シークエンスは健常群のデータからは観察されず，臨床群においてのみ見出された．また，＜問題意識の推察＞は，夫婦の一方が＜問題意識の存在を示す＞のを受けて生起することが示された．さらに，夫婦間葛藤を回避するパターンは，夫婦の一方が＜雑談の焦点を定める＞ことによって開始されることが見出された．

B．夫婦間葛藤の扱い方

本項のリサーチ・クエスチョンは，「夫婦はどのように夫婦間葛藤を取り扱うのか？」と

Table 11-3 夫婦間葛藤のプロセスにおいて繰り返されるパターンの比較

シークエンス名		カテゴリ名	説明	健常群(n=8)	臨床群(n=9)
要求の明示	◎	要求を伝える	配偶者に対して、自身の要求を伝える。	8	9
	◎	意向を確認する	配偶者に対して、配偶者の要求を尋ねる。	7	8
	◆	要求の修正の繰り返し	夫婦のいずれか一方が有している要求が配偶者に伝わらず、追加の説明を行ったり表現を変えたりして要求を修正する。	−	3
葛藤の扱い方	◎	現況の共有	夫婦間葛藤に関し、現在の状況を共有する。自身の理解している現況を述べる場合と、配偶者に現況を尋ねる場合のいずれもが存在する。	8	9
	◎	原因の探索	繰り返しているパターンの洞察や原因にまつわる仮説を示すなど、夫婦間葛藤の原因を探索する。	5	8
	☆	譲歩	夫婦間葛藤の議論を経て、不本意な点を残しつつ自身の要求を取り下げる、あるいは配偶者の要求を受け入れる。	6	−
	◎	問題意識の価値下げ	配偶者の要求を満たしていることを伝える、あるいは配偶者の有している問題意識は大げさだと価値を下げる。	4	5
	◎	解決策の提案	解決策を提案する。 自分が提案する場合も、相手に提案を求める場合もある。	8	8
	◎	論点の整理	夫婦間葛藤に関連する論点を整理する。	5	7
	◆	権威を用いた主張	治療者の発言や書籍に書かれている内容、一般論、宗教上の教え、統計的知見などの権威を用いて、配偶者の説得を試みる。	−	4
葛藤回避と要求の拒絶	◎	話題の転換	夫婦のいずれか一方が話題を転換することで、夫婦間葛藤を回避する。	5	8
	◎	開き直り	配偶者から提示された夫婦間葛藤の解決策に対して、開き直ることで拒絶する。	5	4
	☆	責任転嫁	配偶者から提示された夫婦間葛藤の解決策に対して、第三者が容認しないことを理由に拒絶する。	2	−
		議論の拒絶	夫婦間葛藤に関する議論の進行を、直接的に拒絶する。	1	2
		時間への言及	研究協力時間に言及することで葛藤を回避する。	2	3
関係への配慮		努力の承認	夫婦間葛藤の解消に向けて配偶者が行っている努力を承認する。	2	2
	☆	深刻度の管理	「議論が並行して対立が深刻化する」前に論点を戻す。	2	−
		否定の前置き	配偶者の主張を否定する際に前置きをする。	1	2
		配偶者を非難する	議論の途中で、配偶者を非難・攻撃する。	2	3
	◆	共感的な応答	夫婦間葛藤にまつわる議論の中で、夫婦は互いに共感的な応答をする。	1	5
発話ターン		発話ターンの維持	長時間にわたって、夫婦の一方が発話ターンを維持する。	1	2
		発話ターンの取得争い	発話の重複が続き、発話ターンの取得を夫婦で争う。	1	2
笑い		不適切な笑い	不適切なタイミングで笑い、配偶者の提案や要求などを拒絶する。	1	2
	◎	笑いの共有	夫婦の両方が笑いながら和やかに議論をする。	8	5

注．◎は健常群にも臨床群にも多く見られたカテゴリ，☆は健常群に特徴的なカテゴリ，◆は臨床群に特徴的なカテゴリ，無印は健常群にも臨床群にもしばしば見られたカテゴリを意味する．右欄にはそれぞれのカテゴリが何組の夫婦にみられたかを示しているが，その数が少ないことは，そのカテゴリの重要性が低いということには直結しないことに留意されたい．

いうことであった．会話分析の結果，夫婦間葛藤のプロセスにおいて繰り返されるパターンとして，6 種類のシークエンス，22 種類のカテゴリが見出された（Table 11-3）．ここでは，臨床群にのみ見られたパターンのみを例示する．

ｉ．要求の明示　1 つ目のシークエンスは，《要求の明示》であった．ここでは，夫婦の一方が配偶者に対して行っている要求の明示・明確化が行われる．さらに，臨床群に特有のパターンとして，＜要求の修正＞が見られた．

Extract B’-1 は＜要求の修正＞の例である．01 行目で，妻は夫に対して，「ADHD だと分かった時にどう思ったか」を尋ねている．それに対して夫は，05 行目で「何をもって ADHD とするのかが分からない」と応じつつも，07 行目で，「片づけられない」などのレベルでは認識していたことを答えている．妻は，01 行目で尋ねたことに対する回答を得られていないために，改めて 10 行目で夫に対して問い直している．その後，夫婦の議論は継続するも，妻は満足が出来る回答を夫から得られず，15 行目に改めて，「ADHD であるという認識を持っていることについてどう思っているかを聞いている」と問い直している．ここでは，妻は夫に対して何度も問いを投げかけており（「ADHD であるという認識を持ったことに対してどう思っているのか」），また夫もそれに応じているが，やりとりは噛み合わない．そこで妻は，内容的には同一であるが異なる尋ね方をする「要求の修正」を行い，問いを重ねている．

Extract B’-1＜#C-004＞

01　妻：**あの，**（夫が自身に）**ADHD の障害っていうのが分かった時にどう思いました？**

02　夫：はあ．

03　妻：それを聞きたい．

04　夫：まずそれが，理解が違うのね．

（中略）

05　夫：**何をもって ADHD とするかとかいうのがわかんない．**

06　妻：うん．

07　夫：あと，一般的な事項．片づけられないとかさ．

08　妻：うん．

（中略）

09　夫 : そういったレベルのところでは，私自身は，分かっていた．認識はしていました．

10　妻 : うん．**だけどその自分が ADHD の障害があると，まあ，認識が，した時に，えっと思ったのか，あるいは自分の障害が，認めようと思ったのか，否定しようと思ったのか．**それはどうなんでしょうか．

（中略）

11　妻 : その ADHD という障害があるっていうことは．

12　夫 : うん．

13　妻 : 別に他の人と比べてどうのこうのじゃなくって，自分が持っているものだから．

14　夫 : うん．

15　妻 : **それについての認識をどう，持っていることについてどう思うかって聞いているの．**

注．（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した．

ⅱ．葛藤の扱い方　2 つ目のシークエンスは，《葛藤の扱い方》であった．ここには，6 つのカテゴリが含まれていた．健常群夫婦にみられた＜譲歩＞のシークエンスは見られず，代わりに臨床群特有のシークエンスとして＜権威を用いた説得＞が見出だされた．

Extract B’-2 は，＜権威を用いた説得＞の例である．01 行目で，妻は子どもにピアノを買い与えなかったことについて，良くなかったと振り返っており，何でも「いけない」という夫を責めている．それに対して夫は，02 行目で「なんでもノーというわけではない」と反論し，さらに 06 行目で「統計的に比較をすることもなく『なんでもノーと言う』と言われることは心外だ」と反論している．「統計的な比較」という権威を議論に持ち出し，「それが欠けている」ために「なんでもノーというわけではない」という論理で，妻の主張に対して権威を用いつつ反論を試みている．

Extract B’-2＜#C-006＞

01　妻 : もっといいもの，もっといいものをとか思っていて，すぐに買ってあげなかった，あれはやっぱりよくなかったなと思うよ．で，お父さん（夫）はなんでもいけないいけないって．

02　夫 : いや，なんでもいけないいけないって言ってないじゃない．

03　妻：あたしがお金を出すからって.

04　夫：それはお母さん（妻）の記憶，記憶としてね，そういう風に記憶されているのかも知れないけど.

05　妻：そうあと場所もないなと思っていたの，あたしは.

06　夫：**そんなこと言うんだったらね，他の人はいったいどうなんだと．他のうちでね，その，それはダメだって言ってさ，それでいったい，何回さ，ノーが出てくる．それに対してうちは何回ノーが出てくる．それは統計的にちゃんと比較をしてね，その上で議論になるんだったらまだわかるけれども．**ノーだなんて言ったら，あなたはノーだノーだノーだよなんて言われちゃったら，それは困るよねえ.

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

ⅲ. 葛藤回避と要求の拒絶　3 つ目のシークエンスは,《葛藤回避と要求の拒絶》であった．ここには，4 つのカテゴリが含まれていた．健常群夫婦にみられた＜責任転嫁＞のシークエンスは見られず，代わりに臨床群特有のシークエンスとして＜時間への言及＞が見出だされた.

Extract B’-3 は＜時間への言及＞の例である．夫婦は金銭管理について議論をしている．夫は 01 行目で支出を減らすことを提案している．03 行目で贅沢を減らすことを提案している夫に対し，04 行目で妻は贅沢をしていないと反論し，議論は並行している．08 行目で妻は，研究協力時間に言及しており，ここで議論は拡散している．09 行目で夫は議論を継続し始めているが，10 行目に妻は新たな議論の焦点を定め，支出を減らす話から論点は移行する.

Extract B’-3＜#C-005＞

01　夫：やっぱりそれは支出をどうやって減らしていくかをきちんと考えていかないといけないだろう.

02　妻：なるほど.

03　夫：どうやって贅沢を.

04　妻：贅沢なんてしてないじゃん.

05　夫：してるじゃん.

06　妻：洋服だってさ，500 円の服着て満足しているあたしがさー.

07　夫：それはまあそこはそうなんだけどさ．オレだってそんなに．まあこの前は背広買わせて貰ったけどさ.

08　妻：うん．どっかが違うよねえ．**あと 10 分か．**うん．＊＊（聞き取れず）

09　夫：だから.

10　妻：お金のことよりは，K（子ども）のこと，そっちの方が大事だと思う，あたしは.

11　夫：うん．K．選ばなければどこでも大学行けるわけでしょう？

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

ⅳ．関係への配慮　4 つ目のシークエンスは，《関係への配慮》であった．ここには，5 つのカテゴリが含まれていた．健常群夫婦にみられた＜深刻度の管理＞のシークエンスは見られず，代わりに臨床群特有のシークエンスとして＜配偶者を非難する＞＜共感的な応答＞が見出だされた.

Extract B’-4 は＜配偶者を非難する＞の例である．K（子ども）との関わり方について，夫婦は議論をしている. 同じ立場に立つことが重要だろうという文脈で, 01 行目の夫の「親父が K のメイクと同じ次元に立てない」と発言する．これは，K の父親である夫が，高校生である K と同じようなメイクをすることは出来ない, という意味である. これに対して，妻は 02, 04, 06 行目で「きもい」「ずれたことを言っているから嫌がられる」と非難し，咎めている.

Extract B’-4＜#C-005＞

01　夫：　まさか親父があの K（子ども）のメイクと同じ次元には立てねえんだよなあ.

02　妻：**きもい.**

03　夫：え？

04　妻：**きもい.**

05　夫：俺がメイクすんのかっていう.

06　妻：**そういう意味じゃないでしょ．でそういうねえ，ずれたことを言っているからねえ，嫌がられるのよ.**

07　夫：だって，だから同じ次元に立つっていうのはさ，どういうことなのかな.

注.（　）内は，引用部分の内容や文脈の理解を容易にするために筆者が補足した.

Extract B’-5 は，＜共感的な応答＞の例である．妻は夫に対して「ADHD だという認識を持った時，どのように思ったか？」ということを問いかけて，夫婦は議論を継続している．妻の問いに対して夫が答えるが，妻の問いかけている内容に沿う答えではないと妻は感じており，01 行目で改めて問題意識を明確化している（＜要求の修正＞）．それを受けて夫は妻の問いに答え，妻も共感的な姿勢（13, 15, 19 行目）で夫の答えを聞いている．

Extract B’-5＜#C-004＞

01　妻：**それについての認識をどう，持っていることについてどう思うかって聞いているの.**

02　夫：そうすると.

03　妻：うん.

04　夫：逆に，私としてみれば.

05　妻：うん.

06　夫：さっきちょっと，まあちょっとさきほどと言い方を変えるけどね.

07　妻：うん.

08　夫：今までこう育ってくる中で.

09　妻：うん.

10　夫：あのほかの人と違うなっていう言葉をここではまた使うけども.

11　妻：うん.

12　夫：違う場面が散々あった.

13　妻：**うん．そうだね．そう思うね.**

14　夫：もの凄くいっぱいあった.

15　妻：**すっごいいっぱいあったと思う.**

16　夫：それが，さっき言ったみたいに.

17　妻：うん.

18　夫：他の人にはなれないっていうのは，そこらへんの事を，指したかったのね.

19　妻：あ，そっかそっか．うんうん．

ｖ．発話ターンの維持　5 つ目のシークエンスは，《発話ターン》であった．ここには，2 つのカテゴリが含まれていた．健常群夫婦にみられた＜発話ターンの維持＞に加えて，臨床群特有のシークエンスとして＜発話ターンの取得争い＞が見出だされた．なお，これまでの分析と異なり，発話の重複などを示すために，会話分析において使われる記号を用いて例を示す．

Extract B’-6 は，＜発話ターンの取得争い＞の例である．夫婦は自宅 1 階のスペースについて議論を行っている．妻は，「本来，1 階の部屋はデスク空間として設計されている」ということを主張している．それに対して，01 行目で夫は反論を試みている．さらに，03 行目で何か主張を付け加えようとしているが，妻は夫の発言を待たずに 01 行目の夫の発言に対する反論を 04 行目で始め，発話が重複している．04 行目の妻の発話に対して，夫は 05 行目で反論を試みるも，06 行目で妻が発話ターンを取得する．しかしその後，06 行目の妻の発話に重複して 07 行目で夫は発話を開始し，08 行目で妻の発話が重複しているにも関わらず，09 行目で夫は発話を継続し，発話が重複した状態が続く．妻は 09 行目で夫の発話に重複して発話を試みるも，夫はそのまま発話を継続し，そのまま 10 行目で夫は発話ターンを取得する．このように，発話の重複が強引に継続され，発話ターンの取得争いのパターンが見られた．

Extract B’-6＜#C-006＞

01　夫：でも本来あそこはデスク空間かどうかなんて言うのはね．

02　妻：　　=うーん．

03　夫：誰が決めるの？　それ[からそれがね．]

04　妻：　　[だって>上の照明を見てみるとそういう風に]

05　夫：　　[=いや違う違う違う違う違う違う違う-]

06　妻：出来ているから間違いなく誰が決めるの[かも何も．<]

07　夫：　　[いやいやそれは間違い．]

08　妻：　　[＊＊＊＊（聞き取れず）-]

09　夫：[そういう風にね．家が．]そういう風に，見えるからと言ってね．

10　妻：　　[出来てるじゃん．]　　[見えるからじゃなくてそ

ういう風に出来てるじゃん．]

11　夫：[こうしなきゃいけないという風]にはね，決まってないし．そんなこというんだったら，なんで＊＊＊（聞き取れず）そういう風にしなかったのかとかね．そういういっぱい色んな議論が出てきちゃうじゃない．それは違うよ．

注．トランスクリプトの記号リスト

[ ]（空白）：会話の重複の始まりと終わり．

=（等号）：発話に間が無い．

-（ダッシュ）：発話の中断．

>文字<：前後に比べ早いペースのやりとり．

<文字>：前後に比べゆっくりとしたペースのやりとり．

__（下線）：強調された発話．

太字：分析において注目する発話部分．

（文字）：（丸括弧）：転記者が聞き取りに確信の持てない部分．

比較のために参照出来るように，Extract B’-6 と同じ夫婦において＜発話ターンの取得争い＞が見られなかった部分を Extract B’-7 に示しておく．

Extract B’-7＜#C-006＞

01　妻：あたし一回話し合いたいなあって思っていることは．

02　夫：　　うん．

03　妻：いっつも同じで不愉快な思いをさせてしまって悪いんだけれども．

04　夫：　　＝うん．

04　妻：ほんとにK（子ども）が．帰ってくることを考えたら，<あたしは>．

05　夫：　　=うん

06　妻：いつ，いつそういう話になってもいいように，準備，心の準備をしてね．

07　夫：　　=うん　　=うん．

08　妻：私たちが３階で，Kが，ああ，私たちは下で，

09　夫：　　=うん．

10　妻：Kが３階で暮らせるような，体制を．取っておきたいと思うのね．

11　夫：　　=うん　=うん　　子どもが帰っ

って，いつ帰ってきても好いように，準備をしておきたい.

12　妻：　　**=うん.**

13　夫：でそ**[の時に]**.

14　妻：　　**[心の準備は]**，>具体的な準備は<やっぱり心の準備だよ.

15　夫：　　うん，まあね.

夫婦は，家を出ている子ども（K）が帰ってくる場合に，K のために３階のスペースを空けて，両親は１階で暮らすことの是非について話し合っている．夫妻の一方が配偶者に対して相槌を打つ場合，文字に起こした場合，句点となるような発話の隙間に打たれることが多く，発話は重複しない．02 行目のように，相槌の直前に充分な発話の空間がある場合と，04 行目，07 行目などにみられるように，前の発話に間髪入れず相槌が打たれる場合が見られた.

また，13 行目の終りでは，夫の発話に対して妻の発話が重複している．しかし，基本的に発話者は一人であるという会話のルールに従い，夫は発話ターンを妻に譲り，14 行目のように妻が発話を継続する．このようなやりとりによって，＜発話ターンの取得争い＞は回避されている.

ⅵ．笑いの生起　6 つ目のシークエンスは《笑い》であった．健常群の会話パターンと同様に，臨床群においても，2 つのカテゴリのパターンが見出された.

ⅶ．まとめ　以上より，臨床群における夫婦間葛藤は，健常群夫婦と同様に，＜要求の明示＞＜葛藤の扱い方＞＜葛藤回避と要求の拒絶＞＜関係への配慮＞＜発話ターン＞＜笑い＞の 6 種類のシークエンスによって扱われることが見出された. これらのシークエンスは，さらに複数のカテゴリに分類された.

殆どのコミュニケーション・パターンは健常群と臨床群のいずれにもみられる一方で，健常群のみに認められる夫婦間葛藤の扱い方，および臨床群のみに認められる夫婦間葛藤の扱い方が示された.

C．夫婦間葛藤の終結

本項のリサーチ・クエスチョンは,「夫婦間葛藤はどのように終結するか？」ということであった．会話分析の結果，夫婦間葛藤を終結するパターンとして，2 種類のシークエンス，6 つのパターンが見出された（Table 11-4）.

健常群と比較して，臨床群夫婦には＜譲歩＞による夫婦間葛藤の終結が見られなかっ

た．その他のパターンについては，健常群と臨床群で違いは見られなかった．

Table 11-4 臨床群夫婦における夫婦間葛藤の終結パターン

シークエンス名	説明
夫婦間葛藤の終結	
解決策の合意	夫婦のいずれかによって提案された解決策に合意し、夫婦間葛藤を終了する。
先延ばし	結論を先延ばしにし、夫婦間葛藤を終了する。
議論の並行	夫婦間の議論は平行線を辿り、合意に達しないまま話題が転換されることで、夫婦間葛藤が終結する。
拡散	夫婦間葛藤の焦点は拡散し、夫婦間葛藤が終結する。
譲歩	夫婦のいずれか一方が譲歩し、夫婦間葛藤を終了する。 葛藤のテーマについては合意に至らないが、夫婦のいずれか一方が、相手の主張を受け入れることで夫婦間葛藤を終了する。
回避	夫婦のいずれか一方によって定められた夫婦間葛藤のテーマについて話し合うことを配偶者は拒否し、夫婦間葛藤を終了する。
夫婦間葛藤終結の失敗	
議論の継続	夫婦のいずれかによって提案された解決策に合意した後も、議論の焦点は変わらないまま、夫婦はそれぞれ自身の主張を繰り返すやりとりが継続される。

D.　健常群と臨床群の夫婦間葛藤パターンの記述統計

本項では，健常群と臨床群の両群について，夫婦間葛藤のコミュニケーション・パターンの記述統計を示す．30 分の議論で話し合われた葛藤のテーマ数は，健常群の方が臨床群よりも多く，約 2 倍であった（Table 11-5, 11-6）．t 検定の結果，両群に有意な差が認められた（$t = 2.13$, $df=15$, $p < .001$）．

続いて，葛藤開始の段階のコミュニケーション・パターンについて記述統計量を示す．両群ともに，主として＜議論の焦点を定める＞ことによって夫婦間葛藤を開始することが示された（Table 11-7, 11-8）．また，＜議論の焦点を定める＞あるいは＜雑談の焦点を定め

Table 11-5 健常群夫婦の葛藤テーマ数（再掲）

ケース番号	葛藤のテーマ数
#001	25
#002	20
#003	37
#004	26
#005	22
#006	17
#007	15
#008	5
合計	167
平均値	20.88
標準偏差	9.31

る＞ことで夫婦間葛藤を開始する頻度は，健常群夫婦が臨床群夫婦の約 2 倍見られた．＜議論の焦点を羅列する＞あるいは＜議論の方法を示す＞ことによって夫婦間葛藤を開始するというコミュニケーション・パターンは，臨床群においてのみ見られた．これら 2 つのコミュニケーション・パターンの生起頻度は低かった．このことには，次の 2 つの可能

Table 11-6 臨床群夫婦の葛藤テーマ数

ケース番号	葛藤のテーマ数
#C-001	10
#C-002	10
#C-003	5
#C-004	11
#C-005	18
#C-006	14
#C-007	10
#C-008	10
#C-009	10
合計	98
平均値	10.89
標準偏差	3.52

性が考えられる．1 つの可能性は，＜議論の焦点を羅列する＞あるいは＜議論の方法を示す＞というコミュニケーション・パターンが生起頻度の低いパターンであり，それがたまたま今回，臨床群においてのみ見られたという場合である．この場合は，これら 2 つのパターンが臨床群においてのみ見られたということは重要な意味を持たないと考えられる．もう 1 つの可能性は，これら 2 つのパターンは，生起頻度は低いが臨床群においてのみ生起するパターンである，というものである．この場合，「臨床群においてのみ生起した」という点が重要な意味を有するため，生起頻度が低いとはいえ，その出現を無視することは出来ない．

次に，葛藤終結段階のコミュニケーション・パターンについて記述統計量を示す（Table 11-9, 11-10）．健常群夫婦は，主として＜解決策の合意＞，＜議論の並行＞，＜拡散＞によって夫婦間葛藤を終結することが示された．また，葛藤の総テーマ数の約 22%において＜議論の継続＞が見られた．一方，臨床群夫婦は，＜議論の並行＞もしくは＜拡散＞によって夫婦間葛藤を終結することが示された．

最後に，χ^2 検定の結果を示す．ただし，葛藤開始段階および葛藤終結段階において，健常群あるいは臨床群のいずれか一方にのみ認められたシークエンスや，いずれの群においても出現頻度が極めて低かったシークエンスなどがあり，一部のシークエンスにおいて出

現頻度が 5 に満たないものが認められていることから，以下に述べる検定結果は参考程度に留めて理解する必要がある．χ^2 検定の結果，葛藤開始段階における各シークエンスの出現頻度は，健常群と臨床群で統計的に有意な差は認められなかった（χ^2（6）=3.28, *n.s.*）.

Table 11-7 健常群夫婦の葛藤開始段階のコミュニケーション・パターン（再掲）

ケース番号	議論への導入		議論の開始		葛藤の回避
	問題意識を示す	問題提起の促進	議論の焦点を定める	問題意識の推察	雑談の焦点を定める
#001	0	0	20	0	5
#002	0	0	4	0	16
#003	3	2	27	2	3
#004	0	3	18	0	6
#005	2	3	13	0	4
#006	0	1	14	0	1
#007	0	0	10	0	5
#008	0	0	5	0	0
合計	5	9	111	2	40
平均値	0.63	1.13	13.88	0.25	5.00
標準偏差	1.83	2.92	33.17	0.88	12.53

注．%は，葛藤のテーマ総数に対する割合を示す.

Table 11-8 臨床群夫婦の葛藤開始段階のコミュニケーション・パターン

	議論への導入				議論の開始		葛藤の回避
ケース番号	問題意識を示す	問題提起の促進	焦点の羅列	議論方法を示す	議論の焦点を定める	問題意識の推察	雑談の焦点を定める
#C-001	1	0	0	0	9	0	0
#C-002	1	0	0	0	9	0	2
#C-003	0	0	1	0	3	0	2
#C-004	0	1	0	0	10	0	0
#C-005	0	0	1	0	15	0	5
#C-006	1	1	0	1	14	0	0
#C-007	0	0	1	1	5	0	3
#C-008	0	1	0	0	2	0	7
#C-009	0	3	0	0	7	1	0
合計	3	6	3	2	74	1	19
平均値	0.33	0.37	0.33	0.22	8.22	0.11	2.11
標準偏差	0.50	1.00	0.50	0.44	4.49	0.33	2.52
%	3	6	3	2	76	1	19

注．%は，葛藤のテーマ総数に対する割合を示す.

一方，葛藤終結段階における各シークエンスの出現頻度は，健常群と臨床群で統計的に有意な差が認められた（χ^2（6）=0.22, p<.001）．Table11-11 に各シークエンスの調整済み残差を示す.

４．考察

本研究は，臨床群夫婦について夫婦間葛藤のコミュニケーション・パターンを探索的に検討すること，さらに，健常群夫婦と比較し，健常群と臨床群の夫婦間葛藤におけるコ

Table 11-9 健常群夫婦の葛藤終結段階のコミュニケーション・パターン（再掲）

ケース番号	夫婦間葛藤の終結						夫婦間葛藤終結の失敗
	解決策の合意	先延ばし	議論の並行	拡散	譲歩	回避	議論の継続
#001	8	0	2	13	0	0	2
#002	0	0	0	18	0	1	0
#003	6	0	16	7	2	1	5
#004	14	0	1	9	1	0	3
#005	2	1	9	7	0	0	2
#006	1	0	9	3	1	0	2
#007	7	0	0	6	1	0	20
#008	3	0	0	0	0	1	2
合計	41	1	37	63	5	3	36
平均値	5.13	0.13	4.63	7.88	0.63	0.38	4.50
標準偏差	4.61	0.00	6.00	5.62	0.74	0.52	6.41

注．%は，葛藤のテーマ総数に対する割合を示す．

Table 11-10 臨床群夫婦の葛藤終結段階のコミュニケーション・パターン

ケース番号	夫婦間葛藤の終結					夫婦間葛藤終結の失敗
	解決策の合意	先延ばし	議論の並行	拡散	回避	議論の継続
#C-001	2	0	7	3	0	2
#C-002	0	0	7	3	0	0
#C-003	0	0	0	4	1	0
#C-004	0	0	3	7	0	1
#C-005	3	1	8	6	0	0
#C-006	0	0	8	1	5	0
#C-007	2	0	0	8	0	0
#C-008	3	0	1	5	0	2
#C-009	0	0	3	7	0	2
合計	10	1	37	44	6	7
平均値	1.11	0.11	4.11	4.89	0.67	0.78
標準偏差	1.36	0.33	3.41	2.32	1.66	0.97
%	10	1	38	45	6	7

注．%は，葛藤のテーマ総数に対する割合を示す．

Table 11-11 葛藤終結段階のコミュニケーション・パターンの調整済み標準化残差

	解決策の合意	先延ばし	議論の並行	拡散	譲歩	回避	議論の継続
非臨床群（調整済み）	0.76	−0.02	−1.03	−0.64	0.14	−0.21	0.74
臨床群	−0.95	0.03	1.30	0.80	−0.17	0.27	−0.93

注．健常群の「調整済み」は，臨床群の夫婦数に対応して，各シークエンスの出現頻度に重みづけを施したことを意味する．

ミュニケーション・パターンの相違を検討することが目的であった．まず，本章の研究から見出された，臨床群夫婦のコミュニケーション・パターンについて考察する．続いて，臨床群と健常群のコミュニケーション・パターンを比較し，考察する．

ｉ．夫婦間葛藤を開始するコミュニケーション　臨床群における夫婦間葛藤を開始するコ

ミュニケーション・パターンとして，＜議論への導入＞＜議論の開始＞＜葛藤の回避＞の3種類のシークエンスが見出された．これらはさらに，7カテゴリに分類された．＜議論の焦点候補の羅列＞＜議論の方法を示す＞の2カテゴリは，臨床群のみに認められた．このことについては，２つの可能性が考えられる．臨床群夫婦は健常群夫婦に比して，葛藤場面におけるコミュニケーションの扱いが難しいと考えられる．そこで，臨床群夫婦の場合には夫婦間葛藤にまつわる議論を始める前に，夫婦の一方が複数の議論の焦点を提示し，その中から二人が扱うことが出来るテーマを選択するというプロセスが必要とされている可能性や，どのように議論を進めるかについて予め決めておく必要があるという可能性が考えられる．もう1つの可能性は，＜議論の焦点候補の羅列＞＜議論の方法を示す＞という2つのカテゴリは《議論への導入》のバリエーションに過ぎず，たまたまそれが臨床群の夫婦において認められたというものである．本研究は健常群8組および臨床群9組のデータを用いて検討しているため，サンプルの数は多くない．よって，上記の２カテゴリは今回たまたま臨床群において見出されただけであって，サンプル数を増やすと健常群夫婦においても認められる可能性がある．

ⅱ．夫婦間葛藤のプロセスにみられるコミュニケーション　次に，臨床群における夫婦間葛藤のプロセスにみられるコミュニケーション・パターンについて検討する．会話分析の結果，6種類のシークエンス，22種類のカテゴリが見出された．そのうち15種類のカテゴリは，健常群夫婦にも共通して認められたものであった．健常群夫婦特有のパターンは3カテゴリ，臨床群特有のパターンは7カテゴリであった．

夫婦間葛藤のプロセスで見られる6種類のシークエンス，22種類のカテゴリのコミュニケーション・パターンのうち，15種類が健常群と臨床群の夫婦において共通して見られたことは，健常群と臨床群のコミュニケーションの連続性を示唆すると考えられる．つまり，健常群と臨床群の夫婦は，同じようなコミュニケーションをしている場面が多く認められるということが考えられる．したがって，臨床群への介入を視野に入れた場合には，健常群特有，および臨床群特有のコミュニケーションに着目することに意味があるだろう．

ⅲ．夫婦間葛藤終結のコミュニケーション・パターン　次に，臨床群夫婦における夫婦間葛藤終結のコミュニケーション・パターンについて検討する．健常群と比べ，臨床群夫婦には＜譲歩＞による夫婦間葛藤の終結が見られなかった点を除き，健常群と臨床群で違いは見られなかった．健常群夫婦と臨床群夫婦で葛藤を終結する方法に大きな違いはなく，健常群夫婦のコミュニケーションと臨床群夫婦のコミュニケーションとの間に連続性が示

唆されると考えられる．ただし，上記の夫婦間葛藤のプロセスにおけるコミュニケーションについての考察をふまえると，健常群夫婦においてのみ＜譲歩＞による葛藤終結のパターンが見出された点は重要であると考えられる．

最後に，健常群夫婦と臨床群夫婦の夫婦間葛藤パターンの記述統計量について考察を加える．30 分間の議論で話し合われた夫婦間葛藤のテーマ数は，健常群が臨床群の約 2 倍程度であった．また，健常群と臨床群の夫婦間葛藤のテーマ数には，統計的に有意な差が認められた．

ⅳ．葛藤のテーマ数　健常群夫婦の方が臨床群夫婦よりも話し合った葛藤のテーマ数が多いことは，葛藤のテーマ 1 つあたりにかける時間が短いことを意味する．臨床群夫婦では＜要求の修正＞を繰り返すなど，夫妻間の対立が深いために 1 つの葛藤テーマについて話し合う際にかかる時間が延びる可能性や，一つの話題について解決に至ることが少ないことから，終結に至るまで時間がかかる可能性が考えられる．また，健常群夫婦の#008 が 30 分で話し合った葛藤のテーマ数が他の健常群夫婦に比べて少ないことを踏まえると，一般的な健常群夫婦は本研究のデータよりも，単位時間あたりに話し合う葛藤のテーマ数が多い可能性が考えられる．

ｖ．葛藤開始段階の比較　臨床群・健常群の両群において，殆どの場合，＜議論の焦点を定める＞もしくは＜雑談の焦点を定める＞ことによって夫婦間葛藤を開始する点が共通していた．臨床群夫婦のみにおいて《議論への導入》として＜議論の焦点候補の羅列＞および＜議論の方法を示す＞ことが見出されたが，その生起頻度は 2-3%程度と低かった．これらのことから，葛藤の開始段階においては，健常群と臨床群で大きな差は認められないものと考えられる．

ⅵ．葛藤プロセスの比較　健常群においても臨床群においても，夫婦間葛藤は夫妻の一方が自身の要求を相手に伝えるところから開始される場合が多く，それを配偶者が受けることによって，議論が展開していく．しかし，自身の要求が相手に理解されなかったり上手く伝わらなかったりする時には＜要求の修正＞が必要となる．そこで＜要求の修正＞は，夫婦間葛藤を経て上手く合意へ達することが困難である臨床群夫婦にのみ見出されたと考えられる．

また，臨床群においてのみ＜権威を用いた説得＞，＜配偶者を非難する＞，および＜発話ターンの取得争い＞が見られたこと，健常群においてのみ＜譲歩＞＜深刻度の管理＞＜責任転嫁＞が見られたことからは，臨床群の夫婦は相手の反論を許さず，配偶者を非難し，

自身の主張を通そうとするといった頑なな姿勢が伺えるのに対して，健常群の夫婦は議論の展開や結論に対して開かれた姿勢を取り，議論が深刻になりすぎないように管理している可能性が示唆された．＜責任転嫁＞については，自身が直接的に配偶者の要求を拒絶したり葛藤を回避したりするのではなく，「自身は配偶者の要求を受け入れても構わないが，第 3 者は受け入れない」というように，第 3 者に責任を転嫁することによって，葛藤を緩和し，夫婦間の対立を解消している可能性が考えられる．ただし，長期的な視点から検討した場合に＜責任転嫁＞が夫婦間葛藤の扱い方として適応的かどうかについては，検討の余地が残される．

さらに，＜時間への言及＞が臨床群で見られたことについては，葛藤回避の現れである可能性が考えられる．健常群夫婦のように＜深刻度の管理＞を行うことは出来ないにしても，議論の焦点から離れて＜時間への言及＞を行うことで，夫婦間の対立を回避している可能性が考えられる．

臨床群においてのみ＜共感的な応答＞が認められた点は，直感的理解とは反する結果であったと言える．このような結果が見られた理由としては，臨床群は葛藤のテーマがシビアな内容であったり，夫妻間の対立の深刻度が高かったりすることから，夫婦間の議論の中に＜共感的な応答＞の必要性が高いことが可能性として考えられる．

vii．葛藤終結段階の比較　葛藤終結段階のコミュニケーション・パターンについて考察する．健常群夫婦と臨床群夫婦はともに，主として＜議論の並行＞＜拡散＞＜解決策の合意＞によって終結することが見出された．このうち，＜解決策の合意＞の生起頻度が，健常群が臨床群の 2 倍以上見られたことから，健常群は臨床群に比べてより高い頻度で，議論を通じて夫婦間葛藤を＜解決策の合意＞へ導くことが出来ると考えられる．また，＜議論の継続＞は，健常群の方が臨床群に比べ多く見られた．ただし，その多くは#007 においてみられたものであり，#007 の＜議論の継続＞の生起頻度は外れ値であると考えられる．よって，#007 の影響を除外して考えた場合，＜議論の継続＞は両群とも多くは見られず，健常群夫婦と臨床群夫婦で差異は殆ど無いものと考えられる．

viii．シークエンスの出現頻度　続いて，葛藤開始段階および葛藤終結段階における各シークエンスの出現頻度について，健常群と臨床群の相違を検討する．葛藤開始段階については，健常群と臨床群において統計的に有意な差は認められなかった．このことから，健常群，臨床群を問わず，本論文から見出されたコミュニケーション・パターンによって葛藤が開始されると考えられる．一方，葛藤終結段階においては，健常群と臨床群において統

計的に有意な差が認められた．残差の分析結果から，健常群と臨床群では＜解決策の合意＞に至るかどうかや，＜議論の並行＞，議論が＜拡散＞するかどうか，＜議論が継続＞するかどうかといった点で差が示された．ただし，分析方法の項で述べた通り，本章の χ^2 検定の結果の解釈については，慎重でなければならない．

まとめ　最後に，第 10 章および第 11 章の知見全体に対する考察を行う．第 10 章および第 11 章ではそれぞれ，健常群および臨床群の夫婦間葛藤の際にみられるコミュニケーション・パターンを明らかにし，その機能および生起頻度について考察を行った．

ix．夫婦間葛藤への介入　これまで述べてきたように，夫婦間葛藤の開始方法は健常群と臨床群で大差がないものと考えられる．すなわち，健常群夫婦も臨床群夫婦も同じように，夫婦間の葛藤のテーマもしくは雑談のテーマに焦点を当てることで夫婦間葛藤を開始する．健常群と臨床群で差が見られるのは，葛藤のプロセスおよび終結の方法においてであった．臨床群夫婦は健常群夫婦と比べて，葛藤のテーマを上手く扱えないこと，および葛藤を夫婦間の合意に至ることによって終結することが難しいことが示された．したがって，臨床群夫婦を対象に，夫婦間のコミュニケーションを改善することを目的とした心理療法を行う場合には，夫婦間葛藤を適切に扱う方法の心理教育が有用である可能性が示唆される．

具体的には，＜要求の修正＞の繰り返しを避けること，＜権威を用いた説得＞＜配偶者を非難する＞＜発話ターンの取得争い＞といった破壊的なコミュニケーションを避けること，＜譲歩＞＜深刻度の管理＞を行うことが挙げられる．ただし，その内実はケースによってさまざまであると思われる．例えば，#C-004 の夫婦間の議論において＜要求の修正＞が繰り返される原因は，妻の主張に対して夫が細部に拘泥し，議論が進展しないためだと考えられる．そうであるならば，夫婦は自身が議論をする際に＜要求の修正＞のコミュニケーション・パターンを繰り返していることを治療者の助けを得ながら自覚し，夫婦自身にとって可能なやり方で＜要求の修正＞の繰り返しを避ける方法を考え，実践し，どういう点は上手く出来たがどういう点は難しかったのかを特定し，代替案を練る，といった作業が必要となるだろう．言い換えれば，本研究は，夫婦間葛藤の際に避けるべきコミュニケーション・パターンおよび扱えるようになるべきコミュニケーション・パターンのエッセンスについて明らかにしたと考えられ，実際の治療場面においては本研究の知見を参照枠として具体的な実施方法を検討していくことになると考えられる．

夫婦間のコミュニケーションを改善することを狙ったアプローチには，アクティブ・リスニングのスキルを用いられるように練習をしたり，アサーション・トレーニングを行っ

たりするということが行われている．これらは，コミュニケーションのスキルとして重要であり，これらのスキルの心理教育を行うことが効を奏する臨床群夫婦がいるだろう．一方で，これらのスキルの心理教育による改善が期待される範囲には限界があることが指摘されている（Gottman & Silver, 1999）．例えば，夫婦間葛藤の際に＜要求の修正＞が繰り返されている夫婦に対して，「相手も自身も尊重する自己表現」の方法の心理教育を行ったとしたら，「相手も自身も尊重する自己表現を用いた要求の修正」が行われるようになるかも知れない．これでは，夫婦間のコミュニケーションが十全に改善されたとは言い難い．

そこで，既存のコミュニケーション・スキルの心理教育に加えて，本研究の知見を用いることで，「＜要求の修正＞のような「好ましくないが繰り返されているコミュニケーション」を改善すること」に目を向けることが可能となる．本研究の知見は，＜配偶者を非難する＞というような，コミュニケーションの内容的側面に関する知見と，＜発話ターンの取得争い＞というような，コミュニケーションの形式的側面に関する知見の両方に目を向けている．既存のコミュニケーション改善プログラムに，コミュニケーションの内容的側面・形式的側面の双方に焦点を当てているものは無いことから，本論文の知見をふまえることで，コミュニケーション改善プログラムをより効果的なプログラムへ発展することが期待される．

ｘ．中年期夫婦のコミュニケーション　最後に，本研究においては，夫婦間の日常的なコミュニケーションが観察・記録されたと考えられる．また，中年期夫婦関係が「長期に渡って継続されてきた親密な二者関係である」という特徴がふまえられている．中年期の夫婦は，出逢い，結婚し，永い年月を経て現在に至る．ここには，夫婦の歴史があり，夫婦のコミュニケーションと配偶者もしくは自身の変容にまつわる試行錯誤がある．本論文の研究において，突然，「これまでに夫婦の間で生起したことのないような，新奇なコミュニケーション・パターン」が生起するとは考え難い．「どのような表現を用いると配偶者に理解されやすいか」というような自身や配偶者に対する配慮によって，コミュニケーション・パターンは洗練されてきただろう．加えて，「実際にそれを試してみて，配偶者に自身の意図が充分に伝わったのか，あるいは伝わらなかったのか」というようなフィードバックの蓄積により，コミュニケーション・パターンはある程度収束してきたものと考えられる．

本研究において観察・記録されたのは，この永い年月にわたってフィードバックを得ながら変容してきたコミュニケーション・パターンであると考えられる．この点は，本研究において研究の対象となった，中年期夫婦のコミュニケーション・パターンの特徴として

理解されよう．以上をふまえてなお，臨床群夫婦において破壊的なコミュニケーション・パターンが見られた点が，臨床群のコミュニケーションを考える上で重要な点である．例えば，上述のような，コミュニケーション・パターンに関する配偶者からフィードバックが適切に蓄積されないことで，＜要求の修正＞のようなシークエンスが変わらず出現し続けるといったことが考えられる．

もう一点，中年期夫婦のコミュニケーションとして特徴的なのは，「見知らぬ他者と何か交渉事をする」のではなく，これから先も（基本的には）夫婦関係を維持していく相手とのコミュニケーションであるという点である．このことは，例えば《関係への配慮》の動機を高めるように作用しているかも知れない．ただし，言うまでもなく，縦断的に研究をすることなしに，この点について実証的に示すことは出来ない．したがって，今後の重要な検討課題としてこの点が挙げられよう．

第Ⅴ部　総合考察

第Ⅱ・Ⅲ部では，ポジティブ・イリュージョン研究の枠組みを用いて，ポジティブ・マリタル・イリュージョンと適応の関係について検討し，自身の夫婦関係を実際よりも好ましいものと捉える傾向が強いほど適応的であるという結果が見出された．また，第Ⅳ部では，会話分析の手法を用いて，夫婦間葛藤において繰り返されるコミュニケーション・パターンを質的に検討し，夫婦が葛藤中に繰り返すコミュニケーション・パターンが明らかにされた．それらはさらに，健常群夫婦と臨床群夫婦のいずれにもみられるもの，健常群夫婦にのみ見られるもの，臨床群夫婦にのみみられるものに分類された．

第Ⅴ部は，これらの知見を整理・総括した上で，健常群および臨床群の中年期夫婦について，夫婦関係と適応の関連について考察する．さらに，今後の課題について論じる．

終章　中年期における夫婦関係と適応の関連―本研究のまとめと展望―

本章は総括として，これまでに見出されてきた知見から，中年期における夫婦関係と適応の関連について検討する．

本論文では，システム論の観点を採り入れた中年期夫婦関係研究として，Ⅲ部において中年期における夫婦関係と適応の関連を量的に，第Ⅳ部において中年期における夫婦関係と適応の関連を質的に，それぞれ独立して検討した．そこで本章は，これらの知見を整理・統合する試みを通じて，中年期における夫婦関係と適応の関連について考察を行う．さらに，夫婦関係と適応の関連を検討する際に混合研究法を用いる利点および今後の方向性について考察を行う．

１．システム論の観点を採り入れた二者関係研究

本論文は，システム論の観点を採り入れて，中年期夫婦関係と適応の関連について検討を行った．第Ⅲ部および第Ⅳ部から，システム論的観点を採り入れることなしには見出すことが出来ない知見（Reis, et al., 2000）が示された．

ｉ．ペアワイズ相関分析による検討　第Ⅲ部において，平均的な夫婦関係と比して個人が自身の夫婦関係を肯定的に認知することがどのように精神的健康と関連するかについて検討を行った．システム論の観点を採り入れた研究を行うため，ここではペアワイズ相関分析の手法が用いられた．このことにより，夫妻間の類似性に配慮した，個人レベルと二者関係レベルに分割された相関係数の検討が可能となった．その結果，自身の夫婦関係についての認知が夫妻で類似すること，PMI は高い心理的 well-being へつながる一方，GHQ28 とは関連しないこと，配偶者が自身の平均的な夫婦関係と比して夫婦関係を肯定的に認知することは個人の「自律性」「自己受容」と関連することが示された．また，心理的 well-being および GHQ28 は二者関係レベルの情報を有していないと考えられることが見出された．これらの知見は，夫婦を 1 つの単位としてネストした，階層性に配慮した分析方法を用いることでのみ見出せるものであった．

PMI が高い心理的 well-being と関連することについて，本論文の結果は Taylor & Brown（1988）の提唱した「肯定的に偏った認知が精神的健康につながる」とする精神的健康観を支持するものであった．一方で、Baumeister（1989）の提唱した「『認知の偏りの程度が最適である限界』が存在する」という点については、本論文の研究デザインからは検討されなかった．この点については，今後の検討課題として残された．

夫婦関係認知における PI は文化的な現象であることが，先行研究から指摘されている

（e.g., Fowers, et al., 2001; Endo, Heine, & Lehman, 2000）。我が国において，中年期の PMI に焦点を当てた研究はこれまで見当たらないことから，日本人の中年期の PMI を明らかにしたことは重要な点である．

海外の先行研究からは，PMI がどのようなメカニズムによって維持されているのかを検討する必要があること（Fowers, Veingrad, & Dominicis., 2002）が指摘されている．今後，さらなる研究の発展のためには，海外の夫婦ではない，他ならぬ日本の中年期夫婦が有している PMI についても同様に，PMI がどのようなメカニズムによって維持されているのかについて検討する必要がある．

ⅱ．会話分析による検討　一方，第Ⅳ部においては，中年期夫婦を臨床群と健常群の 2 群に分けて，夫婦間のコミュニケーションを会話分析の手法により検討した．

ここでは，夫婦間の相互作用に分析の対象としたという意味で，システム論の観点が採り入れられた．第 1 章において既に述べられたように，「関係」の本質は個人とパートナーとの間で生起する相互作用にある．また，「関係」は，相互作用の連鎖に加えて，それら相互作用のエピソードが将来におけるエピソードに影響を及ぼすことを意味する．したがって，「関係」には本質的に時間が関与する．

第Ⅳ部において用いられた会話分析は，会話そのものを分析の対象としている．会話は，夫妻間の相互作用の過程やパターンの一種として位置付けられることから，会話分析は夫婦間の相互作用を直接的に研究の対象とした分析方法であると言える．したがって，第Ⅳ部の研究からは，これまで先行研究において踏み込んで検討されてこなかった中年期夫婦の相互作用について，新しい知見が提出されたと言えよう．

その顕著な例として，臨床群夫婦において見られた＜要求の修正の繰り返し＞のパターンを示すことが出来る．ExtractB’-1（p.154 参照）に示されているように，01 行目で妻が問題意識を示すが，その後の夫の応答では，妻の問題意識に対する応答が明確に示されなかった．そこで，妻は再度，同様の問題意識を示すが，夫は妻が納得するように回答することが出来ない．改めて妻は問題意識を示し……というように，会話が続くのが＜要求の修正の繰り返し＞であった．ここでは，妻の問題意識の提示が夫の応答を喚起し，夫の応答が妻による再度の問題意識の提示を喚起し，……というように，妻から夫，夫から妻への影響が連鎖している．この連鎖はさらに，（中略）を挟みつつ，再度の問題意識の提示につながっている．つまり，問題意識を提示し，それに応答するという連鎖において「夫から妻が納得するような充分な応答が得られていない」ことが，しばらくした後の再度の問題

意識の提示につながっている．このことは，夫妻間で個人が配偶者に，配偶者が個人に影響を及ぼし合っていることに加え，その連鎖が将来のエピソードにつながっていることの具体的な表れであると理解出来よう．

夫婦間のコミュニケーションに焦点を当てた研究は，欧米圏においては研究が蓄積されてきたのに対して，我が国を含め，アジア圏では殆ど行われて来なかった．そのため，アジア圏 5 ヶ国における夫婦間コミュニケーションを比較した Lee, et al.（2013）は重要な研究であったと言える．しかし，本論文のように夫婦間のコミュニケーション・パターンに細かく焦点を当てた研究は見られない．夫婦間葛藤が深刻化する前のダメージ・コントロール（Baucom, Snyder, & Gordon., 2009）などのコミュニケーションが，日本人夫婦においてはどのようになされているのか，欧米圏との相違はどうであるか，また臨床現場へどのように応用出来るか，といった点を考えるためには，このような細やかな検討が必要である．

２．PMI 研究の枠組みから捉えた夫婦関係と適応の関連

次に，第Ⅲ部第 8 章から見出された，中年期夫婦における夫婦関係と適応の関係に関する知見を整理し，簡潔に記述する．

第 6 章および第 7 章の結果から，一般的な中年期夫婦は自身の夫婦関係を「明るい関係」「成熟した関係」「対等で重要な関係」「関係の不和」の 4 つの観点から捉えており，また実際の夫婦関係よりも好ましく自身の夫婦関係を認知していることが示された．続いて，第 8 章のペアワイズ相関分析の結果から，夫婦関係認知は夫妻間で類似すること，自身の夫婦関係を肯定的に捉えることが適応につながることが示された．さらに，夫婦関係を捉える認知の次元によって，精神的健康との関連の様相がそれぞれ異なることが示された．

今後の課題として，(1)PMI が形成されるプロセスの検討，および(2)期待充足度などの視点を取り入れた PMI の検討，が挙げられる．(1)は，出逢い，恋愛関係を経て，結婚し，子どもが出来，……という中で，自身の夫婦関係に対する認知がどのように形成されていくのかについての検討を意味する．新婚期や育児期の夫婦関係認知と中年期の夫婦関係認知の比較や，夫婦関係認知に影響を及ぼす日常生活状況の出来事や変数の特定などが課題となる．特に，中年期において重要な意味を有すると考えられている変数（夫婦関係満足度など）を研究で扱う変数に加えることは重要である．(2)は，PMI と適応の関連をさらに細やかに検討する際に必要となる視点の導入を意味する．本論文の研究結果からは，PMI を有することが適応につながることが示された．しかし，夫婦関係認知と適応の関連を媒介

する変数の存在が仮定される．例えば，自身の夫婦関係に対しては大変満足しており，良い夫婦関係だと認知している場合でも，夫婦関係に対する期待の高低によって，PMI と適応の関連は異なるかも知れない．自身の夫婦関係を良いと認知していたとしても，それが当たり前のことであるという考えを有している場合には，夫婦関係認知が適応へ及ぼす影響は小さいかも知れない．

３．会話分析による夫婦関係と適応の関連

第 10 章，第 11 章の会話分析の結果から，中年期夫婦においてどのようなコミュニケーションが行われているかが示された．さらに，健常群夫婦と臨床群夫婦との比較・検討によって，健常群夫婦および臨床群夫婦それぞれのコミュニケーションの特徴が示された．

健常群と臨床群の夫婦間コミュニケーションは，多くの部分で共通することが見出された．一方で，夫婦間葛藤のプロセスおよび夫婦間葛藤の終結の方法において，健常群特有の夫婦間コミュニケーション，および臨床群特有の夫婦間コミュニケーションがそれぞれ見出された．健常群夫婦特有のコミュニケーションは適応に，臨床群特有のコミュニケーションは不適応にそれぞれ関連するものと考えられる．

中年期の健常群夫婦に特有のコミュニケーション・パターンとしては，＜譲歩＞や＜深刻度の管理＞を行いながら夫婦が葛藤することや夫婦間の葛藤中に＜責任転嫁＞が見られること，＜解決策の合意＞による夫婦間葛藤の終結が挙げられた．また，臨床群にのみ認められ，健常群では見られなかった夫婦間のコミュニケーション・パターンとして，繰り返される＜要求の修正＞＜共感的な応答＞＜時間への言及＞＜権威を用いた説得＞＜配偶者を非難する＞＜発話ターンの取得争い＞が挙げられた．

今後の課題として，臨床現場への応用が期待される．第Ⅳ部から見出された知見をもとに，夫婦間コミュニケーションの改善プログラムの開発が必要である．夫婦療法などにおいて，夫婦間のコミュニケーションが治療の焦点となっている場合，Gottman による一連の研究（e.g. Gottman, 1998; Gottman, Coan, & McCoy, 1996; Gottman & Levenson, 2000; Gottman & Silver, 1999）を基に介入することが多いだろう．しかし，本論文の問題意識として指摘したように，海外における夫婦間コミュニケーションは我が国における夫婦間コミュニケーションと大きく異なるため，海外の知見を基にした介入よりも，我が国の夫婦を対象とした研究から見出された知見を基にした介入の方が，より適切な介入が出来るものと考えられる．また，夫婦間のコミュニケーションに働きかける既存の方法は，アクティブ・リスニングなどのスキルを教えたり，アサーション・トレーニングを行ったりする

ものが主流である．これらは概念的な理解が多く，またコミュニケーションの内容に触れることはあっても，形式に触れることは無い．これに対して，本論文の知見からは，コミュニケーションの内容と形式の両方に目を向けた，コミュニケーションの改善プログラムの開発が可能となるだろう．例えば，＜配偶者の非難＞を行わないようにする，というのは，内容的な側面である．これに対して，＜発話ターンの取得争い＞を行わないようにする，というのは，会話の形式的な側面である．このように，本論文の知見をふまえることで，既存のコミュニケーション・トレーニングと比較して，より細やかな心理教育・介入を行うことが可能となるため，夫婦間コミュニケーションの改善プログラムの開発および効果研究が期待される．

４．中年期の夫婦関係と適応の関連

PMI 研究と会話分析研究を用いた研究法を行ったメリットは，3 点，考えられる．

ｉ．混合研究法による多面的な検討　一点目は，これら２種類の研究方法をそれぞれ実施することによって，夫婦関係と適応の関連を多面的に検討することが出来た点である．本論文で行った研究からは，自身の夫婦関係を好ましく捉えていることが適応につながること，および適応状態（健常群か臨床群か）によって夫婦を分けた場合に，夫婦間のコミュニケーションの様相が異なることがそれぞれ示された．これらの知見から，夫婦関係が適応にどのように関連するかという点について，多面的に示された．これらの研究は，夫婦関係をどのような観点から評価するかという点において，相互に補い合う関係にある．すなわち，第Ⅲ部の量的研究においては，当事者によって評定される夫婦関係が適応にどのように関連するかが検討されたのに対して，第Ⅳ部の質的研究においては，第 3 者である研究者によって夫婦関係が検討されている．

このように夫婦関係と適応の関連を多面的に捉えることは，重要な意味を持つ．何故なら，夫婦関係への介入による適応状態の改善ということを臨床的活動の目標の一つとして置いた際に，複数の視点からの介入が可能となるためである．具体的には，本論文の知見からは，夫婦関係認知の改善と夫婦間コミュニケーションの改善という 2 つの異なる臨床的示唆が得られたと言える．これらを並行して実施することも，いずれか一方から取り掛かることも，治療者が選択肢として保持出来るというのは，実際の臨床援助面接場面における実現可能性をふまえた際に重要だと考えられる．

例えば，とある夫婦は夫婦間のコミュニケーションに問題を感じていて，夫妻がともにコミュニケーション不全を改善したいと動機づけが高い状態にある場合には，コミュニケ

ーションに対する心理教育やその実際的な訓練が有用だろう．それに対して，夫妻のいずれか一方，あるいは両方の夫婦関係認知が，平均的な夫婦のそれに比べて悪い場合には，そのことを面接の焦点として取り扱うことが有効かも知れない．さらに，場合によっては，夫婦関係認知の改善に焦点を当てる際に，日常生活場面におけるコミュニケーションが変わることで，それに伴って夫婦関係認知の改善が期待される，という導入の仕方もあり得るだろう．夫婦の来談動機や臨床的見立てなどによって，臨機応変に介入の方法を定めることが可能となるというのは，臨床家にとっては重要な意義を持つ．

ⅱ．夫婦関係の多面的評価　二点目として，適応との関連における自己評定による夫婦関係と他者評定による夫婦関係を関連づける可能性が示唆された点が挙げられる．

夫婦関係を評価する場合，従来の方法としては，研究者が用意した質問紙を当人に行わせるものが主流である．それに対し，本論文では，自身の夫婦関係を当事者がどのように評価するかという観点から検討を行っている．従来の質問紙も自記式であるため，自身の夫婦関係を当事者が評定するという点では，先行研究におけるデータの収集方法と本論文におけるデータの収集方法は共通している．一方で，質問紙の内容を夫婦関係認知で構成している点が大きく異なる．

先行研究における質問紙は，理論的背景を踏まえ，例えば夫婦間の性交渉の頻度など様々な内容を尋ねるものである．これらの内容は，理論的背景や，臨床家が重要だと判断している項目から構成されている．しかし，例えば一般に個人が自身の夫婦関係を評定する際に，夫婦間の性交渉の頻度が重要な観点であるかどうかは不明であった．これに対し，本論文において示された夫婦関係認知は，一般に個人が自身の夫婦関係を評定する際に重要な観点が取り上げられている．

さて，本研究の知見からは，適応につながる「夫婦関係」は，当該の夫婦関係にある個人が認知するものと研究者が観察するものの間に重複する部分が多く示唆された．例えば，自身の夫婦関係を「思いやりがある関係」と認知することが適応につながることが示されたが，このことは臨床群夫婦において＜権威を用いた説得＞＜発話ターンの取得争い＞が見られたのに対して健常群夫婦においては見られなかったこととの関連が示唆される．何故なら，臨床群夫婦における＜権威を用いた説得＞＜発話ターンの取得争い＞などのコミュニケーションは，いずれも相手より優位に立つという機能を備えていると考えられるためである．このようなコミュニケーションが多くみられる夫婦では，自身の夫婦関係に対して「思いやりがある関係」と認知しているとは考え難いだろう．同様の示唆として，次

のような点も指摘することが出来る．自身の夫婦関係を「配偶者への非難と攻撃」が無いと認知することが適応につながることが示されたが，このことは臨床群夫婦においてのみ＜配偶者を非難する＞コミュニケーション・パターンが見られたこととの関連が示唆される．

そこで，今後の課題として，個人の夫婦関係認知と夫婦間コミュニケーションの関連を検討することが必要である．例えば，臨床場面において，ある時点における夫婦関係認知を測定した上で，夫婦間コミュニケーションに関する心理教育を行い，夫婦間のコミュニケーション・パターンの変化が研究者によって認められたところで，夫婦関係認知の変化を検討するというようなことが課題として挙げられる．もし夫婦関係認知と夫婦間コミュニケーションの間に関連が見出されたとしたら，それは本論文における第Ⅲ部の知見と第Ⅳ部の知見の統合と位置付けられよう．臨床場面において夫婦を対象として夫婦間のコミュニケーション・パターンへの介入を行うことで，個人および配偶者の夫婦関係認知が改善され，適応を促進することが可能であるという臨床的示唆が得られる．

ⅲ．混合研究法の副次的な利点　三点目として，本論文で用いたような方法で研究手法を組み合わることの副次的な利点として，夫婦関係へより踏み込んだ研究が可能となる点が挙げられる．本論文の第Ⅱ部において行った PMI 研究は，質問紙を用いた調査研究であった．その回収率は，約 6 割であり，充分に高いとは言えない値であった．中年期夫婦は新婚期や育児期，老年期など，中年期以外の家族ライフサイクル期における夫婦関係と比してもっとも夫婦関係満足度が低い時期であり，質問紙調査研究の充分な回収率を確保するのが難しい時期であると言える．一方で，臨床群を対象とした，同じ質問紙を用いた研究（第 11 章を参照）は，会話分析のためのデータ収集後，デブリーフィングのセッションで調査協力者に質問紙への回答を求めたため，回収率は 100%であった．質問紙調査を単独で実施するよりも，会話分析のためのデータ収集に付随してその場で質問紙調査を併せて実施することで，回収率が改善された上，回答の不備をその場で修正することが出来た．質問紙調査を訪問法によって実施することを想定した場合，同様に質問紙の回収率が高まることが考えられる．しかし，上述のように夫婦関係満足度が最も低い状態で，訪問法による調査に協力していただくことは，実際には相当に困難であると考えられる上に，訪問法による調査はコストがかかるため，質問紙を用いた調査研究のメリットであるコストの低さが損なわれることになる．研究手法を組み合わせることで，質問紙調査への導入が容易になり，回収率を改善することが副次的に期待できる．

５．中年期夫婦関係研究における混合研究法の可能性と課題

本論文は，PMI 研究と会話分析研究の２つの観点による研究をそれぞれ行い，中年期夫婦関係と適応の関連について検討を行った．

ｉ．今後の課題―「適応」概念の一貫性　本論文の研究デザインは，「適応」の概念に狭義の意味で一貫性がない点が問題点として残される．本論文の PMI 研究における「適応」は，GHQ28 によって一般的な健康度を，心理的 well-being 尺度によって精神的健康の肯定的側面をそれぞれ測定した．それに対して，会話分析研究における「適応」に関しては，中年期夫婦を健常群と臨床群の 2 群に分けることで適応的なコミュニケーションか否かを判断するという方法が採られた．また，検討の対象となった夫婦間相互作用は，もっとも夫婦関係の良し悪しが表れる場面と考えられたことから，夫婦の葛藤場面に限定されていた．これらの「適応」の概念は，第 1 部で詳述したように，広義の意味では共通している部分が認められる一方で，今後，これらの「適応」概念のズレをすり合わせて，「適応」の指標を統一するということが考えられる．例えば，会話分析を行う対象として，夫婦を GHQ28 や心理的 well-being を用いてスクリーニングすることで，本論文の PMI 研究と「適応」の指標を一にすることが出来る．ただし，本研究で行ったような夫婦間のコミュニケーション・パターンについての会話分析研究は，リクルートが難しく，また調査協力者に対する負担も大きいため，国内外において他に例を見ない．そもそも実施することが難しいという状況を考えれば，「適応」の指標を統一することの優先度は必然的に下がると考えられる．研究の実現可能性をふまえつつ，どのように「適応」を定義し，多角的な検討を行うかが，今後の重要な課題である．

また，特定のコミュニケーションが適応につながるという文脈ではなく，夫婦を健常群と臨床群に分けた上で，それぞれの群のコミュニケーション・パターンの比較を行っているという点が，研究のデザイン上の問題として指摘される．夫婦関係が適応につながるという文脈ではなく，適応状態によって夫婦関係の様相が異なるという文脈であるため，夫婦関係と適応の 2 変数間について，影響を及ぼし合う時系列が逆転しているためである．

ただし，夫婦関係と適応の関連は，単なる因果関係ではなく，円環的に影響を及ぼし合うものであると考えられる．したがって，ここで問題として指摘されるのは，研究の枠組みが非一貫的であるという点に限定され，その結果の妥当性までもが損なわれるとは考え難い．

今後，会話分析によって見出された「適応的なコミュニケーション」の促進を可能とす

るような心理教育を行い，その結果夫婦間のコミュニケーションがどのように変化したかを検討するとともに，GHQ28 や心理的 well-being の適応の指標がどのように変化したかを検討する必要がある．

ⅱ．今後の課題―混合研究法としての知見の統合　もう一点，本論文には，「混合研究法としての知見をどのように統合することが出来るか」という課題が残された．前述のように，「夫婦関係と適応の関連」を多角的に検討した点，「夫婦関係」の評価を多面的に行った点は，それぞれ一定の価値が認められよう．特に，量的研究法，質的研究法を同一テーマに対して実施した点からは，両研究法から見出された知見間の関連性が示唆された．前述のような「思いやりがある関係」であると自身の夫婦関係を認知する夫妻は，＜権威を用いた説得＞＜発話ターンの取得争い＞といったコミュニケーション・パターンが少ないかも知れない，というような仮説は，混合研究法を行ったことによって示唆されたものである．

そこで，同一テーマに対して異なる複数のアプローチを組み合わせて行った研究から見出された知見を有機的に関連付けるような仮説が示唆された場合には，その仮説について実証していくことが今後の課題として挙げられる．

また，混合研究法を行って知見を統合する際に，より直観的に了解可能な方法は，同一データについて量的検討，質的検討を加えることである．本研究においては，「夫婦関係」「適応」といった中核の変数が，それぞれ第Ⅱ部・第Ⅲ部における量的研究と第Ⅳ部における質的研究との間で，定義が異なっていた．例えば，第Ⅳ部の研究を実施する際に，予め GHQ28 および心理的 well-being によるスクリーニングを実施した上で夫婦を分類し，コミュニケーションを比較するということが出来るかも知れない（本論文においては，実現不可能であったために，そのような研究は行うことが出来なかったが，ここでは方法論としての課題を論じるため，例として「適応」概念の統制について言及している）．今後，いかに実現可能で統合可能な混合研究法を実施するかということが，課題として挙げられる．

引用文献

Anderson, C., Ames, D. R., & Gosling, S. D. (2008). Punishing hubris: The perils of overestimating one's status in a group. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 90-101.

Anderson, C., Srivastava, S., Beer, J., Spataro, S.E., & Chatman, J.A. (2006). Knowing your place: Self-perceptions of status in social groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 1094-1110.

Aron, A., Aron E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596-612.

Bales, R. F. (1999). Social interaction systems: Theory and measurement. New Brunswick, NJ: Transaction.

Barelds-Dijkstra, P., & Barelds, D. P. H.（2008）Positive illusions about one's partner's physical attractiveness. *Body Image*, **5**, 99-108.

Barelds, D.P.H., & Dijkstra, P. (2009). Positive illusions about a partner's physical attractiveness and relationship quality. *Personal Relationships*, 16(2), 263-283.

Bartley, S. J., Blanton, P. W., & Gilliard, J.（2005）Husbands and wives in dual-earner marriages: Decision-making, gender role attitudes, division of household labor, and equity. Marriage & Family Review, 37, 69-94.

Baucom, D. H., Snyder, D. K., & Gordon, K. C.（2009）Helping Couples Get Past the Affair –A Clinician's Guide-. The Guilford Press.

Baumeister, R. F. (1989). The optimal margin of illusion. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **8**, 176-189.

Baumeister, R., Bushman, B., and Campbell, K. (2000). Self-Esteem, Narcissism, and Aggression: Does Violence Result from Low Self-Esteem or From Threatened Egotism? *Current Directions in Psychological Science*, 9(1), 26-29.

Berscheid, E. (1999). The greening of relationship science. American Psychologist, 54, 260–266.

Berscheid, E., & Reis, H. T. (1998). Attraction and close relationships. The handbook of social psychology, 4th edition, 193-281.

Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M., (1989). The Relationship Closeness Inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807

Biesta, G.（2010）Pragmatism and the philosophical foundations of mixed methods research, Tashakkori, A., & Teddlie, C. eds., Sage Handbook of mixed methods in social & behavioral research 2nd edition, Sage publications, pp.95-117.

Boyd-Wilson, B. M., Walkey, F. H., McClure, J. L. (2002). Do men still have it all? Gender differences in well-being and implications for ways of coping. Victoria University, Wellington.

Boyd-Wilson, B. M., Walkey, F.H., McClure, J., & Green D.E. (2000) Do we need positive illusions to carry out plans? Illusion and instrumental coping. *Personality and Individual Differences*, 29, 1141 - 1152.

Brendgen, M., Vitaro, F., Turgeon, L., Poulin, F., & Wanner, B.（2004）Is there a dark side of positive illusions? Overestimation of social competence and subsequent adjustment in aggressive and non-aggressive children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **32**, 305-320.

Bromgard, G. D., Trafimow, D., & Bromgard, I. K. (2006). Valence of self-cognitions: The positivity of individual self-statements. *The Journal of Social Psychology*, 146, 85-94.

Bryk, A.S., & Raudenbush, S.W. (1992). Hierarchical Linear Models in Social and Behavioral Research: Applications and Data Analysis Methods (First Edition). Newbury Park, CA: Sage Publications.

Bugental, D. B.(2000) Acquisition of the algorithms of social life: A domain-based approach, *Psychological Bulletin*., 26, 187-209,

Burgoon, J. K. & Hoobler, G. (2002) 'Nonverbal signals', in M.L. Knapp and J. Daly (eds) Handbook of Interpersonal Communication, Thousand Oaks, CA: Sage.

Christensen, A. & Heavey, C.L. (1990). Gender and social structure in the demand/withdraw pattern of marital conflict. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 73-81

Christensen, A., & Pasch, L. (1993). The sequence of marital conflict: An analysis of seven phases of marital conflict in distressed and nondistressed couples. *Clinical Psychology Review*, 13, 3-14.

Cohen, J. D., & Fowers, B. J. (2004). Blood, sweat, and tears: Biological ties and self-investment as sources of positive illusions about children and stepchildren. *Journal of Divorce and Remarriage*, 42, 39-59.

Colvin, C.R., Block, J. & Funder, D.C. (1995) the relation of overly positive self evaluation and Adjustment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, (6) 1152-1162.

Conley, T. D., Roesch, S. C., Peplau, L. A., & Gold, M. S. (2009). Testing the positive illusions model of relationship satisfaction among gay and lesbian couples. *Journal of Applied Social Psychology*, 39 (6), 1417-1431.

Creswell & Clark（2007） Designing and conducting mixed methods research, Sage publication（大谷潤子（訳）人間科学のための混合研究法　北大路書房）

Deutsch, M.（1998）"Constructive Conflict Resolution: Principles, Training, and Research," in The Handbook of Interethnic Coexistence, ed. Eugene Weiner, (New York: Continuum Publishing), pp. 199-216.

Deutsch, M.（1982）Interdependence and psychological orientation. In V. Derlega & J. L. Grzalek（Eds.）, *Cooperation and helping behavior: Theories and research*（15-42）. Academic Press.

Dhami, M. K., Mandel, D. R., Loewenstein, G., & Avton, P.（2006）Prisoner's positive illusions of their post-release success. *Law and Human Behavior*, **30**(6), 631-647.

Donner, A. & Koval, J. J.（1980）The estimation of intraclass correlation in the analysis of family data. Biometrics 1980; 36: 19-25.

Duck, S. W.（1990）Relationships as unfinished business: Out of the frying pan and into the 1990s. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 5-29.

Ei-Alayli, A. & Gabriel, S.（2007）To prove or to improve? which motive distorts perceptions of personality controllability? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33(11), 1572-1586.

Elliott, S., & Umberson, D.（2004）Recent demographic trends in the US and implications for well-being. *The Blackwell companion to the sociology of families*, 34-53

遠藤由美（1999）自尊感情　中島義明他編　心理学辞典　Pp.343-344

Endo, Y., Heine, S. J., & Lehman, D. R. (2000). Culture and positive illusions in close relationships: How my relationships are better than yours. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1571-1586.

Evangelista, N., Owens, J. S., Golden, C. M., & Pelham, W. E. (2008). The positive illusory bias: Do inflated self-perceptions in children with ADHD generalize to perceptions of others? *Journal of Abnormal Child Psychology*, 36, 779-791.

Fast, N. J., Gruenfeld, D. H., Sivanathan, N., & Galinsky, A. D. (2009). Illusory control: A generative force behind power's far-reaching effects. *Psychological Science*, 20, 502-508.

Fischer, P., Greitemeyer, T., & Frey, D.（2007）Ego-depletion and positive illusions: Does the construction of positivity require regulatory resources? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33, 1306-1321.

Fiske, A. P.（1991）Structures of social life: the four elementary frms of human relations. New York:Free Press.

Forgas, J. P. (1979). Social episodes: The study of interaction routines. London/New York: Academic Press.

Fowers, B. J., Fışıloğlu, H., & Procacci, E. (2008). Positive marital illusions and culture: A comparison of American and Turkish spouses' perceptions of their marriages. *Journal of Social and Personal Relationships*, 25, 267-285.

Fowers, B. J., Lyons, E. M., & Montel, K. H. (1996). Positive illusions about marriage: Self enhancement or relationship enhancement? *Journal of Family Psychology*, 10, 192-208.

Fowers, B. J., Lyons, E., Montel, K., & Shaked, N. (2001). Positive illusions about marriage among married and single individuals. *Journal of Family Psychology*, 15, 95-109.

Fowers, B. J., Veingrad, M., & Dominicis, C. (2002). The unbearable lightness of positive illusions: Engaged individuals' explanations of unrealistically positive relationship perceptions. *Journal of Marriage and the Family*, 64, 450-460.

Fraley, R. C., & Waller, N. G. (1998). Adult attachment patterns: A test of the typological model. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), Attachment theory and close relationships (pp. 77-114). New York: Guilford Press.

福丸由佳（2003）乳幼児を持つ父母における仕事と家庭の多重役割．風間書房, 117-143.

Gana, K., Alaphilippe, D., & Bailly, N.（2004）Positive illusions and mental and physical health in later life. *Aging and Mental Health*, 8, 58-64.

Gonzalez, R. (1994). When words speak louder than actions: Another's evaluation can appear more diagnostic than their decision. *Organization Behavior and Human Decision Processes*, 58, 214-245.

Gonzalez, R. & Griffin, D. (1997). The statistics of interdependence: Treating dyadic data with respect. In S. W. Duck (Ed.), Handbook of Personal Relationships: Theory, Research, and

Interventions (2nd Ed), Chichester: Wiley=和田実・大坊郁夫（監訳）パーソナルな関係の社会心理学.北大路書房.

Gonzalez, R & Griffin, D. (1999). The correlation analysis of dyad-level data in the distinguishable case. *Personal Relationships*, 6, 449-469.

Gonzalez, R. & Griffin, D. (2000). The statistics of interdependence: Treating dyadic data with respect. In W. Ickes and S. W. Duck (Eds.), The Social Psychology of Personal Relationships, Chichester: Wiley, 181-213.

Gonzalez, R. & Griffin, D. (2001). A statistical framework for modeling homogeneity and interdependence in groups. Blackwell Handbook of Social Psychology, Vol 2: Interpersonal Processes, M. Clark and G. Fletcher (Eds), p. 505-534.

Gonzalez, R. & Griffin, D. (2002). Modeling the personality of dyads and groups. *Journal of Personality*, 70, 901-924.

Gorard, S. （2010）Research design, as independent of mothods. Tashakkori, A. & Teddlie, C eds., SAGE Handbook of mixed methods in social & behavioral research 2nd edition, Sage publications, pp. 237-251.

Gottman, M. M.（1998）Psychology and the study of marital processes. *Annual Review of Psychology*, 49, 169-197.

Gottman, J. M., Coan, J., & McCoy, K.（1996）The specific affect coding system. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

Gottman, J.M., & Levenson, R.W. (2000). The timing of divorce: Predicting when a couple will divorce over a 14-year period. *Journal of Marriage and the Family*, 62, 737–745.

Gottman, J. M. & Silver, N.（1999）The seven principles for making marriage work. Brockman, Inc., New York.（松浦秀明（訳）新装版　結婚生活を成功させる七つの原則　株式会社第三文明社）

Gramzow, R. H., Elliot, A. J., Asher, E., & McGregor, H. (2003). Self-evaluation bias and academic performance: Some ways and some reasons why. *Journal of Research in Personality*, 37, 41-61.

Griffin, D., & Gonzalez, R. (1995). The correlational analysis of dyad-level data: Models for the exchangeable case. *Psychological Bulletin*, 118, 430-439.

Griffin, D., & Gonzalez, R.（2000）Advanced regression models in dyadic and group

research. *Annual meeting of the Society for Experimental Social Psychology*, Close Relationship Pre-Conference, Atlanta.

Hall, J. A., Coats, E. J., & LeBeau, L. S.（2005）Nonverbal behavior and the vertical dimension of social relations: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 131, 898-924.

Hareven, T. K., 1982, Family Time and Industrial Time: the Relationship between the Family and Work in a New England Industrial Community, Cambridge; New York: Cambridge University Press.

Heavey, C. L., Layne, C. & Christensen, A. (1993). Gender and conflict structure in marital interaction: A replication and extension. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 61, 16-27.

Heyman, R. E. (2001). Observation of couple conflicts: Clinical assessment applications, stubborn truths, and shaky foundations. *Psychological Assessment*, 13, 5-35.

日潟淳子・岡本祐子（2008）. 中年期の時間的展望と精神的健康との関連：40 歳代，50 歳代，60 歳代の年代別による検討　発達心理学研究, 19, 144-156.

Hinde, R. A. （1979）*Towards understanding relationships*. London: Academic Press.

Hinde, R. A. （1999）. *Why gods persist: A scientific approach to religion.* London: Routledge.

平木典子・中釜洋子　2006　家族の心理　―家族への理解を深めるために―　サイエンス社

平山順子（1999）家族を“ケア”するということ　―育児期女性の感情・意識を中心に―. 家族心理学研究, 13, 29-47.

平山順子（2002）中年期夫婦の情緒的関係：妻から見た情緒的ケアの夫婦間対称性　家族心理学研究　16(2),1-12.

平山順子・柏木恵子（2001）中年期夫婦のコミュニケーション態度―妻と夫は異なるか―　発達心理学研究, 12, 216-227.

平山順子・柏木恵子（2004）中年期夫婦のコミュニケーションパターン　―夫婦の経済生活及び結婚観との関連　発達心理学研究, 15, 89-100.

廣瀬春次（2012）混合研究法の現在と未来　山口医学,　61,　11-16.

Hoza, B., Pelham Jr., W. E., Dobbs, J., Owens, J. S., & Pillow, D. R.（2002）Do boys with attention-deficit/hyperactivity disorder have positive illusory self-concepts? *Journal of*

Abnormal Psychology, 111(2), 268-278.

Ickes, W.（2000）. The social psychology of personal relationships. (イックス, W.　大坊郁夫・和田実（監訳）（2004）.パーソナルな関係の社会心理学　北大路書房)

Ickes, W., Bissonnette, V., Garcia, S., & Stinson, L. (1990). Implementing and using the dyadic interaction paradigm. In C. Hendrick & M. Clark (Eds.), Review of Personality and Social Psychology: Volume 11, Research Methods in Personality and Social Psychology,(pp. 16-44). Newbury Park, CA.: Sage.

稲葉昭英（2001）夫婦間サポートのパターンと発達的変化．岩井紀子（編）現代日本の夫婦関係．日本家族社会学会全国家族調査（NFR）研究会, No.2-3, 59-70.

井上清美（2001）家族内部における孤独感と個人化傾向　―中年期夫婦に対する調査データから　家族社会学研究, 237-246.

石川実（1996）中年期の発見（井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『ライフコースの社会学』岩波書店，95-118.）

石盛真徳・清水裕士（2004）二者間データ分析へのペアワイズ・アプローチ　対人社会心理学研究, 4, 127-133.

伊藤裕子・相良順子（2012）愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　―中高年期夫婦を対象に―．心理学研究, 83, 211-216.

伊藤裕子・相良順子・池田政子（2006）多重役割に従事する子育て期夫婦の関係満足度と心理的健康　―妻の就業形態による比較．聖徳大学研究紀要, 17, 33-40.

伊藤裕子・相良順子・池田政子（2007）夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響　―自己開示を中心に―．　文京学院大学人間学部研究紀要, **9**, 1-15.

岩井紀子（1997）『現代家族の社会学　―脱制度化時代のファミリー・スタディー』　石川実（編）　東京大学出版会

Jefferson, G. (2004).　Glossary of transcript symbols with an introduction. In Lerner, G.H. (Ed). Conversation Analysis: Studies from the first generation. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins (pp. 13-31).

Johada, M.（1953）　The meaning of psychological health. *Social Casework*, 34, 349.

金子拓也（2005）データマイニングにおける新しい欠損値補完方法の提案　電子情報通信学会論文誌. D-II, 情報・システム, II-パターン処理 J88-D-II(4), 675-686.

金政裕司（2012）相互支援が関係満足度ならびに精神的健康に及ぼす影響についての青年

期の恋愛関係と中年期の夫婦関係の共通性と差異　発達心理学研究, 23, 298-309.

Karney, B. R. & Bradbury, T. N. (1995). The longitudinal course of marital quality and stability: A review of theory, method, and research. *Psychological Bulletin*, 118, 3-34.

柏木惠子・平山順子　2003 夫婦関係　児童心理学の進歩2003 年版　金子書房　Pp.85-117.

Kashy, D. A., & Kenny, D. A. (2000). The analysis of data from dyads and groups. In H. T. Reis & C. M. Judd (Eds.), Handbook of research methods in social psychology. Cambridge University Press.

川口俊明（2011）教育学における混合研究法の可能性(<特集>教育学における新たな研究方法論の構築と創造). 教育学研究, **78**, (4), 386-397.

Kenny, D. A. (1994). Interpersonal perception: A social relations analysis. New York: Guilford.

Kenny, D. A. (1996). Models of nonindependence in dyadic research. *Journal of Social and Personal Relationships*, 13, 279-294.

Kenny, D. A. (1998). Couples, gender, and time: Comments on method. In T. N. Bradbury (Ed.), The developmental course of marital dysfunction (pp. 410-422). New York: Cambridge University Press.

Kenny, D. A., & Cook, W. (1999). Partner effects in relationship research: Conceptual issues, analytic difficulties, and illustrations. *Personal Relationships*, 6, 433-448.

Kenny, D. A., & Judd, C. M. (1996). A general procedure for the estimation of interdependence. *Psychological Bulletin*, 119, 138-148.

Kenny, D. A., & La Voie, L. J. (1985). Separating individual and group effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 339-348.

Klar, Y., & Giladi, E. E. (1997). No one in my group can be below the group's average: A robust positivity bias in favor of anonymous peers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 885-901.

厚生労働省（2008）平成 19 年国民生活基礎調査の概況　2008 年 9 月公表,（オンラインデータベース）,入手先 http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-19-1.html）,（参照　2014-06-10）

Kruger, J. (1999). Lake Woebegon be gone! The "below-average effect" and the egocentric nature of comparative ability judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 221–232.

工藤恵理子（2004）平均点以上効果が示すものは何か：評定対象の獲得容易性の効果　社

会心理学研究, 19, 195-208.

Lee, W. Y., Nakamura, S., Chung, M. J., Chun, Y. J., Fu, M., Liang, S. C., & Liu, C. L.（2013）Asian couples in negotiation: a mixed-method observational study of cultural variations across five Asian regions. *Family Process*, **52**(3), 499-518.

レビンソン, D. J.（南博訳）（1992）ライフサイクルの心理学　講談社（Levinson, D. J.（1978）The seasons of a man's life, New York: Knopf.）

Luo, S., & Snider, A. G. (2009). Accuracy and biases in newlyweds' perceptions of each other: Not mutually exclusive but mutually beneficial. *Psychological Science*, 20, 1332-1339.

Mcleod, J. (2000). Qualitative Research in Counselling and Psychotherapy. （下山晴彦（監修）谷口明子・原田杏子（訳）　臨床実践のための質的研究法入門　金剛出版）

松久文子・緒賀郷志（2009）中年期女性の夫婦関係に関する研究―実存分析的視点から―　岐阜大学教育学部研究報告　人文科学, 57,　2, 191-203.

Mazur, E.（2006）Biased appraisals of parenting daily hassles among mothers of young children: Predictors of parenting adjustment. *Cognitive Therapy and Research*, 30(2), 161-175.

Mertens, D. M. （2010）Publishing mixed methods research, *Journal of mixed methods research*, **5**(1), pp.3-6.

Miller, P. J., Niehuis, S., Huston, T. L. (2006). Positive Illusions in Marital Relationships: A 13-Year Longitudinal Study. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 1579-1594.

Morse, J. M.（1991）. Approaches to qualitative-quantitative methodological triangulation. *Nursing Research*, 40, 120-123.

Morse, J. M., & Niehaus, L.（2009）Mixed methods design, Left coast press.

長津美代子・細江容子・岡村清子（1996）夫婦関係研究のレビューと課題：1970 年以降の実証研究を中心に（野々村久也・袖井孝子・篠崎正美編著　いま家族に何が起こっているのか：家族社会学のパラダイム転換を巡って　ミネルヴァ書房　pp.159-186.）

長津美代子（2007）中年期における夫婦関係の研究―個人化・個別化・統合の視点から　日本評論社

長津美代子・小柳有希（2012）中年期における子どもの離家とエンプティ・ネストへの移行―事例調査を通しての分析―. 群馬大学教育学部紀要　芸術・技術・体育・生活科学編, 47, 181-191.

中川泰彬・大坊郁夫（1985）日本版 GHQ 精神健康調査票手引　日本文化科学社

Nagy, M. E., & Theiss, J. A. （2013）Applying the Relational Turbulence Model to the Empty-Nest Transition: Sources of Relationship Change, Relational Uncertainty, and Interference from Partners. Journal of Family Communication, 280-300.

中嶋和夫, 朴志先, 小山嘉紀 & 尹靖水 (2012). 父親の家事参加が自身の心理的 Well-being に与える影響. 評論・社会科学, 99, 15-25.

中島久美子 & 行田智子. (2009). 妊婦が認知する夫の行為満足尺度の作成. 母性衛生, 50, 49-56.

内閣府大臣官房政府広報室(2012)　男女共同参画社会に関する世論調査

成田健一（1994） データベースによる General Health Questionnaire に関する研究の展開―PsycLIT と Medline を用いて―　東京学芸大学紀要 1 部門, 45, 185-203.

根ヶ山光一（1999）適応　中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司編　心理学事典　有斐閣

西田裕紀子（2000）成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.

岡本祐子（1985）中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究, 4, 295-306.

岡本祐子（1994）生涯発達心理学の動向と展望　―成人発達研究を中心として―　教育心理学年報, 33, 132-143.

岡本祐子（1997）中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版

岡本祐子, 村田朋子(2005). 中年期夫婦における夫婦関係満足度と妻理解・平等主義的性役割観の関連. 広島大学心理学研究, 195-209.

Olson, D. H. (1999). Counselor's manual for PREPARE/ENRICH. Minneapolis, MN: Life Innovations.

Overall, N. C., Fletcher, G. J. O., Simpson, J. A., & Sibley, C. G. (2009). Regulating partners in intimate relationships: The costs and benefits of different communication strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 620-639.

Parke, J., Griffiths, M. D., & Parke, A. （2007）Positive thinking among slot machine gamblers: A case of maladaptive coping? *International Journal of Mental Health Addiction*, 5, 39-52.

Patterson, G. R., & Dishion, T. J. (1988). Multilevel family process models: Traits, interactions, and relationships. In R. Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds.), Relationships and families: Mutual influences (pp. 283–310). Oxford, UK: Clarendon.

Peräkylä, A. (2004) Making links in psychoanalytic interpretations: a conversation analytic view. Psychotherapy Research 14(3):289-307.

Ransom, S., Sheldon, K. M., & Jacobson, R. B.（2008）Actual change and inaccurate recall contribute to posttraumatic growth following radiotherapy. *Journal of Counseling and Clinical Psychoogy*, 76, 811-819.

Reis, H., Collins, W. A., & Berscheid, E.（2000）The relationship context of human behavior and development. *Psycohjlogical Bulletin*, 126, 6, 844-872.

Reis, H. T., & Wheeler, L. (1991). Studying social interaction with the Rochester Interaction Record. Advances in Experimental Social Psychology, 24, 269-318.

リクルートブライダル総研（2012）夫婦関係調査 2012.

李甚平（2008）夫の家事参加と妻の夫婦関係満足度　―妻の夫への家事参加期待とその充足度に注目して―　家族社会学研究, 20, 70-80.

Robins, R. W., & Beer, J.S. (2001) Positive illusions about the self: Short-term benefits and long term costs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 340-352

Robinson, W. S.（1950）Ecological correlaitons and the behavior of individuals. *American Sociological Review*, 15, 351-357.

Robinson, W. S.（1957）The statistical measurement of agreement. *Americal Sociological Review*, 22, 17-25.

Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M.（1996）Interdependence processes. In E. T. Higgins & A. Kruglanski(Eds)*Social psychology: Handbook of basic principles* (pp. 564-596) New York: Guilford.

Ryff, C. D.（1989）Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of personality and social psychology*, 57, 1069-1081.

Ryff, C., & Keyes, C. (1995). The structure of psychological well-being revisited. Journal of Personality and Social Psychology, 69, 719–727.

Saginak, K. A., & Saginak, M. A.（2012）Balancing work and family:Equity, gender, and marital satisfaction. The Family Journal, 13, 162-166.

西條剛央（2005）構造構成主義とは何か―次世代人間科学の原理 北大路書房

Schegloff, E. A. （2007）Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis

I. Cambridge, England: Cambridge University Press.

Schlehofer, M. M., Thompson, S. C., Ting, S., Ostermann, S., Nierman, A., & Skenderian, J.（2009）Psychological predictors of college students' cell phone use while driving. *Accident analysis and prevention*, 42, 1107-1112.

世界保健機関 (1948) 世界保健機関憲章前文：日本世界保健機構協会仮訳

Segrin, C., & Taylor, M. (2007). Positive interpersonal relationships mediate the association between social skills and psychological well-being. Personality and Individual Differences, 43(4), 637-646.

Seligman, M.E.P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. American Psychologist, 55, 5-14.

Sevier, M., Simpson, L.E., Christensen, A. (2004). Couples interaction rating system (CIRS). In Kerig, P.K., Baucom, D. (Eds.), Couple observational coding systems. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, Associates.

嶋信宏（1994）GHQ28 項目版の検討　日本健康心理学会第 7 回大会発表論文集, 34-35.

清水紀子（2004）中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ　発達心理学研究, 15, 52-64.

清水紀子（2008）中年期のアイデンティティ発達研究：アイデンティティ・ステイタス研究の限界と今後の展望　発達心理学研究, 19, 305-315.

清水裕士　(2006).　ペア・集団データにおける階層性の分析　対人社会心理学研究, 6, 89-99.

清水裕士・村山綾・大坊郁夫（2006）集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1)コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用　電子情報通信学会技術研究報告, 106(146), 1-6.

清水裕士・大坊郁夫　(2005).恋愛関係における関係性認知が精神的健康に及ぼす影響　対人社会心理学研究, 5, 59-65.

白井利明（1997）　時間的展望の生涯発達心理学　勁草書房

Sidnell, J.（2010）Conversation analysis: An introduction. Chichester: Wiley-Blackwell.

総務省統計局（2007）社会生活基本調査　2007 年 12 月公表,（オンラインデータベース）, 入手先（http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/2.htm#05e1-9）,（参照　2014-06-10）

Stevens, D. P., Kiger, G., & Mannon, S. E.（2005）Domestic labor and marital satisfaction: How

much or how satisfied? Marriage & Family Review, 37, 49-67.

末盛慶（1999）夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感　―妻の性別役割意識による交互作用―．家族社会学研究, 11, 71-82.

菅原ますみ・詫摩紀子（1997）夫婦間の親密性の評価―自記入式夫婦関係尺度について―．季刊精神科診断学, 8, 155-166.

Swami, V., Stieger, S., Haubner, T., Voracek, M., & Furnham, A.（2009）Evaluating the physical attractiveness of oneself and one's romantic partner. *Journal of Individual Differences*, 30 (1). pp. 35-43.

橘千恵・中村絵里子・中島夕美・石田貞代・萩原結花　2008　，夫婦関係満足度との関連：妻との比較　母性衛生, 49, 65-73.

平英美（2009）隣接ペアと活動の連鎖の組織化　谷富夫・芦田徹郎（編著）やわらかアカデミズム・＜わかる＞シリーズ　よくわかる質的社会調査　技法編　ミネルヴァ書房, p.116-117.

Taylor, S. E. & Brown, J. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, (2), 193–210.

Taylor, S. E., Lerner, J. S., Sherman, D. K., Sage, R. M., & McDowell, N. K.（2003）Portrait of the self-enhancer: Well-adjusted and well-liked or maladjusted and friendless? *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 165-176.

Teddlie, C., & Tashakkori, A.（2006）Major issues and controversies in the use of mixed methods in the social and behavioral science, Tashakkori, A., & Teddlie, C. eds., Handbook of mixed methods in social & behavioral research, Sage publications, pp. 3-50.

外山美樹（2002）大学生の親密な関係性におけるポジティブ・イリュージョン　社会心理学研究, 18, 51-60.

外山美樹（2006）ポジティブ・イリュージョンの功罪―小学生のストレス反応と攻撃行動の変化に着目して―　教育心理学研究, 54, 361-370.

外山美樹（2008）小学生のポジティブ・イリュージョンは適応的か―自己評定と他者評定からの検討―　心理学研究, 56, 560-574.

外山美樹・桜井茂男（2000）自己認知と精神的健康の関係　教育心理学研究, 48, 454-461.

土倉玲子　2005　中年期夫婦における評価ギャップと会話時間　社会心理学研究，21, 79-90.

都築学（2007）　青年の時間的展望　南徹弘（編）　発達心理学（朝倉心理学講座 3）　朝倉書店　pp.202-215

東原麻奈美（2004）中年期女性のアイデンティティ研究に関する一考察　―結婚・夫婦関係を中心に―　東京大学大学院教育学研究科紀要, 43, 165-173.

氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（共編）（1992）心理臨床大事典　培風館

Unger, J. B., Molina, G. B., & Teran, L. (2000). Perceived consequences of teenage childbearing among adolescent girls in an urban simple. *Journal of Adolescent Health*, 205-212.

後山尚久　2002　成長した子どもと母親との関係が女性の心身に与える影響　―空の巣症候群―　日本女性心身医学会雑誌, 7, 192-197.

Voutilainen, L., Peräkylä, A., & Ruusuvuori, J. （2011）. Therapeutic change in interaction: Conversation analysis of a transforming sequence. *Psychotherapy Research*, 21, (3), 348-365.

若本純子（2007）中高年期の自己評価における発達的特徴　―自尊感情との関連，および領域間の関連に注目して　パーソナリティ研究, 16, 1-12.

Weiss, R. L., & Heyman, R. E. (1997). A clinical-research overview of couples interactions. In W. K. Halford & H. J. Markman (Eds.), Clinical handbook of marriage and couples interventions. (pp. 13-41): John Wiley & Sons, Inc

Wish, M., Deutsch, M., & Kaplan, S. B.（1976）Perceived dimensions of interpersonal relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 409-420.

Woodin, E. M. (2011). A two-dimensional approach to relationship conflict: Meta-analytic findings. *Journal of Family Psychology*, 25, (3), 325-335.

藪垣将（2009）中年期における夫婦関係認知と精神的健康の関連　―システム論的観点からの検討―　東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース　平成 20 年度修士論文（未公刊）

藪垣将（2010）中年期夫婦関係研究の展望―システムズ・アプローチの観点から―　東京大学大学院教育学研究科紀要, 49, 307-316.

藪垣将（2012）ポジティブ・イリュージョン研究の展望　東京大学大学院教育学研究科紀要, 52, 419-426.

藪垣将（2013）夫婦関係認知における評定項目の獲得困難性と平均点以上効果の関連　対

人社会心理学研究, 13, 41-47.

藪垣将（2015）中年期の夫婦関係認知におけるポジティヴ・イリュージョンと精神的健康の関連　家族心理学研究, 29, (2), in press.

藪垣将・中村伸一（2015）中年期夫婦は葛藤をどのように扱うのか？：会話分析による臨床群と健常群の比較検討, 家族療法研究, 32, (3), in press.

藪垣将・渡辺美穂・田川薫（2015）中年期における夫婦関係満足度および諸変数の関連：多母集団同時分析による JGSS-2006 の検討　家族心理学研究, 29, (1), 51-63.

大和礼子（2006）夫の家事・育児参加は妻の夫婦関係満足度を高めるか？　―雇用不安定時代における家事・育児分担のゆくえ―　西野理子・稲葉昭英・嶋崎尚子・編．第２回家族についての全国調査（NFRJ03）第 2 次報告書 No.1:夫婦，世帯，ライフコース, 日本家族社会学会　全国家族調査委員会.pp. 17-33.